平成 27・28・29 年度
社会教育事業の開発・展開に関する調査研究事業

高齢者の地域への参画を促す地域の体制づくりに関する調査研究報告書

NIER
文部科学省
国立教育政策研究所社会教育実践研究センター

平成 30 年 3 月

はじめに

人生100年時代を見据え、高齢者から若者まで全ての国民に活躍の場があり、全ての人が元気に活躍し続けられる社会、安心して暮らすことのできる社会をつくるためには、生涯を通じて切れ目なく質の高い教育を用意し、いつでも有用なスキルを身に付けられる学び直しの場を提供する必要があります。

我が国の高齢化率は、平成29年10月１日現在、27.7%となっており、このような社会状況において、人生100年時代の「全員参加による課題解決社会」を実現するためには、高齢者が、地域が抱える課題を解決する「地域社会の主役」として活躍することが求められています。

本調査研究は、高齢者の学びを通した地域参画やつながり促進に関する取組等について調査を行い、高齢者が地域の担い手として活躍する仕組みや孤立化を予防する事業モデルを開発することを趣旨とし、平成27年度から３年間で実施しました。

１年目は、高齢者の地域参画・つながり促進に関する取組事例の収集・分析を行い、モデル事業の開発に向けた視点を検討しました。２年目は、埼玉県秩父市と千葉県浦安市において、モデル事業を開発・実施しました。３年目は、モデル事業の成果や効果等を検証し、水平展開に向け報告書を作成しました。

結びに、本調査研究の実施に当たり御指導を賜りました野島正也委員長（文教大学学園理事長）をはじめ委員の方々、並びに本調査研究に御協力をいただきました各自治体や社会教育関係団体、地域の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

平成30年３月

国立教育政策研究所
社会教育実践研究センター長　妹尾　剛

目　次

はじめに … i

第１章　調査研究の概要
1　調査研究の目的 … 2
2　調査研究の方法等 … 2
3　調査研究の主体 … 3

第２章　高齢者の地域参画に関する取組の事例（平成27年度ヒアリング調査） … 5
1　【埼玉県春日部市】庄和地区市民大学
～住民と公民館の協働による地域で主体的に活動する人材の育成～ … 8
2　【千葉県柏市】くるる即興劇団
～インプロ（即興劇）を通じた高齢者のつながり促進の取組～ … 14
3　【東京都中央区】りぷりんと・中央区
～絵本の読み聞かせによる学校支援の取組～ … 20
4　【新潟県小千谷市】わかとち未来会議
～地域資源を活かしたまちづくりとコミュニティ・ビジネスの取組～ … 26
5　【愛知県田原市】元気はいたつ便（図書館資料等によるグループ回想法）
～図書館とボランティアによる高齢者福祉施設訪問サービス～ … 30
6　【愛知県北名古屋市】北名古屋市回想法事業「思い出ふれあい事業」
～博物館と福祉部局の連携による回想法事業～ … 36
7　【福岡県飯塚市】熟年者マナビ塾
～学びの成果を生かした学校支援ボランティア～ … 42

第３章　モデル事業（平成28年度）
1　モデル地域選定の経緯と地域の特色 … 48
2　浦安市におけるモデル事業「回想法ボランティア養成事業」 … 51
3　秩父市におけるモデル事業「インプロ（即興劇）を用いた交流事業」 … 69
4　質問紙調査結果 … 89

第４章　高齢者の地域への参画を促す地域の体制づくりに向けて
1　高齢者の学習支援の動向と今後の課題について … 98
2　地域学校協働活動の推進に資する高齢者の地域参加と課題 …104
3　健康増進の活動に参加している高齢者について …111
4　プロダクティブ・エイジングを推進する地域の体制づくり
～行政内外のネットワークの構築に向けて～ …120

おわりに …133

参考 …139

質問紙調査票 …140

講座参加者への質問紙調査結果 …154

第１章　調査研究の概要

第１章　調査研究の概要

１　調査研究の目的

高齢者の学びを通した地域参画やつながり促進に関する取組等について調査を行い、高齢者が地域の担い手として活躍する仕組みや孤立化を予防する事業モデルを開発する。

２　調査研究の方法等

平成27年度　文献調査、特徴的な取組のヒアリング調査

平成28年度　モデル事業の開発・実施

（１）ヒアリング調査

平成27年度は、文献等の調査により特徴的な取組を挙げ、訪問によるヒアリング調査を行った（表１－１参照）。

ア　調査対象

表１－１　平成27年度ヒアリング調査一覧

地域	取組名	概要
埼玉県 春日部市	庄和地区市民大学	住民と公民館の協働による地域で主体的に活動する人材の育成
千葉県 柏市	くるる即興劇団	インプロ（即興劇）を通じた高齢者のつながり促進の取組
東京都 中央区	りぷりんと・中央区	絵本の読み聞かせによる学校支援の取組
新潟県 小千谷市	わかとち未来会議	地域資源を活かしたまちづくりとコミュニティ・ビジネスの取組
愛知県 田原市	元気はいたつ便（図書館資料等によるグループ回想法）	図書館とボランティアによる高齢者福祉施設訪問サービス
愛知県 北名古屋市	北名古屋市回想法事業「思い出ふれあい事業」	博物館と福祉部局の連携による回想法事業
福岡県 飯塚市	熟年者マナビ塾	学びの成果を生かした学校支援ボランティア

イ　調査期間

平成28（2016）年１月～３月

ウ　調査内容

各事業に共通する主な聞き取りの柱は次の３点である。

（ア）団体・施設の活動の概要（目的、内容、活動の運営、メンバー等）

（イ）取組の経緯（立上げ、活動の維持・拡大、取組による効果等）

（ウ）活動継続における課題と対応方法（他地域における取組の汎用性）

（２）モデル事業の開発・実施

平成28年度は、千葉県浦安市、埼玉県秩父市において、モデル事業を開発検討し、実施した（表１－２参照）。

モデル事業の開発では、平成27年度にヒアリング調査を行った特徴的な取組の中から、社会教育の分野で取り組んでいる事例が少なく、健康福祉行政との連携も期待できる取組として、「回想法」と「インプロ」をモデル事業化する方針を決定した。

事業の実施に向けては、一口に高齢者といっても地域によって環境や抱える課題も多様であり、モデルとして事業を実施し効果等を検証するには、最低でも、①都市部の地域に住む高齢者層、②山間部の地域に住む高齢者層を対象にすることが望ましいことから東京近郊の２市を選定することとした。その後、２市の特色や地域性に応じた事業となるよう各自治体において検討を重ねた。

また、「回想法」と「インプロ」を先駆的に取り組んでいる実践者を講座の講師に招くとともに、関係職員向けの研修会においても講師をお願いした。併せて、講座の構成等についても助言を受け、事業を計画した。なお、第３章では、回想法ライフレヴュー研究会、中嶋惠美子氏から「回想法について」、三重大学教育学部特任講師、園部友里恵氏から「インプロについて」解説していただいている。

さらに、モデル事業の効果を検証するため、モデル事業及び同自治体における高齢者対象の他事業の参加者に対して質問紙による調査を行った。

表１－２　モデル事業の概要

自治体名／事項	千葉県浦安市	埼玉県秩父市
事業名	回想法ボランティア育成事業	インプロ（即興劇）による交流事業
事業目標	回想法を用いた脳を活性化する取組を通して、参加者の交流と健康増進を図るとともに、博物館や図書館等で活動する新たなボランティアを育成し、高齢者が地域に参画する機会へ繋げる。	インプロ（即興劇）を用いたワークショップ等を通して、参加者のコミュニケーション能力の向上を図るとともに、他世代との交流を深めることで、高齢者が地域に参画する機会へ繋げる。
講座名	想い出語りボランティア講座 ～楽しく学ぼう！回想法～	即興劇（インプロ）による 仲間と健康づくり講座
実施時期	平成28（2016）年 10月５日（水）～11月９日（水） 全６回　各回14：00～16：00	平成28（2016）年 ９月11日（日）～12月17日（土） 全６回　各回13：30～15：30
実施会場	浦安市役所、浦安市郷土博物館、浦安市立中央図書館	秩父市荒川公民館
講師 助言者	回想法ライフレヴュー研究会 中嶋　惠美子	三重大学教育学部 特任講師　園部　友里恵
対象	市内在住在勤の60歳以上の方	市内在住在勤の60歳以上の方

３　調査研究の主体

「高齢者の地域への参画を促す地域の体制づくりに関する調査研究」は、調査研究委員会を組織して実施した。委員は次の通り。

倉岡　正高　　東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム研究員
齊藤　ゆか　　神奈川大学人間科学部准教授
島﨑　浩一　　浦安市教育委員会生涯学習部生涯学習課長
中薗　　宏　　福岡県立図書館長
梨本　雄太郎　宮城教育大学教職大学院教授
○野島　正也　　文教大学学園理事長
堀　　薫夫　　大阪教育大学教育学部教授
八木　進也　　埼玉県教育局北部教育事務所秩父支所社会教育主事兼指導主事

（以上、五十音順、○は委員長）

（平成27年度）
浅見　和良　　埼玉県教育局北部教育事務所秩父支所社会教育主事兼指導主事

＜事　務　局＞
（平成29年度）
妹尾　　剛　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長
毛利　るみこ　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター企画課長(併)専門調査員
二宮　伸司　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育調査官
市川　重彦　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター専門調査員
岡田　純一　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター専門調査員
原　　昌作　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育特別調査員
仲村　拓真　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター研究補助者

（平成28年度）
渡部　　徹　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長
波塚　章生　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育調査官
齋藤　有子　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育特別調査員

（平成27年度）
渡部　　徹　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター長
安達　　昇　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター企画課長
波塚　章生　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育調査官
井上　昌幸　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育調査官
手塚　博子　　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育特別調査員

なお、鳥越　留美子（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター普及・調査係専門職）が庶務を担当した。

第２章　高齢者の地域参画に関する取組の事例
（平成27年度ヒアリング調査）

第２章　高齢者の地域参画に関する取組の事例

高齢者の地域参画に関する特色ある取組についてヒアリング調査を実施するに当たり、文献調査による情報収集を行った。

文献調査を進める中で、高齢者を取り巻く課題や、社会教育施設等の事業取組例から、図２－１のように「高齢者の課題への対応」として、①つながりの創出、②健康の維持・向上、③地域の活性化、④生きがいの創出、⑤高齢者の意識改革、の５点を抽出し、収集した取組を分析し、調査研究委員会における検討を踏まえて、調査の対象を選定した。

ヒアリング調査を実施した取組についての分析は表２－１のとおりである。

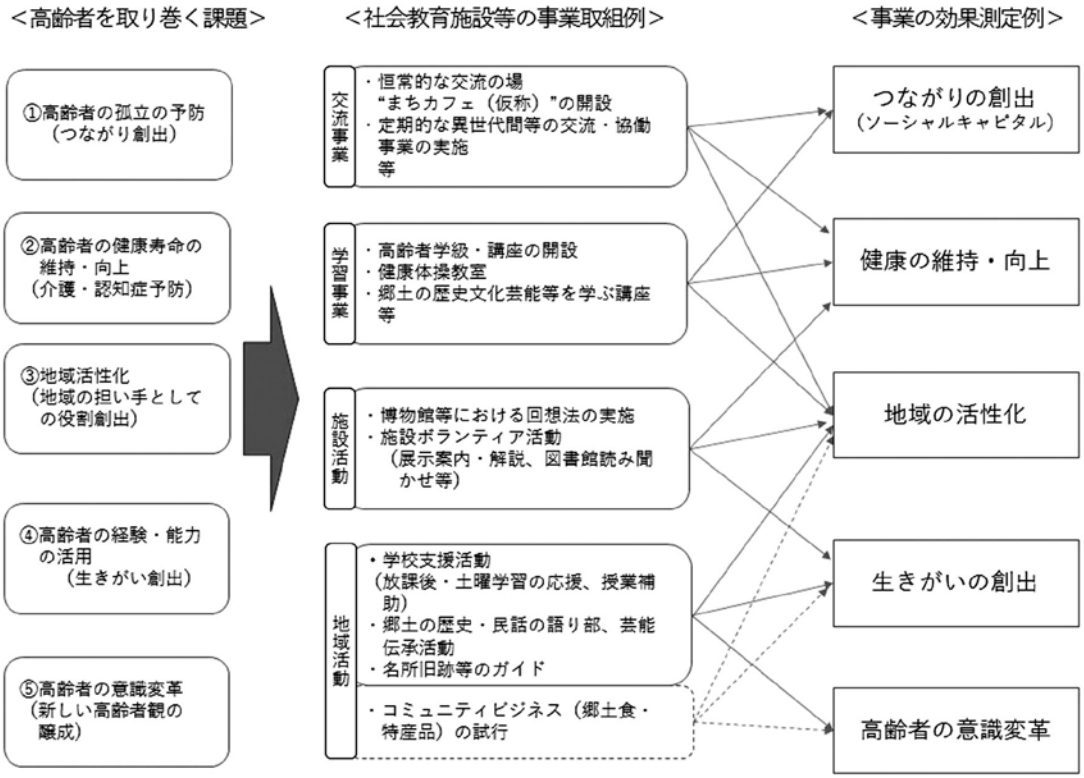


図２－１　高齢者を取り巻く課題と社会教育施設等の事業取組例及び効果測定例

表２－１　ヒアリング調査の対象の選定に向けた特徴的な取組の分析

No.	実施地域 「取組名」	文献調査による事業概要	高齢者の課題への対応				
			つながりの創出	健康の維持・向上	地域の活性化	生きがいの創出	高齢者の意識改革
1	埼玉県 春日部市 「庄和地区市民大学」	春日部市との合併後も旧庄和町において、地域で主体的主導的に活動できる人材を育成することを目的に、春日部市民大学とは別に15名の２年制の市民大学を開設。	○		◎	○	○
2	千葉県 柏市 「くるる即興劇団」	柏市豊四季台団地の高齢者が、インプロ（即興劇）に関する生涯学習講座をきっかけに劇団を結成し、生きがいを高めながら、高齢化する地域の団地とのつながりを深めている活動。	◎	◎		◎	○
3	東京都 中央区 「りぷりんと・中央区」	東京都健康長寿医療センターとの連携により、60歳以上のシニアが、読書ボランティアとして幼稚園、保育園、小・中学校等で子供たちに絵本の読み聞かせを行う活動。	○	◎	○	◎	○
4	新潟県 小千谷市 「わかとち未来会議」	主体的な集落活性化の活動に取り組む人材育成を目指し、「まちあるき」による地域内外との交流、教育体験旅行の受入、６次産業等の集落活性化の学習機会等を実施。	◎		◎	○	
5	愛知県 田原市 「元気はいたつ便」（図書館資料等によるグループ回想法）	図書館資料の利用を通じて元気になるきっかけを提供することを目的に、図書館への来館が困難な高齢者や障害者を対象とした高齢者福祉施設への訪問サービス。	○	◎		○	
6	愛知県 北名古屋市 北名古屋市回想法事業「思い出ふれあい事業」	「昭和日常博物館」と呼ばれる昭和時代をテーマとした資料展示を活用し、高齢者を対象とする回想法による認知症の予防の取組等を実施。	○	◎		○	
7	福岡県 飯塚市 「熟年者マナビ塾」	熟年者の力を学校教育に活かすことなどをねらいとし、熟年者が小学校に通い、自主的に学習活動を行いながら学校支援ボランティアとして活動する事業。			○	◎	◎

1　【埼玉県春日部市】庄和地区市民大学
～住民と公民館の協働による地域で主体的に活動する人材の育成～

キーワード：市民大学、自主運営、人材育成、ボランティア

＜取組の概要＞
　春日部市庄和地区市民大学は、「地域市民に生涯学習の機会を提供すること」ならびに「地域において、主体的主導的に活動できる人材を育成すること」を建学の精神として、官民協働の運営で実施している。主な特徴は、次の３つである。１つ目は、市民大学は２年制であり、同プログラムを、１～２年生が共に学びあうことにより、受講生の仲間意識や協働意識が高まっていること、２つ目は、現役受講生と卒業生との自主活動組織「学友会」が活発であり、大学の組織運営を支えていること、３つ目は、講座は、講義ばかりでなく、ディベートや体験、視察・鑑賞等受講生の地域への実践力を高めていることである。

（1）実施機関・団体名

団体等の名称	春日部市庄和地区市民大学
連絡先	庄和市民センター正風館（庄和地区公民館） 住所　〒344-0116　埼玉県春日部市大衾307-１ 電話番号048-746-6666 ウェブサイト「春日部市庄和地区市民大学」 https：//www.city.kasukabe.lg.jp/bunka_sports/shougai/shimindaigaku.html

（2）取組の状況

ア　実施主体の概要

　庄和地区市民大学は、「地域市民に生涯学習の機会を提供すること」並びに「地域において、主体的主導的に活動できる人材を育成すること」を目的とした２年制大学である。その目指すところは、「学友が共に学びながら考え合い、他者の意見を聞き、理解し合うことで、どのように行動することが最善の選択となるかを学習すること。同時に地域活動を実践できる能力と人間形成ができる環境作り」である。

生涯学習論Ⅰ

　前身は、平成12（2000）年に旧庄和町教育委員会の事業として、「庄和町町民大学」（年６回、14名）を開設。平成14（2002）年に２年制に変更した。学生と卒業生による自主活動組織「学友会」を設立。平成17（2005）年に庄和町が春日部市と合併し、「春日部市庄和地区市民大学」と改称。庄和地区公民館事業の一環となり、継続実施する。平成18（2006）年より、学友会が事業の企画運営に参画するようになる。平成20（2008）年より大学運営委員会を設置し、官民の本格的な協働事業として継続実施される。

イ　活動の企画運営体制

市民大学の運営組織は、学長（公民館館長）の委嘱により、運営委員（卒業生７名）及び公民館大学担当者（計２名）で構成される。(平成29（2017）年12月現在)

同市民大学の主催は庄和地区公民館である。しかし、実質的な企画運営は、庄和地区市民大学学友会の有志が行っている。具体的な運営内容としては、講座のニーズ調査や新規講師の開拓、採用、講座ごとの担当者との打合せ、講座の進行等のすべてを学友会有志がボランティアとして行っている。公民館担当者は、主に講座のPRや受付等を担当する。

これら講座や運営に関して、学識経験者の指導教授（近隣の文教大学の前学長）から、適宜アドバイスを受けることで、カリキュラムの充実と質の維持を図っている。

市民大学の運営費は、学費（年間23,000円）と公民館予算で賄っている。

ウ　活動の実際

（ア）市民大学の理念とねらい

市民大学の理念は、「地域市民への生涯学習の機会の提供」及び「地域で活躍できる人材づくりと人脈づくり（仲間）づくり」である。

そのため、カリキュラムには、「地域に役立つ」、「地域を知る」、「知識を深める」、「心身・健康のため」、「文化・芸術に親しむ」の５領域が含まれている。

清掃ボランティア活動

在学中及び卒業後において、公民館事業等はもとより、地域のボランティア活動に積極的に参加・自主行動できるような意識の醸成を図っている。

（イ）市民大学の構成

講座は、年間の通学制で２年間学ぶ。講座内容は、１年生（約15名）と２年生（約15名）が同内容を一緒に学ぶ。講座内容は、１年ごとに変更している。

表２－２のように、公民館等の行事や受講生同士の交流の機会も重視している。

なお、２学年修了者には卒業証書が授与される。２年間在籍終了後の再入学はできない。修了後は、学友会活動や地域活動に参加することが期待されている。

表２－２　市民大学のカリキュラム例（平成27年度　15期の例）

５月	開講式、生涯学習概論Ⅰ、地球温暖化と私たちの暮らし、NPO活動や地域協働
６月	歌舞伎鑑賞、庄和地区の歴史「原始・古代」、宿泊体験（林業体験、うどん体験）
７月	健康講座、ディベート講座（体験１～４）
９月	自由課題紹介、ワークショップで学ぶまちづくり（まち育て）、日本の宇宙開発
10月	防犯・交通安全講座、室内運動体験、御近所防災を学ぶ
11月	日展鑑賞、音楽鑑賞「新・クラシックへの扉」、文学講座、食品衛生講座
12月	生涯学習概論Ⅱ、金融講座、生理学講座「体内時計と健康」
１月	人権講座、地方自治講座、自由課題発表、修了発表
自由参加の行事：宿泊体験学習（６月）、暑気払い（７月）、公民館まつり（９月）、バーベキュー大会（10月）、新年会（１月）	

（ウ）講座形態の体系化

講座は、主に３つの形態で構成される。

ａ　講座・討論の実践である。「話を聞き、理解する」効果を得るために、人の話を聞く、話す、議論を重視している。平成27（2015）年は15講座21回の実施がされた。重点講座は、生涯学習論、環境問題、人権問題等である。そのほか、地方自治、健康、農林水産、郷土史、防災、防犯、国土教育、社会参加、地域環境、まちづくり、生物学等がある。

ｂ　体験・実習・宿泊体験等である。平成27（2015）年は４講座５回実施された。ここでは、主にディベートや室内運動を行い、実際の体験をしなければ得られない、感動経験を提供している。それ以外に、工芸、林業体験、自由課題実習等が行われている。

ｃ　視察・鑑賞の機会である。平成27（2015）年は４講座４回実施された。その内容として、古典芸能の「能狂言」、音楽「吹奏楽」、美術「日展」をはじめ、見学視察として「自動車工場」等を行い、知識を広く高めることを目指している。

林業体験

（エ）講座時間と会場

講座時間は、通常は13時30分～15時30分の120分で行われる。この中で、事務連絡や休憩が含まれる。講座終了後は、学友会が主催するホームルームがある。ここで、学友会の事務連絡や各種イベントの呼びかけ等が行われる。

会場は、通常は庄和地区公民館（正風館）の２階会議室で実施される。

（オ）講座の運営にあたる役割分担

講座の運営にあたり、受講者も運営に参加する当番制が決められている。当番は、講座開始20分前までに受付ができるように会場設営、出席受付を行う。講

座後に、当番が後片付けを行う。

また、受講生は学年ごとに班編成している。各班には、班長と副班長がいる。班長は、班内の連絡や相談、まとめ役であり、特に館外の講座の班員の統率を行う。具体的な場面としては、宿泊体験、ディベート、自由課題、修了文集作成等の講座のまとめ役に位置づけられる。

（カ）課外活動

課外活動は、受講生と卒業生による自主活動組織「学友会」がある。市民大学とは別組織であるが、会員相互の親睦を深め、地域の発展に寄与すること、市民大学に対する協力や支援を行うことを目的としている組織である。

学友会の事業に参加するだけでなく、事業の企画や運営に携わることで、一人一人の企画力や運営力を高め、市民大学の理念の実践の場としている。

各種クラブには、ボランティア部、ウォーキング部、ハイキング部、ゴルフ部、グランドゴルフ部、麻雀部、囲碁部等があり、懇親会や各種活動を広めている。

（キ）主な講師

市民大学の講師は、近隣大学の文教大学をはじめ、東洋大学、宇都宮大学、工学院大学等の社会貢献の一環としての大学派遣制度等を活用しながら多くの協力を得ている。また、行政機関としては、当該市の春日部市や埼玉県、及び県・市内の施設・機関（埼玉県、春日部市、県立大滝げんきプラザ、埼玉県警察音楽隊）、各種研究機関（産業技術総合研究所や国土技術政策総合研究所）を活用している。

（3）考察

本研究「高齢者の地域参画を促す地域の体制づくり」のテーマに照らし、事例「庄和地区市民大学」の成果のポイントについて示しておきたい。受講生は年齢に限定はされていないが、受講生の大半が60歳以降の高齢者である。ここでは、あえて受講生＝高齢者として考察したい。

ア　高齢者自身の意識・行動の変化

高齢者自身の意識・行動の変容を促している「市民大学」のポイントを記しておきたい。

第１に、高齢者が市民大学に２年間在籍していることである。この期間に、同地域に在住する高齢者が、共通の場所とカリキュラム（体験型講座）を受講している。この共通項が、高齢者の共通の話題と仲間意識を高めている。

学習班で自由課題打合せ

第２に、高齢者同士の交流や楽しみの機会を多く設定していることである。高齢者同士のつながりは、講座内のディベートや体験活動等に限らず、課外活動等でも

交流機会に多数の工夫がみられる。また、講座以外にも自主的な交流会が実施され、仲間同士のコミュニケーションが活発になり、地域でつながる楽しみを堪能できる。こうした試みは、仲間意識と学びへの継続意欲、さらには地域貢献のインセンティブにつながっている。

第３に、講座運営にあたり高齢者の役割を与えていることである。講座受講生は、班単位で決められた役割を果たす。同時に、課外においても、学友会のボランティア部のように、ちょっとした社会貢献が各々の自己有用感を高めている。

第４に、「市民大学」は、設立以来、旧庄和町を中心に地域との関係を築き、地区の公民館がその活動拠点となってきたことである。地域の拠点は、気軽に通える高齢者の居場所となっている。ここに繰り返し通うことで、公民館行事への参加の機会が増し、地域への愛着行動が社会貢献へとつながる。

イ　実施主体からみた成果

春日部市生涯学習推進計画においては、「市民の顕在的・潜在的な学習要求を把握し、地域の学習資源を活用した多様な学習の機会を提供することはもとより、学習の成果が地域の中で生かされる仕組みを作り、市民の温かい人間関係に支えられた活力あるまちづくりを目指す」ことを基本としている。庄和地区市民大学では、基本方針の大方がすでに達成されている。中でも、次の３点は実施主体からみた市民大学の成果といえる。

まず、「市民の学習要求に対応した多彩な学習機会の提供」についてである。市民大学では、学習資源である人材（指導者）、施設・設備、教材・教具、学習の機会、学習グループのいずれもフル活用させ、平成29年度は、年間27講座（30回）の多彩な内容と方法で学習提供を行っている。

次に、「学習機会の充実と関連機関との連携強化」についてである。講座のうち、関連連携機関と連携した学習機会の充実が行われている。例えば、県内・市内の部署が担当する「郷土史講座」、「スポーツ講座」、「人権教育講座」、「地方自治講座」、「ボランティア講座」等がある。また、警察庁や県立施設との連携により、体験的学習機会を充実させている。

さらに、「学習の成果を生かす機会の提供と地域の活性化」についてである。学習の成果を生かす機会提供としては、「学友会」の自主組織があげられる。「学友会」は、受講生・卒業生の交流の機会、各々役割を持ち地域へ生かす機会を意図的に設定し、地域の活性化につなげている。

ウ　創造性、持続性、汎用性

庄和地区市民大学の持続性と汎用できるポイントについて、５点記しておきたい。

第１に、地域に密着したプログラムの質の維持があること。これは、受講生の満足度と誇りを高める要因になっている。近隣大学教授のアドバイスに依るところが大きいが、それが継続可能かどうかは課題である。

第２に、講座内外で受講生同士が交流する機会が多いこと。これにより、受講生の共通の楽しみと仲間意識が芽生え、自主組織「学友会」への積極的な参加につな

がっている。

第３に、定期的な拠点の確保と居場所づくりがあること。公民館がその役割を果たしている。特に、受講生ばかりでなく、卒業生も気軽に足を運べる場の存在は大きい。しかし、市民大学の占有にならないよう、他の講座や団体への配慮も必要である。

第４に、講座の受益者負担を行っていること。社会教育の予算が縮小される只中、受講生の受益者負担は、講座を継続させる不可欠要素である。しかし、受講料の設定は、自治体ごとに異なり、難しいものである。

第５に、受講生・卒業生も運営に参加・参画し、地域活動に貢献していること。受講生は班体制で講座運営の役割を持ち、卒業生も講座運営を応援できる体制が整っている。今後は、メンバーの性別・年齢バランスも考慮し、固定メンバーによる過重負担にならないよう、定期的な「声かけ」、「仲間づくり」、「楽しみ」、「やりがい」を持つことが重要である。

＜参考資料＞

春日部市庄和地区市民大学（平成28年度学生募集案内）、関連資料
春日部市庄和地区市民大学学友会ウェブサイト　http：//seifukan@city.kasukabe.lg.jp
春日部市庄和地区市民大学ウェブサイト　https：//www.city.kasukabe.lg.jp/bunka_sports/shougai/shimindaigaku.html（アクセス日　2018年３月18日）
春日部市生涯学習推進計画
沖田隆一（2011）「春日部市庄和地区市民大学の運営にあたって」『月刊社会教育』No. 783, p. 40-42.

（齊藤　ゆか）

（ヒアリング調査協力者）

所属	氏名
春日部市庄和地区市民大学学友会会長	鬼柳　徳 氏
春日部市庄和地区市民大学運営委員会委員長	沖田　隆一 氏
庄和市民センター正風館館長	小林　正樹 氏

ヒアリング調査日　平成28（2016）年１月28日（所属・職名は当時）

２　【千葉県柏市】くるる即興劇団
～インプロ（即興劇）を通じた高齢者のつながり促進の取組～

キーワード：インプロ（即興劇）、高齢者の社会参画、高齢者の学習活動、ファシリテーター

＜取組の概要＞
市内で開催された生涯学習講座「豊四季台くるるセミナー」（主催：東京大学高齢社会総合研究機構、共催：柏市地域支援課・地域医療推進室、柏市社会福祉協議会）の「即興劇で学ぶコミュニケーション」に参加した高齢者有志が、インプロ（即興劇）を通じて、自らの生きがいを高めながら、高齢化する地域の団地とのつながりを深めている。

（１）実施機関・団体名

団体等の名称	高齢者インプロパフォーマンス集団「くるる即興劇団」
連絡先	「くるる即興劇団」事務局：園部　友里恵 氏 ウェブサイト「園部友里恵のウェブサイト：くるる即興劇団」 http：//yuriesonobe.com/kururu-senior-impro/ メールアドレス kururu.senior.impro@gmail.com 活動場所「柏地域医療連携センター」 住所　〒277-0845　千葉県柏市豊四季台１-１-118

（２）取組の状況

ア　実施主体の概要

（ア）活動に至る経緯

昭和39（1964）年に造成された柏市豊四季台団地では、入居者の高齢化が進み高齢化率が40%を超えるとともに、団地内の商店街も閉鎖が続く等の課題を抱えていた。

第１回即興劇団公演

平成25（2013）年に、本劇団を主宰する園部氏の大学院での指導教員である牧野篤東京大学教育学研究科教授（同大高齢社会総合研究機構副機構長）から、同団地内で東大が主催する生涯学習講座“豊四季台くるるセミナー”の一環として高齢者対象のインプロ（即興劇）（以下「インプロ」とのみ表記）に関する企画を勧められ、平成26（2014）年10月及び翌年２月に開始した連続講座「即興劇で学ぶコミュニケーション」の修了生等が中心となり、継続した活動を行うために自主グループの活動として「くるる即興劇団」が結成された。日本初の高齢者インプロパフォーマンス集団である。

（イ）活動目的

高齢者自らがパフォーマーとして舞台に立ち、インプロのおもしろさ・深さと、高齢者にしかできない即興表現を追究することを目的に活動している。

（ウ）運営主体（機関・団体等）の組織

「くるる即興劇団」ではメンバー登録等の制度は設けていないが、30名弱（男性２割、女性８割）が参加している。劇団の参加者の年齢は、66歳～89歳であり、70歳代後半～80歳代前半が大半である。参加者の全員が柏市に居住しており、特に80歳代の高齢者の多くは団地在住者である。

（エ）活動場所等

稽古及び公演は、基本的には柏市豊四季台団地内にある柏地域医療連携センター研修室で行っている。

練習会場の柏地域医療連携センター

イ　活動の企画運営体制

（ア）活動の企画運営状況

劇団を主宰するのは、御自身もインプロの俳優として活動を続ける園部友里恵氏（当時：東京大学大学院情報学環特任研究員、平成28（2016）年４月から三重大学教育学部特任講師）である。

（イ）関係機関・団体等との関わり・連携協働の状況

生涯学習講座“豊四季台くるるセミナー”の主催者は東京大学高齢社会総合研究機構であり、柏市地域支援課・地域医療推進室、柏市社会福祉協議会が共催者となっている。本劇団の公演も上記機関・団体が主催及び共催となっている。

くるる即興劇団の活動は、１年単位で活動を継続するかどうか参加する劇団員の意見を聞いて判断することとしている。

劇団主宰　園部 氏

ウ　活動の実際

（ア）活動の実際

インプロの稽古を月２回、１回当たり２時間実施、現在のところ４か月に１回のペースで公演を実施している。

（イ）インプロの稽古の様子

インプロには、主に“ゲーム”と呼ばれるものと、“フリーシーン”と呼ばれる２つの活動がある。両者ともに観客（稽古の場合は見ている参加者）からお題を頂戴して演ずる場合もある。ヒアリング調査で見学した際には、約２時間の間に次のような活動を行っていた。

【２人１組での小ゲーム】

a　最初に、「いち、に、さん」を２人で順番に言い合う。

b　次に、「いち、に、（さん）手を叩く」という動作を入れて交互に繰り返す。

c　最後に、感情を入れて、「いち、に、感情（あらかじめ両者で決めておく）」を交互に繰り返す。

２人１組の小ゲーム

【“It’s Tuesday（火曜日です）”ゲーム】

a　椅子を寄せて舞台となるスペースを作り、４人ずつの２グループを登場させる。

b　「火曜日」という言葉に反応して感情を先に出して、脳が考えたことを話す。

c　片方のグループのメンバーを１人ずつ交代し、もう片方のグループのメンバーに順番に「今日は何曜日ですか？」と尋ね、相手が「今日は火曜日です」との答えに反応して様々な感情を表現する。

【“フリーシーン”による活動】

a　３人が前に出る。フロアーからお題を頂戴して寸劇を演じる。

b　初めにメンバーから出された演題の“保育士”を演じる。楽しく演じている状況から一転何らかの“変化”を加えて演じるよう指示する。

c　次に出された演題“昔の恋人”について、喫茶店で会うシーンを即興で演じる。必要に応じて適宜ファシリテーターが演技を止めては、留意点を述べ、さらに場面に変化を与えて演技を続ける。

フリーシーンの様子

（ウ）ファシリテーターの役割について

インプロでは、一般の演劇のような脚本や演出家がないため、ファシリテーターの役割が極めて重要となる。園部氏は、常に演技するメンバーの顔の表情や様子を見ることにより、その場で出す指示を決めている。出した指示に対してメ

ンバーが嫌な表情を見せた場合は、無理にやらせることはない。

園部氏自身は、国内外でインプロを学んでいるが、師匠が行う様々なワークショップ等の現場に同行し、どの場面でどのような指示を出すのかを見て学ぶことを通して力量を身に付けてきた。ファシリテーターには「今、何が起こっているのか」を把握することが一番大事であり、また、その日に集まった参加者の状態を見て何が足りないのかを考えて活動していくことが求められる。このため、園部氏は、演劇を長くやっている人がインプロのファシリテーターとしての力量を必ずしも身に付けているわけではなく、また、現場の中で身に付けられていく要素も多いため、短期的な“インプロファシリテーター養成講座”等によってファシリテーターを養成することは難しいとの考えを持つ。

（エ）高齢者への効果について

園部氏は、参加者の間に「何かができないことへの捉え方が変わりつつある」と感じている。具体的には、インプロを通じて、自分ができないと思っていたり、失敗したら嫌だと思っていたりしたことに対して「できないかもしれないけどやってみよう！」という意識が浸透していくところが面白いと見ている。

また、講座開始当初は、孤立化、個人化しており、メンバー間にバラバラな状況が見られたが、劇団化し活動を継続していく中で、最近は同じ劇団員という一体感が生まれてきたという。

（オ）課題について

インプロのワークショップでは、１回当たりの参加者数は20人弱が望ましいといわれることもあるが、くるる即興劇団では、現在、30人弱のメンバーが活動しているため、これ以上増えてしまうと一人一人に目が届かなくなる可能性があることが一番の課題であるという。メンバーが多すぎると、舞台に立つときには一人一人の出番が少なかったり、遠慮しあったりして上手くいかないことがあるため、できれば２グループに分ける等の工夫をする必要があるとのことである。

（カ）事業の継続、他地域への波及について

くるる即興劇団では、１年ごとにメンバーの意見を聞いて継続するか否かの判断をすることにしていることからも推察できるように、活動を継続することが前提になっておらず、活動のノウハウを文書化等により蓄積することは行われていない。それは、「長く続けていかなければ」ということにとらわれるのではなく、「今、ここで起こっていること」を大切にしたいという思いから生まれている。また、インプロは、その場に立ち会わないと伝わらないことがあり、それを言葉にしたり、原則化したりすると大事な部分が抜け落ちてしまうのではないかと考えている。

インプロで用いられているゲームの優れている点は、汎用性があることである。ルールを覚えれば誰でも行うことができ、ゲームを行う目的についても多様な意味付けを行うことができる。園部氏は、そのゲームを行うことで何を学ぶか、その中にどのような意義を見出すかということを現場に応じて考えていくことに

関心のある方には是非やっていただきたいと考えている。

（3）考察

ア　事例の成功要因等

本事例の成功要因としては、以下の点が挙げられよう。まず活動を通じての高齢者自身の意識・行動の変化である。例えば講座を始めたときはややバラバラであった人間関係において、活動を通じて地域・仲間とつながりができたことである。ソーシャルキャピタル（互酬性、信頼、愛着）の構築だともいえる。そして、できない、失敗するかもしれないという意識を「即興劇」というかたちを通じて、失敗を笑いに変える関係性づくりのなかで、「できないかもしれないがやってみよう」と意識と行動を変化させたことである。第２は園部氏及び東京大学高齢社会総合研究機構、柏市の地域医療連携センター等のサポート体制があることである。特に園部氏が高齢者の即興劇の理論と手続きを学ばれた上で、支援をされている点の意義は大きい。第３は、即興劇と特に70歳代以上の高齢者との親和性の問題で、セリフを覚えなくてもよい、あるいは何をやっても間違いではないと思える関係性があるといった即興劇ならではの特性が高齢者の特性とマッチしているという点である。

劇団の公演ちらし

イ　課題と今後の方向性

本劇団の最大の課題は園部氏以外の支援者をいかに養成するかということであろう。こうした支援は誰でもできるわけではない。その意味で即興劇の支援法のエッセンスを共有する作業が求められているだろう。そのためには、若い人たちにもこの手法の良さを伝え、そうした人たちが次に支援者として育っていくという循環のネットワークを構築することが重要となろう。またメンバー数が飽和状態になっていることや60歳代等やや若い高齢者にいかに活動をつなげていくかも大きな課題であろう。

（堀　薫夫）

（ヒアリング調査協力者）

所属	氏名
東京大学大学院情報学環特任研究員 （平成28（2016）年４月から三重大学教育学部特任講師） 高齢者インプロパフォーマンス集団「くるる即興劇団」主宰	園部　友里恵 氏

ヒアリング調査日　平成28（2016）年３月16日

３　【東京都中央区】りぷりんと・中央区
～絵本の読み聞かせによる学校支援の取組～

キーワード：読書ボランティア、絵本の読み聞かせ、健康増進

＜取組の概要＞
東京都健康長寿医療センターとの連携により、60歳以上のシニアが読書ボランティアとして幼稚園、保育園、小学校等で子供たちに絵本の読み聞かせを行っている。また、会員は所定の講習を修了し、読書ボランティアとしての知識や技能を身に付けており、実践の場においても、会員相互で切磋琢磨しながら活動している。

（１）実施機関・団体名

団体等の名称	りぷりんと・中央区
連絡先	東京都健康長寿医療センター研究所　安永　正史 氏 ウェブサイト「NPO法人りぷりんと・ネットワーク」 https：//www.nporeprints.com/ 阪本小学校図書館（司書）　植田　たい子 氏 活動場所：中央区立阪本小学校、中央区内幼稚園、保育園、児童館等

（２）取組の状況

ア　実施主体の概要

（ア）活動に至る経緯

平成16（2004）年、東京都老人総合研究所のモデル事業「Research of Productivity by Intergenerational Sympathy（世代間交流による高齢者の社会貢献に関する研究）」のモニターとして活動を開始した。その後、自主運営に向けた委員会を立ち上げ、試行錯誤の末、平成19（2007）年に任意ボランティア団体「りぷりんと・中央区」として再結成し、現在の活動に至る。

阪本小学校での活動

中央区の他にも、モデル事業から立ち上がった団体として、神奈川県川崎市多摩区（りぷりんと・かわさき）、滋賀県長浜市（りぷりんと・長浜「ジーバーぽこぽこ」）、東京都杉並区（りぷりんと・すぎなみ）が各地で活動している。

なお、団体名の「REPRINTS（りぷりんと）」は、活動のきっかけとなったモデル事業の頭文字を並べたもので、単語として「復刻版・別刷」の意味があることから、「名作絵本が復刻するように、高齢者も人生を復刻しよう」という願いが込められている。

（イ）活動目的

団体の目標として以下の４点を掲げている。①地域の子供たちの成長の一端を担う、②地域と関わりながら自己研鑽を図る、③組織活動を通して友達との絆（きずな）を大切にする、④東京都老人総合研究所・社会参加とヘルスプロモーション研究チーム（現：東京都健康長寿医療センター研究所・社会参加と地域保健研究チーム）と連携して健康増進を図る。

（ウ）運営主体（機関・団体等）の組織

現在の活動人数は39名（１期生から７期生までの平均年齢は73.4歳）で、複数の小グループに分かれ活動している。会員の半数は中央区在住であるが、千葉県から参加している会員もいる。

なお、会員の資格は、読書ボランティアとしての知識や技能等を身に付ける講習を修了した60歳以上の方としている。

（エ）活動場所等

中央区内の小学校４校、幼稚園、保育園、児童館、子ども園等16施設で活動している。

なお、毎週定期的に活動している中央区立阪本小学校では、読み聞かせボランティア専用の控室が設置されており、活動の拠点となっている。

イ　活動の企画運営体制

（ア）活動の企画運営状況

活動の形態や実施方法等の仕組みは各施設で異なっているので、状況に合わせて活動している。なお、最も活動が多い阪本小学校では、毎週水・金曜日（奇数・偶数学年）の始業前に読み聞かせを行っている。

グループの振り分け等の調整は、５つの地域に分け、各施設での活動はシフト制にしており、年間の計画に基づいて活動している。

また、１人当たりの活動頻度は、多い人で８か所、少ない人で１か所、平均すると３、４か所で活動している。なお、活動の回数等は個人に任せているが、月１回は読み聞かせの活動に参加することを原則としている。

（イ）関係機関・団体等との関わり・連携協働の状況

自主運営になる以前は、東京都健康長寿医療センター研究所に全て任せていた。自主運営化に向けた準備では、ボランティア経験者も少なく、試行錯誤があった。その際、図書館が継続的に会場を貸し出してくれたり、社会教育の職員がボランティアに関する講演を行ったりすることはあったが、自主運営化に向けて行政からの具体的な支援はほとんどなかった。

また、新たな活動施設を確保するために、保育園等を歩いて回ったこともある。現在は、中央区社会福祉協議会からの助成を受け、活動している。

ウ　活動の実際

（ア）活動の実際

中央区阪本小学校における読み聞かせ活動

阪本小学校では、始業前に朝読書の時間を設定しており、週１回ボランティアによる読み聞かせを行っている。

阪本小学校で読み聞かせの活動が始まったのは、当時の図書担当の教員が、りぷりんとの読み聞かせ発表を聴いたことがきっかけとなっている。活動を開始した当初は、「読み聞かせは３年生ぐらいまでが適当」という学校側の考えがあったが、読み聞かせボランティアの活動が高く評価され、対象学年が広がり、現在は全学年で実施している（１、３、５年生を対象にした週と、２、４、６年生を対象にした週に分けて実施）。

また、校舎１階には、読み聞かせボランティア専用の控室が設置されており、活動の拠点となっている。

表２－３　阪本小学校での活動スケジュール

時刻	活　動　内　容（活動場所）
８：00	ボランティア集合（控室）
８：15～	打合せ（控室）
８：20～	発声練習・絵本確認（控室）
8：30～8：45	読み聞かせ活動（各教室）
８：50～	反省会（控室）

読み聞かせ前の発声練習

ボランティアによる読み聞かせは、毎週水・金曜日（奇数・偶数学年）の朝読書の時間、午前８時30分から８時45分までの15分間で行っている。担当するボランティアは、読み聞かせを行う30分前の午前８時に集合することで、打合せや発声練習の時間を確保している。

控室に集合したボランティアは、読み聞かせる本を確認した後、活動記録カードを参考に、これまでの活動の反省等を生かせるよう入念な打合せを行い、読み聞かせに臨んでいる。

また、読み聞かせを行う際にはっきりと大きな声が出せるよう、必ず発声練習を行うことを徹底している。発声練習では、各々の方向を向いて起立し、背筋を伸ばした姿勢で、北原白秋の「五十音」を大きな声で暗唱し、読み聞かせに備える姿が見られた。

視察日は、１、３、５年生を対象にした平成27年度最後の読み聞かせということもあり、ボランティアの意気込みも感じられた。

本の見せ方を工夫する

発声練習を終えたボランティアは、絵

本を手に担当する教室へ移動する。各教室では、教室前方のスペースに児童が床に座って待機しており、担当者が教室に入ると、元気な挨拶が交わされた。ボランティアは読み手と補助者の２名体制で教室を訪問し、補助者は、読み手が最適な環境で読み聞かせができるよう、読み聞かせを始める前に、読み手の座る位置や本の持ち方等について詳細に指示を出していた。また、読み手は、読み聞かせる前に本のタイトルを黒板に書き示して紹介する等、児童に本を印象付ける工夫がされていた。

ボランティアによる読み聞かせは、本を読む速さや声の大きさ、抑揚、間の取り方等、読み聞かせの技術が非常に高く、絵本を効果的に見せるために、本の持ち方や椅子の座る向き等、細部にわたって留意されていた。児童は、絵本を食い入るように覗き込み、熱心に聴く姿が見られた。

読み聞かせ後には、今年度最後の活動だったこともあり、児童から御礼の手紙がボランティアに手渡された。その後、終了の挨拶を行い、担任の教員と入れ替わりに教室を後にした。

控室に戻り、全員が揃うと反省が行われた。反省会では、ボランティア一人一人が、本の紹介や読み聞かせた感想、読み聞かせを行っている際の児童の反応等を詳細に発表し共有していた。本選びや読み手の声の出し方を称賛する一方で、補助者から読み手に対して、本の持ち方や開くタイミング等、絵本を見せる技術について詳細に指摘する場面も見られ、会員間で切磋琢磨しながら、読み聞かせの技術を高めている様子がうかがえた。

反省会後には、読み聞かせた本と、反省会の内容等を活動記録カードに記入し、ファイルに綴じ込んで保存すると同時に、次の活動へと生かしている。

これらの記録は、１年間に読んだ本を冊子にまとめて家庭に配付する等の情報発信としても活用されている。

記録カードへの記入

（イ）読み聞かせ活動の効果について

ボランティアから以下のような声が挙がった。

・読み聞かせの活動が生活のメリハリとなっている。本を読むのが好きなので、活動を楽しむことができている。

・本を読むのもいいが、本を選ぶことも楽しい。本を選ぶ際には、図書館や新聞から情報を得ており、普段の読書量も増えている。

・毎回反省会で意見交換をして学び合うことができ、ボランティア同士の情報交換も刺激となる。

・子供たちから頂く感想文が何よりも励みとなり、自分の活動を振り返ることにも役立っている。

（ウ）課題について

活動の広がりとともに会員の数が増えてくると、意思の統一も難しくなってきている。最近の会員は、自分の空いた時間に活動したいという思いが強く、30分前に集合する等の活動に対する意識にもバラつきが見られる。

また、男性の会員が少ないことも課題である。男性の読み手は子供にも人気があり効果的であるが、読み聞かせは母親、女性が行うものという意識が強く、りぷりんとの活動にも、男女共同参画の意識が必要だと感じている。活動前の研修会には、受講者20人中男性は５、６人の参加があるが、そのうち活動につながるのは２、３人程度である。研修修了者には、活動の理念等を確認してから参加してもらっているが、実践につながらない男性もいる。

（エ）事業の継続、他地域への波及について

人づてに活動が伝わり、現在16施設と活動が広がってきているが、中途半端な活動にしたくはないので、隣接する地域からの依頼を断っている状況である。

また、運営は、苦労や負担を一人に任せることなく、みんなで分かち合うことが重要であると考え、輪番制で行っている。

（３）考察

ア　事例の成功要因等

本事例の成功要因として、以下の２点を挙げる。１点目は、会員の読み聞かせの技術と意識の高さにある。会員として活動するには、読み聞かせの技術を習得する研修を終えることが条件となっている。また、活動の前後に課題等を交流する時間を設け、会員相互で切磋琢磨できる人間関係が築かれていることから、活動を継続することによって、会員は読み聞かせの技術とともに意識の向上が図られると考える。

２点目は、自主運営化と運営システムの構築である。東京都健康長寿医療センター研究所の調査研究の一環として立ち上がった会が、自主運営に至るまで紆余曲折を経ながら、地域ごとに分けた小グループによる活動や年間計画によるシフト制、負担感を減らすための運営の輪番制等といった運営システムが構築されたことが、会の継続要因の１つにもなっていると考える。

イ　課題と今後の方向性

本会の課題は、次世代の会員の獲得であろう。70歳代の会員が多くなっていることから、継続して活動するためには、50歳代、60歳代の新たな会員を獲得する必要がある。そのためには、社会教育行政や社会福祉行政等と連携し、広報活動の強化等を行うことで、新たな会員を獲得することも可能である。

また、会員数の増加により会員の意志統一が図れていないとの課題が挙げられたが、会員の研修の場として、会員相互の意思疎通を図る機会を設けることも必要である。

さらに、りぷりんとの取組は、東京都杉並区や川崎市多摩区等でも行われているので、他のグループの取組と情報交流を図ることも会の活性化につながると考える。

（市川　重彦）

（ヒアリング調査協力者）

所属	氏名
東京都健康長寿医療センター研究所	安永　正史 氏
阪本小学校図書館（司書）	植田　たい子 氏
りぷりんと・中央区	工藤　寛 氏 小林　典子 氏 坂本　幸子 氏 佐野　勝子 氏 （五十音順）

ヒアリング調査日　平成28（2016）年３月16日

4　【新潟県小千谷市】わかとち未来会議
～地域資源を活かしたまちづくりとコミュニティ・ビジネスの取組～

キーワード：まちづくり、地域資源、コミュニティ・ビジネス

＜取組の概要＞
　中山間地の一つの集落の自然や文化、地域資源を活かしたまちづくりと、グリーンツーリズムや農家民泊等コミュニティ・ビジネスによる持続可能な暮らしを目指す。

（1）実施機関・団体名

団体等の名称	りぷりんと・中央区
連絡先	わかとち未来会議事務局 住所　〒949-8726　新潟県小千谷市真人町戊378- 1 電話番号／Fax番号　0258-82-1410

（2）活動の実際

ア　運営主体の概要

（ア）活動に至る経緯　～活動の開始時期、活動が始まった理由やきっかけ

　わかとち未来会議は、新潟県小千谷駅から車で25分ほどの山間地にある、真人（まっと）町の「若栃（わかとち）」地区で活動している団体である。若栃の世帯数は35世帯、人口は約110人（平成28（2016）年３月調査時）である。

農家民泊での歓迎会

　わかとち未来会議発足のきっかけは平成16（2004）年に発生した中越地震にまでさかのぼる。大きな被害を受け、避難生活も強いられながらも少しずつ復興の兆しが見えていた。しかし、翌年には地元の小学校が閉校になる等、村に元気がなくなりつつあった。一部村人に危機感が生まれ、平成18（2006）年２月、中越地震がきっかけで元気がなくなった村を取り戻そうと、38歳から78歳までの有志30人が集まり、わかとち未来会議が設立された。廃校になった小学校の活用や、グリーンツーリズム、イベント等によって村の知名度をあげようと議論を重ねていく。平成18（2006）年８月に早稲田大学とNPOふるさと回帰支援センターがコラボレーションした講座の一環で、「都市と農村の関係論」を学ぶ学生18人が若栃にやってきた。そこで、学生と地域住民の交流を通して、学生は村の文化や生活の知恵に触れ、また地域住民は村が持つ価値を改めて感じることができた。学生が若栃のイベントに参加する等、この交流は社会人になった現在も続いている。

　平成19（2007）年１月、今後の若栃の未来を見据えた課題の整理や取組を話し合う機会として、NPO法人まちづくり学校のコーディネーターによるワークショップを２ヶ月の間実施した。ワークショップという言葉を聞いたことも

ない約20人の住民が、25回ものワークショップで若栃の夢と未来について話し合った。この取組によって「わかとち未来デザイン・実践プラン」を作成でき、これを取り組むべき事業の指針としている。

イ　事業の概要

（ア）活動内容の設定方法

わかとち未来会議は、会の理念として、「１．超進化し、夢語る暮らし、２．人に温かく、寄り添う暮らし、３．自然と共にある種まく暮らし」を掲げて活動している。先述の実践プラン等の計画に基づき様々な事業に取り組んでいる。月１度の会議を、村の集会場、農家民宿「おっこの木」で開催し、活動の内容等について話合いを行っている。代表、副代表、会計等の役員がメンバーと一緒になって取り組む活動や、集落の課題や未来についての議論を設立以来続けている。

（イ）関係機関の関わり方・連携状況

わかとち未来会議の設立以来、大学や学校等との交流のきっかけは小千谷市の行政を介したものが多い。そういう経過をたどって今でも東小千谷小学校等の総合的な学習の時間の関わりにもつながっている。また、公民館と連携し、様々な講座やわかとち楽校を開催している。インタビューの中で、市教育委員会生涯学習スポーツ課職員の「若栃は５校を受け入れている。他の集落にも声をかけていただける。５つの集落のリードオフマンという感覚でお願いができる。」という言葉からも、わかとち未来会議と市との信頼関係が強固なことがうかがえた。

ウ　活動の実際

わかとち未来会議が展開している主な事業として以下の３事業である。

（ア）農家民宿「おっこの木」の運営

本調査でも訪れた農家民宿「おっこの木」（写真）は、解体される予定になっていた築160年の古民家を改修し、平成22（2010）年６月にオープンし、民宿を運営している。１泊２食で大人7,800円～、定員は10名。客室は２部屋あり、大広間は17.5畳の広さである。1,500円から昼食の提供もしている。地元で採れた山菜や旬の野菜等を使った田舎料理や、地元の魚沼コシヒカリが楽しめる。民宿は民間サイトからでも予約が可能であり、評価も高く、全国から宿泊客が来て、リピーターも多いことが特徴である。おっこの木では若栃の高齢の女性たちも活躍しており、貴重な就労の場にもなっている。

農家民宿「おっこの木」

（イ）教育体験旅行（グリーンツーリズム）民泊

平成18（2006）年の早稲田大学の学生を民泊で受け入れて以来、これまでJICAの海外研修生や中学生、小学生の教育体験旅行に参加してきた。海外研修生の受入れは６年間続いていた。中学生は地域住民宅に民泊体験等を行い、小学生は総合的な学習の時間の授業として田植えから稲刈りまでの体験等を通して住民と交流を行っている。

海外研修生の受入れ

（ウ）特産品の開発・販売

米、野菜、山菜といった農産物から加工品の生産や販売を行っている。こうした特産品は「おっこの木」でも購入が可能である。こうした特産品をブランド化していくことが今後の課題として挙げられている。また、昔からあるしめ縄の製造販売がこの集落の特徴であり、わかとち未来会議のコミュニティ・ビジネスのさきがけ的な特産品とされている。11月～12月にかけて行われるしめ縄づくりでは、多くの住民が参加し100万円以上売り上げている。

特産品の販売

（３）成果と課題

ア　成果

わかとち未来会議にとって、有志の集まりとしてスタートしたことと、ワークショップ等を通じて若栃が目指すべき未来を共有するプロセスを経たことが、その後の様々な活動の下地になっている。前述の理念はそうしたワークショップからできたものであり、１つの大きな成果と言える。また、必要に応じてすぐに仲間が集まる機動性が行政や他団体との連携につながり、コミュニティ・ビジネスの展開等に活かされている。若い世代との交流を積極的に行うことにより、地域住民が地域の自然や文化、地域資源の素晴らしさを再認識するきっかけとなり、刺激にもなっていると言える。

イ　課題

わかとち未来会議の代表からは次世代育成が課題であると指摘があった。高齢化率が43%となる集落であり、今後の若い世代への継承が重要である。そのためにも、若い世代の雇用が生まれ、収入を得られる仕組みづくりが必要である。

（4）今後の方向性

廃校になった学校をどのように活かしていくのか、いくつかのアイデアがインタビューの中でも提示された。カフェやハーブ畑を作って、人が集まれるような新たな場所に変えていきたいという希望が語られた。学校の活用にはいろいろと制約もあるようだが、これまでの実績からも、市と連携しながら若栃ならではの活用方法を見出していくのではないかと考えられる。

また、物販事業を推進するため、「株式会社Mt.ファームわかとち」が平成28（2016）年４月に法人化され、米や野菜の生産と販売、惣菜および加工品の製造や販売の事業を強化した。わかとち未来会議は、グリーンツーリズムや農家民泊、イベント等を通して地域伝統文化の伝承や地域の魅力づくりを進めている。また、法人が設立されたことにより、地域の経済力を高め地域の産業創出と雇用の確保を推進する組織として、さらに発展していくことが期待されている。

（5）考察

本事例は中山間地の集落の住民有志の集まりが組織となり、様々な取組や交流を通して、住民が地域の素晴らしさを再認識し、持続可能な地域づくりを実践している住民組織の事例である。設立以来、市行政との連携、教育行政との連携はわかとち未来会議の発展の重要な要因であった。それまで地域にとって未経験であった連携が、「小さな成功体験」をもたらしたと言える。この事例の大きな特徴の１つは震災をきっかけに、様々な地域の課題や資源、地域の未来について何度も繰り返し議論するワークショップを経験し、住民の思いが共有できたこと、そしてお互いの絆（きずな）が強化されたことではないかと考える。

また、中山間地や地方に見られるような影響力のある血縁や地縁による紐帯とは異なる気持ちでつながった結束力や行動力が感じられた。地域の資源をコミュニティ・ビジネス化し、まちの存続と次世代への継承を目指すことは、こうした山間地のみならず多くの地域が目指していると思われる。しかし、そこに向かって発展を目指す具体的なロードマップは多様であり、それぞれの地域が主体的に考えるしかない。この主体的に考えるということが、わかとち未来会議の力ではないかと感じた。集落の課題はより深刻になるかもしれない。事業が必ずしも期待どおりの成果を生まないかもしれない。しかし、わかとち未来会議の持つ力は、こうした状況の変化にも柔軟に対応し、集落が一丸となって解決していく姿を想像させる。

（倉岡　正高）

（ヒアリング調査協力者）

所属	氏名
わかとち未来会議代表	細金　剛 氏
小千谷市地域おこし協力隊	佐藤　春香 氏
小千谷市教育委員会生涯学習スポーツ課参事	久保田　千昭 氏
小千谷市教育委員会生涯学習スポーツ課係長	林　真紀子 氏

ヒアリング調査日　平成28（2016）年３月９日

5　【愛知県田原市】元気はいたつ便（図書館資料等によるグループ回想法）
～図書館とボランティアによる高齢者福祉施設訪問サービス～

キーワード：グループ回想法、貸出しサービス、ボランティア

＜取組の概要＞
　図書館職員と回想法講座を修了したボランティアによる「元気はいたつ便」が市内の高齢者福祉施設を訪問し、図書館資料等による「グループ回想法」やレクリエーションとミニ回想法を取り入れた「元気プログラム」を実施し、さらに「団体貸出サービス」を行うことで図書館への来館が困難な高齢者等に元気になるきっかけづくりを行っている。

（1）実施機関・団体名

団体等の名称	田原市中央図書館
連絡先	住所　〒441-3421　愛知県田原市田原町汐見５番地 電話番号　0531-23-4946 ウェブサイト「田原市図書館」 http：//www2.city.tahara.aichi.jp/section/library/

（2）取組の状況

ア　運営主体の概要

（ア）活動に至る経緯

「元気はいたつ便」は、地域にとっての最重要課題の１つである高齢化に対応するため、平成23年に図書館職員の企画から生まれた事業である。

高齢者を対象とした新しい図書館サービスの開拓により、図書館職員の高齢者に対する理解が深まり、選書にも反映されることや、図書館には、本、紙芝居、CD等の資料や活用のノウハウが揃っていること、また図書館職員のスキルも向上できるということで始めることになった。

図書館職員による実践

昔の道具の展示

企画のきっかけは、総務省の地域活性化交付金を活用するアイデアを職員から募集して、コンペを行った結果によるもので、その後図書館資料等を用いた「グループ回想法」を実施することに決定した。その後に福祉課（訪問先の絞り込み）や博物館の分館である民俗資料館（昔の道具の手配）、福祉専門学校や大学（職

員の研修やボランティア養成講座)、協力機関との連携により実施し、４年間の試行期間を経て、平成27（2015）年７月から本格実施している。

現在、市内に27ある高齢者・介護等の福祉施設のうち19施設で事業が実施されている（平成28（2016）年３月時点)。

（イ）活動目的

図書館への来館が困難な高齢者や障害者等の方々へ図書館資料の利用を通じて、元気になるきっかけを提供することを目的として行っている。

（ウ）運営主体（機関・団体等）の組織

田原市中央図書館、「元気はいたつ便」ボランティア

（エ）地域の状況

a　人口：64,064人（平成27（2015）年12月）

b　産業：愛知県南東の端に位置し、東西に長い渥美半島の大部分を占めており、農業は露地栽培や施設園芸、畜産と多様で農業生産額全国第１位、トヨタの工場もあり、経済的には恵まれている。

c　歴史・文化：平成15（2003）年８月に市制施行し、平成17（2005）年10月に渥美町の編入合併により新「田原市」が誕生。

d　高齢化率：23.2%（平成27年度）

e　教育の状況（社会教育施設数：文化会館３、市民館19、図書館３、博物館１、郷土資料館１、学校数：小学校18、中学校７、高等学校３）

イ　事業の概要

（ア）活動の企画運営状況～「元気はいたつ便」～

「元気はいたつ便」の活動には、訪問サービスと団体貸出サービスの２つの活動がある。

「訪問サービス」の活動では、図書館職員とボランティアが施設を訪問して、グループ回想法や元気プログラム（レクリエーション＋ミニ回想法）の２種類を実施しているが、どちらのサービスを行うかは訪問先の施設の希望に合わせて決めている。

元気プログラムは、レクリエーションと回想法を簡易化したミニ回想法を組み合わせたもので、本や紙芝居の読み聞かせのほかに、施設入所者と一緒に歌ったり、踊ったり、ゲームをしたりすることもある。

「団体貸出サービス」は、福祉施設の利用者や職員からのリクエストを聞き入れて、毎月１回、図書館配送指定日に希望の図書館資料を配達する。

（イ）関係機関等の関わり方・連携状況～回想法講座(回想法ボランティア養成講座)～

グループ回想法は、図書館が博物館や介護施設等とつながりながら、市民とともに超高齢化社会に向けて実施している取組である。図書館の中でのサービスに

こだわらないで、地域に出向いて地域の方とつながることで、図書館サービスに良い影響を与えられるように取り組んでいる。

「回想法講座～元気はいたつ便ボランティア募集～」は、介護施設等への訪問ボランティアを養成するために民俗資料館を会場に実施している。受講対象は、回想法や福祉ボランティアに興味のある方30名を対象に年１回、民俗資料館見学・回想法説明・昔の道具を使った演習を行っている。

ウ　活動の実際

（ア）「元気はいたつ便」の実施体制について

「元気はいたつ便」の担当は、図書館職員６名（正規２名・嘱託４名）と、訪問サービスボランティア８名となっている。実際に訪問サービスに行く場合は職員２名とボランティア２名という体制である。また、団体貸出サービスは職員２名で出向いている。

ボランティア８名は、担当月に１回から３回、１時間程度（行き帰り時間を除く）お願いしている。

（イ）訪問サービスについて

訪問サービスのうちグループ回想法は、各施設入所者８名を対象に回想法を45分程度行う。元気プログラムは、人数制限を設けずにレクリエーションと短い時間のミニ回想法で50分程度行う。

訪問サービス

また、訪問サービスは、訪問する施設からの要望を聞き入れて、回想法のテーマやレクリエーションの内容等を検討しプログラムを作成している。

グループ回想法では、毎回テーマを設定して、博物館から借り受けしている昔の生活用具の他に音楽CD、古い写真等を用いている。

グループ回想法の流れとしては、３つの約束（①話の内容は絶対に外では話さないこと、②互いを尊重すること、③話したくない人には無理強いしないこと。）を説明し、テーマの発表、自己紹介、自由に昔の思い出等を語り合い、最後に感想を聞いて終了としている。

元気プログラムは、ゲームやクイズ、歌、手遊び等のレクリエーションが中心になっている。

（3）成果と課題

ア　成果

回想法は昔の記憶を呼び起こすことで、脳を活性化したり、思い出話をしたりすることで、感情を豊かにすることを目指している。「元気はいたつ便」では、より多くの声に耳を傾けられるよう図書館職員と施設の介護職員、さらに図書館で育成している市民ボランティアがチームワークを組んで話を聞き出している。お年寄りからの話で地域の埋もれた情報に巡り合うことや、別の施設で行う回想法の際に生かすことが出来る話を聴くことができるというメリットがある。

グループ回想法

また、団体貸出サービスでは、施設からの要望に応えられるよう、選書にあたっては、中央図書館や分館と連携しながら取り組んでいる。

イ　課題

市内に３館ある図書館の中で、訪問サービス事業を実施しているのは中央図書館だけとなっている。その理由としては、分館では、ボランティアとの調整やプログラムの準備等を行うには、職員数が十分ではないことが挙げられる。

また、市内の福祉施設が少しずつ増えていることで、増大するニーズへの対応を検討していかなければならない状況にある。

今後は、訪問サービスボランティアの養成により、事業の進行役もボランティアにお願いできるようにしていくことや、団体貸出の利用促進、提供資料の充実を図ること等が課題として挙げられる。

その他に、回想法講座が年１回の開催であることから、福祉施設の職員が受講できない状況があることも課題として挙げられる。

（4）今後の方向性

ア　福祉施設の増加とニーズ拡大の対応

訪問サービス事業（グループ回想法や元気プログラム）を実施している福祉施設で、回想法を取り入れた取組をしてもらえるきっかけとしていきたい。

イ　関係機関、福祉施設、地域との連携

回想法で使用する昔の生活用具については、一般の方にも声かけして、さらに収集していきたい。

ウ　訪問サービスボランティアの養成、サポート

訪問サービスボランティアを養成する講座は、ボランティアが増えて自分たちで回想法をやってみることにつながればと思う。

エ　団体貸出の利用促進、提供資料の充実

団体貸出の利用促進については、おすすめ本のパック便事業に取り組んでいきたい。

（5）考察

ア　分類の視点との関連

回想法の導入により、図書館職員の高齢者に対する理解が深まり、図書館にある資料を活かすことができ、さらに図書館職員のスキル（お話会やレファレンス等）も向上している。

また、地域にある課題を見つけて、それを図書館が持っているリソース・技術を用いて解決しようとしている。

イ　社会教育行政、社会教育施設との関連

民俗資料館との連携はあるが、自治会組織が管理運営している市民館（公民館）との連携は図られていない。

ウ　コミュニティとの関わり、人と人とのつながりの構築、他行政等との関連

福祉課（訪問先の絞り込み）や民俗資料館（昔の道具の手配）、福祉専門学校や大学（職員の研修やボランティア養成講座）との連携により着実に事業展開がされている。

訪問サービス事業のグループ回想法は８名を対象にしているが、実施場所や職員の問題がクリア出来れば対象者を増やして行うことも考えられる。また、元気プログラムは地域の人たちとの交流等を通じて地域課題や地域の状況を発見し、プログラムや図書館業務に生かしている取組になっている。

エ　創造性、持続性

「元気はいたつ便」の活動が４年間の試行期間を経て、改善が図られてきていることと、図書館長を筆頭に職員の事業の取組に対する意識が高いことが継続している理由として挙げられる。さらに民俗資料館や関係部署との連携が図られていることや、回想法講座による訪問サービスボランティアの養成と活用が継続的に行われていることによってこの取組が持続しているものと考えられる。

オ　他の地域等で取り入れる場合の留意点等

回想法を取り入れた事業とする場合は、回想法についての職員研修の実施や昭和の時代の生活用具等を揃えることが必要である。

また、福祉部局をはじめとする行政機関やNPO、自治会、老人クラブ等との連携も必要である。

（島﨑　浩一）

（ヒアリング調査協力者）

所属	氏名
田原市中央図書館長	豊田　高広 氏
田原市中央図書館主任嘱託司書	河合　美奈子 氏

ヒアリング調査日　平成28（2016）年３月２日

６　【愛知県北名古屋市】北名古屋市回想法事業「思い出ふれあい事業」
～博物館と福祉部局の連携による回想法事業～

キーワード：回想法、認知症予防、介護予防

＜取組の概要＞
北名古屋市歴史民俗資料館が福祉部局との連携を密にしながら認知症予防として回想法を中心とした事業を展開している。

（１）実施機関・団体名

団体等の名称	北名古屋市歴史民俗資料館「昭和日常博物館」
連絡先	住所　〒481-0006　愛知県北名古屋市熊之庄御榊53 電話番号　0568-25-3600 ウェブサイト「北名古屋市歴史民俗資料館　昭和日常博物館」 http：//www.city.kitanagoya.lg.jp/rekimin/

（２）活動の実際

ア　運営主体の概要

（ア）活動に至る経緯

北名古屋市歴史民俗資料館（以下、「資料館」とする）は、平成５（1993）年に開館し、昭和時代の民俗資料の収集と展示をはじめた。自宅に保存しておいたものを単に捨てたくはない、という思いから、市民が残していたものを提供してもらうことで、多くの人との関わりが生じた。平成９（1997）年までにフロアリニューアルを行い、昭和の民俗資料の展示を開始した。この時の展示会名「昭和日常博物館」は現在館の愛称としても使用され、設置条例でも認可されている。平成10（1998）年、野口悠紀雄氏との対談により回想法の概念を知ることとなった。これにより資料館を利用した自分史構築の活用模索が始まった。平成13（2001）～14（2002）年、国立長寿医療研究センターの遠藤英俊医師から、館のコレクションを活用しつつ地域での回想法による、認知症予防事業に関する提案があった。これは回想法を市民に提供できる仕組みをつくりたい、という医師の思いからスタートした。ここから順調に取組が進み、厚生労働省の介護予防事業補助金を得て、回想法が平成14年度から国のモデル事業としてスタートすることとなった。

館内の展示

（イ）活動目的

継続的な取組の中で、高齢者の介護予防と地域づくりを結び付け、地域づくりの担い手を回想法の手法を用いながら確立させること。

（ウ）運営主体（機関・団体等）の組織

市高齢福祉課（回想法センター）：回想法スクール

『資料館』：回想法ワークショップ・展示会

（エ）地域の状況

人口：84,411人（平成28（2016）年２月現在）、産業：名古屋市のベッドタウンとしての側面と都市近郊農業の側面を併せ持つ、歴史・文化：平成18（2006）年旧西春町と師勝町が合併して成立、国登録有形文化財となる旧加藤家住宅が平成10（1998）年寄贈されたことを受け、同敷地内に回想法センターを設置、高齢化率：24.2%。

（オ）教育の状況

社会教育施設数：公民館２・図書館２・博物館１、学校数：小学校10・中学校６・高等学校１

イ　事業の概要

（ア）活動の企画運営状況

回想法事業は運営主体で上述した通り、高齢福祉課による「回想法スクール」と、「資料館」による「回想法ワークショップ」の大きく２本立て構成となる。

回想法スクールは、市内４か所において８回・８週連続、１回あたり１時間の事業で、概ね10名程度の参加者を募りグループを形成する。多少の増減は認めている。このスクールを修了すると、「いきいき隊」（現在約600名）という総会や役員も存在する会に入会することとなり、グループは自主活動を展開し、その後も活動をグループごとに行う。対象は市民であり、認知症予防にもつながっている。

回想法ワークショップは、対象も市民以外でも可能と広がり、認知症ケアとしても利用できる。また、スクールのように一定期間の時間を確保できない人でも単発事業のため、気軽に参加できる。参加者にはスクールの案内も行う。

回想法スクール

（イ）　関係機関等の関わり方・連携状況

ａ　活動への行政機関（教育委員会、他部局）の関わり

上述しているように、「資料館」と福祉部局との連携は密である。このほか保健師等、小さな市であるため行政スタッフ間のつながりはある程度できあがっており、チームのような形になっている。

b　関係機関（大学、施設等）・企業・NPO団体等の関わり

活動のきっかけとなった国立長寿医療研究センターはもちろん、現在回想法センターの運営にも携わっているNPOシルバー総合研究所とも連携している。

ウ　活動の実際

回想法事業の核となっているのが回想法スクールである。概ね65歳以上の10名程度のグループで、専門知識を持つスタッフと１時間ほど語り合う。全８回のスクールは、回ごとに「遊びの思い出」、「学校の思い出」、「お手伝いの思い出」等のテーマがあり、テーマに沿った思い出を楽しむ。また、回想を導き出すため昔懐かしい生活道具も利用する。回想法の先駆的地域である欧米では、12回１クールの取組を行っているが、国内の研究者等と協議し、８回が妥当であるとの結論となった。スタッフは、進行役のリーダーのほか、コ・リーダー（サブリーダー）や記録係が必要となる。コ・リーダーは人前で話すのが苦手な人や耳が遠い人等をさりげなくサポートする。また、参加者が和む、回想が導かれやすい等の理由で回想法スクールの卒業生もこの役を務める。

グループ回想法

スクール参加者の多くが女性で、コミュニケーション力の低くなりがちな男性をフォローすべきという現場からの声により、男性専科のスクールも開催される。スクールには３つの約束ごとがあり、それらは①スクールで出た話は、よそでは話さないこと、②ほかの人が話す思い出話を否定しないこと、③話したくないことは無理に話させないこと、である。これまでのグループのほとんどは、すぐに懐かしい思いを共有し話がはずみ、会の修了後もいきいき隊として自主グループを結成し活動を続ける。もし活動が続けられない人が発生したら、次のスクールへの勧誘等を行いフォローする。また、最近「いきいき隊」の会員が、回想法スクール等でリーダー役を務められるように育成するボランティア養成講座をスタートさせた。

「資料館」内での取組としては、前述した回想法ワークショップによる、基本は単発での事業がある。来年度（平成28年度）のワークショップについては、「いきいき隊」のうち「資料館」を定例として活用しているグループがあるので、このグループに企画から参加してもらう予定である。現在、職員事情により、活動が手薄になりがちではあるが、年に１回は８回連続の講座も行ってきている。

また、「お出かけ回想法」という「資料館」を利用した取組も行われる。これは、近隣の施設に呼びかけ、回想法マニュアルを施設スタッフに渡し、定期的に自施設の行事としての活用を周知している。

「いきいき隊」は、活動の発表場所として、市で行っている子どもフェスタ等のイベントでも積極的に活動を行っている。

（3）成果と課題

ア　成果

回想法スクールから、「いきいき隊」結成という流れが出来上がっているため、地域における回想法の広がりが着々と進行してきている。また、「いきいき隊」の活動により、市民に地域貢献やボランティアに関する意識が高まっていると捉えられる。回想法を通して学んだことを、子供や同世代の人たちに伝えるというような、地域に還元することを実行に移せていることも成果といえる。

世代間交流事業

地域に新しい仲間ができることから、地域に対する愛着が広がり、地域貢献にもつながっていく。

イ　課題

市には市民協働課というセクションがあるが、現時点で連携できていない。今後さらに連携を拡大させ、「資料館」としての機能を充実させていくことを検討している。

回想法の検証として、健常者にも効果があることがわかっているが、データ量が少なく、エビデンスとして活用するには至っていない。事業の前後にSKTやSF８等のスケールを用いながら、閉じこもり、認知症、社会性等を計測して数値の改善は見られているが、個人の機能状況の報告にとどまっているので、今後この点も深めていくことを考えている。

（4）今後の方向性

「資料館」の職員が現状２名と、とても厳しい中での運営が続いている。しかしながら、毎年増加している「いきいき隊」により、「資料館」内にボランティアとして活躍してもらう可能性が広がってきている。また、事業スタート当初によく見られた、「回想法受講＝認知症の人」という誤った認識が徐々に修正されつつある。もともと回想法は、家庭内でも取り組んでもらいたいものでもあり、さらに市内外問わず、回想法の理解を広めていきたいと考えている。

（5）考察

ア　分類の視点との関連

回想法による先駆的事例であり、現在も全国から注目を集めている。10年前に町の合併により２町が１市にまとめられたが、人口や面積もコンパクトであるため、行政間の風通しもよく、しっかりとした連携のもとに事業が展開されている。

イ　コミュニティとの関わり、人と人とのつながりの構築、他行政等との関連

医療関係や福祉部局との連携により、発案から速やかに実施までのステップが形成され、成果も着実に作られていった。

ウ　創造性、持続性

スクール受講から「いきいき隊」という、自主グループ結成の流れを確立したことで、事業が拡大していき、今後、社会教育としての事業展開に期待が持てる。

エ　汎用性

都市部では、個人主義が強まり、回想法に適さない場合も考えられる。

（岡田　純一）

（ヒアリング調査協力者）

所属	氏名
北名古屋市歴史民俗資料館館長	市橋　芳則 氏

ヒアリング調査日　平成28（2016）年３月３日

7　【福岡県飯塚市】熟年者マナビ塾
～学びの成果を生かした学校支援ボランティア～

キーワード：熟年者ボランティア、生きがい、健康増進、脳トレ

＜取組の概要＞
熟年者が週に１回小学校（余裕教室）に通い、午前中３時間ほどの活動を行う。活動では塾生が相互に教え学び合う「自主的な学習活動（脳や身体をトレーニングする活動・趣味を広げる活動）」と「学校支援ボランティア活動（環境整備支援・教育活動支援）」を行っている。

（1）実施機関・団体名

団体等の名称	熟年者マナビ塾 （飯塚市内19の小学校、200名登録）
連絡先	飯塚市教育委員会生涯学習課 住所　〒820-0041　福岡県飯塚市飯塚14番67号 電話番号　0948-22-3274 ウェブサイト「飯塚市中央公民館（飯塚市ウェブサイト内）」 http：//www.city.iizuka.lg.jp/i-kominkan/shisetsu/annai/shisetsu/shi-003.html

（2）取組の状況

ア　運営主体の概要

（ア）活動に至る経緯～活動の開始時期、活動が始まった理由やきっかけ～

家庭や地域の教育力は、生活の不便や経済的貧困とともにその力が発揮されてきたが、豊かな社会においては、こうした形での地域共同体の再現は難しくなっている。今日、新しいコミュニティの核として学校が期待され、学校が地域と一体となって連携・協働することが求められる一方で、教職員の学校開放への意識が十分に追いついていない面もある。

算数「九九」の聞き取り

飯塚市では高齢化率が29.2%（平成28年度）を超え、医療費・介護費は増加し、市財政が圧迫されるようになってきた。高齢者の居場所づくり、生きがい対策づくり、孤立や孤独からの解放・支援は、高齢社会の大きな行政課題となっている。

熟年者マナビ塾は、平成17（2005）年１月から合併前の旧穂波町教育委員会の事業として、穂波町の小学校５校でスタートしている。旧穂波町では、「こどもマナビ塾（放課後子供教室）」の指導者として熟年者のボランティアが関わっており、こうした取組が熟年者マナビ塾のきっかけとなっている。平成18（2006）年３月には、飯塚市、穂波町、筑穂町、庄内町、頴田町が合併し新し

い飯塚市が誕生し、熟年者マナビ塾は飯塚市教育委員会に引き継がれている。

（イ）活動目的

熟年者が小学校に通い、自主的に学習を行い、学校支援ボランティアとして活動することで、熟年者の生きがいづくりや健康増進、児童の健全育成、学校の活性化、開かれた学校づくりに資する。

（ウ）運営主体の組織（機関・団体等）の組織

熟年者マナビ塾…塾生は200人在籍（市内の小学校19校）、各塾に塾長、副塾長、会計を置く（熟年者マナビ塾実施要項）

生涯学習課…熟年者マナビ塾の運営

小学校…熟年者マナビ塾の開設

（エ）地域（飯塚市）の状況

人口：129,803人（平成29（2017）年11月）、高齢化率：29.2%（平成28年度）

歴史文化産業：かつては長崎街道の宿場町、筑豊炭田の中心として栄えた。今日、自動車関連産業の地元への誘致、旧伊藤伝右衛門邸、嘉穂劇場、旧長崎街道内野宿等歴史的遺産を活用した観光ルートの整備、３つの大学を有する情報産業・学園都市として、県中央地域の中心都市となっている。市内には、教育施設、医療・福祉施設が多くあり、教育・子育て・医療福祉の環境は充実している。

（オ）教育の状況

公民館13、図書館５、博物館１、学校数：小学校20・中学校10・高等学校４・大学３。

イ　事業の概要

（ア）活動内容の設定方法

熟年者マナビ塾は、熟年者（60～80歳代）が、小学校の余裕教室で、週１回、学期単位（１～３学期）で、３時間程度（概ね８：50～12：00）行う活動である。１回の参加につき会費は100円（プリントやテキスト代）。塾生の活動は「自主的な活動」と「学校支援ボランティア活動」に分かれる。

脳活性化トレーニング

「自主的な活動」は「脳や身体をトレーニングする活動（詩・和歌・俳句・論語等の朗唱、百マス計算、ストレッチ体操・健康体操等）」と「趣味を広げる活動（絵手紙づくり、パソコン、切り絵づくり、グラウンドゴルフ等）」がある。「趣味を広げる活動」では、参加者が自分の特技を生かしながら、互いに講師となって活動している。

また、「学校支援ボランティア」では、「環境整備支援（花壇づくり、図書整理、校舎の清掃、校舎の修理等）」と「教育活動支援（読み聞かせ、教材づくり補助、安全パトロール、昔遊び等）」がある。

花植えのボランティア活動

各学校では、塾長と熟年者マナビ塾担当の先生とが、概ね２週間前までに日程や活動内容の調整を行っている。

塾生による自己学習・相互学習を基本とし、自分たちで学習内容や教材を決めている。クラフト等特殊な技術を要するときは、外部講師を招くこともある。

塾生は名札を着用する、子供たちに積極的に挨拶や声掛けを行う、活動で知り得たことは校外で話さない、学校で定めたルールを厳守する等の塾生心得がある。

（イ）関係機関等の関わり方・連携状況

教育委員会内部で生涯学習課と学校教育課との連携ができている。各地区公民館で入塾の受付や事前説明、塾生からの相談対応を行い、学校教育課では学校に対して学校支援ボランティア活用の指導助言を行っており、両者で学校支援ボランティア活用の情報や広報について連携を図っている。

飯塚市主催で、塾生間の交流等を目的として研修会や発表会を開催するとともに、各地区の公民館では、地区内の熟年者マナビ塾の活動の様子を取りまとめ、パンフレットを作成し、紹介している。

活動のための補助金はないが、消耗品費・光熱費・修繕費等は市が負担している。

また、事業の実施に当たり、飯塚市を所管する県の筑豊教育事務所の社会教育主事が研修会で助言を行ったり、保健センターの運動指導員が研修会でインストラクターとなって体操等を指導したりして、関係機関等との連携が図られている。

熟年者マナビ塾は公民館活動の一環として展開しており、公民館保険の範囲での補償となっている。

ウ　具体的な活動の様子

（ア）具体的な活動の様子

１時限目（８：50～）は、サーキットラーニングタイムとして、朗唱や読み書き計算、健康リズム体操等、脳の活性化や身体機能維持のプログラムを実践している。２時限目（９：40～）は、わくわくタイムとして、塾生同士が講師となり、趣味を広げる活動等自分たちが得意なことを楽しく学習している。そして、３時限目（10：45～）は、学校支援タイムとして、学校の依頼により、学校支援ボランティアに従事している。

１時限目に塾生の集まる余裕教室に入ると、机上に論語のプリントが置かれて

いた。ほかにも百マス計算、漢字検定等もある。塾生一人一人から自己紹介を頂いた。塾生は地域の住民で平恒（ひらつね）小学校出身者が多く、先輩塾生が後輩の同窓生を塾に誘うこともある。塾生の14名のうち女性は13人で明るく生き生きしていた。また、小学６年生一人一人に切り絵を作り、卒業式にはメッセージを書いて送る製作途中の作品も見せていただいた。子供たちは孫のようにかわいくて、元気が出るとのこと。

学校支援ボランティア

２時限目が始まる前に、２年生の男女２人がマナビ塾にやってきて、「九九を覚えたので聞き取りをお願いします。教室に来てください。」と大きな声で塾生に案内があった。

２年生の教室の１クラスでは、約30人の子供たちが、14人の塾生の前に並び、覚えた九九を唱えていく。１つの段を間違えなく唱えることできれば、その段にシールを貼ってもらい（合格）、他の塾生の前に行って違う段を唱え始める。塾生と子供たちとのコミュニケーションには、真剣さの中に親しみと明るさがうかがえた。担任教員に尋ねると補助に入っていただき助かっているとのことであった。

（３）成果と課題

ア　成果

熟年者は、自主学習・相互学習により脳や身体機能の活性化が図られ、健康の維持・向上につながるとともに、他の塾生や子供たちと接することで元気をもらい生きがいの創出になっている。

また、熟年者と子供たちとの交流により、子供たちの挨拶や豊かな生活のための知恵・技能の伝授が行われ、基本的生活習慣や規範意識の向上につながっている。

さらに、学校にとっても、授業等に支援が入ることで、授業の効率や効果が上がり、学校の安全性が向上するとともに、地域においても、子供たちと顔見知りになり注意しやすくなり、地域の教育力の向上につながっている。

イ　課題

塾生の高齢化・固定化が進んでいる状況がある。新しい塾生の参加促進と塾生の参加意欲を持続させる活動の導入を図る必要がある。

（４）今後の方向性

行政側には、各地区の公民館に熟年者が集まってコミュニケーションを取ってもらいたい、こうした活動の参加者が増えて生きがいとなり、高齢者の医療費の軽減につなげたいとの考えがある。そのためにも、本事業のさらなるＰＲが必要となってくる。

この事業は、高齢者の自主活動と学校支援ボランティアの活動を組み合わせることで、健康の維持・向上とともに、子供たちの健全育成に寄与しているという意識を醸成

し、高齢者の生きがいやつながりの創出に貢献している。加えて、教員の多忙化の軽減や地域の教育力の向上にも少なからず効果を発揮している。

もともと、この地域は産炭地域で、共助や互助の土壌があり、地域の子供は地域で育てるという意識が強かった。旧穂波町の教育行政関係者は、学校週５日制の実施に当たり、地域における子供の育成に熟年者を活用したが、こうした考えが余裕教室での取組に進化し、小学校全校に広がった。その際、行政の社会教育部門と学校教育部門が連携して、学校にメリットがあることを具体的に説明することで理解が進んだ。学校、地域、行政が一体となって子供たちの成長を支える活動が大切であるという関係者の理解が成功の要因となっている。

また、市では主催する研修会や発表会を通して、塾生間のつながりを生み出し、活動への意欲付けを図っている。地区の公民館は中央公民館と連携しながら、事業の実施や広報等で学校・地域と連絡を取ることが多く、コーディネーター的な機能を果たしている。このように行政サイドが事業全体の調整者としてネットワーク化を図り、予算をほとんどかけることなく熟年者マナビ塾の自主的な活動を継続的に支援している役割は大きいといえよう。

熟年者マナビ塾の代表である塾長は、支援する教育活動等の日程や内容について学校の担当教職員と調整を図るコーディネーターとしての役割を有している。今後、より多くの地域住民の参画が得られることにより、多様な活動が継続的に行われることになれば、学校と地域の効果的な連携・協働体制が図られることとなる。

この事業は教育サイドの取組であるが、超高齢社会を迎える中、認知症の予防や健康づくりを担う福祉行政等の機関・団体との連携を図ることにより、新たな塾生の創出や本事業の汎用性の可能性を検討していくことが期待できよう。

（中薗　宏）

（ヒアリング調査協力者）

所属	氏名
飯塚市立平恒小学校長	城石　俊弘 氏
飯塚市立平恒小学校マナビ塾長	松尾　フユ子 氏
福岡県教育庁筑豊教育事務所社会教育室長	近藤　真紀 氏
飯塚市教育委員会教育部生涯学習課長	松原　克彦 氏

ヒアリング調査日　平成28（2016）年２月26日（所属・職名は当時）

第３章　モデル事業（平成28年度）

第３章　モデル事業（平成28年度）

１　モデル地域の選定経緯と地域の特色

（１）モデル地域の選定経緯

我が国は、全国的に高齢化率が高くなっているが、高齢化率や人口構成は、都市部との遠近によって大きな差異が見られる。このことから、人口や高齢化率、経済や教育等、様々な面で環境が異なる都市部と中山間部をモデル地域に選定した（表３－１及び図３－１参照）。

そこで、都市部として、東京都に隣接する千葉県浦安市、中山間部として、秩父山地に位置する埼玉県秩父市荒川地区をモデル地域として選定した。

ア　千葉県浦安市の選定経緯

浦安市の平成28（2016）年４月１日現在の高齢化率は16.1％と全国的にも若いまちではあるが、高齢者がたくさんの仲間と楽しく生きがいのある充実した人生を送ることを目的に開催している公民館高齢者大学「コミュニティ・カレッジうらやす」をはじめ、郷土博物館ボランティア「もやいの会」による伝承活動や学校との連携による体験活動など、高齢者のつながりを深める取組や元気な高齢者が中心となった地域づくりの取組が進められている。また、うらやす市民大学の介護予防リーダー養成講座修了生が設立した介護予防アカデミア*による介護予防推進協働事業の取組も見られる。

しかし、高齢化が進む中で高齢者のニーズを満たす居場所の提供や高齢者の知識・経験等を活かす取組（ボランティア活動、世代間交流、学校支援等）、地域で高齢者を支える仕組みづくりなどが課題となっていた。

これらの課題解決と浦安市の郷土博物館と中央図書館が隣接している立地条件などから、北名古屋市などが取り組んでいる「回想法事業」を参考に事業のモデル地域として選定した。

＊「浦安介護予防アカデミア」は「介護予防リーダー養成講座」の修了生が中心となって設立され、介護予防リーダー養成講座や運動機能向上、栄養改善、口腔機能向上、認知症予防、閉じこもり予防、うつ予防をベースとして７班に分かれて活動している。

イ　埼玉県秩父市荒川地区の選定経緯

秩父市の平成28（2016）年４月１日現在の高齢化率は30.6％と市民の約３人に１人が65歳以上という状況の中、介護の認定率も年々上昇している状況である。秩父市高齢者福祉計画・第６期介護保険事業計画（平成26～29年度）では、「生きがい活動の充実」として、「生涯学習活動」を掲げ、中央公民館をはじめとして、各地区公民館において、高齢者を対象にした「寿学園教養教室」、「寿健康教室」、「童謡唱歌を歌う会」、「寿大学」等、様々な教室や学級が開催されているが、学習内容がマンネリ化し、参加者が固定化していることもあり、新たな

参加者や講座の開拓を進めることが課題である。加えて、高齢者の自主的活動・地域交流の推進の場である老人クラブでは、会員数、加入率ともに減少傾向にある（平成25年度 会員数6,253名加入率25.6%）。

前述してきているように、中山間地域では、高齢化率が高い傾向にあるため、そこに居住する高齢者の人間関係も限定的であると予想される。そこで、柏市等で取り組まれているインプロによる交流事業が、人間関係を組み直す仕掛けとなり、新たな人間関係の構築等により高齢者の地域参画意欲につなげたいと考えた。さらに、多世代交流を図る観点から、小学生との交流を図ることで、学校支援ボランティア等、地域と学校との協働活動における高齢者の活躍の場を広げられるのではないかと考えた。

そこで、秩父市内でも中山間部に位置し、公民館と小・中学校が比較的近くにある荒川地区が、活動に最も適すると判断し、モデル地域として選定した。

表３－１　モデル地域の人口及び高齢化率

	浦安市	秩父市
人口	165,411人	64,989人
高齢者人口(65歳以上)	26,576人	19,872人
高齢化率	16.1%	30.6%

＊平成28（2016）年４月１日現在

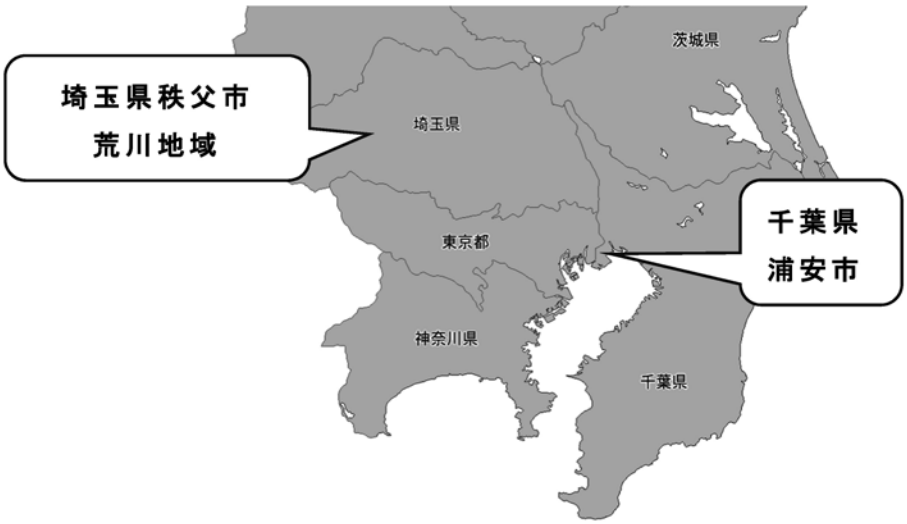


図３－１　モデル地域の位置

（２）モデル地域の特色

ア　千葉県浦安市の特色

浦安市は、千葉県北西部に位置し江戸川を隔てて東京都に隣接し、面積は16.98km^{2}で、半径20㎞圏内に東京駅、羽田空港があり利便性が高く、農地ゼロの全域市街化区域のまちである。平成28（2016）年４月１日の人口は約16万5,000人で、高齢化率は16.1%と全国的にも若いまちでもある。しかし、近年高齢化が進み、平成29年（2017）４月には高齢化率は16.5%に上昇している。

今後もこの傾向は続き、将来推計では平成37年に17.7%になると予測されている。また、今後も当面の間は人口が増加するが、人口増加の伸びは少なくなっていき、将来的には微減傾向に転じていく方向性になることが予測されている。

現在では年間約３千万人の来訪者を迎える東京ディズニーリゾートを抱え、全国的に有名なまちになったが、かつては三方を海と川に囲まれ「陸の孤島」と呼ばれた半農半漁のまちであった。しかし、昭和46（1971）年に海水の汚染により漁業権を放棄し、その後の海面埋立によって４倍の面積になった。

市域は５つの地域に分けられ、①125年前に浦安町が誕生した頃からの元町、②住宅・商業用地として整備され発展してきた中町、③計画的に都市開発が進められている新町、④鉄鋼流通などの工場が集約されている工業ゾーンと、⑤東京ディズニーリゾートとホテル群を中心とした舞浜アーバンリゾートゾーンからなり、地域ごとに異なる表情をもつまちとして発展している。

また、東日本大震災で市域の80%が液状化により被災したが、復旧も終盤を迎え、ほぼ震災前の状況に戻っている。

イ　埼玉県秩父市荒川地区の特色

秩父市は、埼玉県の北西部にあり、面積は577.83km^{2}で、埼玉県全体の約15%を占めている。東京、群馬、長野、山梨の１都３県に接しており、高低様々な山岳・丘陵地帯に囲まれた盆地である。地域の８割を森林が占めるとともに関東平野を流れ東京湾に注ぐ荒川の源でもあり、緑と水の豊かな自然に恵まれた地域である。

荒川地区は、旧荒川村であり、平成17（2005）年４月に吉田町・大滝村と共に秩父市と合併した。また、そばの里としても有名で、毎年11月に新そばまつりを開催している。

荒川地区の面積は46.9km^{2}と広いが、荒川源流に程近く山間部を抱えており、人口約5,000人の小さな集落が形成されている。秩父市街地から南西に位置し、車で20分程度の距離にあり、秩父鉄道も通っており、交通の便は市内の中でも比較的良いが、地区の人口は、平成24（2014）年４月の5,739人が、平成28（2016）年４月に5,282人と457人減少している。

また、荒川地区の高齢化率は、平成27（2015）年４月時点では、34.0%と高い状況にあり、地元で育った住民が多く、お互い顔見知りで関係性も深い傾向が見られる。

また、高齢者福祉計画・第６期介護保険事業計画策定時における「日常生活圏域ニーズ調査結果」では、一般高齢者のリスク保有者状況のうち、「閉じこもりリスク」が秩父市全域の6.1%よりも荒川地区は3.1ポイント高い9.2%であった。

（島﨑　浩一、市川　重彦）

２　浦安市におけるモデル事業「回想法ボランティア養成事業」

（１）回想法について

ア　回想法とは

回想法とは、1960年代アメリカの精神科医ロバート・バトラー（Butler, R. N.）が高齢者の過去の思い出を語ることの良さを発見したことに始まる。高齢者の多くは、昔の体験を懐かしがり「昔は良かった、昔は良かった」と表現され、その行為は、「現実からの逃避」など否定的に捉えられていた。しかし、バトラーは、高齢者の思い出話は自然に起こる心理的な過程であり、良い聴き手を持つことで、今までの人生を肯定的に捉え直す、積極的な意味があると唱えたのである。

回想法は、非薬物療法の一つである。実施の方法には，１対１で行う個人回想法と、グループで行うグループ回想法がある。グループの場合は、８人程度の小さなグループで、一定の期間、定期的に集まり、「テーマ」を決めて、昔を積極的に語り、共感し、輝いていた過去を再認識することで、心の安定が得られる。

回想法の特徴は、話の糸口を提供するために「テーマ」を設定し、テーマに関連する「古い道具」を使用することである（表３－２参照）。

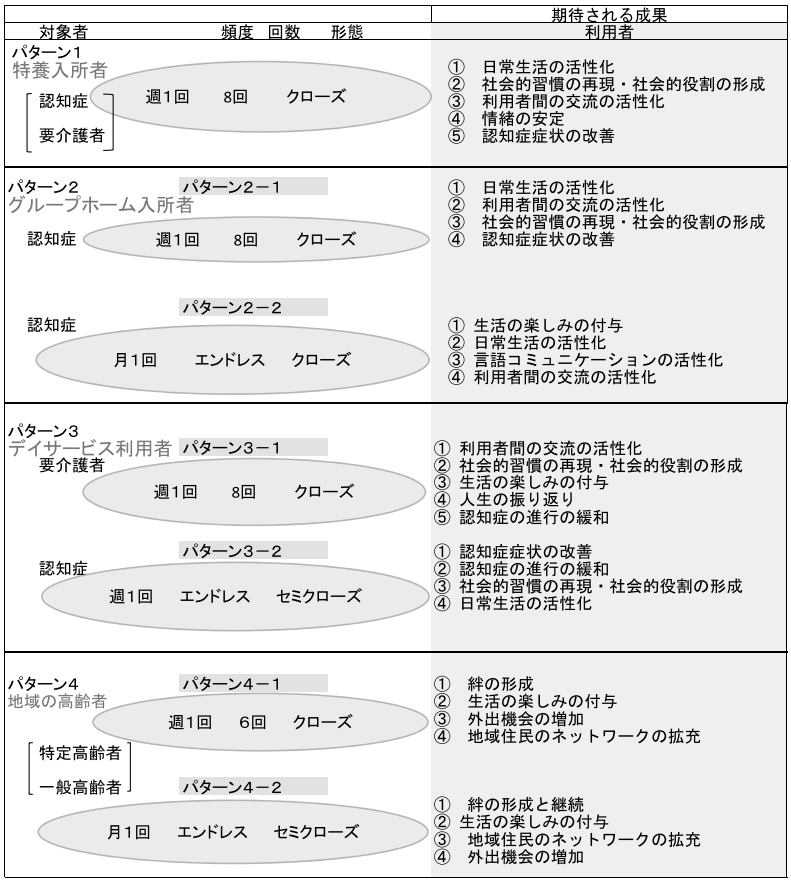
表３－２　テーマと道具の例

	テーマ	道具
第１回	私のふるさと	日本地図
第２回	子供のころの遊び	お手玉、メンコ、ベーゴマ、おはじき
第３回	小学校の思い出	昔の教科書、四つ玉か五つの玉算盤
第４回	お手伝い	水汲みの写真
第５回	お月見	ススキ、月見団子
第６回	仕事	くけ台、コテ、繭玉、タイプライター
第７回	もう一度行ってみたい所	旅行パンフレット
第８回	これからのこと	参加簿

イ　回想法の効果

野村によると（野村、1998）高齢者における回想法の効果には個人への内面効果と対人関係的・対外的世界への効果がある。個人の内面への効果としては、「ライフレヴューを促し、過去からの問題解決と再組織化および再統合を図る」、「アイデンティティの形成に役立つ」、「自己の連続性への確信を生み出す」、「自分自身を快適にする」、「訪れる死のサインに伴う不安を和らげる」、「自尊感情を高める」などが挙げられる。対人関係的・対外的世界への効果には、「対人関係の進展を促す」、「生活を活性化し、楽しみを作る」、「社会的習慣や社会的技術を取り戻し、新しい役割を担う」、「世代交流を促す」、「新しい環境への適応を促す」などである。

回想法の期待される効果は、グループ回想法か個人回想法かの違いとともに、グループ回想法においても実施場所、頻度、回数、グループの形態により異なる。グループ回想法による実施パターンの違いによる期待される効果については、図３－２に示したとおりである。



第12回認知症ケア学会(2011年)発表より

図３－２　グループ回想法のパターン

ウ　医療や福祉等における回想法の取組

日本での回想法の歴史は浅く回想法が医療、社会福祉の現場に根付き始めた最初のきっかけは、平成４（1992）年に野村・黒川により作成されたテキストと大判の写真集からなる『回想法への招待』である。これはイギリスの回想法ガイドを、日本の実情に合わせた内容で、回想法の総合的なガイドブックであった。

平成９（1997）年、野村が監修した、回想法の魅力と理論、実践方法について映像でわかりやすく解説したビデオ「回想法」４巻が作成されている。これらのことがきっかけに、徐々に回想法実践のための環境が整い、施設高齢者・認知症高齢者に対して、回想法の実践が進んだ。

平成14（2002）年、愛知県北名古屋市（旧師勝町）において、健康高齢者に対し介護予防事業として回想法を実施した。昔の体験を皆で語らう（回想する）ことにより、いきいきとした自分を取り戻し、小島らの「回想法による介護予防事業で地域での取り組み」によると「介護予防上もリスクに対し、有効性が示唆された」との報告である。この報告は回想法＝認知症ケアというイメージから、元気な高齢者に対する介護予防事業として印象を変え、回想法対象者の幅を大きく広げるきっかけとなったのである。

また、介護予防のように広域に他者を支えるための事業は、医療、福祉、教育それぞれ単独の取組ではなく、相互に利点を生かし協働して取り組む必要がある

ことも示唆したのである。

社会教育分野では、愛知県北名古屋市（旧師勝町）の昭和日常博物館からの発信により、貯蔵されている道具の活用、資料価値の創出として博物館での展開が進んだ。従来からの認知症ケアを必要とする高齢者施設で、新しい分野としての介護予防事業を展開する行政で、町づくりに力を入れているサロン事業へと、つながっていったと考える。

医療の現場では、身体的ケアを必要とする対象者が多いが、ケアを提供する過程で、身体的ケアだけの関わりでなく回想法を精神的ケアの補助的なツールとして活用されている。

例えば、リハビリが必要な患者に対し、理学療法士、作業療法士が眼に見える身体的機能の回復目標にリハビリを実施してもリハビリ効果が上がりにくいが、懐かしい話の中で、患者の価値観、大切にしている文化を知った上で、リハビリの目標を設定することにより、心のリハビリ効果が期待できるのである。医療分野では、理学療法士、作業療法士が、回想法への関わりが多い印象が見られる。

介護分野では、アクティビティ活動として取り入れられ、参加者自身の思いをケアプランに反映される。回想法の中で伺った懐かしい話は、思い出話だけにとどまらずに、これからの生活のエネルギーに変えていくことが狙いである。

そのために、終盤のセッションのテーマは、これからの生活につながるように「これからしたいこと」、「もう一度行ってみたいところ」、「もう一度会いたい人」、「若い人につたえたいこと」など、これからの生活につながるテーマが設定される。

「これからしたいこと」というテーマでは、「自分があの世に行く前に、親のお墓参りしておきたい」と語った方に対して、実際にお墓参りに行く機会を設けたり、「もう一度、あの美味しいそば屋に行きたい」と話した内容をきっかけに、食事メニューの参考に取り入れたりと、ケアプラン作成へとつながる。

日常の会話の中からだけでは、聞き取れない言葉、聞き取れたとしても「思い」までは、くみとりにくい、高齢者の思いを形に実現できる非薬物療法といえる。

次に、東京都葛飾区では、介護予防事業の三本柱として、脳トレ、筋トレ、回想法を打ち立て、回想法ができる実践者の養成を定期的に行い、区内全域で回想法が行われている。地域で生活している退職後の高齢者が、回想法を受けた後に、回想法トレーナー養成講座を受講してトレーナーとして、実践者として活躍している報告もあがっている。生きがいづくり、まちづくりに「回想の力」を介護予防事業として取り入れている例である。

エ　社会教育において回想法を扱う意義・可能性

高齢者への学習支援をめぐっては、社会福祉と社会教育・生涯学習との間に新たな関係性を生むこととなり、そうした構図のなかで高齢者に対する社会教育や生涯学習固有の意義を探っていくことが求められてきている。多くの高齢者は、人との関係が細くなり、交流機会も減り、淋しさを感じていることが多い。思い出語り活動である回想法は、10人未満ほどの小さなグループで、意図的に交流

の機会をつくり、一定の期間、60分ほどの時間で、テーマを決めて懐かしい話をする地味な活動である。

しかし、参加者が、場と時間と思いを共有する機会を通して、自分の力を再確認し自己肯定感を高めることができる活動の１つである。

また、回想法は、受ける側だけでなく実施する側にも効果が期待できる。「歳をとってからの気持ちがよくわかった」、「苦労されたことをバネに凛と過ごされている姿は、尊敬に値する」、「話を伺うことは、偉人伝を読むより勉強になる」、「最近、聞き上手になったと言われた」と、実施する側から成果の声が多く聞かれている。

さらに、社会教育分野においても回想法をツールとして、高齢者へ働きかけができる可能性を秘めていると考える。回想法では、懐かしい話を行うきっかけとして道具を使うが、この場合に、古い写真を使うことが多い他の領域で実施する場合には、古い道具、写真、資料の準備を不得意とする傾向もあるが、その点、社会教育施設である図書館・博物館は、資料の宝庫であり、社会教育分野において回想法を実施する強みとなる。

このほかにも、実践において実践場所の確保で困ることが多いが、社会教育分野では、ハード面が整っていることも、利点にあげられる。既に、回想法を実践するための環境が整っているのである。

このように、少しだけ先に歩みを進めた医療、福祉の回想法実践者も、「他者を支える」、「人としての尊厳」について取り組む同志として、枠域を超えて社会教育の現場で実践されることを願い、共に成長できることを願っているのである。

（中嶋　恵美子）

参考文献

遠藤英俊監修、NPOシルバー研究所編（2007）『地域回想法ハンドブック―地域で実践する介護予防プログラム』河出書房新社.

小島恵美（2002）「回想法による介護予防事業の地域での取り組み」『第３回日本認知症ケア学会抄録集』.

中嶋恵美子（2011）「回想法の分析軸に関する調査研究」『第12回日本認知症ケア学会抄録集』.

野村豊子、語りと回想研究会、回想法ライフレヴュー研究会編（2011）『Q&Aでわかる回想法ハンドブック―「よい聴き手」であり続けるために』中央法規出版.

野村豊子・黒川由紀子（1992）『回想法への招待』スピーチ・バルーン.

野村豊子（1998）『回想法とライフレヴュー――その理論と技法』中央法規出版

堀　薫夫（2017）社会教育推進全国協議会編『社会教育・生涯学習ハンドブック』（第９版）エイデル研究所.

（２） 回想法ボランティア養成事業

ア　モデル事業のあり方を検討

（ア） 浦安市高齢者の地域参画モデル事業検討会の設置

都市部において地域の担い手として高齢者が活躍する仕組みをつくる事業モデルの開発にあたり、浦安市の地域特性を生かせる事業として、回想法ボランティア養成事業を実施した。

浦安市教育委員会生涯学習課では、このモデル事業の検討にあたり、浦安市における高齢者に関する行政課題を共有、整理する必要があるという視点から、生涯学習課だけで事業検討を進めるのではなく、全庁的な取組とするための組織づくりに着手した。

これにはまず、高齢者に関わる業務を担っている部署をリストアップし、各部署に出向き業務内容のヒアリングをした後に、モデル事業実施の趣旨等を説明し協力を得られた部署を選定した。

具体的には、図３－３に示したように、教育委員会からは公民館、図書館、郷土博物館の社会教育施設や学校支援業務に携わる教育政策課とした。福祉部局からは高齢者福祉課、地域包括支援センター、老人福祉センター（指定管理者）、社会福祉協議会とし、市民協働を推進する拠点である市民大学と生涯学習課を含む11部署で構成する「浦安市高齢者の地域参画モデル事業検討会」を設置した。また、検討会の職員体制は生涯学習課長を会長とし、その他社会教育主事、司書、学芸員、教員、精神保健福祉士、保健師、社会福祉士等の専門職と行政職で構成した。

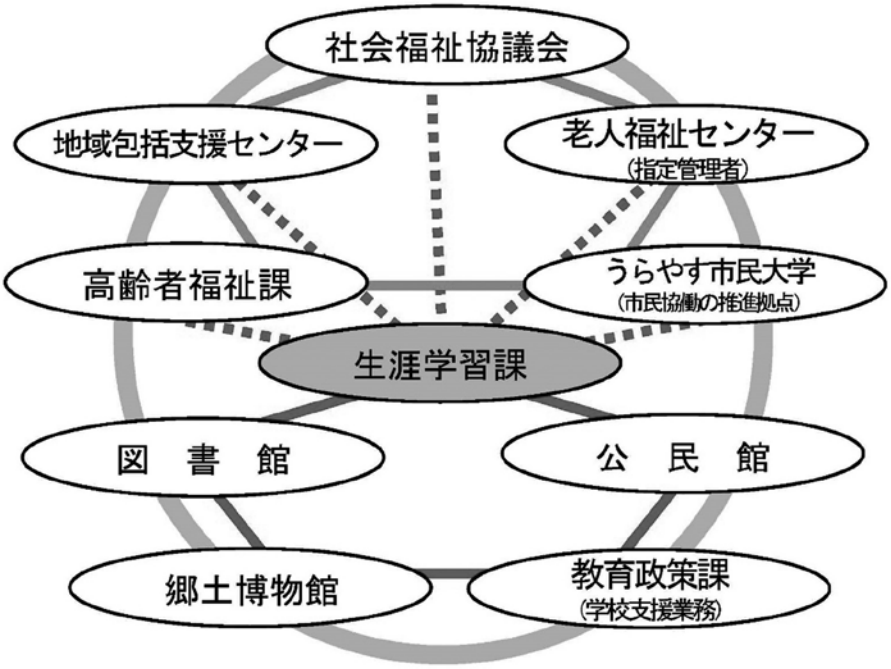


図３－３　浦安市高齢者の地域参画モデル事業検討会

（イ） 浦安市高齢者の地域参画モデル事業検討会の経過

平成28（2016）年５月31日に、第１回目の浦安市高齢者の地域参画モ

デル事業検討会を開催し、各部署の高齢者事業の取組の現状と課題を共有し、同時に他市における回想法事業の事例紹介と、回想法ボランティア育成事業について検討した。

検討会は限られた時間内で効率よく効果的に議論ができるように、事前に会議資料を配付するとともに、回想法ボランティア養成事業（案）については、事業名称や実施期間、会場、対象者、募集定員、事業内容、職員分担等を検討することから、質問シートに各自記入してもらい、その検討内容のまとめを検討会当日に会議資料として配付した。

また、検討会の議論では「回想法そのものの理解が不十分である」、「認知症予防のための回想法講座であれば多くの参加者が期待できるが、ボランティア養成ということになると回想法の基礎的な技法を習得さえすれば、すぐにボランティア活動ができるのか」などの意見があった。

このことから、回想法を取り入れた事業を実施している葛飾区の回想法講座と取手市の回想法による認知症予防のための脳活教室の視察を行った。

平成28（2016）年６月17日に、第２回目の浦安市高齢者の地域参画モデル事業検討会を開催し、本市におけるモデル事業のプログラム案を基に事業内容や講師、事業の進め方について議論し、事業実施に向けたプログラムを作ることができた。あわせて各部署が回想法を用いた事業展開の考え方やモデル事業終了後のボランティアの活用と活動の場の在り方についても検討した。しかし、回想法を用いた場合の効果や福祉サービスの充実だけでなく、高齢者自身の主体的な学習への取組とその成果をどのように生かしていくかなど、行政の関わり方についての課題が残った。

このことから、平成28（2016）年６月30日に、高齢者の地域参画モデル事業を円滑に進めるため検討会のメンバーを中心に、高齢者の学習特性や回想法に関する理解を深める機会として、文教大学の野島正也学長（当時）と氷見市立博物館の小谷超副主幹を招き職員研修会を開催した。

野島講師による講義

この研修会によって、高齢者がよりよく生きていくための考え方や、回想法が介護予防策として効果があることなどを学び、同時に高齢化と生涯学習の在り方はこれからの大きなテーマであり、高齢者福祉と生涯学習の連携がますます必要になってくることを再認識することができた。

小谷講師による演習

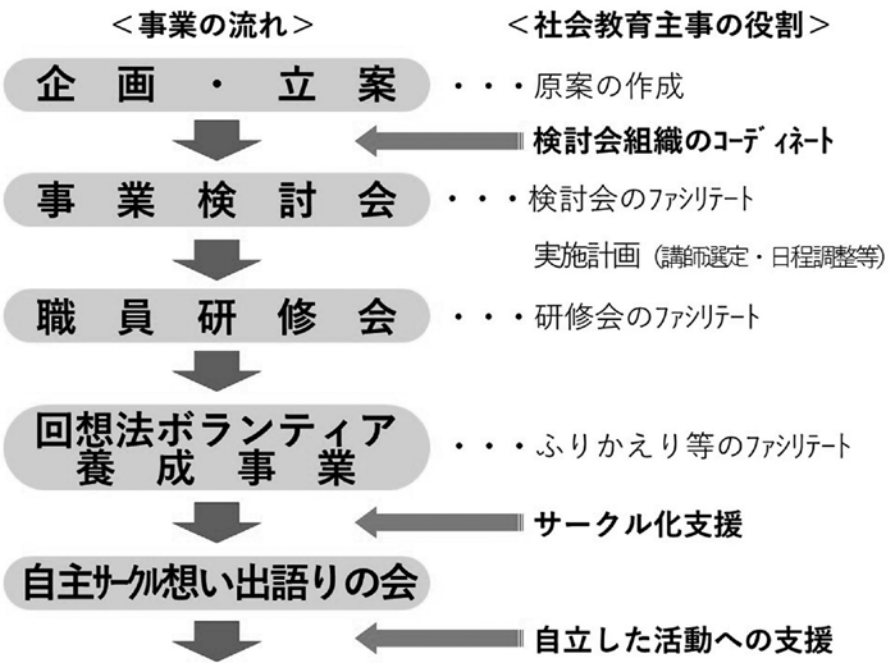


図３－４　浦安市におけるモデル事業の流れと社会教育主事の役割

イ　モデル事業の実施

（ア）　回想法ボランティア養成事業

講座名を「想い出語りボランティア講座～楽しく学ぼう！回想法～」とし、平成28（2016）年10月５日から11月９日までの毎週水曜日の午後２時から４時までの時間帯で、市内在住在勤の60歳以上の20名程度を対象に実施した。

講座の参加者23名のうち男性は４名、女性は19名であり、全６回講座のうち３回以上の出席者18名には修了証を交付した。また、受講者のうち４名については、初回の参加で回想法が自分には合わないという理由から辞退する結果となった。これは講座の中で、受講者を８名ずつに分けて行ったグループ回想法の体験の際に、昔のことを思い出せないことや触れられたくない話題があったことによるものであった。

※実施内容及び結果の詳細はp.61～を参照。

（イ）　回想法職員研修会

想い出語りボランティア講座の開催に合わせて、第１回から第３回までの講座開始前の時間帯に、講座の講師である回想法ライフレヴュー研究会代表の中嶋恵美子氏により、職員を対象とした回想法の講義やグループ回想法の体験学習を行った。この研修を通じて職員間にあった回想法に対する認識の統一化が図れたことと、各部署においてグループ回想法を用いた事業導入への期待が持てた。

ウ　モデル事業を生かす取組

（ア）　サークル化支援に資する社会教育主事の役割

サークル化に向けた話合い

浦安市では生涯学習行政を推進するために、社会教育主事講習修了者には社会教育主事としての辞令交付を行ってきており、教育委員会（公民館を含む）には８名が配属されている。このたびのモデル事業では、社会教育主事が中心となり、教育委員会だけの取組に留めず、福祉部局等と連携した検討会組織の立ち上げからはじまり、視察を含む職員研修会の企画・実施を経て、モデル事業の企画、講師選定、講座運営等を担った。

また、講座期間中の平成28（2016）年11月２日に「想い出語りボランティア講座受講者の集い」を企画し、講座開始前の１時間を活用して５名の受講者とともに講座の感想や講座終了後の活動等について話合いを行った。

さらに、講座終了後の翌週にも２回目の受講者の集いを行い10名の参加者とともに、学習成果を活用するためのサークル化支援としての助言を行った。

しかし、講座が終了して間もなくサークル活動を始めるのは難しいことから、３回目の受講者の集いは、昔の映像を利用したグループ回想法学習と話合いの場とした。その後も参加者の学習意識を継続させることを優先にしつつ、サークル化に向けた仕掛けとして回想法の学習会を12月から３月まで毎月１回実施した。これにより新たな参加者が加わったことや学習の成果を地域に生かしていこうという意識も生まれた。

また、一部のメンバーによるものではあったが、市民を対象にした回想法体験会を開催することができた。このことがメンバーの自信にもつながり、講座終了から約５か月をかけ平成29（2017）年４月に「うらやす想い出語りの会」を立ち上げることができた。

４月以降の活動は毎月１回第３水曜日に郷土博物館を会場に定例会を開催しているが、社会福祉協議会等からの依頼もあり、市内の認知症カフェで出前の回想法体験会も実施した。また、９月以降も老人福祉センター等で実施する予定である。

現在も生涯学習課の社会教育主事と郷土博物館の学芸員が緊密に連絡を取り合ってサークル活動を支えている現状ではあるが、講座終了後からサークル活動に至るまでの関わりの中で、社会教育主事が人と人、人と地域をつなぐという役割を十分に発揮することができたといえる。

（イ）　モデル事業の検証

平成29（2017）年３月16日に、第３回浦安市高齢者の地域参画モデル事業検討会を開催し、モデル事業の検証を行った。事業検討にあたり、検討会を組織し部署を超えての話合いの場が設けられたことを成果として捉えたい。また、プログラムの内容や講師については、毎回の受講者アンケートの結果からも回想法に対する理解と講座に対する満足度は高く、回想法の手法や奥の深さなど幅広く学ぶことができたことは、職員をはじめ受講者にとっても大きな成果であったといえる。

あわせて、事業の検討段階でも懸念していたことではあるが、受講者の中に「自分には回想法は合わない」との理由で初回以降の受講を辞退された方についても検証できたことは成果の１つとなった。

また、講座終了後の目標であったサークル化についても達成することができた。今後はその活動を生かす機会や場の提供が重要となるため、さらに各部署との連携が必要であることを確認できた。

回想法という手段を用いたことについては、前述のとおり想い出語りボランティア講座の終了後からサークル化に向けた回想法の学習会を経て、受講生による市民を対象にした回想法体験会の実施や「うらやす想い出語りの会」の立ち上げなど、一連の取組を通して、高齢者相互の交流や市民協働の基本となる互助の意識を高めることができた。

余談ではあるが、このモデル事業に図書館サービス事業として回想法の導入を検討している埼玉県三郷市の図書館職員の受講や千葉県佐倉市等の図書館職員の視察の受入れもあり、高齢化社会に向けて回想法を取り入れた事業に対する関心度の高さをうかがい知ることができた。

エ　今後の方向性

「うらやす想い出語りの会」の活動支援については、社会教育主事が中心となって、会の運営に関わる指導や助言をはじめ、活動場所の確保や関係部署との調整を行っていくこととした。

あわせて郷土博物館では、資料の貸出や活動場所の提供を積極的に行うと同時に、博物館でボランティア活動をしている「もやいの会」*の活性化と、来館者への展示物を活用した回想法体験会を行っていくこととした。

また、各部署において回想法を取り入れた事業を展開していくことについては、高齢者の多い地区の公民館での回想法講座の企画や高齢者講座に回想法を取り入れるなどの検討を、中央図書館では高齢者の音読講座の実施や図書館資料の活用に加え、回想法キットとして写真や映像、昔の音楽などの資料提供を行っていくこととした。

福祉部局では、「うらやす想い出語りの会」と介護予防アカデミアの脳トレ班や傾聴ボランティアとの連携事業や、地域参画へのきっかけづくりとして、老人福祉センターや老人クラブでの活動機会を設けるとともに、社会福祉協議会推進委員や話し相手・傾聴など高齢者を相手にしたボランティアグループ向けに回想

法体験会を提供していくこととした。

また、小中学校の児童生徒と高齢者との交流を促していけるよう学校支援コーディネーターを介して、昔の遊びや生活用具などについての話ができる機会の提供や介護予防の観点から、うらやす市民大学での科目講座としての開催について、今後も検討をしていきたい。

＊「もやいの会」は会員数が約170人で、ふるさと浦安が大好きで、浦安のまちがもっともっと素晴らしいまちになるようにと、日々の活動として「べか舟乗船体験指導」や昔遊び、焼玉エンジン始動、昔話の読み聞かせ、季節における展示替えの指導、展示解説、昔の生活体験・のりすき体験などの取組に加え、学校の体験授業では講師として活躍している。

（島﨑　浩一）

浦安市におけるモデル事業

「回想法ボランティア養成事業」報告

1　事業目標　回想法を用いた脳を活性化する取組を通して、参加者の交流と健康増進を図るとともに、博物館や図書館等で活動する新たなボランティアを養成し、高齢者が地域に参画する機会へつなげる。

2　講 座 名　「想い出語りボランティア講座～楽しく学ぼう！回想法～」

3　実施時期　平成28（2016）年10月５日（水）～11月９日（水）
全６回　14：00～16：00

4　実施会場　浦安市役所、浦安市郷土博物館、浦安市立中央図書館

5　対象・定員　市内在住在勤の60歳以上の方　20名程度

6　申 込 者　23名　（男性４名、女性19名）

7　展 開 等

実施日・参加人数	内　容　等	講　師　等
第１回 10/５（水） 14名	**○質問紙調査票の回答** **○開講式・オリエンテーション** **○講義・体験学習** テーマ「回想法とは何か」 ～回想法の概要と体験学習～ 【会場】浦安市役所会議室	【講師】 回想法ライフレヴュー研究会 代表　中嶋　恵美子
第２回 10/12（水） 16名	**○講義・体験学習** グループ回想法体験学習① 【会場】浦安市役所会議室	
第３回 10/19（水） 14名	**○講義・体験学習** グループ回想法体験学習② 【会場】浦安市郷土博物館視聴覚室	
第４回 10/26（水） 16名	**○講義・体験学習** テーマ「博物館と地域回想法」 ～懐かしい道具に触れて昔の記憶をたどる～ 【会場】浦安市郷土博物館視聴覚室	【講師】 氷見市立博物館 副主幹　小谷　超
第５回 11/２（水） 17名	**○講義・体験学習** テーマ「図書館とグループ回想法」 ～効果的に脳を活性化させるポイント～ 【会場】浦安市立中央図書館２階視聴覚室	【講師】 田原市中央図書館 主任嘱託司書　河合　美奈子
第６回 11/９（水） 19名	**○事例発表・ふりかえり** テーマ「地域でできるボランティア活動」 ～回想法と地域活動のポイント～ 【会場】浦安市役所会議室	【講師】 葛飾回想法トレーナーの会 由井　秀子、伊豆　由美子 浦安介護予防アカデミア 重田　恵子

想い出語りボランティア講座～楽しく学ぼう！回想法～　＜第１回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年10月５日（水）14：00～16：00
会　場	浦安市役所４階　会議室
講　師	回想法ライフレヴュー研究会代表　中嶋　恵美子
参加者	14名（男性：４名、女性：10名・60歳代：８名、70歳代：６名）

２　プログラム

○開講式（主催者挨拶等）
○オリエンテーション
○講義・体験学習
【テーマ】　回想法とは何か
～回想法の概要と体験学習～
・回想法とは
・回想法の形態（グループ回想法・個人回想法）
・回想法の方法、効果
・回想を促すきっかけ
・回想法が適さない方
・ふりかえり

開講式、講師紹介

３　講座の内容と参加者の様子

回想法を用いて開催した本講座は、募集定員20名のところ23名の申込みがあった。講座の前半は中嶋講師から回想法について講義を頂き、後半は２人１組になって自己紹介の後に、子供の頃の思い出をテーマに、交互に聴き手と話し手になり回想法の体験学習を行った。講師からは体験学習は「人と比べない」、「真剣にする」、「楽しい」の３つを自分の学びの姿勢に入れてほしいという言葉があり、とても印象的であった。

受講者には認知症予防の効果を期待してきた方から、地域でボランティア活動を実践されている方まで様々な動機で参加されていることから、今後の受講者の動向が楽しみである。

回想法で使用する昔の道具の展示

中嶋講師の講義

想い出語りボランティア講座～楽しく学ぼう！回想法～　＜第２回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年10月12日（水）14：00～16：00
会　場	浦安市役所10階　会議室
講　師	回想法ライフレヴュー研究会代表　中嶋　恵美子
参加者	16名（男性：３名、女性：13名・60歳代：11名、70歳代：５名）

２　プログラム

○講義・体験学習

【テーマ】　グループ回想法体験学習①

・回想法を始める前に（準備）
・会の流れ
・参加者を決める
・場所、期間、時間、回数を決める
・テーマと道具を決める
・招待状、参加簿（表）の作成
・会場の準備
・道具を用いる時の留意点

回想法講座の参加簿の展示

３　講座の内容と参加者の様子

前回の講座で回想法の基礎を学び、今回は回想法ボランティアとして、グループ回想法を実施する場合の具体的な流れについて説明していただいた。特に会を開催するときに参加簿を作ることはとても大事で、参加者が参加したということが視覚で感じられるという効果があることなど実体験に基づいた話は参加者から共感が得られていた。講義の後は８人１組のグループになり日本地図を使用して出身地をテーマに体験学習をした。本市は北海道から九州・沖縄まで全国各地から転入されてきた方が多いこともあり、生まれ育った場所や土地の食べ物等、それぞれにいろいろな話が飛び出して楽しい雰囲気の中で時間の経過が早く感じられた。

講義の様子

グループ回想法体験学習

想い出語りボランティア講座～楽しく学ぼう！回想法～　＜第３回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年10月19日（水）14：00～16：00
会　場	浦安市郷土博物館　視聴覚室
講　師	回想法ライフレヴュー研究会代表　中嶋　恵美子
参加者	14名（男性：４名、女性：10名・60歳代：11名、70歳代：３名）

２　プログラム

○講義・体験学習

【テーマ】　グループ回想法体験学習②

・体験学習：シナリオ回想法

・司会（リーダー）の始めの挨拶

・司会（リーダー）の終わりの挨拶

・回想法上達のためのポイント

・ふりかえり

講義の様子

３　講座の内容と参加者の様子

シナリオ回想法では参加者が14名であったので７人ずつ２つのグループに分かれて行った。

円陣体系に椅子を並べて、リーダーとコ・リーダー（p.38参照）、声の小さい方の役の３名を人選し、昔の道具に関する素材や使い方等の体験談を各自で話してもらった。回想法体験は参加者が楽しく昔の思い出を話している様子が見られた一方で、リーダー役やコ・リーダー役となると重荷に感じてしまう様子も感じ取れた。最後に講師からグループ回想法を実施した後には高齢者から感じたこと、学んだことの共有や注意しなければならないことを仲間でふりかえりを行うことの必要性について話していただいた。

道具を用いたグループ回想法体験

ふりかえりの様子

想い出語りボランティア講座～楽しく学ぼう！回想法～　＜第４回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年10月26日（水）14：00～16：00
会　場	浦安市郷土博物館　視聴覚室
講　師	氷見市立博物館副主幹　小谷　超
参加者	16名（男性：３名、女性：13名・60歳代：12名、70歳代：４名）

２　プログラム

○講義・体験学習

【テーマ】　博物館と地域回想法
～懐かしい道具に触れて昔の記憶をたどる～

・回想法の効果と氷見市立博物館の紹介
・ＮＨＫの回想法取組の取材映像の視聴
・介護予防事業「思い出語りの会」の紹介
・富山福祉短大との連携によるグループ回想法
・回想法展示会の実施
・ＮＨＫ認知症アーカイブスの視聴
・郷土博物館の屋外展示場にて回想法体験

講座の様子

３　講座の内容と参加者の様子

今回は富山県氷見市立博物館で回想法を実践している事例について話していただいた。前半の講義では博物館として回想法を取り入れた経緯から、昔の民具の貸出や民具を使用した回想法の効果と、福祉や小学校、短大との連携による取組紹介がなされた。後半は郷土博物館の屋外展示場に移動して、風呂をテーマに銭湯の前でグループ回想法を体験したが、風呂という共通体験を通して参加者一人一人が話に加わり盛り上がる場面があった。前回までに回想法の基礎について学ぶことができたことや、回を重ねるごとに参加者の交流が深まり参加者数も安定してきている。

郷土博物館屋外展示での回想法体験

小谷講師による回想法体験

想い出語りボランティア講座～楽しく学ぼう！回想法～　＜第５回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年11月２日（水）14：00～16：00
会　場	浦安市立中央図書館２階　視聴覚室
講　師	田原市中央図書館司書　河合　美奈子
参加者	17名（男性：３名、女性：14名・60歳代：12名、70歳代：５名）

２　プログラム

○講義・体験学習

【テーマ】　図書館とグループ回想法
～効果的に脳を活性化させるポイント～

・田原市の紹介と田原市中央図書館の概要
・高齢者向け事業「元気はいたつ便」の取組
・２種類のグループ回想法の紹介
（ミニ回想法「元気プログラム」、グループ回想法）
・回想法のポイントについて
・グループ回想法体験学習
・ふりかえり

講座の様子

３　講座の内容と参加者の様子

愛知県田原市中央図書館で実践しているグループ回想法の事例について話していただいた。前半の講義では図書館職員提案からスタートした「元気はいたつ便」が、３年の試行を経て高齢者施設に出向いて回想法やレクリエーションを行う訪問サービスになった話や、訪問サービスボランティアの養成と活用等の取組が紹介された。後半は３グループに分かれ円陣体系に椅子を並べて、「子供の頃の遊び」や「秋の味覚」をテーマにグループ回想法を体験したが、参加者の生まれ育った場所や環境によって遊びの種類や遊び方、食べ物の違いなど話が途切れず時間が短く感じられた。

また、講師から参加者に「諦めるよりもどうしたら続けられるかを考えチャレンジしてほしい」という言葉を頂いた。

講義の様子

河合講師の講義

想い出語りボランティア講座～楽しく学ぼう！回想法～　＜第６回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年11月９日（水）14：00～16：00
会　場	浦安市役所10階　会議室
講　師	葛飾回想法トレーナーの会　由井　秀子、伊豆　由美子 浦安介護予防アカデミア　重田　恵子
参加者	19名（男性：４名、女性：15名・60歳代：13名、70歳代：６名）

２　プログラム

○事例発表・ふりかえり

【テーマ】　地域でできるボランティア活動
～回想法と地域活動のポイント～

①葛飾回想法トレーナーの会

・会の発足から現在までの経緯

・回想法活動の目的と取組内容

②浦安介護予防アカデミア

・会の発足から現在までの経緯、会の理念と目標

・アカデミア組織と活動内容

○閉講式・修了証授与

事例発表の様子

３　講座の内容と参加者の様子

今回は参加者に講座終了後も回想法を引き続き学習しながら回想法ボランティアとしての活動を意識してもらえるように、前半は実際に回想法講座を行っている葛飾回想法トレーナーの会と、認知症や介護予防の活動をしている「浦安介護予防アカデミア」に現在に至るまでの経緯と活動の目的や内容について話していただいた。後半は参加者全員の顔が分かるように机と椅子を並び替え、茶菓子も用意し、お茶を飲みながら講座のふりかえりを行った。参加者からは「自主的に集まりたい」、「自分の取組に生かしたい」、「月１回集まってみたい」、「続けて取り組みたい」などの意見が出された。

また、最終回だったので修了証を授与したが、参加者の笑顔には、やり遂げた達成感と、得ることの多かった充実感が溢れているように感じられた。

事例発表後のふりかえり

修了式集合写真

【参考】広報ちらし

回想法ボランティア養成事業

想い出語りボランティア講座
～楽しく学ぼう！回想法～

郷土博物館や図書館等の資料を活用した回想法の学びを通して、認知症の予防と地域住民とのコミュニケーションを図るボランティアとして活動してみませんか。

参加費無料

1	10/5（水）	**開講式・オリエンテーション** 「回想法とは何か」 ～回想法の概要と体験学習～	市役所４階会議室 講師：回想法ライフレヴュー研究会 代表　中嶋　恵美子氏
2	10/12（水）	**講義・体験学習** グループ回想法体験学習①	市役所 10 階協働会議室 講師：回想法ライフレヴュー研究会 代表　中嶋　恵美子氏
3	10/19（水）	**講義・体験学習** グループ回想法体験学習②	浦安市郷土博物館１階視聴覚室 講師：回想法ライフレヴュー研究会 代表　中嶋　恵美子氏
4	10/26（水）	**講義・体験学習** 「博物館と地域回想法」 ～懐かしい道具に触れて昔の記憶をたどる～	浦安市郷土博物館１階視聴覚室 講師：氷見市立博物館 副主幹　小谷　超　氏
5	11/2（水）	**講義・体験学習** 「図書館とグループ回想法」 ～効果的に脳を活性化させるポイント～	浦安市立中央図書館２階視聴覚室 講師：田原市中央図書館 主任嘱託司書　河合　美奈子氏
6	11/9（水）	**事例発表・ふりかえり** 「地域でできるボランティア活動」 ～回想法と地域活動のポイント～	市役所 10 階協働会議室 講師：① 葛飾回想法トレーナーの会 ② 浦安介護予防アカデミア

○ 実施時期　平成 28 年 10 月５日（水）～11 月９日（水）　午後２時から４時まで

○ 実施会場　浦安市役所　（浦安市猫実一丁目１番１号　電話 712-6792）
浦安市郷土博物館　（浦安市猫実一丁目２番７号　電話 305-4300）
浦安市立中央図書館　（浦安市猫実一丁目２番１号　電話 352-4646）

○ 対　　象　先着 20 名　市内在住在勤の６０歳以上の方

申し込み

電話もしくは、メールにて申し込みください。
申し込みの際には、氏名、年齢、住所、電話番号をお聞きします。

浦安市教育委員会生涯学習課　〒279-8501 浦安市猫実一丁目１番１号
電　話　712-6792　　ファックス　351-5494
メール　manabi@city.urayasu.lg.jp

主 催　国立教育政策研究所（社会教育実践研究センター）・浦安市教育委員会

３　秩父市におけるモデル事業「インプロ（即興劇）を用いた交流事業」

（１）インプロについて

ア．インプロとは

インプロ（improvisational theater）とは、台本も事前の打合せもない中で、その場で起こったことに目を向けながら共演者や観客とともに物語を生み出していく即興劇のことである。演劇は、そもそも即興的な要素を含みつつ発展してきたが、近代以降、脚本演劇が主流となり、即興は主に俳優訓練の手法として活用されるようになった。それに対して、20世紀半ば、即興演劇をそのまま舞台で上演する動きが英米で生まれ、パフォーマンスの一形態として発展してきた。こうした取組は「インプロ」（イギリスでは「impro」、アメリカでは「improv」と表記）と呼ばれ、世界各地に広まっている。

インプロの実践を概観すると、大きく分けて３つの目的で行われていると言える。第１に、インプロを上演することである。インプロの発展してきた英米においては、インプロ専用の劇場が複数存在するほか、インプロ・コメディのテレビ番組も放送されている。また、ライブハウスや小劇場などでもインプロのショーを観ることができ、中学校や高等学校などのクラブ活動としてもインプロが行われるなど、演劇の一形態として定着している。

第２に、俳優養成のためや、台本のある演劇の作品創造過程において活用することである。俳優養成機関でのカリキュラムにインプロが位置づけられているほか、劇団などが、俳優同士の関係構築のためや、上演台本を創作する過程でインプロを用いることも少なくない。

第３に、演劇をはじめ芸術とは直接的に関係のない他の目的のために活用することである。例えば、学校や地域、企業など、様々な場での教育・学習のなかに、創造性やコミュニケーション力、チーム・ビルディングを育むためのツールとしてインプロが用いられている。なお、こうした上演以外の目的へのインプロの活用は、アメリカでは1990年代に流行し始めたという（ホルツマン、2014）。近年では、教育領域のみならず様々な他領域へインプロを応用し、その効果を検証しようとする国際的組織アプライド インプロビゼーション ネットワーク（「Applied Improvisation Network」http：//www.appliedimprov.com/）も設立されている。

イ．日本におけるインプロの広がり

次に、日本におけるインプロ実践の状況を概観する。日本においては、平成６（1994）年に東京の芸能プロダクションを通じてインプロが持ち込まれた（園部・福田、2016）。そして、当時そこでインプロを学んだ者たちが全国各地でインプロを上演・指導するようになり、近年、インプロのパフォーマンス上演やワークショップは、東京のみならずあらゆる地域で行われている。しかし、日本の場合、インプロは、英米のように演劇の一形態としてメジャーになっているとは言い難く、知名度も発展途上にある。一方、英米同様、俳優養成や脚本創作のためのみならず、学校教育や地域活動、企業研修など、多様な領域にインプロが

活用されている状況は日本においても見られる。したがって、日本のインプロ実践の特徴は、上演よりも他の目的、特に教育的な目的のために活用される実践が主流となりつつある点と言える。

以上のような、日本におけるインプロ実践の特徴は、研究の領域においても同様と言える。すなわち、日本におけるインプロに関する研究は、演劇学的な観点よりも、応用的な観点、特に教育学的な観点において進められている。日本におけるインプロと教育に関する研究を進める研究者としては、高尾隆を挙げることができる。高尾は、イギリスにおけるインプロの創始者であるキース・ジョンストン（Johnstone, K.）のインプロの方法論および教育実践への応用について、創造性という視点から検討している（高尾、2006）。さらに高尾は、企業内人材育成や経営学習論について研究を進める中原淳とともに、日本の企業研修におけるインプロの応用について検討している（高尾・中原、2012）。また、園部は、生涯学習論・成人学習論の観点からインプロの研究を行っており、企業研修におけるインプロ応用の歴史的検討（園部、2013）、高齢者を主な対象とした地域の生涯学習講座におけるインプロ実践の検討（園部、2015、2017）を試みている。インプロが他領域において応用的に活用される背景には、その理論や方法論が「ゲーム」という形で蓄積されてきたことがある。すなわち、指導者側に演劇経験がなかったとしてもインプロを教えることは可能であり、また演劇未経験の学習者にとっても容易に参加することができる演劇形態となっている。

ウ．インプロの取組（海外や社会教育以外での取組）

次に、高齢者を対象としたインプロ実践について、米国カリフォルニア州の先進的な取組を紹介する。

（ア） 高齢者パフォーミングアーツスクール「ステージブリッジ（Stagebridge）」におけるインプロクラス

「ステージブリッジ」は、オークランドに拠点を置く、米国初の高齢者を対象とした非営利のパフォーミングアーツスクールである。昭和53（1978）年、「パフォーミングアーツを通して、高齢者の生活やコミュニティを変容させること」（http：//stagebridge.org/）をミッションとして、高齢者の演劇活動の実践家・スチュアート・カンデル（Kandell, S.）によって設立された。現在、インプロをはじめ、演技や歌、ダンスなど様々なジャンルのパフォーミングアーツの学習プログラムが提供されている。

ステージブリッジのインプロクラスは、日中と夜間、それぞれ開講されている。ここでは、筆者が継続的に調査を行っている日中のクラスについて詳述する。日中には、インプロのゲーム体験を通してインプロの基礎を学ぶ初級クラス、ゲームのみならず即興でのシーンづくりなどの発展的な内容も扱う中・上級クラス、外部でのパフォーマンスも行うパフォーマンスクラス、の３つがある。初級、および中・上級クラスについては、週１回・全11回で155ドル、パフォーマンスクラスについては、隔週１回・全６回で80ド

ルの受講料が必要となる。講師は、サンフランシスコのインプロ俳優・コーチであるバーバラ・スコット（Scott, B.）氏が務めている。各クラスでは、毎回、出席状況が名簿などで確認されているわけではない。スコットによれば、例年、初級クラスは10～20人、中・上級クラスは10～15人の受講者がおり、受講者の年齢は、どのクラスも60代後半～70代前半の者が中心であり、ほとんどが女性である。また受講者の大半は10～20分程度自動車を運転してステージブリッジまで通っている（平成26（2014）年８月２日、スコット氏へのインタビューおよび現地参与観察調査より）。

特徴的なのは、３つ目のパフォーマンスクラスが設置されていることである。パフォーマンスクラスには約８名のメンバーがいる。初級クラス、中・上級クラスとインプロを学び続け、講師やクラスのメンバーの承諾を得た者のみが参加できるクラスとなっている。彼女らは、「アンティック ウィッチーズ（Antic Witties）」という団体名で、ステージブリッジの発表会への出演のほか、地域イベントや高齢者施設でのパフォーマンスの実施など、アウトリーチ活動にも取り組んでいる。

ステージブリッジのパフォーマンスクラス「アンティック ウィッチーズ」の様子
平成28（2016）年３月８日：園部撮影

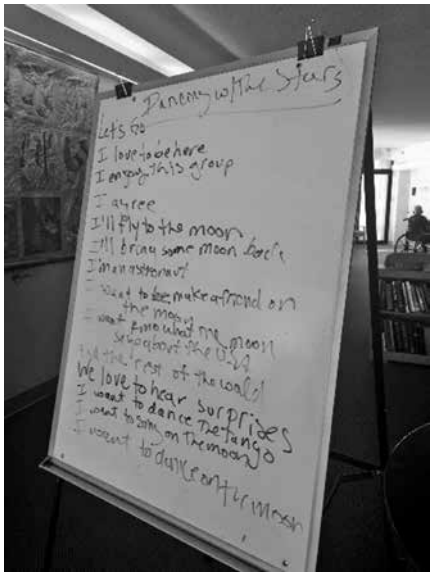
（イ） 介護施設におけるインプロ実践

サンフランシスコやオークランドなどに複数施設を展開する介護施設Ａでは、「ライフエンリッチメントコーディネーター（Life Enrichment Coordinator）」が複数名配置され、施設内におけるアクティビティケアが充実している。介護施設Ａは、主に認知症高齢者や介護度の高い高齢者が暮らすフロアと、そうではない高齢者が暮らすフロアに分かれており、それぞれのフロアにおいて多様なプログラムが連日複数展開されている。利用者が自らアクティビティを選択し参加するが、スタッフからのすすめによって参加する場合も少なくない。

ライフエンリッチメントコーディネーターを務めるＢ氏は、アクティビティケアの手法としてのストーリーテリングに関心を抱く中でインプロと出

会った。そして、自らも近隣のインプロ劇場にインプロを学びに行き、学んだものを利用者の身体・認知能力に応じてアレンジすることで、介護施設Ａの活動に取り入れている。

介護施設Ａのインプロ実践の参加者は、ほぼ全員が車椅子に乗って会場までやってくる。そのため、立ち歩くことを含むインプロのゲームはほぼ行われておらず、座ったままできるものや大きく身体を動かすことが行われている。特に、認知症フロアで行われるインプロ実践は、参加者自身がどの程度そこで行われている内容を理解しているのかはわからない。そして、参加者同士の関わりも自然に生まれてくるわけでもない。しかしＢ氏は、参加者の言動を一切否定することはなく、「その瞬間」を大切にし、参加者の咄嗟の言動を効果的に拾いあげながら活動を進めている。そして、自らが参加者の間に入り、参加者の発言同士をつなげたり、全体に共有したりする役割を担っている。



介護施設Ａの認知症フロアにおけるインプロ実践で生み出された物語

平成29（2017）年２月27日：園部撮影

エ．社会教育においてインプロを扱う意義・可能性等

最後に、社会教育、特に高齢者を対象とした学習活動としてインプロを扱う意義や可能性について３点述べる。

第１に、インプロを学ぶこと自体に、表現すること、舞台に立つこと（誰かに見られること）が含まれる点である。インプロでは、講義形式ではなく、自ら参加・体験し、他者と対話することによって学ばれていくワークショップ形式がとられる。また、脚本のないインプロでは、物語の中で語られるセリフや動きは、誰かに与えられたものや、事前に決められた「正しい」ものではなく、参加者自身によって生み出されるものである。

そして重要なのは、表現の世界においては「喋らない」、「動かない」ということも表現の１つになり得るということである。インプロにおいて、参加者は、

喋ったり動いたりすることを強制されるわけでもなければ、流暢に言語や身体を操れる者が「優れたインプロ俳優」と称賛されるわけでもない。そうした点に、身体的・認知的に課題を抱える高齢者も含めた多様な参加者を包摂し得るインプロの可能性を見ることができる。

今後、こうしたワークショップ形式、学習者が表現することを伴う学習形態は、社会教育、特に高齢者を対象とした学習の場においてもさらに求められると考えられる。一方向的に講師の話を聴くだけの学習でも、仲の良い者同士の「お喋り」でもない、他者と話したり表現し合ったりする学習活動は、あらゆる学習者の「声」を拾い上げ、学習者間に新たな関係を構築することにつながるのではないだろうか。

第２の意義は、インプロにおける「失敗」の扱い方に関する点である。先に触れたように、表現することや舞台に立つことを伴うインプロの学習において、そのハードルをいかに下げるかは、特に演劇経験のない学習者にとっては重要なことである。インプロにおいては、学習者が負担なく表現し、舞台に立っていける考え方や仕組みが構築されている。その中でも特に重要と考えられるのがインプロにおける「失敗」の扱い方である。

「老い」とは、これまでできていたことができなくなっていくという現象である。そうした「老い」は、インプロを学ぶ際にも表出される。例えば、複雑なインプロゲームのルールを正しく理解できない、思うように身体を動かせない、セリフが思いつかない、といったことである。そして、インプロを初めて学ぶ高齢者にしばしば見られるのは、自分ができないことで恥をかくのではないか、誰かの迷惑になるのではないか、といった意識である。

しかし、事前に準備や練習をせず即興的に物語をつくり出していくインプロの世界では、「失敗」は起こって当然のものと考える。すなわち、インプロでは、誰かが「できない」こと自体が、他の誰も思いつかないような新たなアイデアとなったり、他の誰かが新たなアイデアを生み出すことにつながったり、他の誰かと対話したり触れあったりするきっかけとなったりする。そして、そうしたことから、新たな関係やパフォーマンスが生まれていく。

こうしたインプロにおける「失敗」の扱い方は、他の学習活動の場においても有効と考えられる。特に、自身の身体・認知能力に不安を抱える高齢者の場合、そうした不安が学習の場へ足を運んだり、他者と関わったりすることを避けるように働く場合もある。「失敗」をネガティヴなものと見なさない学習の場は、そうした高齢者の参加不安を軽減し、「できなくなっていくこと」を捉え直す機会をもたらすと考えられる。

第３に、インプロでは「相手に良い時間を与えること」が重視されているということである。元々インプロのゲームは、即興で物語を紡いでいく際に生じる様々な問題を解決するためにつくられてきた。それらの多くは、他者との関係に焦点が当てられている。そうした点が、学習者間のコミュニケーションや人間関係・集団づくりのツールとして活用されやすい理由でもある。

インプロは、一人一人が自由に好き勝手に自己表現するものではない。自分の

ためではなく、一緒にパフォーマンスを行う相手のために自らの創造性を用いる。相手にアイデアがなければ自ら提案し、相手にアイデアがあるならそれを受け入れる。そうした中で、１人では決して思いつかなかったアイデアによって新たな物語をつくることができるのである。

また、インプロのゲーム自体、常に他者を必要とし、他者との協働を促すようにデザインされている。ゲームを行う中で、学習者は負担なく他者と関わり、互いにサポートし合うことを自然に学んでいくことができる。インプロは、個人のスキルを高め、個人の表現欲求を満たすための手法ではない。他者との関わりを必至とするインプロは、個人の能力を問わず、フラットに関わり合える学習集団の形成へとつなげていける可能性を秘めているのではないだろうか。

参考文献

キース・ジョンストン（2012）『インプロ：自由自在な行動表現』（三輪えり花訳）而立書房（Johnstone, K. (1987) Impro：Improvisation and the Theatre, Routledge.）

園部友里恵（2013）「企業研修における演劇的手法の活用の変遷：ロール・プレイングからインプロへ」『演劇教育研究』4、p.40-56.

園部友里恵（2015）「地域における学びの場へのインプロ（即興演劇）の応用：「豊四季台くるるセミナー」におけるインプロ講座を事例として」『社会教育』2015年11月号、p.26-31.

園部友里恵・木村大望（2015）「アメリカのシニアシアターカンパニー「Stagebridge」の設立と展開：高齢者を対象としたインプロクラスに着目して」『演劇教育研究』6、p.48-56.

園部友里恵・福田寛之（2016）「日本における「インプロ」の導入と展開：1990年代を中心として」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』32、p. 1-14.

園部友里恵（2017）「インプロ（即興演劇）の学習形態と高齢者の変容：千葉県「くるる即興劇団」を事例として」『老年社会科学』39(1)、p.21-30.

高尾隆（2006）『インプロ教育：即興演劇は創造性を育てるか？』フィルムアート社.

高尾隆・中原淳（2012）『インプロする組織：予定調和を超え、日常をゆさぶる』三省堂.

ロイス・ホルツマン（2014）『遊ぶヴィゴツキー：生成の心理学へ』（茂呂雄二訳）新曜社（Holzman, L. (2009) Vigotsky at Work and Play, Routledge.）

（園部　友里恵）

（２）インプロ（即興劇）を用いた交流事業

ア　モデル事業の実施に向けて

（ア）事業計画や施設間の調整等における教育事務所　社会教育主事の関わり

秩父市荒川地区は、中山間地域に位置することもあり、住民の入れ替わりはほとんど見られず、人間関係が固定化している面も見られる。そこで、高齢者同士の新たな人間関係を構築するため、インプロによる交流事業を実施することとした。また、高齢者の地域参画の一環として、学校支援ボランティアの方向性についても探ることとした。

秩父市では、公民館及びその他社会教育に関することが市民部生涯学習課に補助執行されていることもあり、教育委員会事務局ではない生涯学習課において、社会教育主事は発令されていない。

しかし、本事業を進めるに当たっては、教育委員会、市民部生涯学習課、学校、公民館等の連絡調整が必要不可欠である。そこで、関係機関等のコーディネーター的役割を担う人材として、地域と学校の状況を把握している教育事務所の社会教育主事が望ましいと考えた。

埼玉県には、東西南北の４つの教育事務所があり、教育支援担当として１～２名の社会教育主事が配置されており、市町村の生涯学習・社会教育行政の支援に当たっている。秩父市を含む北部地区においては、担当区域が広域となるため、秩父地域の１市４町（秩父市・横瀬町・小鹿野町・皆野町・長瀞町）を担当する北部教育事務所秩父支所を設置し、１名の社会教育主事を配置している。

教育事務所の社会教育主事の職務は、管内市町の社会教育主管課との連絡調整から学校訪問等、多岐に渡っているが、管内の社会教育と学校教育の状況を把握している貴重な存在でもある。

これらのことから、モデル事業の実施に向けて、市町村の社会教育行政を支援する立場である教育事務所の社会教育主事が事業の支援と連絡調整等を担うことが望ましいと考えた。併せて、高齢者地域参画へ向けての新たな事業を基に公民館が地域のコーディネーター役を果たせるよう、意欲と資質の向上を図るため、意図的・計画的な支援を行っていくこととした。

次に、秩父市内の小・中学校と地域の連携状況を見ると、各学校に埼玉県独自の取組である「学校応援団」*が組織され、学校と地域の連携体制が整備されている。

＊「学校応援団」とは、学校支援地域本部に相当する取組で、学校における学習活動、安心・安全確保、環境整備などについてボランティアとして協力・支援を行う保護者・地域住民による活動組織である。平成17年度よりモデル事業として取り組み、平成28年度現在、埼玉県内全ての小・中学校に「学校応援団」が設置され、特色ある「学校応援団」活動が展開されている。

一方、秩父市の教育行政においては、学校と地域の連携に関する事業は秩父市教育委員会事務局の学校教育課が担当していることもあり、教育行政内

においても社会教育と学校教育の連携を深めることが重要となってくる。

荒川地区においては、荒川東小学校、荒川西小学校、荒川中学校の３校があり、各校では、前述の「学校応援団」が組織され、保護者や地域の方による学校支援活動等が展開されている。

公民館と小・中学校の連携については、公民館が事業を実施する際に小・中学校を通じて参加者を募集したり、年に１度、11月に開催されている公民館文化祭において、小・中学校の児童・生徒の作品を展示したりする等の連携が図られている。特に、公民館文化祭では、公民館利用者以外にも多くの地域住民が集まり、子供から高齢者まで多世代交流の機会にもなっている。

これらの状況から、モデル事業を実施するに当たっては、荒川公民館を中心に置き、市民部生涯学習課、教育委員会学校教育課、地区内の小・中学校との連携体制を構築するとともに、北部教育事務所秩父支所の社会教育主事が支援に当たることとした（図３－５参照）。

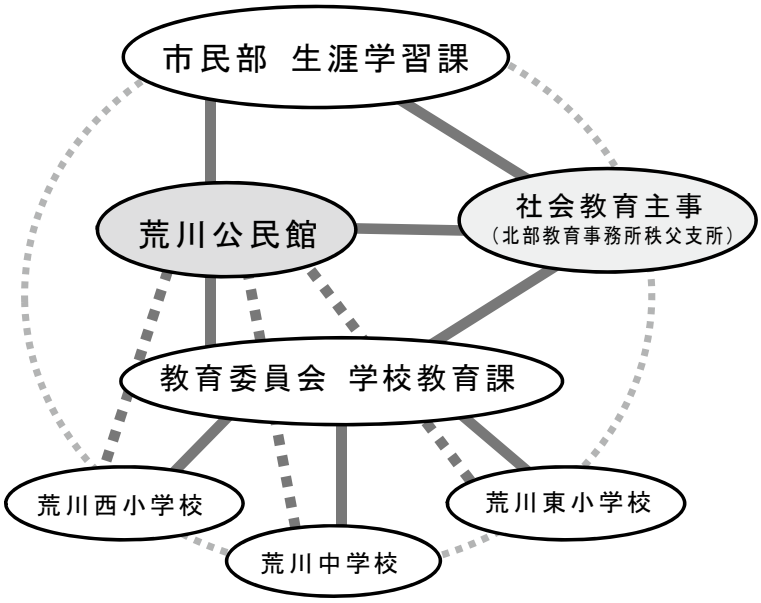


図３－５　荒川公民館区における小・中学校の連携体制

（イ）モデル事業実施に向けた地域の実態調査

平成28（2016）年10月17日に、教育事務所社会教育主事が荒川公民館区にある小学校２校と中学校１校を訪問し、モデル事業「インプロ（即興劇）による交流事業」の説明とともに、学校と地域の連携状況についてヒアリング調査を行った。

各校におけるヒアリング調査の概要は以下のとおりである。

荒川東小学校では、生活科の昔遊び、体育科のボッチャ、ペタンク、総合的な学習の時間の串人形、神楽、獅子舞等、様々な教科において、地域の方がゲストティーチャーとして参加している。また、登下校の見守りボランティアとしても長年協力を得ている。

荒川西小学校では、児童と地域の方の交流の場として「西小まつり」を

38年もの長い歴史ある行事として開催を続けている。「学校応援団」の支援により、児童が育てた野菜を使った郷土料理作りや地域の長寿クラブと昔遊び等を通して交流を図っている。また、総合的な学習の時間では、地域の伝統芸能である白久（しろく）串人形の学習に取り組み、地域の方をゲストティーチャーに招いている。この他にも、学校支援ボランティアとして、登下校の安全確保や校内環境整備等の協力を得ている。

荒川中学校では、長年、総合的な学習の時間において、荒川白久地区に伝わる、国選択無形民俗文化財（県指定無形民俗文化財）指定の伝統芸能「白久の串人形」（白久の人形芝居）や（市指定無形民俗文化財）指定の伝統芸能「神明社神楽」に取り組んでいる。講師には、地域の敬老会のメンバーを含む「白久串人形座」や「神明社神楽保存会」をゲストティーチャーとして招き、中学校に隣接する荒川歴史民俗資料館の協力を得ている。また、地域貢献の一環として、串人形を学んだ中学生が、地区の高齢者が集う敬老会の場で、学習の成果として、串人形芝居の上演を行い、好評を得ている。

このように、荒川地区の小・中学校では、地域の方が「学校応援団」として、学習支援や児童生徒の安全確保、環境整備等に取り組まれている。また、「学校応援団」として学校支援等に携わっている高齢者は、子供たちと関わる中で、とても生き生きと活動しているとの声も聞こえた。

今回のモデル事業においても、参加者の新たな人間関係の構築だけでなく、児童と関わる場面を設けることで、参加者の生き甲斐にもつながると考えた。

ただし、モデル事業の実施に当たっては、講師の都合等により土曜日、日曜日の開催となったため、学校の教育活動と連携して、児童が参加することは困難となった。

そこで、公民館職員からの提案により、公民館で活動する小学生のヒップホップダンスクラブに声を掛け、ダンスの発表と併せて開催することで、高齢者と児童の交流を図ることとした。

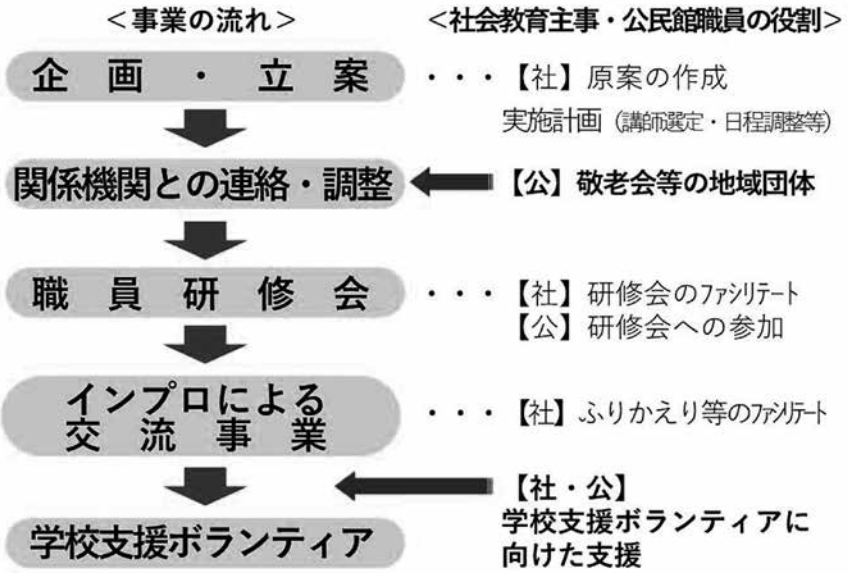


図３－６　秩父市におけるモデル事業の流れと社会教育主事等の役割

イ　モデル事業の実施

（ア）インプロ（即興劇）を用いた交流事業

講座名を「即興劇（インプロ）による仲間と健康づくり講座」として、平成28（2016）年９月11日から12月17日までの午後１時30分から３時30分までの時間帯で、市内在住在勤の60歳以上を対象に実施した。

講座への申込者は36名（男性４名、女性32名）であった。インプロという新たな試みである講座に対して36名もの申込みがあったのは、公民館職員が地区の老人会にチラシを配ったり、公民館利用団体に声を掛けたりする等、参加を促した功績である。

全６回の講座は、講師のファシリテーションにより、インプロに関する様々なアクティビティを展開し、参加者の笑顔が絶えない講座となった。また、後半の４回目、５回目は、ヒップホップダンスサークルの子供たちとインプロに関するアクティビティを通して楽しく交流する姿が見られた。

※実施内容及び結果の詳細はp.81～を参照。

（イ）インプロ（即興劇）職員研修会

平成28（2016）年７月15日に、講座の開催に向け、関係職員等のインプロへの理解を深めるため、職員研修会を開催した。この研修会には、講座の講師である園部講師を招き、市民部生涯学習課職員、公民館職員、教育委員会事務局職員が参加した。研修を通して、高齢者の学習特性やインプロの特徴等を学び、インプロが脳の活性化や健康づくりにつながることを理解することができた。また、インプロに関する様々なアクティビティを体験することで、高齢者同士や多世代との交流につながることを体験的に学ぶことができた。

関係職員によるインプロ・アクティビティ体験研修

ウ　モデル事業を生かす取組

（ア）地域学校協働活動に向けた社会教育主事の役割

本事業を計画・実施するにあたり、教育事務所の社会教育主事が、高齢者地域参画へ向けてのモデル事業を基に公民館が地域のコーディネーター役を果たせるよう、意欲と資質の向上を図るため、意図的・計画的な支援を行うこととした。

具体的には、講座の最終日に、学校支援ボランティアの希望者を募り、『荒川地区の学校の役に立ち隊』という名称の登録制度を構築したいと考えた。その際、ボランティアとして参画する学校を１校に限定せず、公民館地区の２小学校、１中学校の計３校で活躍することができる仕組みにしたいと考えた。

しかし、実際には、最終日の参加者は10名と少なく、そのうち、ボランティアの趣旨に賛同し、登録を希望したのは、わずか３名のみであった。また、この３名もすでに、登下校の見守り等、何らかの形で、学校支援に携わっている状況であった。

また、80歳代の参加者からは、以前は、学校支援等の活動を行っていた時期もあるが、80歳代になると、学校を訪問し、子供たちと交流するのは、体力的に厳しいとの声も聞こえた。

（イ）モデル事業の検証

荒川公民館において、インプロという新たな手法を用いた講座に取り組んだことや、教育事務所の社会教育主事が、公民館と地区内にある学校を往来し、コーディネーター的役割を果たしたことは成果として捉えたい。

出席状況を見ると、前述のとおり、公民館職員の尽力により36名の申込みがあったが、回を重ねるごとに参加人数が減り、１度も出席しなかった者が３名見られた。（表３－３）

また、初回のみ参加者も５名おり、２回目以降の欠席した理由について、後日公民館職員が尋ねたところ、インプロのような体験型の講座に苦手意識がある等が挙げられたとのことである。

表３－３　「即興劇（インプロ）による仲間と健康づくり講座」各回の出席人数

回数	１回目	２回目	３回目	４回目※	５回目※	６回目
参加者数	27人	17人	14人	12人	12人	10人
出席率	75.0%	47.2%	38.9%	33.3%	33.3%	27.8%

※４回目、５回目は児童を除く

さらに、申込者の出席回数を見ると、全６回の講座のうち、出席回数が半分に満たない０～２回の参加者が20人と、全体の55.6%であり、半分を超える３回以上の方は、16人と全体の44.4%であった。また、回を重ねるごとに、参加者が減っていく傾向が見られた。（表３－４）

表３－４　「即興劇（インプロ）による仲間と健康づくり講座」への出席回数

出席数	０回	１回	２回	３回	４回	５回	６回	計
人数	３人	８人	９人	５人	６人	３人	２人	36人
人数（割合）	20人（55.6%）			16人（44.4%）				

これらの要因として、９～12月の３ヶ月に渡る期間や、土曜日や日曜日での開催等が考えられる。また、今回のモデル事業においては、インプロを事業化するという内容や方法ありきで計画したため、荒川地区の高齢者のニーズを把握していなかったことも挙げられる。

また、地域参画の一環として「学校応援団」としての活動につなげることについては、講座の中で、参加者と児童がインプロを通じて楽しく活動する姿は見られたものの、参加者が「学校で活動したい」という意欲を高めるま

でに至らなかった。

　やはり、児童との交流を図るだけでなく、学校での具体的な活動を視野に入れた内容を講座の中に位置付ける必要があると考える。また、学校と地域を繋げるコーディネーター的な役割を担う人材が講座の企画・運営等に関与することも必要であろう。

（市川　重彦）

秩父市におけるモデル事業

「インプロ（即興劇）を用いた交流事業」報告

1　**事業目標**　インプロ（即興劇）を用いたワークショップ等を通して、参加者のコミュニケーション能力の向上を図るとともに、他世代との交流を深めることで、高齢者が地域に参画する機会へ繋げる。

2　**講 座 名**　即興劇（インプロ）による仲間と健康づくり講座

3　**実施時期**　平成28（2016）年９月11日（日）～12月17日（土）
全６回　13：30～15：30

4　**実施会場**　秩父市荒川公民館

5　**対象・定員**　市内在住在勤の60歳以上の方　30名程度

6　**申 込 者**　36名（男性４名、女性32名）

7　**展 開 等**

実施日・参加人数	内　　容	講　師　等
第１回 ９/11(日) 27名	**○質問紙調査票の回答** **○開講式・オリエンテーション** **○講義**（インプロとは、インプロの魅力） **○ワークショップ** ・ウォーミングアップ ・ペアやグループ等で演劇やインプロに関するアクティビティ ・ふりかえり	【講師】 三重大学教育学部 特任講師　園部　友里恵 【アシスタント】 インプロ劇団「SAL-MANE」 インプロ講師　長谷部　光
第２回 ９/25(日) 17名	**○ワークショップ** ・ウォーミングアップ ・ペアやグループ等で演劇やインプロに関するアクティビティ ・ふりかえり	
第３回 10/16(日) 14名		
第４回 10/29(土) 12名	**○小学生ダンスサークルの発表・鑑賞** **○ワークショップ** ・ウォーミングアップ ・小学生との一緒にペアやグループ等で演劇やインプロに関するアクティビティ ・ふりかえり	【講師】 三重大学教育学部 特任講師　園部　友里恵 【アシスタント】 インプロ劇団「即興実験学校」 インプロ講師 野村　真之介
第５回 11/19(土) 12名		
第６回 12/17(土) 10名	**○インプロ劇発表会** **○全体ふりかえり** ・学校支援活動に向けた話合い	

インプロによる仲間と健康づくり講座　＜第１回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年９月11日（日）13：30～15：30
会　場	秩父市荒川公民館　軽運動室
講　師	三重大学教育学部特任講師　園部　友里恵 （アシスタント　インプロ劇団「SAL-MANE」インプロ講師　長谷部　光）
参加者	27名（男性：３名、女性：24名・60歳代：９名、70歳代：13名、80歳代：５名）

２　プログラム

○開講式（主催者挨拶、館長挨拶等）
○オリエンテーション
○インプロ・アクティビティ
・数の掛け声と拍手
・お互いの共通点を探す（２人組）
・バースデーライン
・イス取り、拍手回し
・グループで絵を描き、見合う
・しりとり
○ふりかえり

講師の自己紹介、インプロ説明

３　講座の内容と参加者の様子

本講座は、地域の老人会等を通じて広報したこともあり、サークルの仲間や近所の方と一緒に参加しており、顔馴染みの方がいる一方で、初めて顔を合わせる参加者同士も見られた。

また、初回ということで、緊張している様子の参加者も見られたが、講座開始早々、講師の自己紹介、インプロの簡単な説明に続き、簡単な動作を取り入れたアクティビティを行うことによって、会場の雰囲気が和み、笑い声で溢れる空間となった。

その後のアクティビティでも笑い声が絶えず、バースデーラインなど、全体の交流を図るものから、２人組や４人組での簡単なゲームや共同作業等、交流を深めるものを織り交ぜながら展開され、参加者相互を知る機会となった。

グループで描いた絵を見合う

ふりかえり

インプロによる仲間と健康づくり講座　＜第２回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年９月25日（日）13：30～15：30
会　場	秩父市荒川公民館　生涯学習室
講　師	三重大学教育学部特任講師　園部　友里恵 （アシスタント　インプロ劇団「SAL-MANE」インプロ講師　長谷部　光）
参加者	17名（男性：１名、女性：16名・60歳代：４名、70歳代：７名、80歳代：６名）

２　プログラム

○インプロ・アクティビティ

・指を動かすウォーミングアップ

・顔の表情筋を動かすウォーミングアップ

・見えないボールを表現しながら順に回す

・見えない物を表現しながら順に回す

・魔法の箱「これ何ですか？」

・カードに描かれた絵から物語を創造する

・接続詞のキーワードを使って、物語をつなぐ

○ふりかえり

心と身体の準備体操

３　講座の内容と参加者の様子

２回目ということで、参加者もリラックスした表情で会場に集まり、講座開始前から交流する姿も見られた。はじめに、全体で指や顔の表情筋を動かす体操等を行うことで、場の雰囲気が和んだ。続いて、見えないボールや見えない物を動作で表しながら、隣に手渡していくアクティビティを行い、想像力を高めた。後半は、４人組のグループに分かれ、カードに描かれた絵から物語のイメージを広げるアクティビティや、キーワードに沿ってストーリーを創り上げるアクティビティ等、インプロにつながる内容が展開された。

カードの絵から物語を創る

キーワードでストーリーをつなぐ

インプロによる仲間と健康づくり講座　＜第３回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年10月16日（日）13：30～15：30
会　場	秩父市荒川公民館　生涯学習室
講　師	三重大学教育学部特任講師　園部　友里恵 （アシスタント　インプロ劇団「SAL-MANE」インプロ講師　長谷部　光）
参加者	14名（男性：０名、女性：14名・60歳代：５名、70歳代：６名、80歳代：３名）

２　プログラム

○インプロ・アクティビティ

・ウォーミングアップ

・身体で事物を表現する連想ゲーム「私は木」

・ステータス（地位、身分、立場、状況等）を身体で表現する

・「家族」を想定した短いインプロ劇

○ふりかえり

ステータスの説明

３　講座の内容と参加者の様子

前半は、全体でウォーミングアップを行った後、４人組のグループに分かれて身体で事物を表現しながら連想していく「私は木です」というアクティビティを行った。

後半は、役柄の上下関係を意識するステータスについて学び、アクティビティでは、上下関係をポーズ等で表現する方法を身に付けた。

最後に、この日学んだことを生かして、インプロ劇に挑戦した。「家族」の場面を想定した短いインプロ劇を数回行ったが、役に指名された受講者は、臆することなく、即興による台詞回しで役柄を演じ、会場から称賛の拍手が沸き起こった。

身体で事物を表現し連想する

「家族」を想定したインプロ

インプロによる仲間と健康づくり講座　＜第４回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年10月29日（土）13：30～15：30
会　場	秩父市荒川公民館　軽運動室・ロビー
講　師	三重大学教育学部特任講師　園部　友里恵 （アシスタント　インプロ劇団「即興実験学校」インプロ講師 野村　真之介）
参加者	12名（男性：１名、女性：11名・60歳代：４名、70歳代：５名、80歳代：３名） 小学生16名

２　プログラム

○ダンス発表

小学生ダンスサークル「リトルヒップホップ」によるダンスの発表

○インプロ・アクティビティ

・円座で３人ずつ異なるポーズ

・２人組で割り箸を指で支えながら動く

・２人組で一方の動作を鏡役が真似る

・身体で事物を表現する連想ゲーム「私は木」

○ふりかえり

ダンスサークルの発表

３　講座の内容と参加者の様子

はじめに、荒川公民館で活動している小学生ダンスサークル「リトルヒップホップ」によるダンスの発表があり、受講者は子供たちが一生懸命踊る姿を温かい眼差しで観賞した。

ダンス発表の後、受講者と小学生が一緒にインプロ・アクティビティを行った。初めは緊張していた小学生もインプロ・アクティビティを一緒に行うことで、笑い声が溢れ、場の雰囲気も和んできた。小学生は慣れてくると次第に活発な動きをして、受講者と楽しく活動する姿が見られた。また、これまでの講座の中で取り組んだことのあるアクティビティでは、受講者が小学生に教える場面も見られた。

今回の講座では、小学生と一緒に活動したせいか、受講者の笑顔がこれまで以上に多く見られ、講座終了後、満足した表情を浮かべる受講者が多かった。

割り箸を指で支え合う

２人組で向き合い動作を真似る

インプロによる仲間と健康づくり講座　＜第５回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年11月19日（土）13：30～15：30
会　場	秩父市荒川公民館　軽運動室・ロビー
講　師	三重大学教育学部特任講師　園部　友里恵 （アシスタント　インプロ劇団「即興実験学校」インプロ講師 野村　真之介）
参加者	12名（男性：１名、女性：11名・60歳代：３名、70歳代：５名、80歳代：４名） 小学生５名

２　プログラム

○ダンス発表

小学生ダンスサークル「リトルヒップホップ」によるダンスの発表

○インプロ・アクティビティ

・円座で顔のマッサージ等のアクティビティ

・拍手と視線で意思の疎通を図る

・互いを意識しながら歩調を合わせる

○ふりかえり

円座で顔のマッサージ

３　講座の内容と参加者の様子

前回（第４回）同様、小学生ダンスサークル「リトルヒップホップ」によるダンスの発表があり、会場は大いに盛り上がった。

前回と比べ、インプロ・アクティビティに参加する小学生は少なかったが、円座になって拍手と視線で意思の疎通を図ったり、複数の人数で歩調を合わせたりする等、多様な動きでゲーム性の高いアクティビティを行った。そのため、受講者と小学生が笑い合う場面も多く見られ、前回よりも一段と交流が深まったように感じられた。

拍手と視線で意思の疎通を図る

互いを意識して歩調を合わせる

インプロによる仲間と健康づくり講座　＜第６回＞

１　講座概要

日　時	平成28（2016）年12月17日（土）13：30～15：30
会　場	秩父市荒川公民館　軽運動室・ロビー
講　師	三重大学教育学部特任講師　園部　友里恵 （アシスタント　インプロ劇団「即興実験学校」インプロ講師 野村　真之介）
参加者	10名（男性：０名、女性：10名・60歳代：２名、70歳代：４名、80歳代：４名）

２　プログラム

○インプロ・アクティビティ
・円座でマッサージ
○これまでの活動のふりかえり
○インプロ（即興劇）に挑戦
・「家族」等をテーマに場面や役割を決めた即興劇
○ふりかえり

場面に合わせた即興劇

３　講座の内容と参加者の様子

最終回となる第６回は、マッサージ等の準備運動を行った後、これまでの取り組んだアクティビティ等を振り返り、受講者全員参加によるインプロ劇に挑戦した。講座の途中で、受講者数名から最終回はインプロ劇に挑戦したいという声があり、意欲的に取り組む姿が見られた。

いくつかのグループに分かれ、園部講師が様々な場面や役割を設定し、それに合わせて、受講者は即興で台詞や動きを考え、演じることができた。

受講人数は少なかったが、これまでの欠席が少ない方がほとんどで、様々なアクティビティを通して学んだ成果をインプロ劇として発表することができ、満足そうな表情を浮かべる受講者が多く見られた。

場面や役割を設定する

これまでの活動を振り返る

【参考】広報ちらし

テレビでも紹介された!!

みんなで笑えば

即興劇による（インプロ）

100倍楽しい

仲間と健康づくり

講座

① 9/11(日) ② 9/25(日) ③10/16(日)
④10/29(土) ⑤11/19(土) ⑥12/17(土)

午後１時30分～午後3時30分

※毎回でなくても構いません。都合がよい時に御参加ください。

三重大学教育学部
特任講師　園部 友里恵 先生

会場　荒川公民館

定員　３０名程度（60歳以上）

申込　公民館窓口　8月末日締切
電話 0494-54-1058
保険料 150円

台本のない即興劇(インプロ)のゲームを通して，みんなで笑って楽しい時間を過ごしませんか？みんなで一緒に，たくさん笑えば，たくさん元気になれる！そんな楽しい講座にしていきましょう！

主催　国立教育政策研究所（社会教育実践研究センター）・秩父市

４　質問紙調査結果

（１）質問紙調査の実施状況

ア　質問紙調査の実施方法

本研究では、モデル事業として実施する「回想法ボランティア育成事業（浦安市）」及び「インプロ（即興劇）を用いた交流事業（秩父市）」に関し、参加者に質問紙調査を実施した。また、モデル事業参加者と比較するため、浦安市、秩父市の他の公民館等で実施する講座への参加者にも同様の質問紙調査を実施した。

なお、モデル事業については、社会教育実践研究センター職員が記入相談及び回収を行った。他の公民館講座については、各公民館職員が記入相談及び回収を行った（一部郵送による回収あり）。第１回実施時の欠席者には、次回以降に回答を頂いた。

イ　質問紙調査実施時期

表３－５　質問紙調査実施状況

講座名	第１回アンケート	第２回アンケート
①インプロによる仲間と健康づくり講座（秩父市）	平成28（2016）年 10月16日（日）第３回 10月29日（土）第４回 11月19日（土）第５回 ※所内手続き（倫理委員会）で初回に間に合わず	平成28（2016）年 12月17日（土）第６回
②想い出語りボランティア講座（浦安市）	平成28（2016）年 10月19日（水）第３回 10月26日（水）第４回 ※所内手続き（倫理委員会）で初回に間に合わず	平成28（2016）年 11月９日（水）第６回
③秩父市の他の公民館講座 ア．エコクラフト（荒川公民館）	平成28（2016）年 11月11日（金）第１回	平成29（2017）年 ３月10（金）第５回
イ．パン作り教室（荒川公民館）	平成28（2016）年 11月13日（日）第１回	平成29（2017）年 ２月９日（木）第４回
④浦安市の他の公民館講座 ア．人生をもっと楽しもう！男性専科（高洲公民館）	平成28（2016）年 10月18日（火）第１回	平成28（2016）年 11月１日（火）第３回
イ．元気な今だから準備する終活のあれこれ講座（富岡公民館）	平成28（2016）年 11月14日（月）第１回	平成28（2016）年 11月22日（火）第２回
ウ．スポーツ吹き矢＠NEKOZANE（中央公民館）	平成28（2016）年 11月18日（金）第１回	平成29（2017）年 ４月21日（金）第６回
エ．シニアサロン「ひのでCaféあそんで学んで豊かな人生」（日の出公民館）	平成28（2016）年 12月26日（月）第１回	平成29（2017）年 ３月27日（月）第４回

（２）調査の実施方法

ア 「即興劇（インプロ）による仲間と健康づくり講座」（秩父市）と「想い出語りボランティア講座」（浦安市）は、社会教育実践研究センター職員が記入相談及び回収を行った。

イ　他の公民館講座は、原則として各公民館職員が記入相談及び回収を行った（一部郵送による回収あり）。

ウ　第１回調査実施時の欠席者には、次回以降に回答を頂いた。

（３）調査の回答者数

表３－６　第１回質問紙調査回答者数

区分	秩父市			浦安市				
	即興劇	エコクラフト	パン作り	想い出語り	男性専科	終活	吹き矢	シニアサロン
回答者数	21	10	7	16	10	18	24	11

※回ごとに参加人数が異なる。また、１回目の調査回答者と２回目のアンケート回答者は必ずしも一致しない。

表３－７　第２回質問紙調査回答者数

区分	秩父市			浦安市				
	即興劇	エコクラフト	パン作り	想い出語り	男性専科	終活	吹き矢	シニアサロン
回答者数	10	4	2	15	9	15	21	32

（４）健康に関する分析結果

モデル事業として実施した「回想法ボランティア育成事業（浦安市）」及び「インプロ（即興劇）を用いた交流事業（秩父市）」参加者を介入群、事業として実施してはいないが比較のため調査に協力を頂いた浦安市の終活、吹き矢、男性専科、シニアサロン、秩父市のパン作り、エコクラフトの参加者を比較対照群とし、質問紙調査を実施した。

ここでは特にモデル事業が参加者の健康に関する効果について検証するため、老研式活動能力指標（TMIG-Index）及び、WHO-５に関する分析をした結果を報告する。その他の調査項目の結果についてはp.154～参考「講座参加者への質問紙調査結果」に掲載している。

ア　対象者の属性

モデル事業及び比較対照講座の参加者それぞれの性別は表３－８のとおりである。秩父市の即興劇講座では、女性が９割を超え、浦安市の想い出語り講座では女性が74%、男性が26%となっている。介入群の合計の男女の割合はそれぞれ、14%と86%。比較群では、男女それぞれ31%と69%である。また、対象者の年齢は表３－９のとおりである。全体に対して介入群の60歳から74歳ま

でが23%、75歳以上が11%、比較対照群の60歳から74歳までが46%、75歳以上が20%を占めている。

表３－８　対象者の性別

		男性	女性
介入群	即興劇	1	20
	想い出語り	4	11
比較対照群	終活	7	10
	吹き矢	7	17
	男性専科	10	0
	パン作り	0	7
	エコクラフト	0	9
	シニアサロン	0	11
合計		29	85

表３－９　対象者の年齢

		60~64歳	65~69歳	70~74歳	75~79歳	80~84歳	85歳以上
介入群	即興劇	1	5	5	5	3	2
	想い出語り	2	8	3	2	0	0
比較対照群	終活	1	7	4	3	2	0
	吹き矢	1	7	8	5	2	0
	男性専科	0	4	4	2	0	0
	パン作り	1	3	0	0	0	0
	エコクラフト	1	2	2	0	0	0
	シニアサロン	0	1	3	5	1	1

イ　老研式活動能力指標

高次生活機能を評価する尺度として開発された「老研式活動能力指標」（古谷野他、1987）は、手段的自立、知的能動性、社会的役割をはかる下位尺度から構成されている。次頁図３－７のとおりＡからＭまでの質問項目に対し、回答者は「はい」か「いいえ」で回答し、はいを１点、いいえを０点とし、ＡからＥを手段的自立として５点満点、ＦからIを知的能動性として４点満点、ＪからＭを社会的役割として４点満点の総計13点から構成されている。

あなたの日常生活の状況についてお伺いします

問5. あなたの日常の活動性についてお伺いします。以下のA～Mの質問ごとに、「はい」又は「いいえ」に○を付けてください。

※ 以下の「できますか」の質問については、「やろうと思えばできる」という場合は「はい」に○を付けてください。

A. バスや電車を使って一人で外出できますか	はい	いいえ
B. 日用品の買物ができますか	はい	いいえ
C. 自分で食事の用意ができますか	はい	いいえ
D. 請求書の支払ができますか	はい	いいえ
E. 銀行預金・郵便貯金の出し入れができますか	はい	いいえ
F. 年金などの書類が書けますか	はい	いいえ
G. 新聞を読んでいますか	はい	いいえ
H. 本や雑誌を読んでいますか	はい	いいえ
I. 健康についての記事や番組に関心がありますか	はい	いいえ
J. 友達の家を訪ねることがありますか	はい	いいえ
K. 家族や友達の相談に乗ることがありますか	はい	いいえ
L. 病人を見舞うことができますか	はい	いいえ
M. 若い人に自分から話しかけることがありますか	はい	いいえ

—4—

知的ADL
配点はい：1
いいえ：0
５点満点

社会的ADL
配点はい：1
いいえ：0
4点満点

社会的ADL
配点はい：1
いいえ：0
4点満点

総点　13点

図３－７　老研式活動能力指標

各講座参加者の、１回目と２回目の総計点の平均値及び各講座の回答者数は表３－10のとおりである。

表３－10　各講座の老研式活動能力指標得点結果

講座名	１回目		２回目	
	平均値	回答数	平均値	回答数
即興劇（秩父市）	12.43	21	12.40	10
想い出語り（浦安市）	12.67	15	12.79	14
終活（浦安市）	12.11	18	11.93	15
吹き矢（浦安市）	12.65	20	12.65	20
男性専科（浦安市）	12.30	10	12.11	9
パン作り（秩父市）	12.29	7	13.00	2
エコクラフト（秩父市）	12.30	10	12.50	4
シニアサロン（浦安市）	12.27	11	12.33	30
合計	12.40	112	12.40	104

さらに、表３－11のとおり介入群（即興劇と想い出語り）と比較群（パン作りを除く）の２郡の１回目と２回目の得点の変化を分散分析にて検証した。結果は、介入群と比較群において、被験者内要因の主効果及び交互作用も有意ではなかった。つまり、講座を受講した効果は老研式活動能力指標において見られなかった。

表３－11　介入群と比較群の平均値と標準偏差

	実施介入比較	平均値	標準偏差	回答数
１回目の合計得点	介入群	12.78	.548	18
	比較群	12.23	1.210	26
	総和	12.45	1.022	44
２回目の合計得点	介入群	12.67	.767	18
	比較群	12.19	1.297	26
	総和	12.39	1.125	44

ウ　精神健康状態表（WHO-５）

本質問紙において、高齢者の精神的健康を評価する指標として広く使用されている日本語版精神健康状態表（WHO-5）を使用し、講座参加前と講座参加後の精神的健康状態を評価した。世界保健機関（WHO）により開発されたWHO-5は、図３－８のとおり５つの質問項目から構成され、各質問項目に対し「いつも」から「全くない」の６件法により回答を求めるものである。各回答に対し０点から５点が配点され、全体の合計点は、０から25点の範囲となる。

あなたのお考え・お気持ちについてお伺いします

問7．あなたのお気持ちについて，以下のA～Eの質問ごとに，2週間のあなたの状態に**最も近いものに一つずつ○を付けてください。**

最近2週間，私は・・・	いつも	ほとんどいつも	半分以上の期間を	半分以下の期間を	ほんのたまに	全くない
A．明るく，楽しい気分で過ごした	1	2	3	4	5	6
B．落ち着いた，リラックスした気分で過ごした	1	2	3	4	5	6
C．意欲的で，活動的に過ごした	1	2	3	4	5	6
D．ぐっすりと休め，気持ちよく目覚めた	1	2	3	4	5	6
E．日常生活の中に，興味あることがたくさんあった	1	2	3	4	5	6

配点
いつも：５
ほとんどいつも：４
半分以上：３
半分以下：２
ほんのたまに：１
全くない：０
０～25点

図３－８　精神健康状態表（WHO-5）

各講座参加者の結果は、表３－12のとおりである。各講座のWHO-５の総得点の平均値と回答者数を１回目と２回目の調査結果で示している。

表３－12　各講座の精神健康状態表（WHO-５）の得点結果

講座名	１回目		２回目	
	平均値	回答数	平均値	回答数
即興劇（秩父市）	18.95	21	20.89	9
想い出語り（浦安市）	16.87	15	18.86	14
終活（浦安市）	17.00	17	18.43	14
吹き矢（浦安市）	19.33	21	18.60	20
男性専科（浦安市）	17.40	10	18.22	9
パン作り（秩父市）	18.57	7	13.50	2
エコクラフト（秩父市）	20.89	9	14.75	4
シニアサロン（浦安市）	17.00	9	18.96	27
合計	18.27	109	18.63	99

介入群（即興劇と想い出語り）と比較群（１回目と２回目両方の回答者が１名だけのパン作りを除く）の２郡の１回目と２回目の得点の変化を分散分析にて検証した。

表３－13　介入群と比較群のWHO-５得点平均値と回答者数

	実施介入比較	平均値	標準偏差	回答者数
１回目の合計得点	比較	17.35	4.525	26
	介入	17.35	4.197	17
	総和	17.35	4.347	43
２回目の合計得点	比較	18.08	2.938	26
	介入	18.71	4.806	17
	総和	18.33	3.746	43

被験者内要因の主効果は、$F(1,41)=5.922$、$p<0.05$となり、有意となった。一方、交互作用に有意差は認められなかった。つまり、介入群及び比較対照群全てにおいて講座の効果が見られたが、介入群参加者が比較対照群の講座参加者より効果があったとは言えない。

まとめ

今回、老研式活動能力指標と精神健康状態表により、介入群である即興劇と回想法講座である想い出語り、その他の生涯学習講座の参加者を比較して検証をした。老研式活動能力指標では有意差は認めれなかった一方、精神健康状態表（WHO-５）では被験者内での主効果において有意差が認められたものの、交互作用が認められなかったことから、即興劇と回想法講座が、他の講座と比較して、今回の指標において特に効果があるとは言えない。また、講座からの脱落者や回答者数の減少もあり、２回目の得点が高まったとも言える。比較的元気な高齢者が参加する傾向がある生涯学習講座が、高齢者の健康度にどの程度影響するかは、より長期的な調査が必要とされる。１年後から数年後にかけて、継続している講座に関しては調査が必要だと考える。

（倉岡　正高）

参考文献

古谷野、柴田、中里他(1987)「地域老人における活動能力の測定 老研式活動能力指標の開発」『日本公衆衛生雑誌』34(3)、p.109-114.

Psychiatric Research Unit, Mental Health Centre North Zealand. WHO-Five Well-being Index (WHO-5). http://www.who-5.org/（アクセス日2018年３月31日）.

第４章　高齢者の地域への参画を促す
地域の体制づくりに向けて

第４章　高齢者の地域への参画を促す地域の体制づくりに向けて

１　高齢者の学習支援の動向と今後の課題について

（１）高齢者の学習と学習支援をめぐる状況

現在日本は、65歳以上の者の比率は27.7%、75歳以上の者の比率が13.8%の高齢社会を迎えている（平成29（2017）年９月）。14歳以下の年少人口の比率がすでに12.4%となっており、高齢化の問題は、少子化および後期高齢者の比率の上昇と連動して考えていく必要がある。また厚生労働省の「国民生活基礎調査」（平成22（2010）年）では65歳以上の者の約８割が「健康」だというデータを示している。平成29（2017）年１月には日本老年学会らが、高齢者を75歳以上とし、65歳から74歳までの層を准高齢者と呼ぶという提起を示した。昭和55（1980）年の時点で65歳以上が9.1%、75歳以上3.1%であったことをかんがみると、ここ数十年の間に日本の高齢者をめぐる様相は急激に変化したことになる。

高齢者への学習支援に関しては、文部省（当時）は、昭和40（1965）年に高齢者学級の開設委嘱を諮り、昭和48（1973）年には高齢者教室、平成元（1989）年からは長寿学園（＝都道府県教育委員会による高齢者大学）の開設補助を行ってきた。しかし、平成２（1990）年前後には福祉行政系列の明るい長寿社会推進機構系列の大規模な高齢者大学も組織化され、その後教育行政と福祉行政の２系列に沿って、主に行政による高齢者学習支援が進められていく。しかし、平成11（1999）年の国際高齢者年から21世紀にかけて、長引く経済不況や行財政改革、民間活力導入、参加型高齢社会の提唱などの流れの中で、全国の多くの高齢者大学は、福祉行政・市町村などへの委譲、規模縮小や統廃合の波を被ることになる。現在では、日本エルダーホステル協会も平成22（2010）年より活動停止となっているし、長寿学園もそのほとんどが姿を消している。つまり今日の高齢者学習をめぐる状況は、片や「健康」で「元気」な高齢者が増え、彼らの地域参加・地域貢献が期待されているものの、他方で、主に行政による高齢者の学習機会は増えていないのである。ただ放送大学や市民大学など、高齢者の名称がついていない学習の場では、「結果として」高齢学習者の参加者数は増加している。大阪府高齢者大学校のように、高齢者自らがNPOを立ち上げ高齢者大学を運営するような組織も出てきている。

文部科学省は、平成24（2012）年に『長寿社会における生涯学習の在り方について』の報告を行い、教育行政からの高齢者学習支援の指針を示した。それによると、高齢者への多様な学習機会の提供においては、「個人の自立のための学び」、「地域参画・社会貢献のための学び」、「生活の基礎である情報発信力の学び」、「死生観に関する学び」という柱を設定し、推進体制の整備においては、「学習者の参画による協働型学習プログラムの開発及び提供」、「成果活用の仕組みづくり」、「コーディネーター人材の養成」、「情報発信・情報収集」を設定している。高齢者自身が地域での学習運営に参画し、学校や福祉機関。労働機関、地域センターなどと連携しつつ、学習活動と地域活動とをつなげていくことが重要だといえよう。

今日、団塊世代（昭和22（1947）年～24（1949）年生まれ）の高齢化にともない社会の高齢化は加速化しているが、この世代は新たな文化を演出してきたこと

もあり、その生活スタイルが従前の高齢者像とは異なることも多い。加えて平均寿命の延伸や高学歴化などの動向もあり、今日あるいは今後の高齢者学習支援においては、まず高齢学習者の特性を理解することが重要となってきている。

（２）高齢者の学習者特性

高齢学習者に関する研究は、内外において一定の知見が蓄積されてきた。例えばマクラスキー（McClusky, H.）は、高齢者の教育的ニーズを、対処的・表現的・貢献的・影響的・超越的の５層から説明した。ここで留意したいのは、高齢者の学習ニーズの基底部に、読書算・健康・経済・法律・居住環境などの、「生活との格闘」にかかわる学習をおいた点である。これはロンドナー（Londoner, C.）がいう、高齢者の学習は手段的ニーズ（言語やコンピュータなど）あるいは生存へのニーズを基底におくべきだという論と通底する。つまり高齢学習者には、安易に気晴らし的余暇活動に向かうのではなく、生活の基盤を支える学習が求められるということである。

他方でマクラスキーの論の最上位には超越的ニーズ、つまり人生の有限性を乗り越えたいという高齢期特有のニーズが位置している。高齢者の実存的特性としては、老いや死の現実が垣間見られるという点が挙げられる。こうした点を乗り越えるために高齢者は、歴史や芸術、古典などの、悠久なるものへの学習を志向するということである。こうしてみると高齢学習者には、片や生活と向き合う学習を求め、他方で生活を超越する学習を求めるという、相反するニーズを有しているということである。

マクラスキーの論以降に注目された学習ニーズ論の中では、「過去をふり返る」ニーズが注目される。これはライフ・レヴューや回想法ともいわれている。回想法は主に福祉領域で用いられることが多いが、教育実践の文脈のなかで用いられるものも出てきている。過去の元気だった時代と現在とのつながりを認識する中で、人生の意味をかみしめるという学習ニーズであり、高齢期特有の学習ニーズだともいえる。

他方で多くの高齢者は、退職や子離れ、親しい人との離死別という、いわゆる「喪失」の事実を経験する。そこで重要となるのが「人間関係の再構築」への学習ニーズである。この点を軽視すると孤立化につながり得る。またこの文脈でいえば孫世代との交流などの「異世代交流」も重要な学習となる。つまり高齢期においては、過去とのつながりとともに、次世代とのつながり、切断された人間関係を繕うものとのつながりが重要な学習課題となるのである。

（３）モデル事業における高齢者学習支援の特徴

本モデル事業にて用いられた学習支援の手法は、回想法（浦安市）と即興演劇（秩父市）である。前者は、上述した過去とのつながりの力にて高齢期の生活を活性化する、高齢者特有の学習方法だといえる。回想法の実践は主に福祉の領域で援用されてきたが、その教育的側面をも重視することも重要であろう。例えば兵庫県西宮市の高齢者大学で行われた受講者調査では、「自分の過去をふり返る学習」へのニー

ズは、60歳代36%、70歳代前半49%、70歳代後半以上61%と、70歳代以降に活性化する学習ニーズだといえる。同様に「以前にはやった映画やビデオによる学習」でも、60歳代58%、70歳代前半59%、70歳代後半以降65%と、やはり70歳代以降にニーズが高くなる。団塊世代が70代を迎える今日においては、回想法やライフ・レヴューを用いた学習は高齢者の特性を生かした有効な学習支援法だといえる。

後者の即興演劇も同様の有効性を内包する。これは脳の活性化に有効だという側面もあるが、それに加えて、人間関係の豊饒化ひいては地域づくりを目指すという意味において、人間関係再構築のニーズに応える高齢者の特性を活かした学習支援法だといえる。また上記の西宮市調査でも、「他の高齢者との交流」へのニーズは、60歳代62%、70歳代前半66%、70歳代後半以降76%と、やはり70歳代以降に活性化するニーズであり、即興演劇はこうしたニーズへの受け皿になっているともいえる。

また、学習支援者の園部氏が実践されてきた千葉県柏市豊四季団地の地域においても、希薄だった退職者のコミュニティが、こうした実践をとおして活性化してきたと報告されている。ただすでに人間関係が構築されている農村部での実践では、退職者コミュニティでの実践とは異なる側面がある点には留意が要るだろう。またこの手法は、若者などの他世代の者にとっても有効だとも考えられている。

（４）多様化する高齢者学習ニーズをふまえた支援のあり方

団塊世代の高齢化、平均寿命の延伸に加えて、インターネットやスマートフォンなどの普及、家族・住居形態の変化などにより、今日の高齢者は、学習ニーズひとつを取り上げても多様化しつつある。それゆえ高齢者学習支援の在り方も、従来とは異なるいくつかの留意点が必要となってくる。例えば年齢層をみても、60歳代と70歳代後半以上とでは、対応の仕方は異なるであろう。ここでは一例として、年齢層に対応させた学習支援の例を表４－１に示しておくが、これはあくまでひとつの便宜上の捉え方として見ていただきたい。

表４－１　高齢者への学習支援の三層構造

	第三期前期（プレ高齢期）	*第三期中期以降*	*第四期*
主たる年齢層	50歳代～60歳代前半	60歳代後半～70歳代	75歳以上
この時期の主な特徴	・退職後の準備 ・職業・家庭生活が一段落、もしくは継続中 ・体力的に充実していることが多い ・高齢者としての自覚はあまりない	・従来の高齢者教育の主たる対象 ・退職後 ・職業・家庭生活が一段落 ・老いを感じつつも元気だと自覚する ・高齢期と中年期の自覚が混合	・高齢期の生活の中を生きる ・社会参加活動はやや抑え気味に ・老性自覚の顕在化 ・依存的側面が顕在化してくる
この時期における学習の特徴	・自己の新しい側面の発見 ・自己実現活動 ・老後に備えての準備活動 ・新しい学習活動への挑戦	・学習の継続性を活かす ・退職に伴う生活構造の再編成 ・人間関係の再構築 ・過去と未来へのつながりをもつ学習	・学習や活動の範囲の限定 ・生理的機能低下への補助の伴う学習 ・自己の内面世界の充実化
具体例	第三期の大学、シニア大学、退職準備教育	高齢者大学、高齢者教室・学級、公民館での学習	高齢者養護施設での学習、地域の団体での交流

注）・あくまでの目安であり、現実にはこれに該当しない例も多い。
・第三期は、仕事や家庭管理、子育てなどが一段落ついた時期、第四期は、依存性が増し老いの実感がともなう時期で、厳密にいうならば、年齢とは直接対応しない。

以下、本調査結果や教育老年学領域での知見なども参照しつつ、また高齢者の学習者特性をふまえた学習支援の在り方を考えるならば、例えば次のようなポイントがその留意点として挙げられるだろう。

ア　本人の学習ペースを重視する

高齢者は時間制限や急かされた状態での学習は苦手だとされる。高齢学習者自身の学習ペースを尊重し、他方でその学習スタイルや得意とする学習方法を援用することが重要であろう。

イ　学習者の人生・生活経験が活用されるような学習支援を

高齢者の１つの大きな特徴は、その人生経験の量の多さと多様性にある。回想法など、この点を有効活用できる学習方策を援用していくことが大事であろう。

ウ　人間関係の再構築の可能性が含まれる学習を

とくに企業や役所などで長年勤務されてきた者にとっては、その人間関係を、職場などの役割に縛られたタテの人間関係から、地域でのヨコの人間関係へと組み立て直すことが重要となる。そうした仕掛けが盛り込まれた学習支援が重要となるだろう。即興演劇はそうした役割を担う側面があるといえよう。

エ　生活の足場を見直す学習を

高齢学習者を安易に「生きがいづくり」などの型にはめるのではなく、個々のかかえる生活状況と向き合い、現代社会の一員であり、社会・地域貢献の担い手として活躍できるような学習支援を進めていくことが重要であろう。

オ　高齢者の時間感覚の特性をふまえた学習を

高齢者の時間感覚は、多くの自由時間が生じることが多いものの、他方で人生の有限性の自覚など切迫した時間感覚をもっている場合が多い。残された時間を有意義に活用したいというニーズがある場合が多い。限られた時間の中でこれだけはやりたいという、高齢者の優先順位を尊重することが大事であろう。

（５）高齢者の学習を地域での活躍につなげる体制づくり

地域における高齢者学習支援では、そこでの学習活動が自己完結的である場合もあるが、一方で高齢者が地域や社会で活躍し貢献できる道筋を考えていく必要があるだろう。そのためには、こうした高齢者学習を地域活動につなげていく体制や仕掛けづくりが必要となる。その支援においては、社会教育主事や公民館主事などの職員や支援者の在り方が重要となるだろう。

学校教育における教師とは異なり、地域における高齢者の学習を地域や社会へと開いていくためには、高齢者の学習ニーズや学習経験、専門的知見を、地域課題や地域の組織などとつなげていく支援者が必要となる。またそのための体制づくりも必要となるだろう。その拠点としては、公民館や生涯学習センター、図書館などの社会教育関係施設が考えられるが、これらとともに、コミュニティ・センターや市民センター、文化会館などの施設や地域の団体やＮＰＯなどとも連携を図っていく必要があるだろう。社会教育主事をはじめとする職員や学習支援者は、高齢者のニーズと地域のニーズとをコーディネートする役割を担うといえよう。

以下、本調査研究を踏まえたうえで、高齢者の学習を地域活動につなげるポイントをいくつか列挙してみたい。

ア　学習専念型の高齢者の理解の問題

高齢学習者の中には、社会貢献や地域活動にあまり興味がなく、学習そのものを目的として学習活動に参加する者も多い。その場合、本人が学習に専念していると自覚していたとしても、それにより良好な家族関係や健康的な生活の創出にもつながり、「結果として」地域貢献や地域活性化を果たしている場合もある。地域活動への誘いを示すとともに、「結果として」地域の活性化につながっている場合もある点には留意する必要があろう。

イ　学習活動と地域活動の間接的な連携にも留意を

学習成果を地域活動につなげるという場合、必ずしも学習した内容をそのまま生かすとは限らないし、むしろそうでない場合のほうが多い。一見すると学習活動と地域活動とがつながっていないように見えることもあるが、潜在的な部分でつながっている場合もある。例えば韓国語の講座を受け、韓国に関心を示し、韓国料理に挑戦して、男の料理教室のサークルを立ち上げるなどの場合である。

ウ　学習を通じて地域で活躍している人とのふれあいを

学習を地域活動につなげる支援を行う上で一つの重要な視点は、そうした地域で活躍している人の姿に触れる機会を提供することだろう。そうした生き方がうらやましいと思えるような出会いを演出することが重要だといえる。

エ　地域そのものを学習の場に

高齢者の学習の場は学校的な教室や施設の中にとどまらない。地域での活動の場そのものが学習の場となり、またそこでの実践そのものが教材になることもある。したがって教室内での学習と地域社会に触れる学習とをいかに組み合わせるかが、学習プログラムづくりの重要な点となるだろう。

オ　地域内での交流の節目づくりを

即興演劇のように、地域内であまり交流がなかった人たちが交流し、結果として地域づくりのネットワークにつながるという視点も重要である。地域内の人々の交流の節目づくりを支援することも、高齢者の地域参加支援においては大事であろう。

カ　地域の高齢者のもつ知見を学習場面に

地域に住む高齢者がいかなる専門的知見や他に伝達しうる学習経験を有しているかを把握し、それらを活性化できるように人々を結びつけることは、学習支援者の重要なポイントであろう。

（堀　薫夫）

参考文献

大阪教育大学生涯教育計画論研究室編（2009）『高齢者への学習支援に関する調査研究：西宮市宮水学園の事例を中心に』大阪教育大学生涯教育計画論研究室.

大阪府高齢者大学校編（2017）『高齢者が動けば社会が変わる―NPO法人大阪府高齢者大学校の挑戦』ミネルヴァ書房.

文部科学省超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会（2012）『長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」～』.

日本老年学会・日本老年医学会（2017）『「高齢者に関する定義検討ワーキンググループ」報告書』日本老年学会・日本老年医学会.

堀薫夫編（2012）『教育老年学と高齢者学習』学文社.

２　地域学校協働活動の推進に資する高齢者の地域参加と課題

（１）社会に開かれた教育課程と学校を核とした地域づくり～地域学校協働に向けて～

地域と学校が連携して子供の成長を支える「地域学校協働」の普及に向け、文部科学省が新たな指針を作成した。中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」（平成27（2015）年）及び「次世代の学校・地域」創生プラン（平成28（2016）年）を踏まえ、各地域において「地域学校協働活動」やコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の取組が促進されている。

文部科学省のいう「地域学校協働活動」とは、地域と学校が連携・協働して、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等、幅広い地域住民等の参画により、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する活動である。

しかし、学校の教育資源（教員、施設・設備）を地域へ開放する動きは、1960年代から進められてきた。また、「開かれた学校」の推進によって、学校教育（小中高・大学）に地域の人材を活用する動きも定着しつつある。つまり、地域と学校の連携・協働は今日に始まったわけでなく、学社連携・融合事業を含めると既に多彩な実践と研究が育まれている。こうした地域の歴史や文化の支え手として、高齢者の存在は大きい。

本節では、地域学校協働の推進において、高齢者がどのような場面・方法で地域に参加・参画を行っているのか、事例に基づき検証した上で、今後、高齢者が地域学校協働活動していく可能性とその課題を明らかにしたい。

（２）事例からみた高齢者が地域学校協働活動に参加できる可能性

ア　高齢者が地域学校協働活動に参加した世代間交流事業

本報告書で取り上げた高齢者が地域学校協働活動に参加した事業は、次の３事例である。

事例１　「りぷりんと・中央区」による読み聞かせボランティア活動

事例２　「熟年者マナビ塾」生による学校支援ボランティア活動

事例３　「インプロ（即興劇）」を用いた公民館における交流事業

これら詳細の概要（地域、取組名、対象、支援者・仲介者、事業概要＜テーマ、目的、時期、場所、内容、方法・形式、予算＞、効果、高齢者の地域参画の体制、課題）は、表４－２の通りである。

各事業に共通している事項は、次の点にある。

a　活動の主体：「子供（幼児・児童・生徒）」にあること。高齢者の健康や生きがいの要素は副次的なものである。

b　活動の内容：子供（児童、幼児）と高齢者の交流・コミュニケーションを図る活動が主となる。内容は、子供の学びや成長に結びつく活動（読み聞かせ、学習等）が導入しやすい。

c　活動の時間：学校の授業時間内であれば、時間は限定的である。限られた時間で有効な効果をもたらすことが求められる。学校外（放課後・休暇日）

であれば時間に余裕がある。

d　体制づくり：地域と学校を結びつける支援者・仲介者の存在が重要となっている。相互のニーズをマッチさせ、その約束事を守ることで、信頼感・活動の継続性を高められる。

表４－２　高齢者が地域学校協働活動に参加した事業

	取組事例		モデル事業
地域	東京都中央区	福岡県飯塚市	埼玉県秩父市
取組名	りぷりんと・中央区	熟年者マナビ塾	インプロ（即興劇）を用いた交流事業
対象	60歳以上（読書ボランティアの講習を修了した者）	熟年者は60～80歳	60歳以上
支援者・仲介者	東京都健康長寿医療センター	飯塚市教育委員会（旧穂波町教育委員会から始動）	社会教育実践研究センター、秩父市教育委員会
テーマ	読み聞かせボランティア	自主的な活動と学校支援ボランティア	インプロ（即興劇）
目的（学習目的、活動目的）	①子どもの成長、②自己研鑽、③友達との絆、④健康増進	生きがいづくり、健康増進、児童の健全育成、開かれた学校づくり	インプロを用いた参加者のコミュニケーション向上と世代間交流
時期・期間	毎週水曜日の始業前8:30～15分間（阪本小の場合）	週に1回、学期単位で3時間程度（8:50～12:00）	6回プログラムのうち2回、2日午後2時間（13:30～15:30）
場所	中央区内の小学校、幼稚園、保育園、児童館、こども園等	小学校の余裕教室	秩父市公民館
内容	読み聞かせ活動	高齢者の自主活動と学習支援ボランティア	ダンスサークルの発表とインプロ・アクティビティ
方法・形式	ボランティアは読み手と補助者の2名体制で各教室へ	学校支援ボランティアは、環境整備支援、教育活動支援	高齢者と小学生とがゲーム性の高いアクティビティ交流
予算	該当なし	該当なし	該当なし
効果	高齢者の生活のメリハリ、読書量の増進、ボランティア同士の情報交換、子供達からの感想文等で励みに	熟年者の健康増進、生きがい創出、子どもたちの生活習慣や規範意識の向上	笑顔が溢れる、場の雰囲気が和む、活発な動き、交流が深まる
高齢者の地域参画の体制	NPO法人りぷりんと・ネットワーク（詳細は別紙）	学校支援は、塾長とマイナビ塾担当の先生が調整	各学校の「学校応援団」の協力
課題	会員の意思統一、空いた時間、男性会員が少ない	塾生の高齢化・固定化	地域に即したニーズの把握、学校教育と社会教育の連携体制

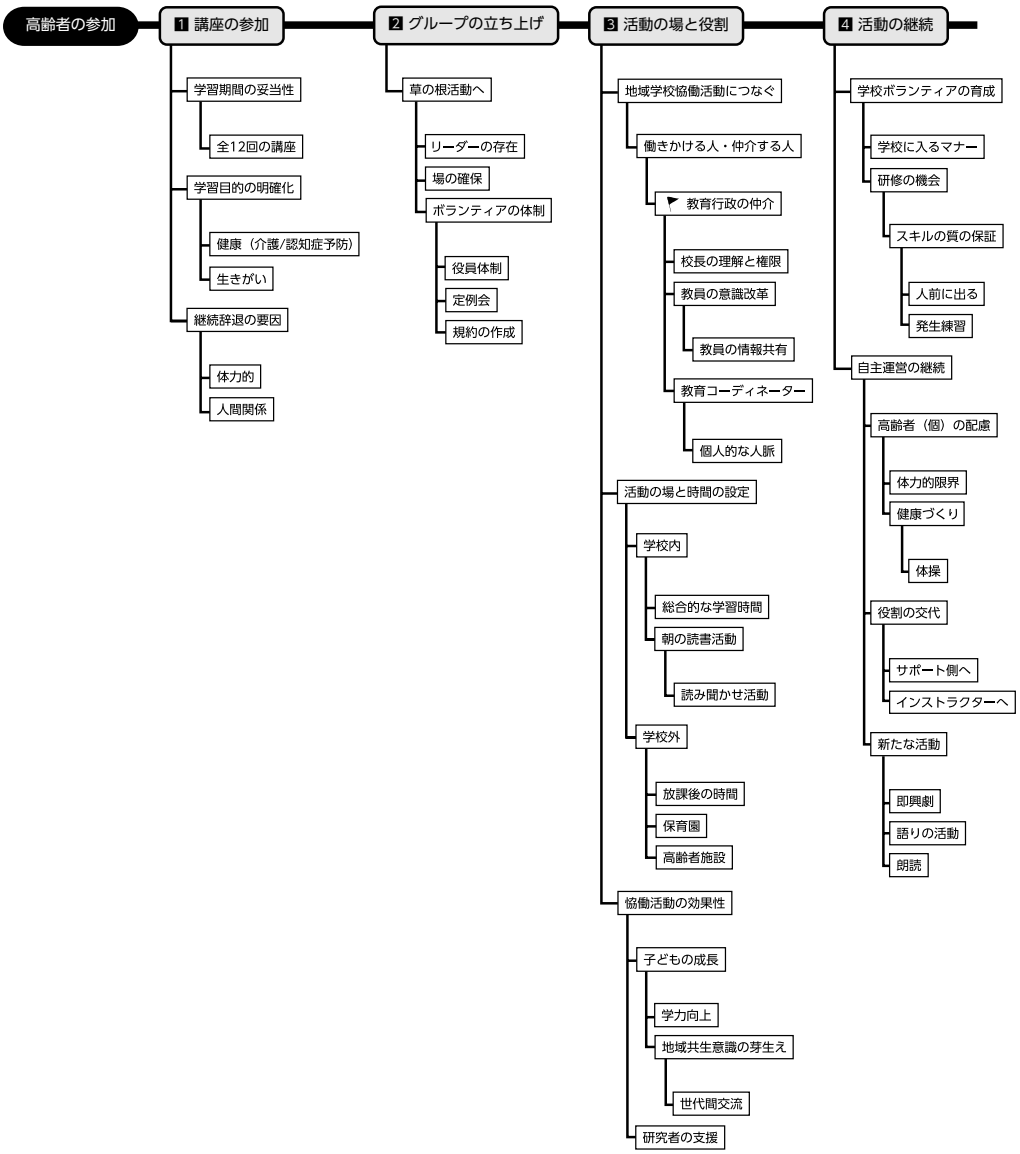
注：前述の取組事例に基づき齊藤が作成。灰色部分は活動プログラムの概要。教員が調整

イ　「りぷりんと・中央区」の取組事例にみる高齢者の参加・参画

地域学校協働活動の３事例のうち、事例１の「りぷりんと・中央区」の取組内容についてはヒアリング調査を実施した。前述のように「りぷりんと・中央区」は2004年にモデル事業として活動を開始し、その後、試行錯誤の末、2007年に任意ボランティア団体「りぷりんと・中央区」として再結成した。10年以上を経た「りぷりんと活動」の学習・活動プロセス及び継続要因についてヒアリング調査を行った。

このヒアリング調査に基づき、本研究テーマ「高齢者の地域への参画を促す地域の体制づくり」に接近する大項目として、次の４項目をあげた。図４－１は「りぷりんと・中央区」の取組例に基づく高齢者の社会・参画プロセスである。

図のステップは、右から左へ「１　講座の参加」→「２　グループの立ち上げ」→「３　活動の場と役割」→「４　活動の継続」である。これは、社会教育関係者が、地域学校協働活動に高齢者を誘導する際の配慮すべき事項でもある。



注１：高齢者の読み聞かせグループ活動「りぷりんと活動」のヒアリングに基づき作成
注２：ヒアリングは梨本、市川が担当。ヒアリング調査は、平成29（2017）年８月10日（木）東京都健康長寿医療センター研究所（研究員：安永正史、村山陽）で実施。ヒアリング調査記録に基づき、齊藤が図を作成。

図４－１　「りぷりんと・中央区」の取組例に基づく高齢者の社会・参画プロセス

（ア）ステップ１：高齢者が参加する第一歩として、生涯学習「講座の受講」が挙げられる。

a　学習目的の明確化：高齢者にとっては、介護や認知症を予防する「健康」と「生きがい」の２つの目的がある。

b　学習期間の妥当性：「りぷりんと・中央区」の場合は12回の長期講座である。

c　継続辞退者の要因分析：高齢者の場合、多くは「体力的」「人間関係」が辞退要因となるが、個のニーズや生活状況等の背景も理解する必要がある。

（イ）ステップ２：講座終了後に、講座受講者で「グループの立ち上げ」がある。

a　個のニーズ：グループでの活動が、高齢者自身の「自己充実」や「自己発揮」につながるような配慮が必要である。

b　中間的な存在：最も重要となるのは、彼らをサポートする中間的な存在（コーディネーター）である。

c　「草の根活動」へ：グループ活動は、行政主導型・行政依存型でなく、受講者が主体となる活動へ誘導すべきである。その他、「リーダーの存在」、定期的に集まる「場の確保」、「ボランティアの体制」づくりなど、徐々にグループ活動・運営が成立していく。

（ウ）ステップ３：高齢者が参加・参画できる「活動の場と役割」である。

a　地域学校協働活動に高齢者を「つなぐ」：つなぐためには、働きかける人・仲介する人の存在が重要となる。教育行政が仲介することによって、校長の理解や教員の意識改革、教育コーディネーターの配置が促される。

b　活動の場と時間の設定：活動の場として、学校内（小学校・幼稚園）と学校外（放課後の時間・保育園・児童館・高齢者施設等）の活動に分かれる。学校内の時間として、「総合的な学習時間」や「朝の活動」で読み聞かせ活動等が有効となる。

c　地域学校協働活動の効果性：まず、「子供（児童生徒）の成長」にどう影響したか、具体的な検証や説明があれば、地域学校協働活動の説得力も増す。例えば、「りぷりんと活動」の場合、学力や共生意識の向上に役立ったとの報告がある。こうした検証に、適宜、「研究者の支援」もしながら、「教員の情報共有」を心掛ける必要がある。

（エ）ステップ４：高齢者の「活動の継続」である。

a　学校ボランティアの育成：活動を継続するには、研修の機会を充実させることによって活動者の士気を高めることができる。例えば、学校に入るマナーの再確認、スキルの質を保証する研修の機会等がある。

b　自主運営の継続：まず、高齢者の年齢や体力に応じた無理のない活動や健康づくりも大切である。次に、活動内における「役割の交代」もあり得る。「りぷりんと活動」の場合、読み手となったり、サポート役割になったり、多様に役割を交代できる。さらに、「新たな活動」の展開である。同じ活動ばかりではマンネリ化するため、自分たちのスタイルにあった活動の創造も楽しいだろう。

以上の４つのステップは、「りぷりんと・中央区」（読み聞かせ活動）の例に過ぎないが、地域学校協働活動に高齢者が参加・参画する可能性は大いに期待できる。

学生等の青年サークルは一過的で人の入れ替わりが激しいが、高齢者グループは安定的でかつ、継続性を特徴とする。たとえ早朝の活動であっても、高齢

者は学校教育の要望に対応可能であろう。

（３）地域学校協働活動を推進する上での課題

「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働活動が各地で展開している。しかし、実態は、協働活動に取り組む学校数は伸び悩みも聞かれる。

では、地域と学校とを協働推進する上で、どのような課題が生じているのであろうか。筆者が、Ｙ市内で教員側のヒアリング情報から得た課題の整理を行った。

ア　人的課題について

ａ　校長：地域学校協働を積極的に推進するかどうかは、「校長の裁量」が大きい。子供の安全・情報漏洩など「リスクの防止」、教育効果性、教員自身の労務上の問題に対して慎重にならざるを得ない。

ｂ　教員：平素から教員は、「子供（保護者も含む）の山積した課題」の対応に精いっぱいである。また、教員の世代交代で、若手教員が増員して余力がない。それに加え、教員自身の「地域への理解不足」（地域での経験不足、地域人との理解不足）が挙げられる。

ｃ　コーディネーター：学校と地域をつなぐ人材が必要である。社会教育主事は、地域学校協働活動の地域の全体像を描く役割が必要とされる。学校・地域双方の理解と情報整理が求められる。この現場を取り仕切るのは「地域学校協働推進委員」であるが、その予算配置や機能化はこれからの課題である。

イ　新たな協働活動の創造について

ａ　目的の明確化: 地域学校協働の推進は「誰のため」に必要なのか、目的を明確にしておく必要がある。学校のため（子供・保護者他）なのか、地域人（高齢者等を含む）のためなのか、ということである。「地域人のため」の場合、学校側は「高齢者の生きがいの場ではない」、「地域人は教育のプロではない」との厳しい見方をするものも少なくない。

ｂ　地域資源を教育活動に導く方法:新しい協働活動には創造性が重視されるが、そうした学習活動に導く内容・方法・教育効果を見い出せていない。つまり、協働活動を行うには、それを得意とするものからのサポートやアドバイスが必要となる。

ｃ　地域との関係作り: 地域と学校が協働するには、信頼関係を築くことが重要である。地域との関係は、「PTA等で十分ではないか」、「学校に新規参入する団体は教育委員会等のお墨付きが欲しい」との本音も聞かれる。地域と学校との協働関係が一旦できると、地域からの期待や要望がより大きくなり、学校がそれに応えることができなくなる。つまり、地域と学校との関係作りの一歩として、双方の信頼関係が重要である。

ウ　学校外の仕事の負担について

ａ　時間の制約：授業内であれば「限られた授業時間に終える」ことが重要である。地域講師の依頼があった場合、限られた授業時間、決められた学習内容を超えて、地域に関与する時間を変更することは難しい。時間の調整とその理解は学校にとって不可欠となる。

ｂ　学校外の負担：地域学校協働を学校外で実施する場合、教員の負担感が高まらない配慮も必要となる。

以上から、地域と学校とが協働して活動していくには、まだ多くの課題が残されている。

（４）地域学校協働活動に高齢者が参加・参画するために

今後、地域学校協働活動に高齢者が参加・参画するために、次の点を再確認する必要があるだろう。

ア　協働活動の主体の理解

地域学校協働活動の主体者を理解することが大切である。学校を拠点にするならば、まず「子供」が主体である。関係者は、子供と彼らを取り巻く環境や課題を十分理解し、双方に共有しておくとよい。

イ　学校（授業）内外の場と時間の設定

場は、学校内（屋内・屋外）及び、学校外施設（屋内、屋外）の設定がある。また時間は、時期・期間、学校の授業内・授業外、放課後、休日なのかによって異なる。授業内であれば、他の教科や単元との調整、時間に限定がある。授業外であれば、既に行われている地域行事等をあらかじめ調べておくとよい。

ウ　社会に開かれた教育課程と効果的なプログラム

主体が利益を得るためには、どのようなプログラムが必要か、より効果的な学習内容と方法とは何か、社会に開かれた教育課程とはなど、具体的に検討すべきで、専門的な見地が求められる。

エ　学校に高齢者が参加・参画するために

豊富な知恵と経験をもつ高齢者は、子供たちにとって魅力的な存在である。しかし、高齢者の全てが子供に伝えるスキルを持っているとは限らない。そこで、学校に高齢者が参加・参画していくためには、高齢者自身も常に学び、成長し続けなければならない。また、高齢者が学校で役割をもてる環境を整備していくには、地域と学校とを結ぶコーディネーター的な存在（例「地域学校協働活動推進員」など）がより一層必要となるだろう。

以上、地域と学校との協働活動はまだ端緒に過ぎない。今後、地域と学校とが共にまちの未来を見据えながら協議を重ね、小さな実践活動を地道に積み上げることによって、学校教育で高齢者の役割がさらに発揮されると思われる。

（齊藤　ゆか）

３　健康増進の活動に参加している高齢者について

（１）高齢者を対象にした健康づくり

心身ともに自立して生活できる期間とされる健康寿命においても、日本は、欧米やアジア諸国に比べて長い（表４－３）。日米の平均寿命の差は４年あり、アメリカの全ての癌による死亡を取り除かないと日本と同じにはならないとされている(カワチ・イチロー、2013)。しかし、国民医療費や介護保険給付費、公的年金など社会保障費が増大している。現在、社会保障給付費総額（平成27（2015）年）は年間114兆円を超えており（国立社会保障・人口問題研究所、平成29（2017）年)、高齢期における疾病の予防と介護予防は、健康寿命の延伸とともに財政を維持する上でも重要な問題である。

表４－３　欧米及びアジア諸国の健康寿命（平成27（2015）年）

１．欧米	
	健康寿命
日本	74.9年
イタリア	72.8年
スウェーデン	72.0年
スペイン	72.4年
ドイツ	71.3年
フランス	72.6年
イギリス	71.4年
アメリカ合衆国	69.1年

２．アジア	
	健康寿命
日本	74.9年
シンガポール	73.9年
韓国	73.2年
中国	68.5年
タイ	66.8年
フィリピン	61.1年
インドネシア	62.2年
インド	59.5年

資料：「World Health Statistics 2017」（World Health Organization）より作成

こうした国民の健康に関する政策として、「健康日本21（第２次)」（厚生労働省、平成24（2012）年）では、10年後に目指す姿が示されている。

10年後に目指す姿

○すべての国民が共に支え合い、健康で幸せに暮らせる社会

・子どもも大人も希望のもてる社会
・高齢者が生きがいをもてる社会
・希望や生きがいをもてる基盤となる健康を大切にする社会
・疾患や介護を有する方も、それぞれに満足できる人生を送ることのできる社会
・地域の相互扶助や世代間の相互扶助が機能する社会
・誰もが社会参加でき、健康づくりの資源にアクセスできる社会
・今後健康格差が広まる中で、社会環境の改善を図り、健康格差の縮小を実現する社会

図４－２　健康日本21（第２次）の基本的な方向

この方針に基づき、各地方自治体では、高齢者を対象にした介護予防において、栄養、身体活動、社会参加を通じて高齢者の健康増進を図る一次予防事業を展開し

ている。こうした一次予防事業では、行政が提供する保健サービスだけでは限界があるため、住民の中から健康ボランティア（介護予防サポーターなど）を養成したり、活躍の場を提供したりしている。

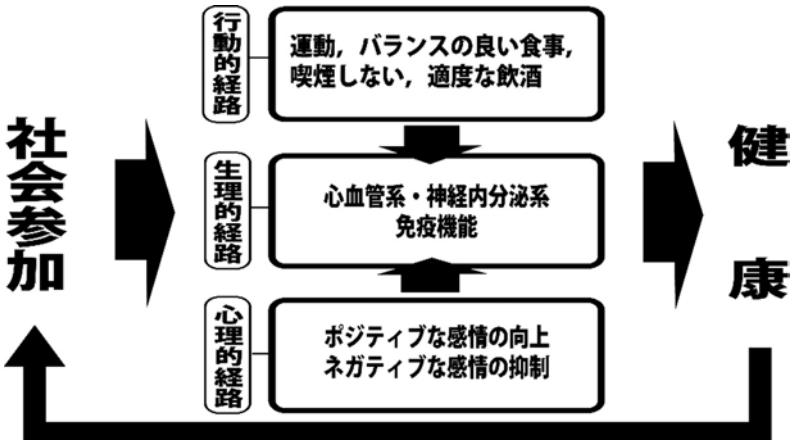
高齢者の健康づくりを研究する東京都健康長寿医療センター研究所では、平成29（2017）年、17年ぶりに健康長寿のための新ガイドラインを作成した。同ガイドラインでは、表４－４のとおり、様々な研究結果をもとに、健康長寿のための12か条をまとめている。高齢者にとっての社会参加の重要性の他、地域力を高める重要性も新たに強調されている。

表４－４　健康長寿のための12か条

１　食生活	いろいろ食べて、やせと栄養不足を防ごう！
２　お口の健康	口の健康を守り、かむ力を維持しよう！
３　体力・身体活動	筋力＋歩行力で、生活体力をキープしよう！
４　社会参加	社会参加　外出・交流・活動で、人やまちとつながろう
５　こころ（心理）	めざそうウェル・ビーイング。百寿者の心に学ぼう！
６　事故予防	年を重ねるほど増える、家庭内事故を防ごう！
７　健康食品やサプリメント	正しい利用の目安を知ろう！
８　地域力	広げよう地域の輪。地域力でみんな元気に！
９　フレイル※	「栄養・体力・社会参加」３本の矢で、フレイルを防ごう！
10　認知症	よく食べ、よく歩き、よくしゃべり、認知症を防ごう！
11　生活習慣病	高齢期の持病を適切にコントロールする知識を持とう！
12　介護・終末期	事前の備えで、最後まで自分らしく暮らそう！

※フレイル…虚弱、脆弱

社会参加の反対の意味にもなる人とのつながりがない状態である社会的孤立は、肥満や禁煙以上に死亡率に影響を与えることが指摘されている（Holt-Lunstad, Smith & Layton, 2010）。社会参加と高齢者の健康との関連は図４－３のとおり、第一に、健康に良い行動をとりやすいこと、ポジティブな感情が高まったり、ストレスに対処する支援が受けられやすくネガティブな感情が抑制されたりすること、これらが生理的な過程を経て健康が維持されやすいことがある。



（小林(2015)を参考に作成）

図４－３　社会参加と健康の関係

また、このようなメカニズムを実際の活動にあてはめると、シニアの絵本読み聞かせの活動である「りぷりんと」の研究結果から、図４－４のような活動が高齢者の健康に影響を与えていることが報告されている。

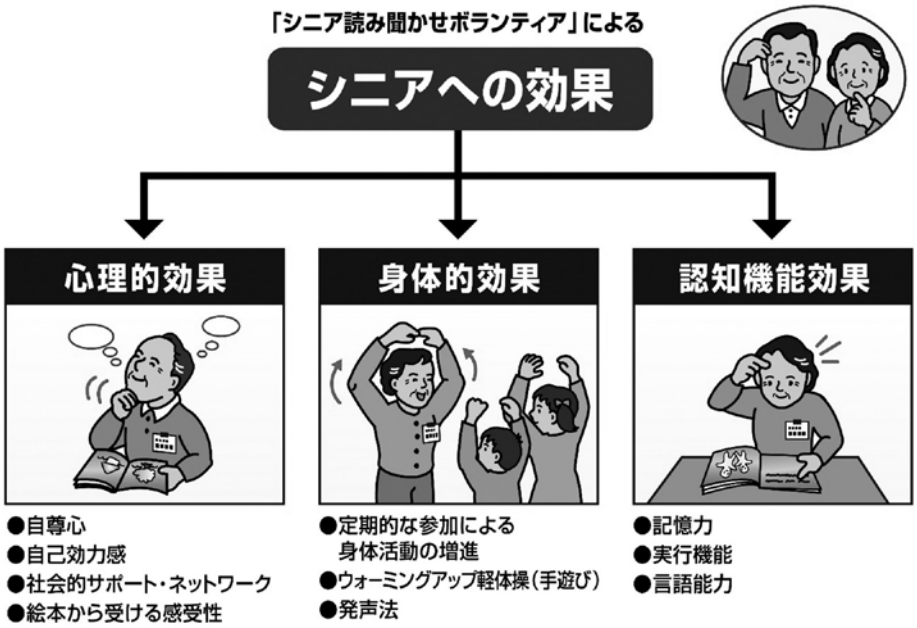


図４－４　シニアの絵本読み聞かせボランティア活動とその効果

例えば、シニアの絵本の読み聞かせ講座を修了し、読み聞かせ活動を９カ月間継続的に行ったシニアは、交流を行わなかった比較対照群のシニアに比べて、健康度の自己評価、異世代間及びボランティア仲間などの間の社会的サポート・ネットワーク、体力指標の一部（握力）に有意な改善があった（藤原他、2006）。また、講座に参加した高齢者を対象にした無作為化比較試験では、講座の前後に実施した記憶力の検査において記憶機能向上の効果がみられた（Suzuki et al., 2014）。

この他にも、前述の新ガイドラインでは具体的な行動として、無理なく、がんばり過ぎないで月１回以上、楽しさややりがいを感じられる活動に参加すること、１日１回以上は外出し、週１回以上は同居の親族以外の人たちと交流することを提言している。

このように、政策や研究結果を反映し、高齢者の社会参加の機会が各自治体で提供されている。現在、介護予防だけではなく幅広い世代を対象にした健康づくりが実施されており、高齢者の多くはこうした事業や活動の参加者として、また担い手として活躍している。今後は、高齢者の社会参加をより活性化されるためにも、住民が主体となった健康づくりの仕組みを、専門職や地域住民が一体となって構築していく必要があり、これまでにない新しいプログラムなどの仕掛けを、他世代を巻き込みながら進めていることが重要である。

（２）絵本の読み聞かせ（りぷりんと）活動における支援体制づくりの経過

ア　活動の概要

「りぷりんと」は、シニアの世代間交流を通した「社会貢献」、「生涯学習」、「グループ活動」を目的に、現東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チームが始めた研究プロジェクトである。研究プロジェクトの英語名でもあるREsearch of PRoductivity by INTergenerational Sympathy “REPRINTS”（りぷりんと）に由来している。REPRINTとは英語で復刻版を意味しており、「絶版になった名作絵本が復刻されるように、シニアが自らの人生に再びスポットをあて、その役割を取り戻し、コミュニティ再生のために復刻を遂げてほしい」という願いが込められている。現在、首都圏を中心に、各地で開催されている絵本の読み聞かせ講座に参加した高齢者は、講座を通して、絵本の読み聞かせの意義や、絵本の選び方、発声方法などを12週間程度で習得する。講座修了生は、自主グループ化、もしくは既存の「りぷりんと」グループに合流し、図４－５のように練習や、選書をグループ単位で行いながら、地域の小学校や幼稚園、保育園、児童館、図書館などで読み聞かせを子供たちに行っている。

図４－５　読み聞かせボランティアの１週間

現在、さまざまな研究事業や、自治体の介護予防事業などの一環としてシニアの絵本読み聞かせプログラムが導入され、導入エリアは年々拡大しており、平成29（2017）年７月現在、約300名ものボランティアが約120か所もの小中学校、幼・保育園などで読み聞かせの活動をしている。

イ　様々な支援の仕組みや体制

（ア）　自主グループとしての運営

「りぷりんと」は、当初から自主グループとして活動をすることにより、役割を分担すること、活動目的の共有など、メンバー間での様々な確認や具体的な手続きが伴う作業を重視している。規約づくりや定例会の運営方法の確立などは、シニアボランティアが読み聞かせ活動を行うことと直接関係のないことのように思われるが、継続的にすべての会員が安定した活動をするためには重要である。

定例会では、それぞれの読み聞かせ施設先での活動状況について、各小グループのメンバーが報告することで、どのような絵本を選んでいるのか、子供たちからどのような反応があったのかを知ることができる。他のグループからの報告を、自分の担当する施設での読み聞かせに生かしたり、各施設の報告を聞くことによってメンバーの編成を変更してみたり、施設の代表への提案や新しい施設の開拓の参考にしたりと、活動全体に反映することができる。また、グループの役員にとっては、メンバーに過度な負担が生じていないかなどが報告からも読み取れる機会となる。

一方、こうした自主グループの活動では、メンバーの一人一人の状態を把握し、支援していくことが重要である。個々のメンバーが加齢により身体的にも認知的にも課題を抱えるようになっても、可能な限り継続的に活動できるようにするためには、助け合いながらどのような支援ができるかをグループ全体で考えることが重要である。活動内容の見直しも含めて個々の活動やグループの活動全体について定期的に課題を把握し、方策を検討し改善するのは自主グループとして活動している強みである。また、こうした個々のエリアの活動を支援するため、平成26（2014）年には、各エリアのグループの代表者や専門家を中心に「ＮＰＯ法人りぷりんと」ネットワークが立ち上がった。これにより、各エリアの活動支援や、インストラクターの養成などの支援を可能にしている。

（イ）　インストラクターの存在

各エリアでは「りぷりんと」専属のインストラクターが定期的に読み聞かせの技術指導を行ったり、活動の受け入れ場所（学校や幼稚園、保育園等の読み聞かせの場所）獲得の支援をしたり、会の運営を円滑にするための様々な助言や支援を行っている。「りぷりんと」の絵本の読み聞かせのインストラクターは、各地で開催される絵本の読み聞かせ講座での指導に当たるとともに、担当するエリアでメンバーの技術的な指導だけでなく、活動全体の運営の支援、エリアにおける読み聞かせの場の紹介や新規開拓の支援なども行っており、まさにコーディネーター的な役割を担っている。

さらには、個々の読み聞かせの現場での活動状況を把握し、健康状態やグループ内での活動の様子などを確認することにより適切な支援を提供している。

ウ　まとめ

「りぷりんと」は平成16（2004）年から東京都健康長寿医療センター研究所が様々な形で支援と評価を続けている取組であり、前例のない特別な取組の一つともいえる。高齢者の社会参加の促進を、様々な実践と検証をとおして進めてきた事例であること、特定の地域だけではなく多くの自治体で実施され検証されてきたことが特色である。社会参加の促進という点で重要なことは、高齢者の力をどのように最大限活かしていくかという視点と、それを実現する仕組みづくりである。それは、地域との連携や世代間交流を意識した活動も、シニアのグループ活動を維持継続させるポイントになっている要因であり、高齢者の社会参加に必要な要素を兼ね備えたプログラムでもある。

（３）保健・福祉部局（地域包括支援センター等）と社会教育行政の連携・協働体制づくり

ア　調査概要

浦安市では、本研究事業において、回想法講座を導入することによって、参加者への効果や、社会参加に関してどのような影響があったかを、導入に関わった職員を対象にした研修も実施することによって、多角的に評価することになった。

評価の一環として、平成29（2017）年、８月１日と９日の両日にかけて、浦安市健康福祉部高齢者福祉課職員、浦安市高洲公民館職員、浦安市教育委員会生涯学習部郷土博物館職員、浦安市立中央図書館、浦安市老人福祉センター、浦安市健康福祉部高齢者福祉課職員を対象にヒアリング調査を実施した。調査の項目は、(１)研修を受けての感想、(２)高齢者の社会参加活動を支援したり、受け入れたりするにあたってのこれまでの課題や工夫、(３)高齢者が担い手として活躍する仕組みや体制づくりの視点で、今後進めたい取組を中心に聞き取りを実施した。本調査では、特に自治体職員等が、高齢者の社会参加の促進するに当たってどのような課題認識を持っているか、またどのような支援や体制の構築を実施しているか、または検討しているかを把握することによって、高齢者の社会参加を促進する体制づくりについて検証することを主な目的とした。

イ　結果

（ア）　職員の課題と対応

職員の課題では、それぞれの部署の業務をしながら、高齢者の社会参加をどのように支援するかの考え方や意識は、各職場の業務全般や担当業務によって大きく異なることが窺えた。

回想法講座を導入するに当たって職員には事前研修として、回想法実施自治体などの視察なども実施されたが、それぞれの部署でこうした研修をとおして連携が生まれた具体的なエピソードはあまり挙げられなかったが、研修の意義については認識されており、継続的に行うことが必要ではないかと考えられる。

（イ） 高齢者の課題と対応

一人の高齢者が多くの役を持ってしまうことや、高齢者の団体は会員数の減少も課題になっていることが公民館職員から挙げられた。こうした現状に、公民館では、サークル支援として、発表の場を提供したり、PRなどのお手伝いをしたりすることによって、会員数が増えたこともあることが挙げられた。何をやりたいか具体的に決まっていない人への対応として、ガイドブックを提示しながらやってみたいことを選ぶということをしている。また、サークルの支援として、異年齢交流が出来るよう、宿題を見たりする機会は作っているというエピソードもあった。

老人福祉センターでは、数多くのサークル活動が講師を中心に展開されている紹介があり、そうしたサークルに所属しない初めての利用者である高齢者も、太極拳、健康体操、ヨガ、そろばん等、事前申込みしなくても、当日参加可能なプログラムを用意しているという取組についての話があった。

高齢者担当の職員からは、高齢者の社会参加に関して、年金の額もわずかなことから、お小遣い程度でも多少のお金をもらえるような社会参加の仕組みづくりの必要性が指摘された。住民主体の居場所づくり等に予算がつく仕組みはできたが、住民主体の取組はできていない部分について今後取組が必要であることと同時に、事業予算に関連する規則や基準が実際の運用にそぐわない現状についての指摘もあった。また、同職員からは、高齢者の活動に関しては継続的な支援が課題になっていることも挙げられ、中間組織の必要性なども含めて新たな仕組みを模索していることがうかがわれた。

利用者に高齢者が多い図書館職員からは、施設を使って高齢者が活躍する双方向性について指摘があった。事業を高齢者と一緒に考え、高齢者が図書館を使って何かを教えたり、読み聞かせをしたりするなどの例を挙げながら、積極的に図書館に関わる高齢者の将来イメージが共有された。また、サロン的な講座を図書館で実施することによって人をつなぐ機能を持つことの可能性にも言及があった。

高齢者ボランティアが数多く関わっている博物館では、ボランティアの高齢化に伴ない、新規ボランティアの獲得が課題として認識されていた。高齢化に伴ない職員のボランティアに対する様々な対応も変化してきており、博物館の業務を維持する上でも、人数の確保が重要であることがうかがえた。一方、ボランティア数が多いにも関わらずボランティアの管理を職員が担っていることから、よりボランティアによる自発的な管理運営を構築する必要性が示唆された。

ウ 施設連携の課題と対応

公民館職員からは、複合施設であることから、家庭内暴力があって見守りをしている人が来たら、その部署に連携することもあるという指摘があった。認知症の人が徘徊したりして、自宅に連絡することもあることや、虐待を受けている人を施設内の福祉部署に紹介することもあるということが紹介された。

エ　まとめ

各職員の高齢者の社会参加に対する意識や理解は様々であり、結果として具体的な対応や、連携に関しての意識の醸成に必要な事前研修の在り方には課題が残された。しかし、生涯学習課と連携した本事業に関わることによって、職員の中で、高齢者の社会参加の促進の必要性が再認識されたこともうかがわれた。福祉にいると高齢者に手を差し伸べるイメージを持ってしまうというある職員の言葉からも、他の部署との交流が職員の意識に影響していることもうかがえた。

職員の多くは増加する高齢者に関する支援の必要性を十分認識しており、各部署や業務の中で取組を進めたい意識も感じられた。福祉の考えと生涯学習課の視野は違うということが、ワーキンググループをとおして勉強になったという言葉もあった。

本研究事業をとおして具体的に回想法のグループに関わっている職員は限定されており、多くの行政職員や施設職員には、調査時点で具体的な受入れ計画などに言及はなかった。まだ、回想法のグループとして活動し始めたばかりで、実際に活動の様子や現状を職員が把握していないことから、関係機関への周知も重要かと考える。ある職員は、回想法講座で勉強した人の意識が高いことに関連して、連携への関心はあるものの、意識の高い集団に対応することへの不安も示されたことから、不安感や無関心が今後定着しないよう、部署や施設間の連携を進めていく必要性を感じる。

ボランティアの数の多い博物館の事例から、ボランティア同士がどのように主体的に活動するかは、簡単なことではないが、りぷりんとの事例からも、長期的にはボランティアが主体的に活動する仕組みづくりが、高齢者の社会参加の意識レベルにも影響したり、職員の業務にも影響を与えたりすることが考えられる。回想法のグループにおいても、こうした視点を参考に、グループ活動の体制づくりや活動の支援の在り方を住民と一緒になって検討する機会が必要だと考える。

今回特に印象的であったのは、老人福祉センターが利用される高齢者に対して様々なメニューを用意していることである。特に、初めて社会参加する機会をいかに大事にしていくかの意識や具体的な対応の重要性について、シームレスな対応をしているという視点が示されたことである。高齢者は、年齢幅も広く、身体的、心理的な特徴も様々であることから、社会参加の方法が多様であることについて、一般的にあまり意識した取組がされておらず、地域の様々な機関が特色ある事業や活動をしてはいるものの、高齢者の社会参加の多様性について配慮していることは少ない。特定の有効な社会参加プログラムを導入することも重要であるが、いかに多様性を備えるか、またその多様性を最大限活かす体制を構築するかは、今後の高齢者の社会参加には重要な点である。

（倉岡　正高）

引用・参考文献

藤原佳典・西真理子・渡辺直紀他（2006）「都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”の 1 年間の歩みと短期的効果」

『日本公衆衛生雑誌』53、p. 702-714.
Holt-Lunstad J, Smith TB, Layton JB (2010) Social Relationships and Mortality Risk: A Meta-analytic Review. PLoS Med 7(7): e1000316. doi:10.1371/journal.pmed.1000316.
厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会次期国民健康づくり運動プラン策定専門委員会（2012)、健康日本21（第２次）の推進に関する参考資料、http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21_02.pdf（アクセス日2018年３月31日).
国立社会保障・人口問題研究所（2017)、平成27年度社会保障費用統計、http://www.ipss.go.jp/ss-cost/j/fsss-h27/H27.pdf（アクセス日、2018年３月31日).
小林江里香 (2015)「高齢者の社会関係・社会活動」『老年精神医学雑誌』26(11)、p. 1281-1290.
カワチ・イチロー (2013)『命の格差は止められるか』小学館.
Suzuki H, Kuraoka M, Yasunaga M.,Nonaka, K., Sakurai, R., Takeuchi, R., Murayama, Y., Ohba, H., Fujiwara, Y.(2014) Cognitive intervention through a training program for picture book reading in community-dowelling older adults: a randomized controlled trial, BMC geriatrics, Vol.14, No.1. p-122, doi:10.1186/1471-2318-14-122.
東京都健康長寿医療センター研究所健康長寿新ガイドライン策定委員会（2017)『健康長寿新ガイドライン　エビデンスブック』社会保険出版社.
World Health Organization (2017), World health statistics 2017: monitoring health for the SDGs, Sustainable, Development Goals, Geneva.

４　プロダクティヴ・エイジングを推進する地域の体制づくり
～行政内外のネットワークの構築に向けて～

（１）はじめに

長生きの時代となった。今や日本人の平均寿命は男性80.98 年、女性 87.14 年（厚生労働省、平成29（2017）年）に達する。しかし、退職となる60歳以降の20～30年間をどう過ごすのか。その生き方に戸惑う者も少なくないだろう。特に、都市部に集まる多くの高年齢層は、戦後の高度成長期を支えた世代である。郷里を離れ、自分や家族の時間、余暇時間より、むしろ仕事を優先させ、日本の発展に尽くしてきたものが多い。働き続けてきた女性も退職期となる。いわゆる「団塊の世代」は、平成29（2017）年現在68～70歳（昭和22～24年生）であり、完全退職期を迎えている。しかしながら、子育てや仕事から解放され、多くの自由時間を享受するようになった高齢者は幸せに、自分らしく過ごしているのだろうか。「無縁社会」や「下流老人」など揶揄（やゆ）されるように、貧困や孤独で辛い生活を強いられている人はどれほどいるのだろうか。

本節は、僅かであっても余力のある人、地域に関わりたい人、役に立ちたい気持ちを持つ人たちが、地域・社会に関与できるよう、生涯学習の観点から「地域参画を促す体制づくり」を提案したい。特に、プロダクティヴ・エイジングを推進する地域のネットワークの形成に向け、社会教育関連職員が高齢者をどうサポートすべきか、検討する。

（２）なぜ高齢者の地域参画が求められるか　～政策的な動向～

ア　国際的な動向～「プロダクティヴ・エイジング」の考え方～

高齢者問題を初めて取り上げたのは、昭和57（1982）年の国連による「第１回高齢者問題世界会議」（ウィーンで開催）である。1980年代前半の論議の中心は、人口の高齢化や高齢者「保護」、「介護」、「社会的コスト」に関する課題であった。しかし、高齢者の心身機能の低下や役割の喪失が強調されすぎることへのアンチテーゼとして、高齢になっても多くの分野で活躍し、成長を遂げる主体的な高齢者を想定した「プロダクティヴ・エイジング」という考え方が、ロバート・バトラー博士（ILC-US；国際長寿米国センター理事長）によって初めて提起された（齊藤、2006）。

（ア）　プロダクティヴ・エイジング (Productive Aging) とは

「プロダクティヴ・エイジング」とは、直訳すると「生産的加齢」であるが、その意味するところは「生産性を保持した状態で高齢期を生きること」である。「生産性（＝プロダクティヴ）」の範囲は、バトラーら（1985）によれば、「有償労働力として働き、ボランティア活動を推進し、家族を援助し、個人が可能な限り自分自身の自立性を維持するための、個人及び人々の能力」全体を指している。プロダクティヴ・アクティビティは、その活動（労働）が有償、無償（家事・育児・介護、ボランティア活動等）に関わらず、人間が自然と人間自身に働きかける活動の総称としての生産的活動を指すものである（齊藤、2006）。この考え方を具体的に記述したのが、表４－５である。

つまり、「プロダクティヴ・エイジング」は、有償・無償に関わらない社会貢献活動と言い換えることもできるだろう。

表４－５　生産的な活動

有償労働 （ペイドワーク）	無償労働 （アンペイドワーク）
会社などの役員	ボランティア活動・社会的活動
正規職員・従業員	家事労働
非正規職員	（家事）
（パートアルバイト）	（育児）
（派遣社員）	（介護）
（契約社員）	生涯学習
（嘱託）	（生産的活動のための能力開発）
（その他）	個人のアクティヴィティ

注：齊藤作成。

（イ）「アクティヴ・エイジング」の考え方

「アクティヴ・エイジング（Active Aging）」とは、「人々が歳を重ねても生活の質が向上するように、健康、参加、安全の機会が最適化するプロセス」を意味する（WHO、2002）。

「アクティヴ・エイジング」の柱は、健康、参加、安全の３つを目指している（表４－６）。「アクティヴ」には健康的で活動的なイメージがある。しかし、この中に「体の弱い人」、「障がいを持つ人」、「ケアを必要とする人」も含み、「すべての人々が老後に生活の質を低下させることなく、社会参加を続けながら、年を重ねていくこと」をいう。これら「アクティヴ・エイジング」の決定要因として、「個人的」、「行動的」、「社会的」、「経済的」の要因に加え、「物理的環境」、「保健・社会的サービス」のすべてが関連している。また、横断的な決定要因として、「文化」と「ジェンダー」がある。（WHO、2002）。

表４－６　アクティヴ・エイジングの柱

健康	環境及び行動の両面で、慢性疾患と生活機能低下のリスク要因が少なく、予防要因が多くなっている時に、人々はより長くかつ質の高い生活を送ることができる。また年を重ねても健康状態を保ちながら生活を営むことができ、高額な治療やケアサービスを受ける高齢者が少ない状態を意味する。
参加	高齢者が基本的な人間の権利、能力、ニーズや嗜好に従って、労働市場、雇用、教育、保健、社会政策・プログラムによって、**社会経済的、文化的、生産的な活動に全面的に参加すること**をサポートする環境をいう。
安全	高齢になるに伴って生じる社会的・経済的・精神的な安全に対するニーズと高齢者の権利に対応した政策やプログラムの実施が、自立して生活できなくなった高齢者の保護、尊厳、ケアが保証されることである。また、家族やコミュニティが高齢者支援をする際にはこれらの政策やプログラムによってサポートを受ける。

注：WHO（2002）に基づき、齊藤作成。

イ　国内的な動向　～社会教育が担当すべき事項～

（ア）　高齢者の地域参加・参画を促す国内政策

平成24（2012）年に閣議決定された「高齢社会対策大綱」では、高齢社会対策基本法に基づき次の６項目を提示している。「（１）「高齢者」の捉え

方の意識改革」、「（２）老後の安心を確保するための社会保障制度の確立」、「（３）高齢者の意欲と能力の活用」、「（４）地域力の強化と安定的な地域社会の実現」、「（５）安全・安心な生活環境の実現」、「（６）若年期からの『人生90 年時代』への備えと世代循環の実現」（下線は齊藤。本研究の関連項目）。

これらは、就業及び所得、健康及び福祉、学習及び社会参加、生活環境などの施策に結びつくフレームである。本研究テーマ「高齢者の地域への参画を促す地域の体制づくり」は、どの項目にも関連している内容である。特に、「意欲と能力のある65歳以上の者には支える側に」、「意欲と能力のある高齢者の多様なニーズに応じた柔軟な働き方」、「様々な生き方を可能とする新しい活躍の場の創出など社会参加の機会の確保を推進」、「地域のコミュニティの再構築」、「健康管理、健康づくり」、「生涯学習や自己啓発の取組」、「高齢者の築き上げた資産を次世代が適切に継承」などはその達成目標に該当する。

こうした理念を具現化するには、文部科学省（社会教育・生涯学習）だけでなく、厚生労働省（高齢者雇用、高齢者福祉）の役割も大きい。また、「地域政策」、「協働推進」、「学校教育」との連携強化も求められる。つまり、「高齢者の地域への参画」、「地域の体制づくり」を強化していくには、関係省庁、各機関、自治体との連携がより一層重要となる。

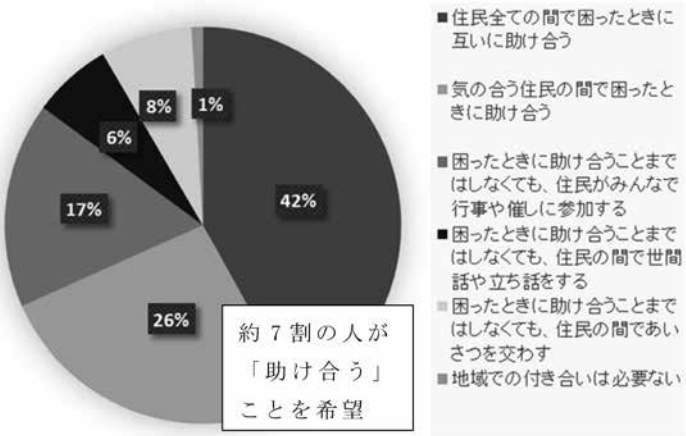
（３）高齢者は地域への参加ニーズはあるか？　～政府統計からの検討～

高齢者の地域・参加に対するニーズと実態について、政府既存統計を用いて整理しよう。

ア　高齢者の地域へのニーズ

（ア）　近所の付き合い方　～７割は「助け合う」を望む～

地域での付き合い方のニーズについて、約７割が「助け合う」（「住民全ての間で困ったときに互いに助け合う」41.4%、「気の合う住民の間で困ったときに助け合う」26.0%）を望んでいた。特に、60歳以上の住民間の「助け合い」の希望者は多い（図４－６）。

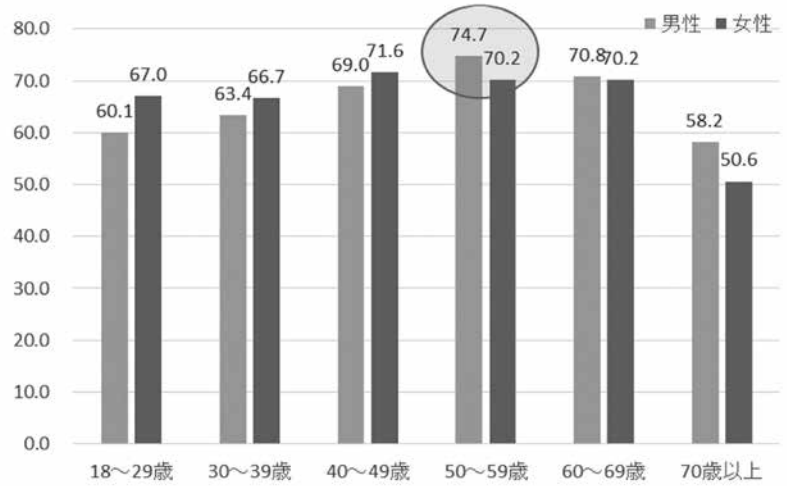


注：内閣府（2017）「社会意識に関する世論調査」に基づき齊藤作成。

図４－６　高齢者の「付き合い方」へのニーズ

（イ） 社会貢献意識　～50歳代に最も高い「役に立ちたい」気持ち

「社会の一員として、何か社会のために役立ちたい」かについて、65.4%は「役立ちたい」とし、社会貢献意識は全般的に高いことが分かる（図４－７）。特に社会貢献意識が高くなるのは、「50歳代の男性」であることは注目すべき点である。

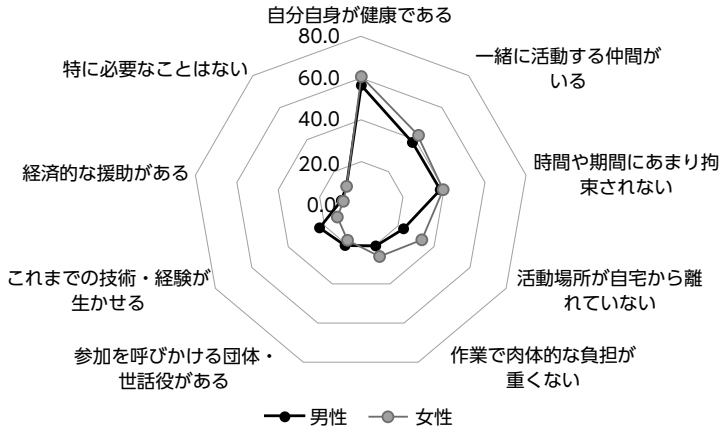


注：内閣府「社会意識に関する世論調査」（2017）より齊藤作成。

図４－７　社会貢献意識

（ウ） 地域活動を行う必要条件～「健康」「仲間」「拘束されない」「近い」「負担ない」～

「地域活動に参加する条件として、「自分自身が健康であること」が 58.6%で最も高く、以下、「一緒に活動する仲間がいること」が 40.8%、「時間や期間にあまり拘束されないこと」が39.4%、「活動場所が自宅から離れていないこと」が 28.8%、「作業で肉体的な負担が重くないこと」が 24.1%の順に必要条件となる（図４－８）。性差の大きい項目として、女性は「活動場所の近さ」、男性は「技術・経験が生かせる」ことをより重視していた。



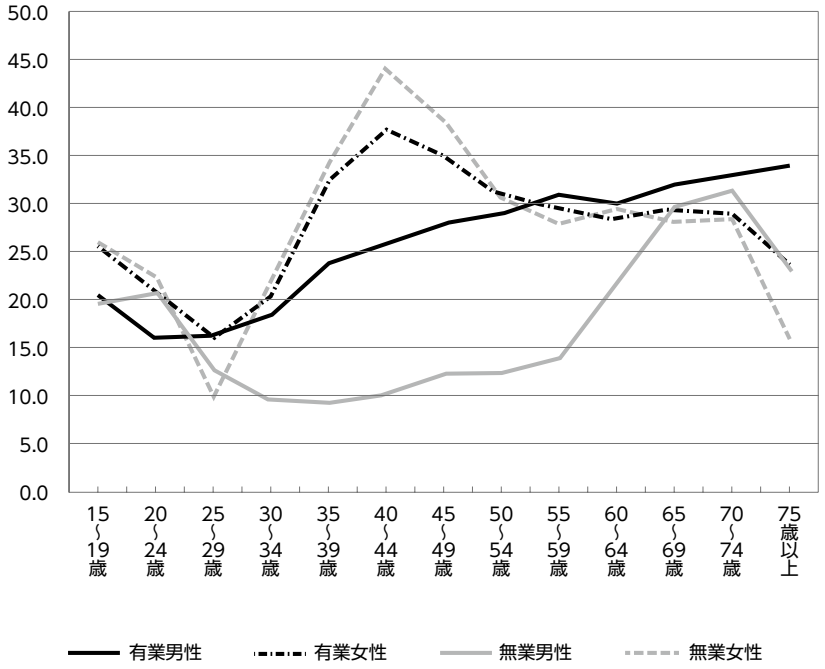
注：内閣府（2013）「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」に基づき齊藤作成。

図４－８　地域活動を行う必要条件

イ　高齢者の地域への参加・参画実態

（ア）　ボランティア活動～「有業男性」は高く、「無業女性」は低くなる～

65歳以降になると、男性のボランティア行動者率が高くなる。特に「有業男性」の行動者率は年齢と共に高くなっていく（図４－９）。一方、中年期（30～40歳代）に活躍していた「無業女性」は60歳以降になると一気に低下する。この要因は、男性の退職期との関連があるが、「無業女性」がボランティア活動から退く具体的な下降要因は明らかではない。



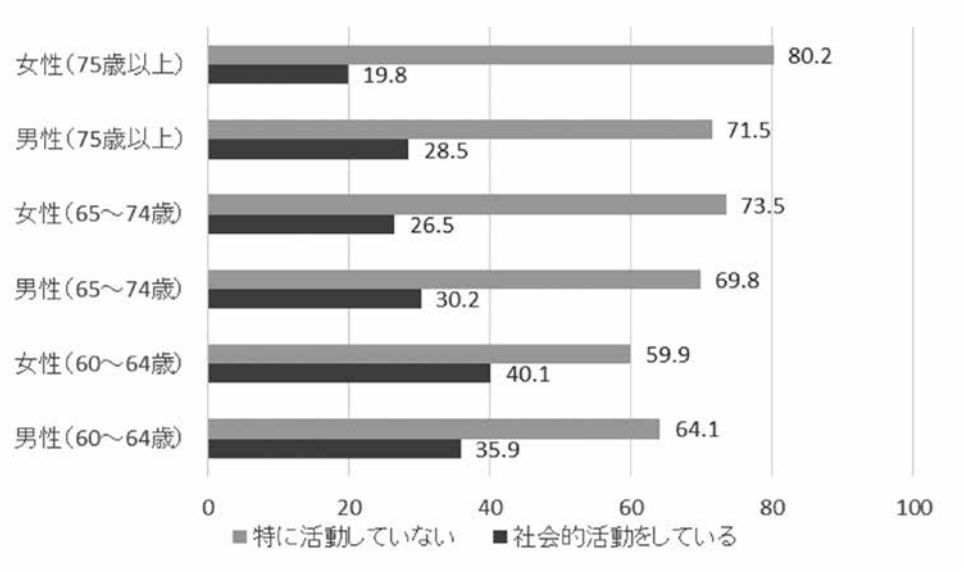
注：総務省（2017）「社会生活基本調査」に基づき、齊藤作成。

図４－９　ボランティア行動者率（2017）

（イ）　高齢者の社会的活動～60歳以上の「社会的活動」は３割前後～

社会的活動を行う者は、「自治会、町内会などの自治会組織活動」18.9%が最も高く、次いで「趣味やスポーツを通じた社会奉仕活動」（11.0%）を行う。「75歳以上」など年齢が高くなるほど、「社会的活動」は減ってくる（図４－10）。

「活動はしていない」者の特徴は、「未婚の男性」（82.4%）、「既婚（配偶者と離別）」の男女（男性81.6%・女性82.3%）、都市規模（大きい）、学歴（高くない）、収入（少ない）である。



注：内閣府（2017）「高齢者の経済・生活環境に関する調査」に基づき齊藤作成。

図４－10　高齢者の社会的活動

以上から、社会貢献意識（７割）とボランティア行動（３割）は結びついていないことが明らかになった。つまり、日本人の社会貢献意識は高くても、実際の社会的活動やボランティア活動に至らない実態がわかる。

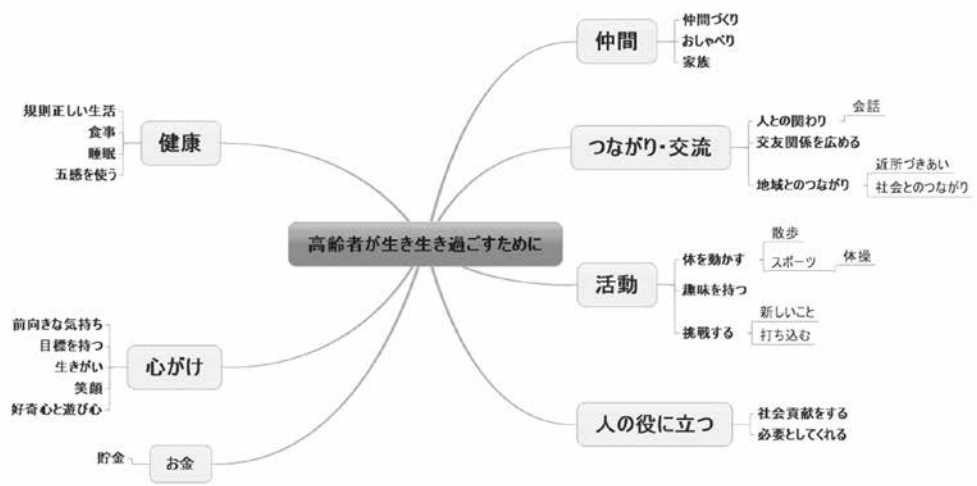
こうした社会貢献意識は高くても行動に至らない層を「潜在的ボランティア層」として位置づけ、より充実した支援が求められている。

（４）地域参加を促したい自治体と住民の想いとの相違　～自治体の住民講座・職員研修から～

ア　高年齢の受講者の真の願いとは？～「生き生き過ごすため」に必要な要素～

高齢者の生きがい講座（講師は齊藤）に関わる際、生涯学習講座の受講者（60歳以上）に共通して質問することは「生き生き過ごすために必要な要素とは何か」についてである。

受講者の回答を分類すると、図４－11のように、「健康」、「心掛け」、「仲間」、「つながり・交流」、「活動」、「人の役に立つ」、「お金」の順に多い。この結果は、先述の「地域活動の条件」（健康、仲間、拘束されない、近い、負担ない）に近い。



注：調査は、千葉県我孫子市、松戸市、佐倉市、東京都江戸川区の講座実施日（2015～2017年）に、自記式回収法で齊藤が行った。調査協力者112人（男性44、女性49、不明19）、回収率95.5%。

図４－11　高齢者が生き生き過ごすために必要な要素

イ　高齢者に地域参画させたい行政と市民との温度差　～なぜ地域参加するか～

神奈川県の社会教育関係者の職員研修（講師は齊藤）でワークショップを実施した。その際、「『地域デビュー』に関する市民と行政の思いは一致しているか」の設問に対し、約９割の行政職員が「一致していない」と回答した。

表４－７　「地域デビュー」に対する市民と行政との見解の相違

	市民が「地域デビュー」するのは何故でしょうか？	行政が市民を「地域デビュー」させたいのは何故でしょうか？
何のため	自分ため（３）、人とのつながり（２）、住んでいる地域のため（２）、役に立ちたい、社会貢献（２）、自己満足	地域の連携、活性化のため、地域ニーズに応えるため、課題解決のため（２）、市民の自治、地域性を反映、人材活用、健康に生きる、保険料のダウン
何故「地域デビュー」	身近で楽しく暮らす、助け合う、役に立ちたい、協力したい、地域が身近にある、生きがい、自己啓発、つながり、自分の満足、自分の欲求を満たすため	繋がるを創る、地域活性化、地域力の向上、人材育成、協働、担い手不足・人手不足、財源がない、市民が主役、元気で活発なまちづくり
何故「やらざるを得ない」	つがりを求めて（一人では生きられない）、これから地域で生きていく、一人では大変、孤独は嫌だ、ほっとけない、仕方ない、	人手不足（２）、放置はまずい、地域の要望に応える、孤独を防ぐ、行政だけでは限界がある（職員数）、まちを存続させるため、多くの人の声に応える
何に応えたいか？	地域の要望・期待、課題（４）、自分・仲間のため、自己表現	市民・地域の要望・声・ニーズ（５）、地域の課題、福祉の向上、市民の笑顔
どうありたいか？	楽しく、健康に、社会のため、地域とつながりたい、存在意義を感じる、役に立ちたい（３）、認められたい、主体的・自主的、充実感、生活に潤いを与えたい	活性化、市民主体の地域づくり、予算をかけず、地域主体の活動、居場所、機会の提供、相談・支援、市民と協働、つながりに価値を見出す

注：神奈川県の社会教育関係職員研修（2015.7.15,伊勢原市中央公民館）で協議内容に基づき齊藤が作成。カッコ内は、複数回答数。

「地域デビュー」に対する市民と行政の思いについて、各自ワークシートに記入後、グループで協議を行った。表４－７は、全７グループ（約45名）で実施された短文を整理したものである。以上から次の点が明らかである。

（ア）地域参加を促したい行政担当者と市民とに温度差が生じていること。

（イ）行政政策（「地域の人手不足」、「予算の縮小」を解消等）が優先されすぎ

ていること。

（ウ）「地域デビュー」講座では、「地域づくり」、「地域活性化」を前提とし、市民一人一人の思いや気持ちへの配慮が不足しがちであること。

（エ）市民の思いとは、「つながりたい」、「役に立ちたい」、「自分のため」ということである。

これらのキーワードを繰る事業の設定を考案していくと、市民と行政の思いに近づく。

（５）高齢者の地域への参画をプログラムの実践とその課題～先進事例・モデル事業～

ア　先進事例にみる特徴

（ア）　先進事例の観点別にみた特徴

先に述べた先進事例にみる特徴を、主催、協働（学校教育）、事業企画（目的、対象、人数、期間、拠点、内容、方法）連携・サポート、特徴や効果等に分類した（表４－８）。

（イ）先進事例にみる共通した特徴

a　始動期：外部からの指導・サポート、連携が強化して事業が始動していること。

b　事業目的：高齢者の健康面を促進すると同時に、何らかの地域活動に繋がっていること。

c　事業内容・方法：あらゆる手法による「実践」を伴い、受講生同志の「学び合い」も重視されていること。

d　事業の特徴：適度な緊張感を伴う活動や地域へ生かす取組を導入していること。

e　拠点：定期的に集まれる場所は、公民館等の社会教育施設が利用されていること。

f　地域資源：公民館、図書館、郷土資料館、民家等の地域資源が活用されていること。

g　受講生同志：活動を通じて「地域の仲間」となり、自主的な「交流」や「つながり」に結びついていること。

h　自主的活動：活動が自立するまで、長期間にわたり、外部からの学習サポートや応援があること。経過を見守り続ける人員がいること。

i　連携・協働：社会福祉施設及び学校教育等の多くの部署との連携があり、今後の発展や広がりがみられること。

表４－８　先進事例による事業の企画・運営・評価

		1	2	3	4	5	6	7
地域		埼玉県春日部市	千葉県柏市	東京都中央区	新潟県小千谷市	愛知県田原市	愛知県北名古屋市	福岡県飯塚市
組織名		庄和地区市民大学	くるる即興劇劇団	りぷりんと・中央区	わかとち未来会議	元気はいたつ便	名古屋市回想法「いきいき隊」	熟年者マナビ塾
主催		同市民大学	同団体	NPO法人りぷりんと・ネットワーク	同未来会議事務局	田原市中央図書館	同市歴史民俗資料館	飯塚市教育委員会
協働部署		公民館	柏地域医療連携センター	小学校、幼稚園、保育園	早稲田大学	福祉課（各種福祉施設）	高齢福祉課、保健士	学校教育課
			東京大学高齢社会総合研究機構	中央区社会福祉協議会	NPOふるさと会期支援センター	民俗資料館	NPOシルバー総合研究所	公民館、保健センター
学校教育		—	—	小学校、幼稚園等	東小千谷市小学校	福祉専門学校や大学等	回想センター	各地区の小学校等
事業企画	目的	主体的主導的に活躍できる地域の人材育成	高齢者に即興劇（インプロ）のコミュニケーションの向上とその追究	高齢者の読み聞かせ意を通じた健康教育	自然や文化、地域資源を生かしたまちづくり	図書館資料の利用を通じた高齢者の健康促進。	高齢者の回想法を通じた学び合いと健康促進	高齢者の自主的な学びと学校支援ボランティアの促進
	対象	庄和地区市民（高齢者）	市民（平均年齢73.4歳）	同区市民（66～89歳）	市民・大学生等	田原市民（高年齢）	市民（65歳以上）	同市民（高年齢）
	人数	30名／1学年15×２	30名	39名	不明	図書館スタッフ6、ボランティア８	生き生き隊600名（65歳以上）	塾生は192名
	期間	2年間	年度ごと	年度ごと	年度ごと	随時	随時	随時
	拠点	春日部市庄和地区公民館	柏地域医療連携センター内	中央区内の公的施設	民家	田原市中央図書館	北名古屋市歴史民俗資料館	公民館、小学校の余裕教室
	内容	地域に関わる内容	即興劇（インプロ）	読み聞かせ	まちづくり、コミュニティビジネス	グループ回想法		学習支援のボランティア
	方法	講座・討論、体験・実習・観察・干渉	コミュニケーション活動	学び合いと読み聞かせ実践	ワークショップ	ボランティアが回想法を推進	回想法	自主学習とボランティア
連携・サポート		文教大学	東京大学	東京都老人総合研究所	早稲田大学	図書館職員	国立長寿医療センター	教育委員会
特徴・効果	学び方	体験型授業	即興劇でコミュニケーション向上	声だし等の発生練習	ワークショップで共有	回想法で脳の活性化	回想法	自主的な学びと生きがい
特徴・効果	交流	受講生間、卒業生間	受講生とのつながり・一体感	ボランティア同士の交流	会議等での交流	回想法の学び合い	回想法で同士の関わりに繋がる	塾生同士の交流
	仲間	交流が楽しみの機会が多い	ゲームでアイスブレイク	本の選定、練習、議論等	機動性のある仲間	少人数で機動性あり	グループごとの活動	塾生という仲間
	役割	卒業生が応援	稽古でアクティヴィな活動	運営等の分かち合い・輪番制	地域資源の活用、地域創生	図書館にある資料の活用	多様な福祉施設	子どもたちの成長を支える役割
	居場所	公民館が居場所に	同センター	練習の場所	民家	図書館	各種、準備共有する場	各小学校・公民館等
	自主的活動		自主グループ活動	自主グループ	民宿の運営、特産物の開発・即売	自主的な活動	自主グループが結成、事業拡大	自分たちで学習内容や教材を決める
	地域へ	地域へ生かす機会	パフォーマーとして	子どもからの感想が励み	地域の自然や文化の再認識	福祉施設等で回想法実践	回想法の実践	小学校の子どもたちへ
	緊張感	高齢者に運営の役割	舞台に立つ緊張感	読み聞かせで適度な緊張感	コミュニティビジネス	施設等での実践	実施にあたる役割と約束を共有している	学校で定めたルールを厳守
	技術の向上	多様な講座	即興劇の指導者	読み聞かせ技術の向上	教育体験旅行（グリーンツーリズム）民泊	職員の事業に対する高い意識		塾生同士の自己学習・相互学習
	予算	受益者負担	—	ー	民泊や特産品で捻出	職員の高齢者に対する理解	回想法という技をボランティアが取得している	受益者負担（1回100円）
	連携	公民館と連携	医療連携センター	社協・小学校等の連携	小学校や行政との連携	福祉課及び大学等の連携	多様な部署との連携	小学校と連携

注：資料に基づき、齊藤が作成。

（ウ）先進事例にみる共通した課題

a　立ち上げ期から大学や各種研究機関等、強力な支援があった。活動が発展・拡大した場合、会員同士の学び合いや技術向上に指導者が必要となる。しかし、社会教育の専門職の人員不足及び外部の指導者・支援者が継続的に得られないことは課題である。そのため、住民同士が自主的に学び合うことが要となる。

b　全団体にて自主的な活動が行われていた。しかし、課題は、活動のリーダー的存在のものが「後期高齢」でかつ「固定化」した場合、その活動を継続できるのかどうかである。

c　団体と他部署、学校教育等を繋ぐ場合、社会教育主事のネットワーク力を高める必要がある。

イ　モデル事業（浦安モデル・秩父モデル）の検証

（ア）モデル事業の検証・評価

前述のように、千葉県浦安市（都市部）、埼玉県秩父市（山村部）にてモデル検証を行った。前者は都市部で新住民が多い地域で、後者は山村部で住民同士のつながりが多い地域である。いずれも受講生は女性に多く、特に秩父モデルは受講継続者の９割が女性であった。

活動のきっかけについて、浦安モデルの回想法は「学習内容に興味を持った」（56.3%）、秩父モデルの即興劇は「健康の維持」（59.1%）「仲間や友人に誘われて」（54.4%）とした。これらモデルに対する評価は、表４－９のとおりである。

表４－９　調査研究の視点からみたモデル事業（浦安、秩父）の評価

調査研究の視点		浦安モデル	秩父モデル
		回想法	即興劇
ア	事業企画・運営・評価等における行政内部	事前検討（３回）、職員研修（事前１回、事中3回）、視察（2回）など事業運営の準備等を熱心に行う。	事前研修（１回）、学校との連携。
	地域関係機関・団体との連携・協働の在り方	事中及び事後も、受講生の自主化を図ろうと継続的な会合を開催。	地縁組織でのつながりが強い地域性。
イ	事業参加者の意識	受講生の「教養の習得」、「交流に役立つ」。事後に「受講生の集い」3回、「想い出語りの会」4回、「体験会」1回、「定例会」1回を実施。継続的に活動を行う可能性が高い。	受講生の「興味がある」、「明るい、、楽しい気分」に役立つ。しかし、事後の継続的な活動には結びつかない。
	行政の変容	事前・事中の研修を繰り返し行う。受講生に向けての自主化に行政は協力的。図書館、郷土資料館の協力がある。	講座の中で、学校教育の協力あり。普段から、地域住民と子どもとの交流は頻繁に行われている。
	健康状態の変化等の状況	健康の変化は不明。受講生は継続的に参加。欠席者が少ない。	健康維持や老化防止に期待が高い。
ウ	事業の効果的な実施方法	回想法を行う先進団体との定期的な交流。	即興劇より、地域の伝統文化を継承プログラムがよい。
		福祉施設等の連携も必要となる。	小学校との連携があるとよい。
	他地域で実施する上での課題	回想法を実施するには地域の想い出に共通項が少ない。	即興劇に効果は高いが、継続的な講師が得られない。
		女性に好まれる活動。	女性が積極的な活動（途中、男性は来なくなる）。
		外部講師に予算がかかる。	外部講師に予算がかかる。
		自主的な活動が軌道に乗るまで、ファシリテートが必要。	講師が不在であると、自主化は困難。

注：資料に基づき齊藤が作成。

（イ）モデル事業の特徴と課題

a　回想法及び即興劇という特殊な手法を導入した。しかし、それら事業を実施運営する場合、継続した指導者・支援者が必要となる。今後、そうした支援者がどれだけ得られるかが課題となる。

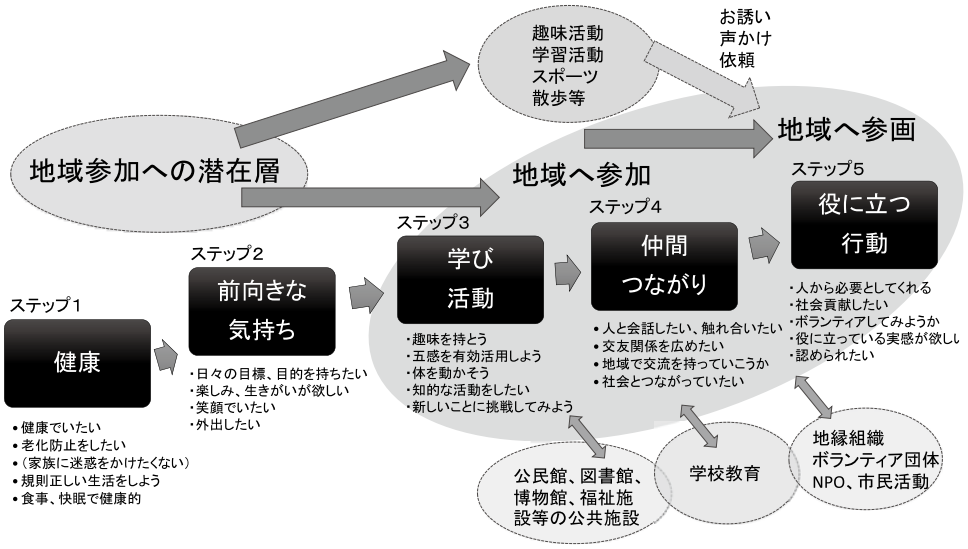
b　回想法及び即興劇は、いずれもコミュニケーションが必要となる学習手法である。そのため、継続的受講生は必然的に女性が多くなる。今後、男性ニーズの意向も把握したプログラムを展開すべきである。

c　事業実施後に、受講生同士が「仲間関係」を保持し、「自主的な活動」を行うためには、会員の「居場所」、「学習成果を生かすフィールド」、「継続的なサポート」にあたっては主事の力量が不可欠となる。しかし、実質的には人員不足のため一団体に多くの時間を割くことが困難な自治体も少なくない。

（６）高齢者の地域への参加・参画を促す地域の体制づくり
～行政内外のネットワーク構築～

高齢者の参加･参加を促し、「プロダクティヴ･エイジング」を推進していくには、どのような地域参加のプログラムと地域の体制づくりが必要なのだろうか。

社会教育関係職員は、次の５つのステップで、地域への参加を促すことができる（図４－12）。



注：齊藤作成。

図４－12 「プロダクティヴ・エイジング」を推進する地域参画へのステップ

ア　ステップ１：「健康」に留意することが最も重要である。講座への参加がいかに個々人の健康によい影響を与えている等の助言があれば説得力も増すだろう。講座当初から、行政の思惑である「人材不足を補う」、「地域の担い手をつくる」という意向を露にしない。尚、学習・活動フィールドは、自宅から近いほうが長続きするようだ。

イ　ステップ２：「前向きな気持ち」（肯定感を高める）になるポジティヴな声かけと事業内容を心掛けること。また、特に、市民の「楽しみたい」、「生きがいが欲しい」、「笑顔で過ごしたい」というニーズに応えるアクティヴな学習方法へ工夫もできるだろう。しかし、ネガディブな発言や態度を示す受講生には、個人的なサポートも要する。

ウ　ステップ３：五感を活用する、体を動かす、知的好奇心や挑戦したい気持ちが増す「学び」や「活動」プログラムが有効である。また、学習プログラムの中に、地域に関連した内容を含めることで、地域に関心や興味を持たせるきっかけができる。一方、趣味活動、学習活動、スポーツ、散歩など個や組織のアクティビティに勤しむものに対して、お誘い、依頼によって「頼まれれば、仕方ない」という思いで地域へ参加に転換する可能性もある。しかし、「ゆっくり」、「無理をしない」ことが肝心である。

エ　ステップ４：仲間やつながりをもたらす学習プログラムが必要である。人と関わる、会話ができるなどを意図的に作ること。また、プログラム実施前後においても、積極的な声かけ、おしゃべり（会話）を重視し、仲間関係や地域のつながりができるように促すこと。講座以外の時間に、講座仲間とのおしゃべり、食事会、ウォーキング等の自主的な活動などが行われた場合、地域参加につながる可能性が高まる。この中から徐々にキーパーソン、地域のリーダーとなるものも現れる。

オ　ステップ５：一人一人が「役に立つ」という実感を持たせることが重要である。受講生も支援者も、感謝の気持ち、労いの言葉、声かけ、ホスピタリティを相互に持つことで、両者の関係性も良くなる。個人の「居場所」、「役割」、「役に立つ」という実感は、自己有用感を高め、次の活動へつながる。その際、個々の健康・体力にも注意を払い、「無理をしない」活動が必要となる。

カ　ステップ６：地域の環境の整備である。講座を受講後に、高齢者がスムーズに地域活動に参加・参画できるフィールドの確保が不可欠である。福祉関連施設との連携も必要となる。そのためには、行政内外のネットワークづくりだけでなく、異世代・異文化に対して「寛容」になれる地域の環境づくりも行わなくてはならない。

本研究は、高齢者をターゲットとした研究であった。しかし、平成25年度より65歳までの雇用の義務化（高齢者雇用確保措置）に伴い、高齢者が地域で関わり始めるのは、60歳代後半からが多くなっている。しかし、地域のキーパーソンとなるには、70歳以上のスタートは体力的に厳しくなることは否めない。そこで、今後、地域への参画を進める際、次のターゲットも視野に入れた研究開発が必要だと思われる。

（ア）社会貢献意識が最も高い「40歳代後半から50歳代」(活動的若者老年段階：active, younger old)もターゲットにした研究開発

（イ）後期高齢・要援護高齢者（最終老衰段階：the last decrepit）も「役に立つ」実感の持てるプログラム開発

（齊藤　ゆか）

【引用文献】

内閣府（2017）「社会意識に関する世論調査」
内閣府（2013）「高齢者の地域社会への参加に関する意識調」
内閣府（2017）「高齢者の経済・生活環境に関する調査」
齊藤ゆか（2006）『ボランタリー活動とプロダクティヴ・エイジング』ミネルヴァ書房.
齊藤ゆか（2017）「アクティヴ・シニアのエンパワメントをめぐる課題」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』Vol.29, pp.6-20.
総務省（2017）「社会生活基本調査」
WHO（2002）“Active Ageing: A Policy Framework”
http://www.who.int/ageing/publications/active_ageing/en/（アクセス日2018年３月31日）

おわりに

1　人生100年時代

「人生100年時代」という言葉を耳にすることが多くなった。寿命が伸び、長生きして、百歳を健康で迎えることが人々にとって現実味をもって受け止められるようになった。

平成29（2017）年９月、政府は「人生100年時代構想会議」を発足させ、超長寿社会を見据えた社会経済システムの在り方や、人々が活力を維持して時代を生き抜くためのロール・モデル等の検討を始めた。

その５年程前、文部科学省は「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」の報告書を公表している。報告書は、「現在、私たちは、人生100年時代の出発点に立っている。」とした上で、以下のように述べている。

「長寿社会は、私たちが迎えようとする新しい社会である。それは、高齢者だけではなく、この社会に生きるすべての人々の社会であり、生涯学習も、この社会に生きるすべての人々が自分らしく生き、この社会を変化に富んだ、価値豊かな社会へとつくりだしていくために必要な学びである。」これに続いて、高齢者への対応について次のように述べている。「今日、急激に増え続ける高齢期にある人々の新しい生き方を模索し、支え、さらにこれらの人々が高齢期を自己の尊厳を持って、心豊かに生きることができるような社会の在り方をつくりだすことが喫緊の課題となっている。」

本報告書のベースにある考え方は、上に引用した２つの文に凝縮されている。本書では社会と高齢者の接点を、高齢者が実際に暮らす地域に求め、さまざまな社会教育事業を通して高齢者の経験と知恵を地域社会の中で生かす方策が提案されている。

2　高齢者の地域参画

人は誰でも、地域で幸せに暮らしたいと願っている。しかし現実は必ずしもそのようにはいっていない。高齢者について言えば、経済的な余裕のなさ、健康不安、定年退職後の無為、家族・友人・知己の死別などの要因が考えられるが、それらを含めて人間関係の縮小という要因によるところが大きいのではないだろうか。

自らの思いを他者に語る機会がない、他者と共感・共喜する機会がないという状況は、人の幸せの対極にある状況と言ってもよいのではないだろうか。私たちが第一に考えなければならないのは、高齢者を地域で「一人ぼっち」にさせないためにできることを探すことではないだろうか。

高齢者は、他者とのつながりを減退させる中で、社会の一員としての自覚や社会的有用感、ひいては自尊感情を失いがちとなる。その深刻な事態としてセルフ・ネグレクト（self-neglect）が挙げられるが、その防止のためには地域社会の関与や支えが欠かせない。

欧州各国や国連等の国際機関で確立され、日本の社会政策にも採用されている理念に「社会的包摂」（Social Inclusion）というものがある。これは「社会的排除」（Social Exclusion）の対概念である。現在は、人々が社会のあらゆる関係性から切り離され、社会とのつながりが希薄になってしまう社会的排除の危険性が高まっている状態であるという指摘がある（平成23（2011）年５月、内閣府「一人ひとりを包摂する社会」特

命チーム、「社会的包摂政策を進めるための基本的考え方」)。高齢者にとって地域への参画や社会教育へのアクセスの機会が確保されることは「社会的包摂」の理念に照らしてきわめて重要と考えられる。

平成29（2017）年３月、文部科学省所管の「学びを通じた地域づくりに関する調査研究協力者会議」が「人々の暮らしと社会の発展に貢献する持続可能な社会教育システムの構築に向けて（論点整理）」を公表した。その中に次のような記述がある。「地域コミュニティが衰退し、つながりが希薄化する中で、社会教育には、その活動を通して人と人との交流を促し、地域に新たな価値をもたらすような『仕掛け』づくりを進めることで、地域コミュニティの再生・活性化に貢献することが期待される。」

高齢者が地域の様々な活動に参画することは、「社会的包摂」の観点から重要であるが、加えてそれは、地域での人々のつながりの希薄化を防ぎ、地域創生の動きを加速させることにもつながる。高齢者がアクティヴに地域に参画できる環境をつくりだすことが、「社会的包摂」と「地域創生」の双方の観点から期待される。

３　「モデル事業」の意義

本報告書の第２章では、文献調査や委員から寄せられた情報を基に、高齢者の地域参画や交流の促進に積極的に取り組む事業例を７例取り上げ、それぞれに分析を行い、考察を付している。また第３章では、実際に２地点で高齢者の地域参画を促すための特徴的な事業をモデル事業として実施し、その成果を分析・検証している（２つのモデル事業における高齢者支援の特徴については第４章１－（３）参照)。

ここで２つのモデル事業について、多少のコメントを付しておきたい。

まず「回想法ボランティア育成事業」について。

概して、道具や写真などの「モノ」にはそれを使用した、あるいはその状況に居合わせた人々の思いが重なっている。その思いを引き出すトリガーの役割をするのが「モノ」である。

例えば、アメリカの学校等で行われているショー・アンド・テル（show and tell）は、子供がクラスメイトに自分の好きなものを見せながらそれについて話すというものだが、子供が話したいという気持ちを引き出すのに効果があるという。回想法は、参加者がその場に持ち込まれた「モノ」に注目して、それにまつわる自らの体験を語るというもので、どちらも話したい気持ちを引き出す状況がつくられている点で共通している。高齢者における回想法の場合、これにライフ・レヴューを通して人生を肯定的に捉え直すという意義が加わる。

関連して、先の東日本大震災の被災地で高齢者に回想法的手法を用いた事例を紹介しておきたい。東日本学院大学教授の加藤幸治氏は、被災した高齢者が多く入所している特別老人ホームに、津波で流失し回収した民具を持ち込み、それらにまつわる暮らしの体験についてヒアリング調査を行った。実際の調査は加藤氏が指導している学生が行った。加藤氏はそこで回想法（個人回想法）を意図して行ったわけではなかったが、結果的のその効果を実感したという。加藤氏は自著のなかで施設長との会話を次のように紹介している。「自分の人生に関心を持ってもらうってことはね加藤さん、誇りを取り戻すってことなのよ。当時の暮らしが忙しくても、自分が一番輝いていた頃に戻れるわけ。

五つ玉の算盤を手に取るとね、自然とパチパチと手が動いているでしょう？　その手が“ある時代を生きた自分の証”だって気付くのね。」（『復興キュレ―ション』社会評論社、2017年）。老人ホームの高齢者は、よい聞き手・話し相手を得て、自らの人生を肯定的に振り返ることができたようだ。

回想法では、民具・写真等のツールを使う。社会教育の分野で回想法の方法を参考にする場合には、とくに博物館・郷土資料館の職員や図書館職員と、企画の段階から連携して事業を進めることが重要と思われる。

次に「インプロ（即興劇）を用いた交流事業」について。

インプロ（即興劇）の実践が我が国に導入されて、まだ四半世紀しか経っていない。社会教育の分野では、まずはその方法論の理解・普及が課題と言えよう。本報告書では、インプロ（即興劇）の概要の理解のために紙幅を割いている（第３章３－（１）参照）。

学校教育では、教育方法の一つとして「劇化」という一種の構成プロジェクトが用いられてきた。それは端的に言えば、ある教育的意図を持って、設定された主題のもとに劇を構成するものだが、今回、モデル事業として行われたインプロは、たしかに劇化の一つには違いないが、学校における劇化とは次の点で基本的に異なっている。

インプロでは脚本がない。演出もない。実際、秩父市の荒川公民館で行われたインプロ劇では、「家族」を想定した場面、という以外の設定はなく、具体的な場面の設定やセリフ・動きは演者自身が共演者との関係の中で、劇中、即興的につくられる。演技の巧拙はまったく問題ではない。あらかじめセリフが決められていないので、セリフを覚える必要もないし、トチることもない。また、即興ならではの思いがけない物語の展開を経験することもできる。インプロでは演劇の経験がまったくない高齢者でも不安なく役柄を演じ、楽しむことができる。

インプロで即興的に物語がつくりだされるとき、演者の発するセリフや動きには、自ずとその人のこれまでの経験や考え方が反映されるものである。それを共演者や観客が受け止め、後の交流のきっかけとしていくことができる。

インプロでは、劇の進行を統括する演出家はいない。しかし参加者の状況等を把握し適切に助言し、劇の進行を方向づけるファシリテーター役の人は必要である。社会教育事業へのインプロの導入には、このファシリテーター役の確保や養成の課題が残る。インプロという演劇手法を用いたワークショップは、今後、実践事例を積み上げながら、高齢者の学び合いや世代間交流の学習形態として定着することが望まれる。

４　地域参画の体制づくり

さきに「学びを通じた地域づくりに関する調査研究協力者会議」が出した「人々の暮らしと社会の発展に貢献する持続可能な社会教育システムの構築に向けて（論点整理）」の内容に一部触れた。ここでもう一度、この文書に戻ってみたい。この文書では、今後の社会教育に期待される役割として、大きく次の３点を挙げている。それらは①地域コミュニティの維持・活性化への貢献、②社会的包摂への寄与、③社会の変化に対応した学習機会の提供である。これらを通して、学びの成果を地域づくりの実践につなげることが求められている。

これを高齢者の学習支援という観点で掘り下げれば、およそ次のような課題が見えて

くる。①については、高齢者が学びの機会を得て、地域に積極的に関わる機運が醸成されること。②については、地域のすべての高齢者が孤立することなく地域社会の構成員として活動に参加できること。③については、「人生100年時代」を視野に、高齢者が健康で生きがいを持って暮らすための学習環境が得られること。

各自治体の教育施策に期待されることは、以上のような観点を踏まえて、教育振興基本計画や総合教育計画等に、「人生100年時代」を見据えた、学びを通じた地域づくりのビジョンを盛り込むことである。人々の学びを通した地域社会の成長・発展の構想を、住民を含めた多くの関係者（ステークホルダー）が共有することが重要と考えられる。

計画は実行体制を持たなければ、先には進めない。実行に向けた組織は、各自治体や各地域の特性を考慮してつくられるが、加えて、自治会等の住民組織、社会教育関係団体、NPO、大学、企業などの強みを生かし、これらの主体と連携・協力する姿勢をもつことが重要である。

では、高齢者の地域参画を促すためにどのように事業を推進・展開するか。本報告書では、先進的な事例を７つ紹介している（第２章）。それらの事業の特徴を一覧表にしたのが第４章４－（４）の表４－８（p.128）である。それに付して先進事例に共通した特徴が整理されている。改めてこれを要約すれば、およそ次のようになる。①公民館、図書館、郷土資料館、学校等の公共施設や民家といった民間施設が活用されている。②福祉部局、学校、大学等の様々な部署との連携が図られている。③学習の手法として何らかの特徴的な「実践」があり、それを通しての学習者同士の「学び合い」が重視されている。④学習活動を通じて学習者が「地域の仲間」となり、何らかの地域活動につなげている。

こうした高齢者の社会参画を進める体制づくりに、社会教育主事はどのような役割を期待されているのだろうか。社会教育主事は、社会教育に関して専門的技術的な知見に富む職能者であることから、周囲からは様々な期待が寄せられるが、中でも次の３つの役割はとりわけ重要と考えられる。

１つは、プランナー（planner）としての役割。企画あっての事業。魅力ある事業を企画し、関係者・関係部署にしっかりと提案できること。そのためには、これまでに当該自治体で実施した事業の振り返りや、現在実施されている先進事例の情報入手、地域特性・地域資源・地域人材の熟知などが求められる。

２つには、コーディネーター（coordinator）としての役割。つまり、地域資源（ひと・モノ）を組み合わせて付加的な事業をつくりだす役割。また、結ばれる関係者・組織のそれぞれに対して、その意義と有効性を説明する役割である。平成27（2015）年12月、中央教育審議会は「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」という答申を出したが、社会教育主事には、学校、地域、社会教育をつなぐ“カナメ”の役割が期待されることとなった。学校と地域の連携・協働を進める中で、高齢者の地域への参画をどのように効果的に盛り込むか、社会教育主事の力量が試されることになる。

３つには、ファシリテーター（facilitator）としての役割。つまり、事業に関わるそれぞれの立場の人たちの「やる気」を後押しし、かつ、学習者の主体性を尊重しつつ、相互の融和と協調の関係を引き出す役割である。

これらの役割を総括して言えば、社会教育主事は「学びのオーガナイザー（organizer）」として、学びを通した地域の活性化や、高齢者の地域参画の促進に包括的な指導力を発揮することが期待される。

本報告書では、公民館等の講座での学習から地域参画のきっかけを得ていく事例を多く挙げているが、高齢者が自らの学びの経験を地域につなげる道はいくつもある。その例は第４章１－（５）で触れている。重要なのは、高齢者自身が、この地域で暮らしてよかったと思えること、そして地域の人々が「あのような生き方をしたい」と思える点を実際の高齢者から学ぶことができることである。高齢者は地域のつながりの中でもっと元気になれる。社会教育は、地域のニーズ、高齢者のニーズに合った、魅力的な学習機会を提供することで、高齢者の元気、地域の元気を引き出し、支えることができる。

各自治体の社会教育関係部署の皆様や社会教育関係団体等の皆様におかれては、本報告書で取り上げた事例とそれについての分析・考察を何らかの形で地域での実践に生かしていただければ幸いである。

（野島　正也）

参　考

講　　座　　名

アンケート（第１回）

ＩＤ：	氏名：
記入日：	点検者：

※アンケートのお願い

本アンケートは、○○市教育委員会に御協力いただき、国立教育政策研究所が高齢者の学びを通じた地域参画の在り方を検討する上での資料を得るために実施するものです。以下の注意書きをお読みいただき、アンケートに御協力をお願いします。

※アンケートに御記入いただくに当たっての注意

◆ アンケートは８ページまであります。指示に沿ってお進みください。

◆ 質問によっては、判断がつきにくい場合や答えにくい場合があるかと思いますが、余り深く考え込まず、最も近いものを選んでください。

◆ 集計結果につきましては、国立教育政策研究所が刊行する報告書やホームページ等を通じて公表されます。ただし、回答内容は統計的に処理され、個人が特定される形では公表されません。

◆ 御回答いただいた調査票につきましては、厳重に保管し、調査研究終了後,５年以内に廃棄処分します。

◆ アンケートへの協力は自由意志です。アンケートに御協力いただけなかった場合でも、不利益になるようなことは一切ありません。

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター
波塚章生、市川重彦

チェック欄

※私は、このアンケートの趣旨について十分な説明を受けた上で回答に協力します。

本講座の受講の目的についてお伺いします

問１．あなたが本講座を受講するようになったきっかけはどのようなものですか。
以下の１～17のうち、**当てはまる番号　全てに**○を付けてください。

１．余暇を有効に使いたいから	11．学習内容を地域活動に生かしたいから
２．学習内容に興味があったから	12．講師が魅力的だから
３．はば広い教養を身につけるため	13．家族にすすめられて
４．健康の維持のため	14．これまでやってきた学習を続けたいから
５．退職して時間的余裕ができたから	15．公民館や市の職員から声をかけられたから
６．費用が余りかからないから	16．広報誌やチラシを見て
７．仲間の輪を広げたいから	17．その他
８．仲間や友人に誘われて	（　　）
９．趣味を身につけるため	
10．自宅から近いから	

あなたの学習活動の状況についてお伺いします

問２．あなたは、この講座を受ける前の１年間にどのような場所や形態で学習活動を行いましたか。以下の１～13のうち、**当てはまる番号　全てに**○を付けてください。

１．公民館など公的な機関における講座や教室
２．自宅での学習活動（書籍など）
３．同好会が自主的に行っている集まり、サークル活動
４．カルチャーセンターやスポーツクラブなど民間の講座や教室、通信教育
５．職場の教育、研修
６．情報端末やインターネット
７．テレビやラジオ
８．図書館、博物館、美術館
９．学校（高等学校、専門、各種学校、大学など）の公開講座や教室
10．子供たちとの交流活動
11．学びの成果を生かした地域活動
12．学習活動をしていない
13．その他（　　）

問３．あなたは、今後どのような場所や形態で学習活動を行いたいですか。
以下の１～13のうち、**当てはまる番号　全てに**○を付けてください。

１．公民館など公的な機関における講座や教室
２．自宅での学習活動（書籍など）
３．同好会が自主的に行っている集まり、サークル活動
４．カルチャーセンターやスポーツクラブなど民間の講座や教室、通信教育
５．職場の教育、研修
６．情報端末やインターネット
７．テレビやラジオ
８．図書館、博物館、美術館
９．学校（高等学校、専門、各種学校、大学など）の公開講座や教室
10．子供たちとの交流活動
11．学びの成果を生かした地域活動
12．特に行いたい学習活動はない
13．その他（　　）

問４．あなたは、本講座を受講するに当たり、どのようなことを期待していますか。以下の１～９のうち、**当てはまる番号　全てに**○を付けてください。

１．時間の有効な活用
２．幅広い知識や教養の習得
３．健康の維持や老化の防止
４．新しいことへのチャレンジ
５．地域活動への参加
６．地域の人々との交流
７．仲間づくり
８．特に期待しているものはない
９．その他（　　）

あなたの日常生活の状況についてお伺いします

問５．あなたの日常の活動性についてお伺いします。以下のA～Mの質問ごとに、**「はい」又は「いいえ」**に○を付けてください。

※　以下の「できますか」の質問については、「やろうと思えばできる」という場合は「はい」に○を付けてください。

A．バスや電車を使って一人で外出**できますか**	はい	いいえ
B．日用品の買物が**できますか**	はい	いいえ
C．自分で食事の用意が**できますか**	はい	いいえ
D．請求書の支払が**できますか**	はい	いいえ
E．銀行預金・郵便貯金の出し入れが**できますか**	はい	いいえ
F．年金などの書類が書けますか	はい	いいえ
G．新聞を読んでいますか	はい	いいえ
H．本や雑誌を読んでいますか	はい	いいえ
I．健康についての記事や番組に関心がありますか	はい	いいえ
J．友達の家を訪ねることがありますか	はい	いいえ
K．家族や友達の相談に乗ることがありますか	はい	いいえ
L．病人を見舞うことが**できますか**	はい	いいえ
M．若い人に自分から話しかけることがありますか	はい	いいえ

あなたの家族や人との交流状況についてお伺いします

問６．友人や近所の方、別居の家族や親戚との付き合いについて伺います。
以下のＡ～Ｄの質問ごとに、あなたのお付き合いの状況として、**当てはまる番号に一つずつ**○を付けてください。

※　該当する関係の方がいない場合（別居の家族・親戚がいないなど）は、「５（年に数回程度／全くない）」とします。

	週に２回以上	週に１回程度	月に２～３回	月に１回程度	年に数回程度/全くない
Ａ．友人や近所の方と、会ったり、一緒に出かけたりすることは、どのくらいありますか	1	2	3	4	5
Ｂ．友人や近所の方と、電話で話すことはどのくらいありますか（電子メールやファックスを含む）	1	2	3	4	5
Ｃ．別居の家族や親戚と、会ったり、一緒に出かけたりすることは、どのくらいありますか	1	2	3	4	5
Ｄ．別居の家族や親戚と、電話で話すことはどのくらいありますか（電子メールやファックスを含む）	1	2	3	4	5

あなたのお考え・お気持ちについてお伺いします

問７．あなたのお気持ちについて、以下のＡ～Ｅの質問ごとに,２週間のあなたの状態に**最も近いものに一つずつ○を**付けてください。

最近２週間、私は・・・	いつも	ほとんどいつも	半分以上の期間を	半分以下の期間を	ほんのたまに	全くない
Ａ．明るく、楽しい気分で過ごした	1	2	3	4	5	6
Ｂ．落ち着いた、リラックスした気分で過ごした	1	2	3	4	5	6
Ｃ．意欲的で、活動的に過ごした	1	2	3	4	5	6
Ｄ．ぐっすりと休め、気持ちよく目覚めた	1	2	3	4	5	6
Ｅ．日常生活の中に、興味あることがたくさんあった	1	2	3	4	5	6

問８．世間一般の人又は近隣の人に対するあなたのお考えをお尋ねします。
以下のＡ～Ｃの質問ごとに、**あなたの感じ方を最もよく表している番号に一つずつ○を**付けてください。

	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらともいえない	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
Ａ．一般に人は信頼できる	1	2	3	4	5
Ｂ．一般に人は他人とのつながりを大事にする	1	2	3	4	5
Ｃ．一般に人は他人の役に立とうとする	1	2	3	4	5

最後にあなた御自身のことについて、お伺いします

Ｆ１（性別）

１．男 性　　２．女 性

Ｆ２（年齢）

１．60～64歳	２．65～69歳	３．70～74歳
４．75～79歳	５．80～84歳	６．85歳以上

Ｆ３（世帯状況）

あなたが今、御一緒にお住まいになっている方はどなたですか。

当てはまるもの　全てに○を付けて、（　）に人数をお書きください。

【続柄】

１．あなたお一人	２．配偶者	３．親（　　人）
４．子供（　　人）	５．孫　（　　人）	
６．その他（　　）		

Ｆ４　あなたは、現在の地域にお住まいになってから、何年になりますか。

この中から　一つだけ○を付けてください。

１．10年未満	４．30年以上～40年未満
２．10年以上～20年未満	５．40年以上～50年未満
３．20年以上～30年未満	６．50年以上～

Ｆ５　あなたの御家族で介護を受けている方はいますか。

１．いる　　２．いない

Ｆ６　あなたは、次のようなグループや団体に入っていますか。入っているグループ・団体の　**全てに**○**を**付けてください。

１．入っていない	８．政治関係の団体や会
２．町内会・自治会	９．業界団体・同業者団体
３．老人会・老人クラブ	10．同窓会や退職者の会（OB/OG会）
４．趣味関係のグループ	11．宗教関係の団体や会
５．スポーツ関係のグループやクラブ	12．その他のグループや団体
６．学習・教養のグループやサークル	（　　）
７．ボランティアのグループ	

⇩

※上記のグループや団体の活動には、合計でどのくらい参加していますか。

１．週１回以上	２．月１～３回
３．月１回未満	４．この１年間は参加せず

Ｆ７　あなたはふだん、御自分で健康だと思われますか。次の中から、**当てはまる番号一つに**○**を**付けてください。

１．とても健康だ	２．まあ健康な方だ
３．余り健康ではない	４．健康ではない

＜質問はこれで終わりです。御回答ありがとうございました。＞

講　　座　　名

アンケート（第２回）

ＩＤ：	氏名：
記入日：	点検者：

※アンケートのお願い

本アンケートは、○○市教育委員会に御協力いただき、国立教育政策研究所が高齢者の学びを通じた地域参画の在り方を検討する上での資料を得るために実施するものです。以下の注意書きをお読みいただき、アンケートに御協力をお願いします。

※アンケートに御記入いただくに当たっての注意

◆ アンケートは６ページまであります。指示に沿ってお進みください。

◆ 質問によっては、判断がつきにくい場合や答えにくい場合があるかと思いますが、余り深く考え込まず、最も近いものを選んでください。

◆ 集計結果につきましては、国立教育政策研究所が刊行する報告書やホームページ等を通じて公表されます。ただし、回答内容は統計的に処理され、個人が特定される形では公表されません。

◆ 御回答いただいた調査票につきましては、厳重に保管し、調査研究終了後,５年以内に廃棄処分します。

◆ アンケートへの協力は自由意志です。アンケートに御協力いただけなかった場合でも、不利益になるようなことは一切ありません。

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター
波塚章生、市川重彦

チェック欄

※私は、このアンケートの趣旨について十分な説明を受けた上で回答に協力します。 ☐

本講座を受講された感想についてお伺いします

問１．あなたは本講座での学習を通じて、どのような効果がありましたか。
以下の１～９のうち、当てはまる番号　全てに○を付けてください。

１．時間を有効に活用することができた
２．幅広い知識や技能が身についた
３．健康の維持や老化防止ができた
４．新しいことにチャレンジする気持ちが持てた
５．講座以外でも参加者と交流ができるようになった
６．仲間ができた
７．地域のために何か活動する具体的な計画ができた
８．特に効果はなかった
９．その他（　　）

問２．本講座を受講された感想をお聞かせください。以下のＡ～Ｄの質問ごとに、最も
当てはまる番号に　一つずつ○を付けてください

本講座を受講して……	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
Ａ．これからの**生活に役立つ**と思いますか	1	2	3	4
Ｂ．これからの**地域活動に役立つ**と思いますか	1	2	3	4
Ｃ．**プログラム内容**は適切であったと思いますか	1	2	3	4
Ｄ．**講座の運営**は、全体として適切であったと思いますか	1	2	3	4

今回の講座を受講して、お感じになったことがありましたら、御自由にお書きください。

あなたの学習活動の希望についてお伺いします

問３．あなたは、今後、どのような場所や形態で学習活動を行いたいと思いますか。以下の１～13のうち、**当てはまる番号　全てに**○を付けてください。

１．公民館など公的な機関における講座や教室

２．自宅での学習活動（書籍など）

３．同好会が自主的に行っている集まり、サークル活動

４．カルチャーセンターやスポーツクラブなど民間の講座や教室、通信教育

５．職場の教育、研修

６．情報端末やインターネット

７．テレビやラジオ

８．図書館、博物館、美術館

９．学校（高等学校、専門、各種学校、大学など）の公開講座や教室

10．子供たちとの交流活動

11．学びの成果を生かした地域活動

12．特に行いたい学習活動はない

13．その他（　　）

あなたの日常生活の状況についてお伺いします

問４．あなたの日常の活動性についてお伺いします。以下のＡ～Ｍの質問ごとに、**「はい」又は「いいえ」**に○を付けてください。

※　以下の「できますか」の質問については、「やろうと思えばできる」という場合は「はい」に○を付けてください。

Ａ．バスや電車を使って一人で外出**できますか**	はい	いいえ
Ｂ．日用品の買物が**できますか**	はい	いいえ
Ｃ．自分で食事の用意が**できますか**	はい	いいえ
Ｄ．請求書の支払が**できますか**	はい	いいえ
Ｅ．銀行預金・郵便貯金の出し入れが**できますか**	はい	いいえ
Ｆ．年金などの書類が書けますか	はい	いいえ
Ｇ．新聞を読んでいますか	はい	いいえ
Ｈ．本や雑誌を読んでいますか	はい	いいえ
Ｉ．健康についての記事や番組に関心がありますか	はい	いいえ
Ｊ．友達の家を訪ねることがありますか	はい	いいえ
Ｋ．家族や友達の相談に乗ることがありますか	はい	いいえ
Ｌ．病人を見舞うことが**できますか**	はい	いいえ
Ｍ．若い人に自分から話しかけることがありますか	はい	いいえ

あなたの家族や人との交流状況についてお伺いします

問５．友人や近所の方、別居の家族や親戚との付き合いについて伺います。
以下のＡ～Ｄの質問ごとに、あなたのお付き合いの状況として、**当てはまる番号に一つずつ**○を付けてください。

※　該当する関係の方がいない場合（別居の家族・親戚がいないなど）は、「5（年に数回程度／全くない）」とします。

	週に２回以上	週に１回程度	月に２～３回	月に１回程度	年に数回程度/全くない
Ａ．友人や近所の方と、会ったり、一緒に出かけたりすることは、どのくらいありますか	1	2	3	4	5
Ｂ．友人や近所の方と、電話で話すことはどのくらいありますか（電子メールやファックスを含む）	1	2	3	4	5
Ｃ．別居の家族や親戚と、会ったり、一緒に出かけたりすることは、どのくらいありますか	1	2	3	4	5
Ｄ．別居の家族や親戚と、電話で話すことはどのくらいありますか（電子メールやファックスを含む）	1	2	3	4	5

あなたのお考え・お気持ちについてお伺いします

問６．あなたのお気持ちについて、以下のＡ～Ｅの質問ごとに、２週間のあなたの状態に**最も近いものに一つずつ**○を付けてください。

最近２週間、私は・・・	いつも	ほとんどいつも	半分以上の期間を	半分以下の期間を	ほんのたまに	全くない
Ａ．明るく、楽しい気分で過ごした	1	2	3	4	5	6
Ｂ．落ち着いた、リラックスした気分で過ごした	1	2	3	4	5	6
Ｃ．意欲的で、活動的に過ごした	1	2	3	4	5	6
Ｄ．ぐっすりと休め、気持ちよく目覚めた	1	2	3	4	5	6
Ｅ．日常生活の中に、興味あることがたくさんあった	1	2	3	4	5	6

問７．世間一般の人又は近隣の人に対するあなたのお考えをお尋ねします。
以下のＡ～Ｃの質問ごとに、**あなたの感じ方を最もよく表している番号に一つずつ**○を付けてください。

	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらともいえない	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
Ａ．一般に人は信頼できる	1	2	3	4	5
Ｂ．一般に人は他人とのつながりを大事にする	1	2	3	4	5
Ｃ．一般に人は他人の役に立とうとする	1	2	3	4	5

＜質問はこれで終わりです。御回答ありがとうございました。＞

講座参加者への質問紙調査結果

１．質問紙調査の概要

（1）　実施時期

講座名	第１回アンケート	第２回アンケート
①即興劇による仲間と健康づくり講座（秩父市）	平成28年10月16日（日）第３回 10月29日（土）第４回 11月19日（土）第５回 ※所内手続き（倫理委員会）で初回に間に合わず	平成28年12月17日（土）第６回
②想い出語りボランティア講座（浦安市）	平成28年10月19日（水）第３回 10月26日（水）第４回 ※所内手続き（倫理委員会）で初回に間に合わず	平成28年11月９日（水）第６回
③秩父市の他の公民館講座		
ア．エコクラフト（荒川公民館）	平成28年11月11日（金）第１回	平成29年３月10（金）第５回
イ．パン作り教室（荒川公民館）	平成28年11月13日（日）第１回	平成29年２月９日（木）第４回
④浦安市の他の公民館講座		
ア．人生をもっと楽しもう！男性専科（高洲公民館）	平成28年10月18日（火）第１回	平成28年11月１日（火）第３回
イ．元気な今だから準備する終活のあれこれ講座（富岡公民館）	平成28年11月14日（月）第１回	平成28年11月22日（火）第２回
ウ．スポーツ吹き矢@NEKOZANE（中央公民館）	平成28年11月18日（金）第１回	平成29年４月21日（金）第６回
エ．シニアサロン「ひのでCaféあそんで学んで豊かな人生」（日の出公民館）	平成28年12月26日（月）第１回	平成29年３月27日（月）第４回

(2)　実施方法

①　「即興劇による仲間と健康づくり講座」（秩父市）と「想い出語りボランティア講座」（浦安市）は、社会教育実践研究センター職員が記入相談及び回収を行った。

②　他の公民館講座は、原則として各公民館職員が記入相談及び回収を行った（一部郵送による回収あり）。

③　第１回実施時の欠席者には、次回以降に回答を頂いた。

(3)　回答者数

①　第１回

区分	秩父市			浦安市				
	即興劇	エコクラフト	パン作り	想い出語り	男性専科	終活	吹き矢	シニアサロン
回答者数	21	10	7	16	10	18	24	11

※回ごとに参加人数が異なる。また、１回目のアンケート回答者と２回目のアンケート回答者は必ずしも一致しない。

②　第２回

区分	秩父市			浦安市				
	即興劇	エコクラフト	パン作り	想い出語り	男性専科	終活	吹き矢	シニアサロン
回答者数	10	4	2	15	9	15	21	32

※集計は２月末現在の状況のものである。他の公民館講座の一部は、まだ講座が終了していないものがある。

２．モデル事業における第１回質問紙調査の結果（単純集計）

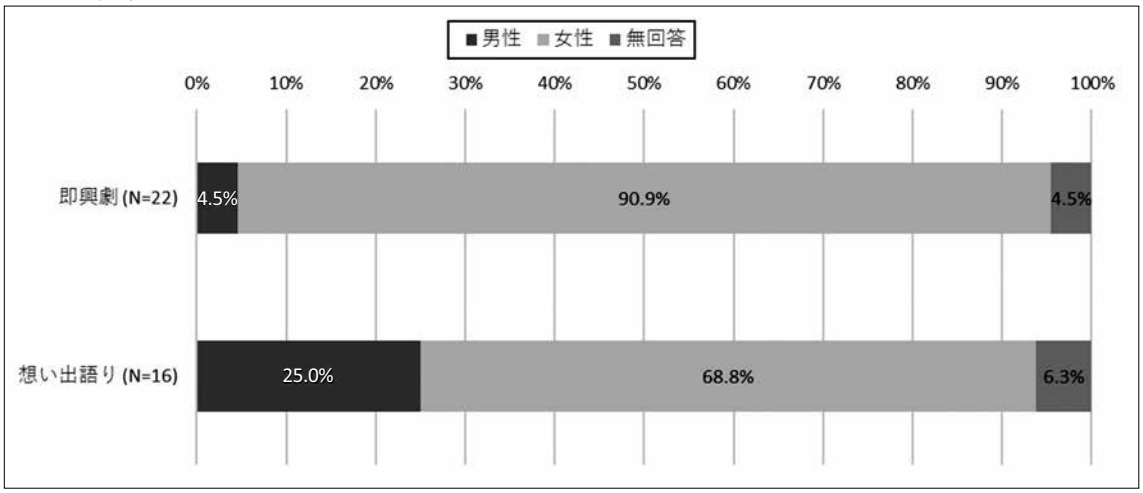
Ｆ１　性別

〈モデル事業の結果〉

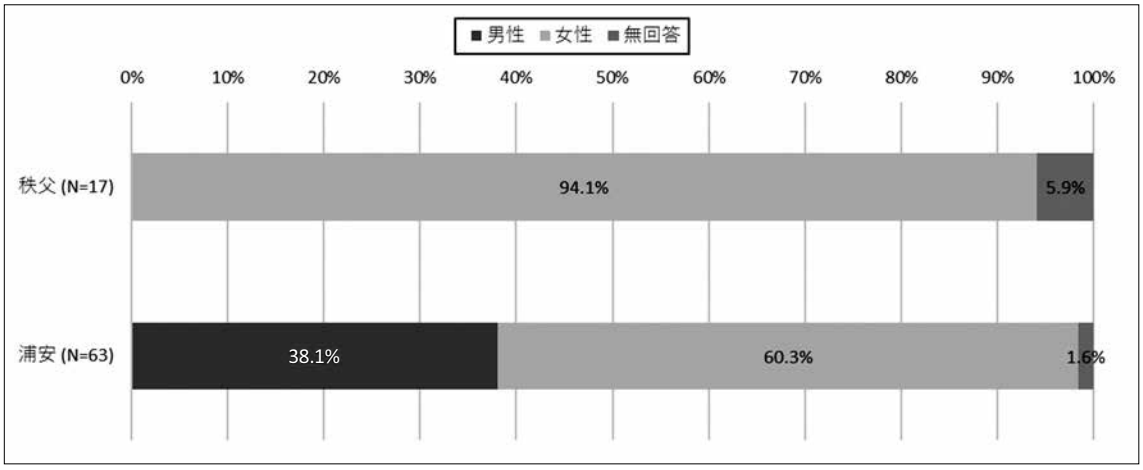
・秩父市の即興劇講座では、「女性」が９割を超える。

・浦安市の想い出語り講座では、「女性」が７割で、「男性」は25%となっている。

モデル事業



その他の講座



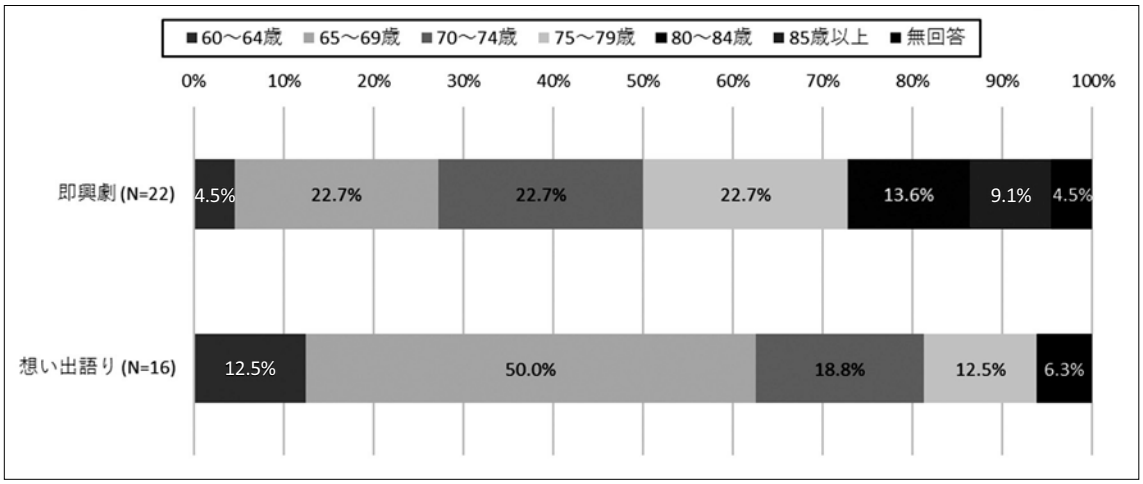
Ｆ２　年齢

〈モデル事業の結果〉

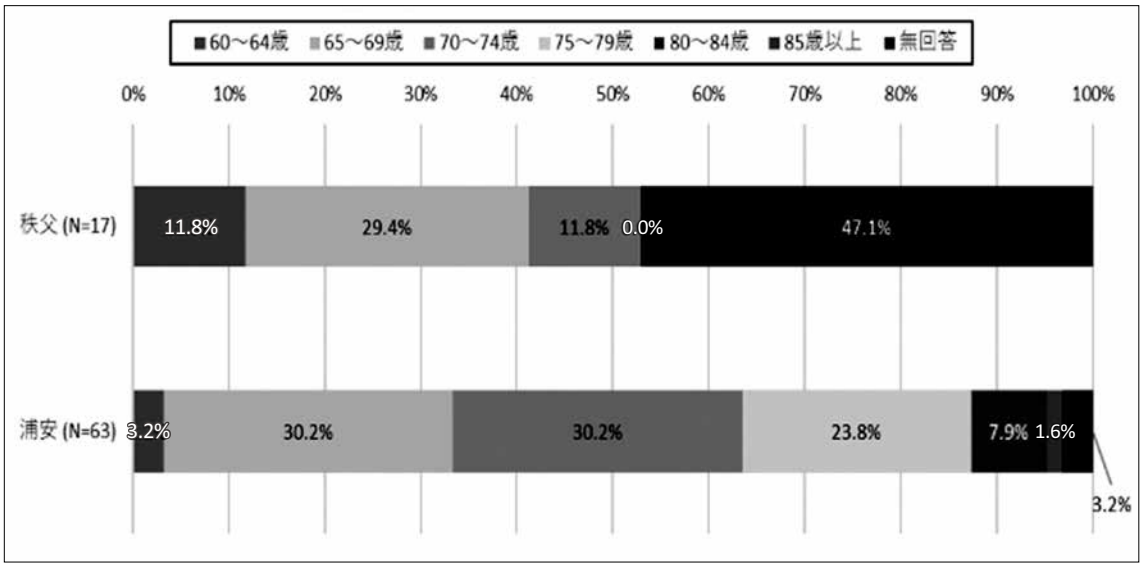
・秩父市の即興劇講座では、「65～69歳」「70～74歳」「75～79歳」が22.7%ずつと最も多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「65～69歳」（50.0%）が最も多く、次いで「70～74歳」（18.8%）、「60～64歳」と「75～79歳」が12.5%ずつとなっている。

モデル事業



その他の講座



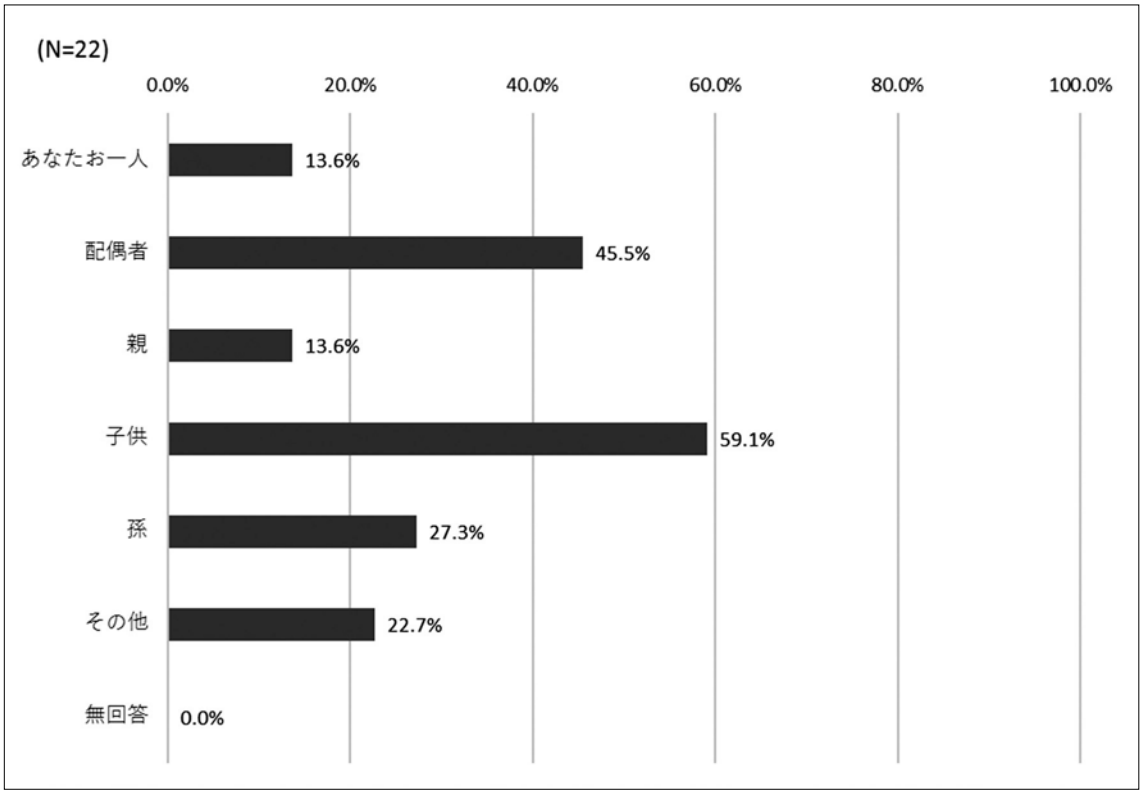
Ｆ３　あなたが今、御一緒にお住まいになっている方はどなたですか。当てはまるもの全てに○を付けて、(　) に人数をお書きください。

〈モデル事業の結果〉

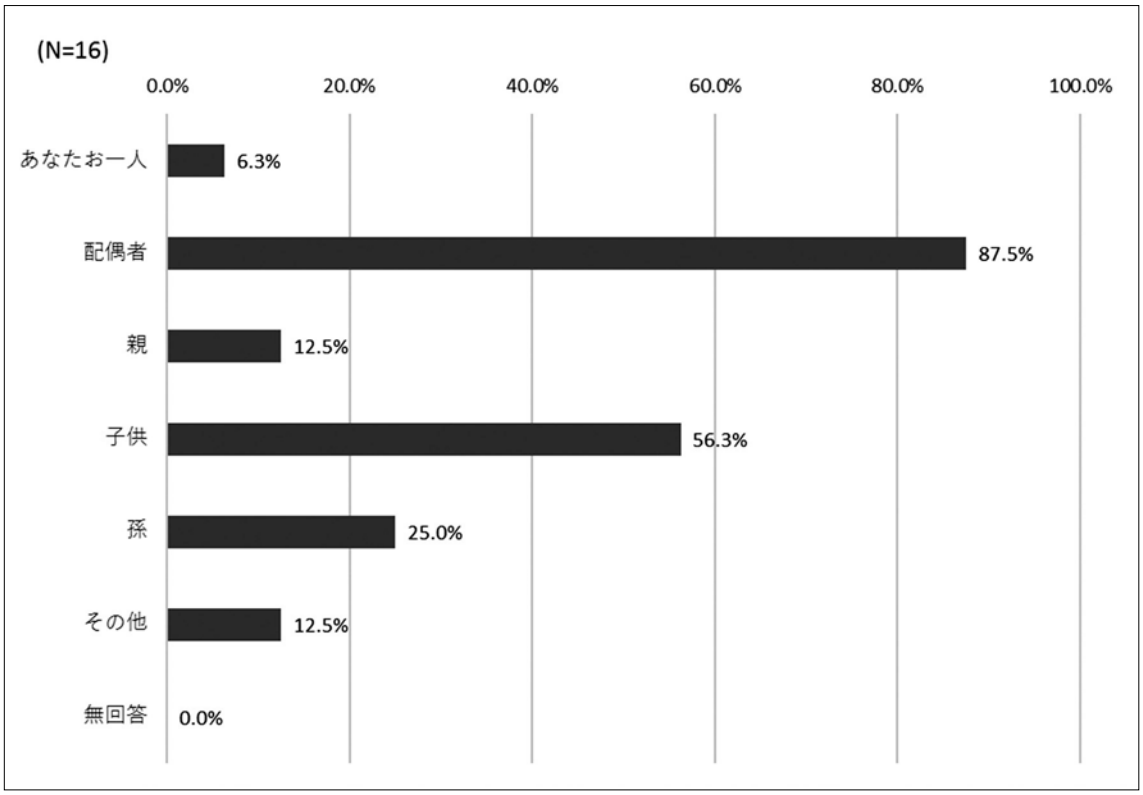
・秩父市の即興劇講座では、「子供」（59.1%）と一緒に暮らしている人が最も多く、次いで「配偶者」（45.5%）、「孫」（27.3%）と暮らしている人が順に多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「配偶者」（87.5%）と一緒に暮らしている人が最も多く、次いで「子供」（56.3%）、「孫」（25.0%）と暮らしている人が順に多い。

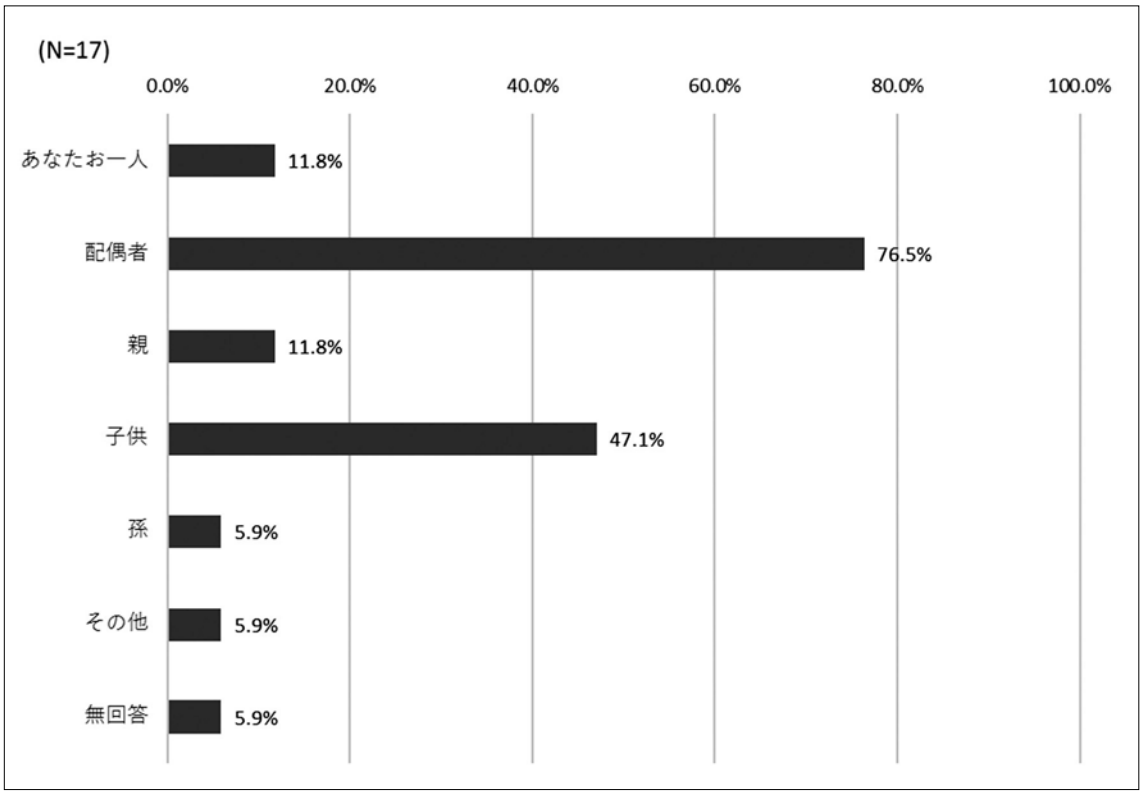
即興劇講座（秩父）　（M. A.）



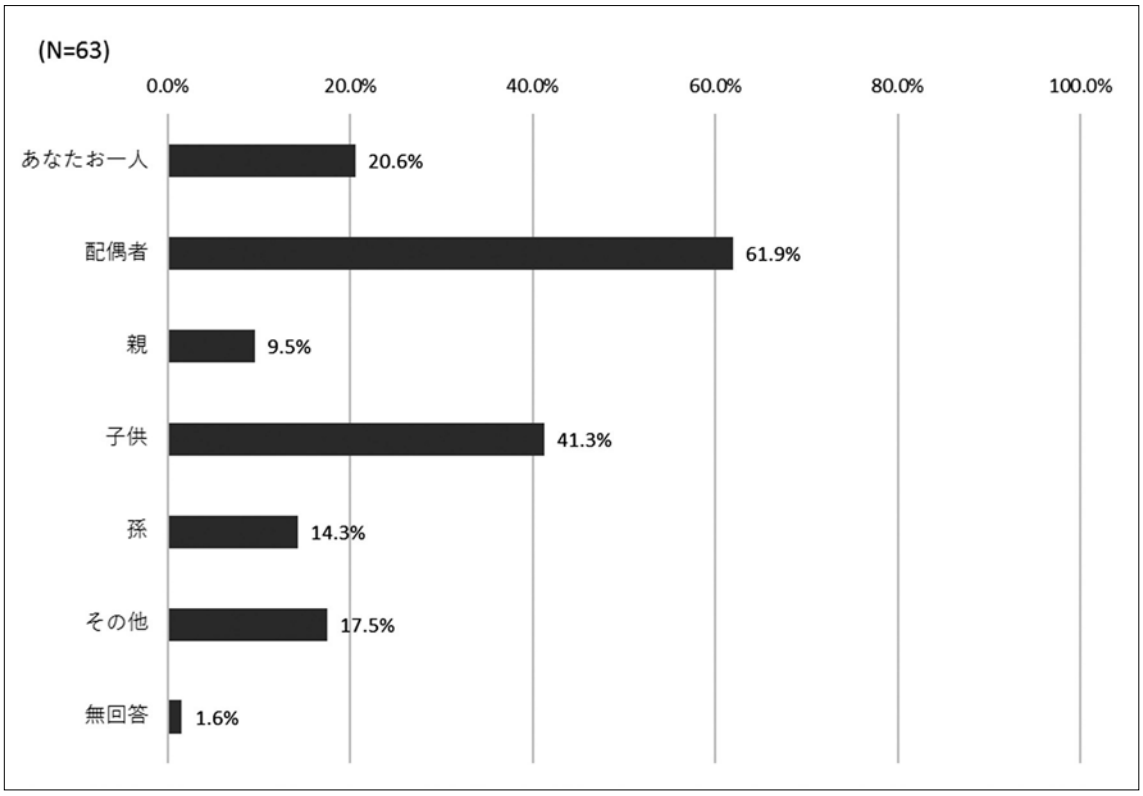
想い出語り講座（浦安）　（M. A.）



秩父市の他の講座　（M. A.）



浦安市の他の講座　（M. A.）



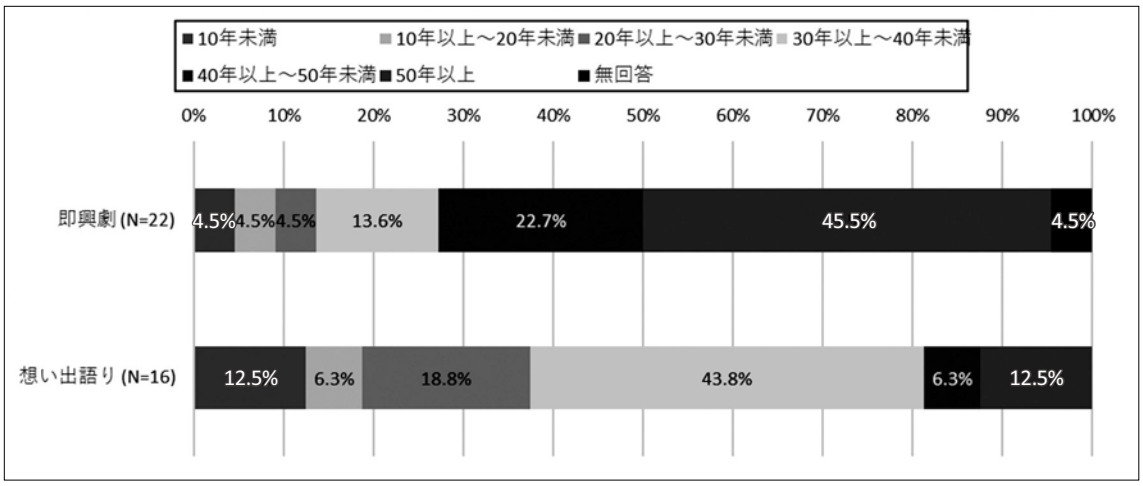
Ｆ４　あなたは、現在の地域にお住まいになってから、何年になりますか。この中から一つだけ〇を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

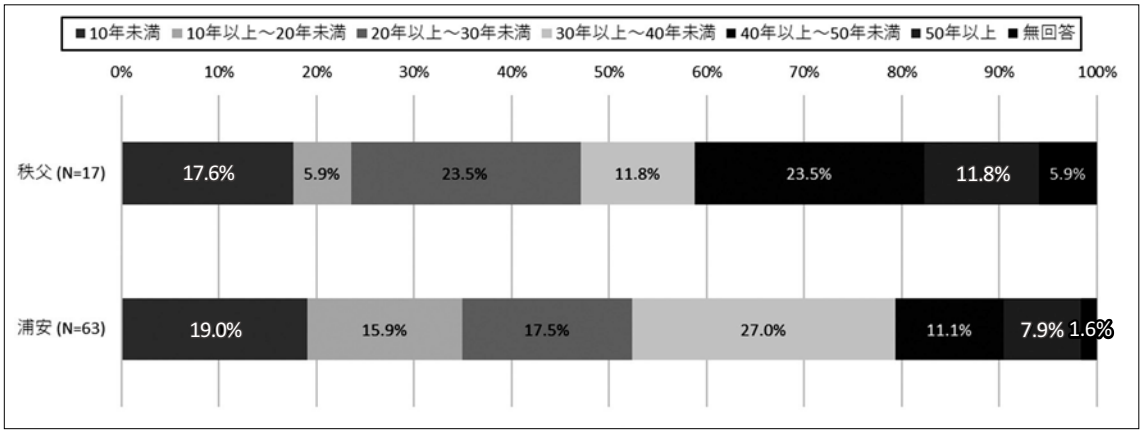
・秩父市の即興劇講座では、「50年以上」（45.5%）暮らしている人が最も多く、次いで「40年以上～50年未満」（22.7%）、「30年以上～40年未満」（13.6%）と長期に住んでいる者が多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「30年以上～40年未満」（43.8%）暮らしている人が最も多く、次いで「20年以上～30年未満」（18.8%）、「10年未満」と「50年以上」が12.5%ずつとなっている。

モデル事業



その他の講座



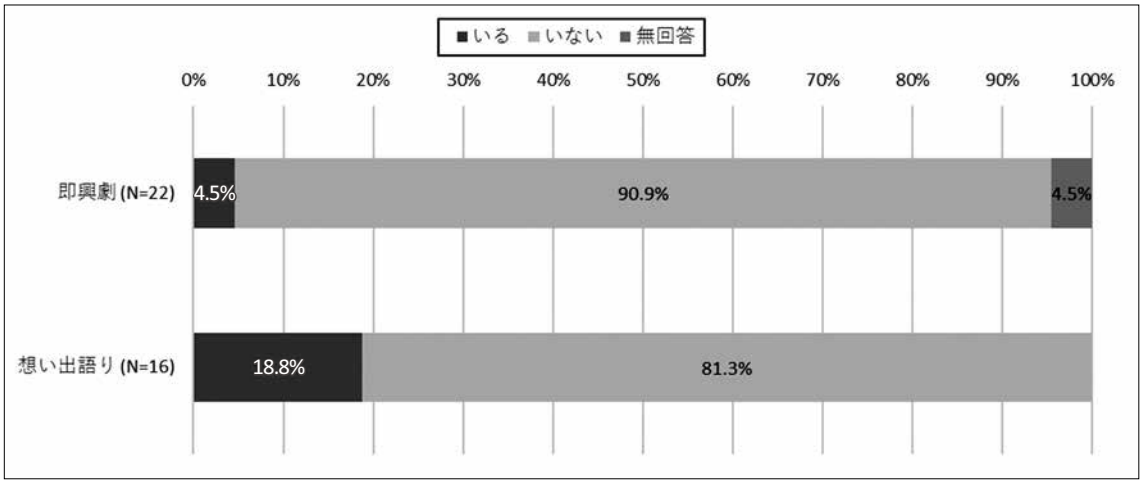
Ｆ５　あなたの御家族で介護を受けている方はいますか。

〈モデル事業の結果〉

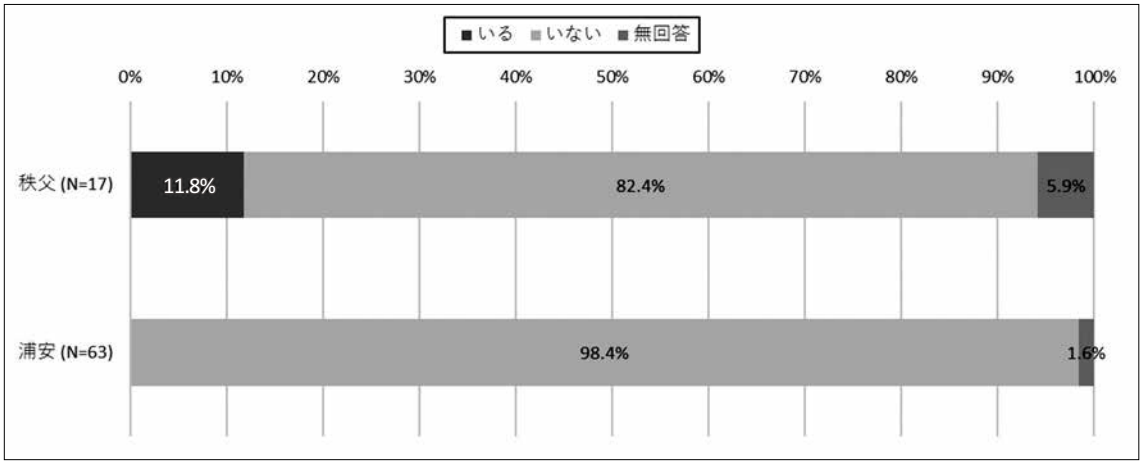
・秩父市の即興劇講座では、「いない」と回答している人が90.9%である。

・浦安市の想い出語り講座では、「いない」と回答している人が81.3%である。

モデル事業



その他の講座



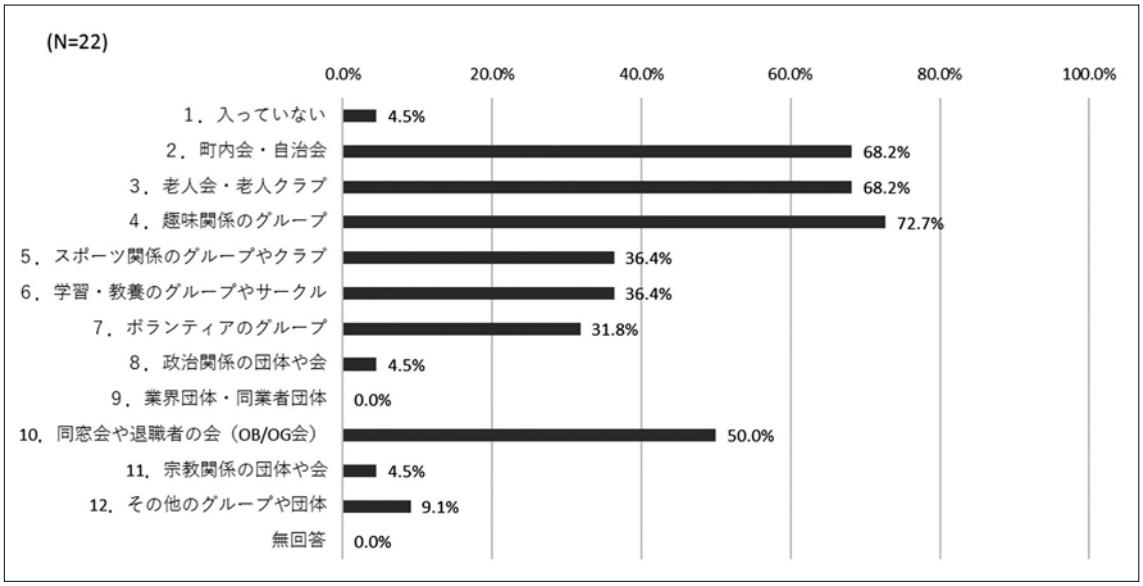
Ｆ６　あなたは、次のようなグループや団体に入っていますか。入っているグループ・団体の全てに○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

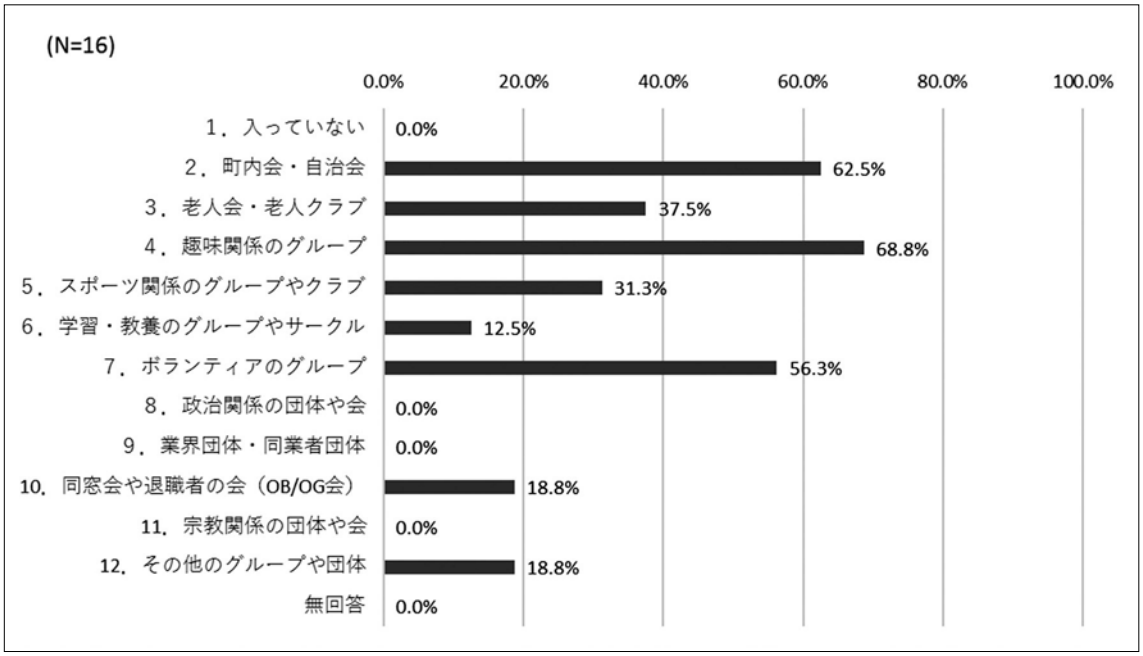
・秩父市の即興劇講座では、「趣味関係のグループ」（72.7%）に入っている人が最も多く、次いで「町内会・自治会」と「老人会・老人クラブ」が68.2%ずつとなっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「趣味関係のグループ」（68.8%）に入っている人が最も多く、次いで「町内会・自治会」（62.5%）、「ボランティアのグループ」（56.3%）となっている。

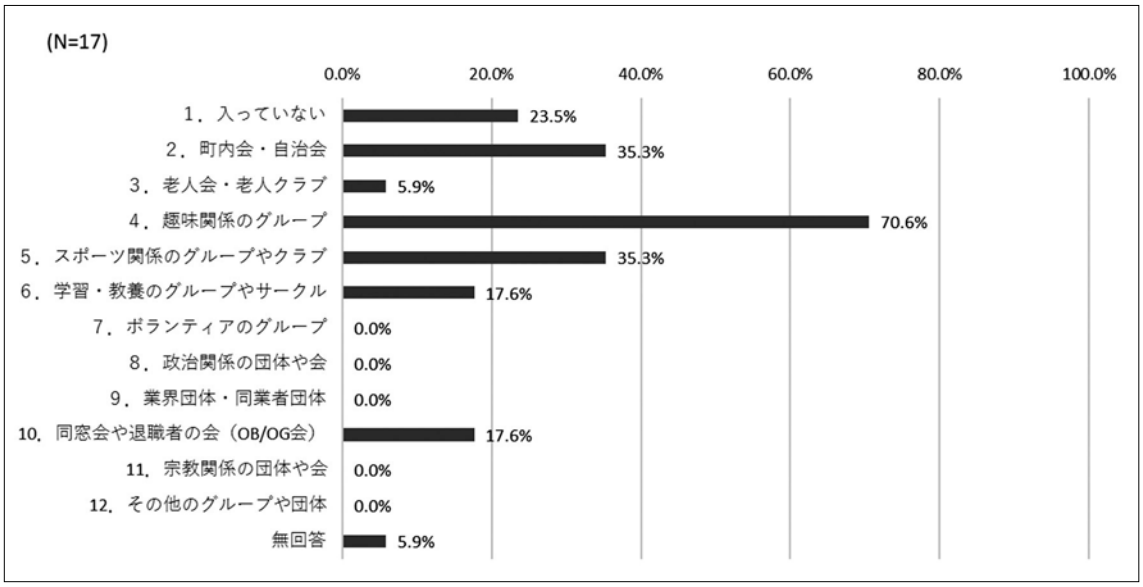
即興劇講座（秩父）　（M. A.）



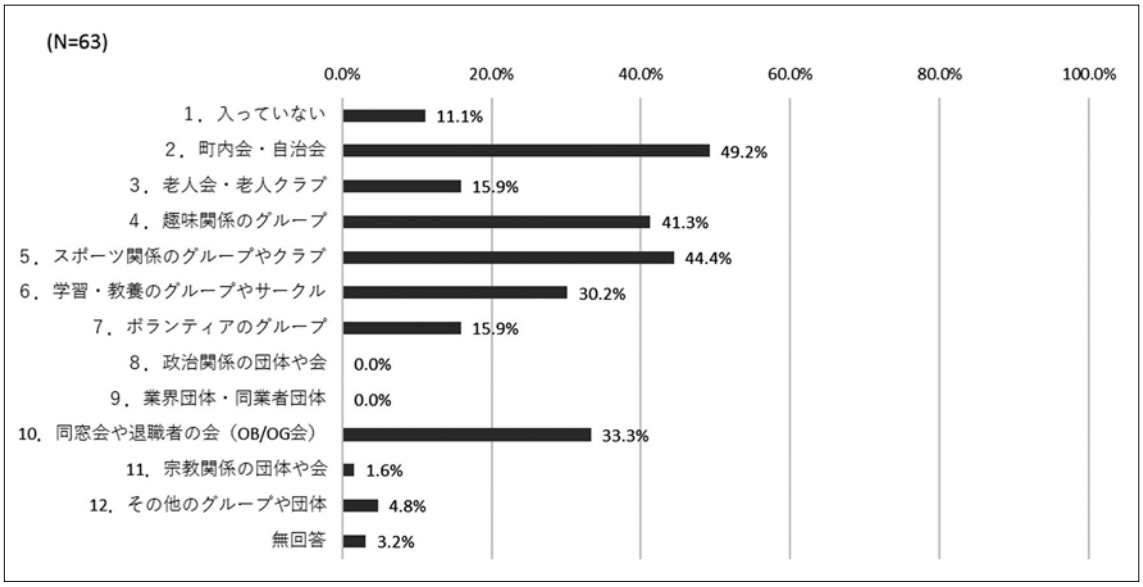
想い出語り講座（浦安）　（M. A.）



秩父市の他の講座　（M. A.）



浦安市の他の講座　（M. A.）



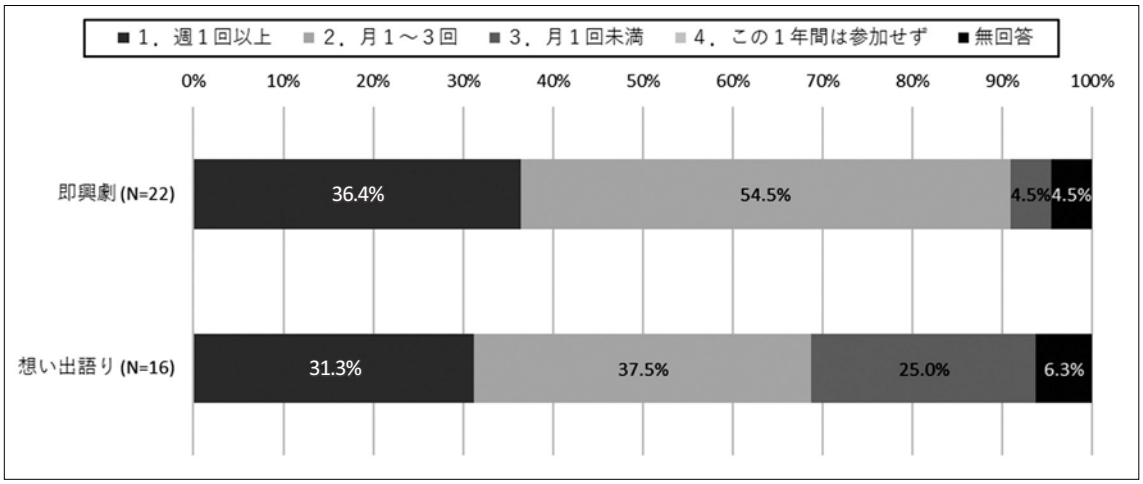
※上記のグループや団体の活動には、合計でどのくらい参加していますか。

〈モデル事業の結果〉

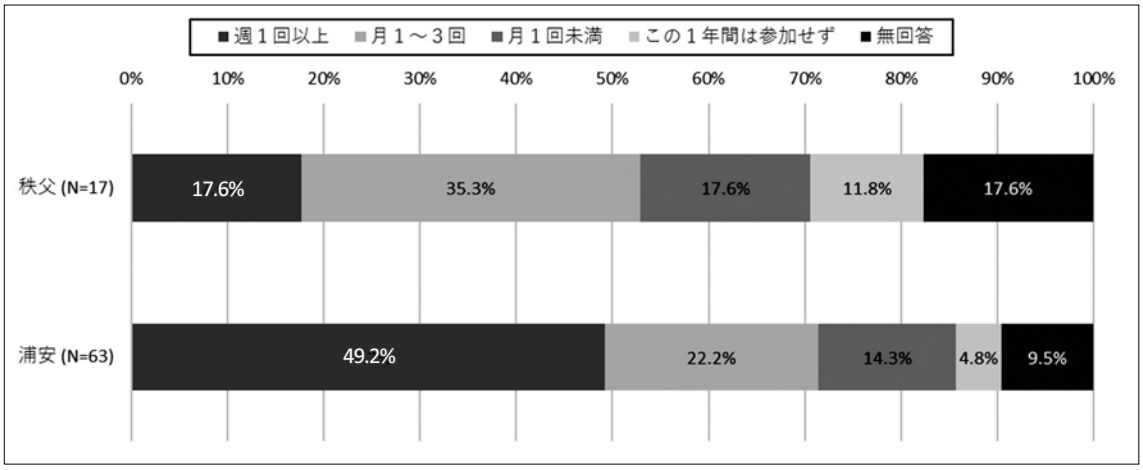
・秩父市の即興劇講座では、「月１～３回」（54.5%）が最も多く、次いで「週１回以上」（36.4%）となっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「月１～３回」（37.5%）が最も多く、次いで「週１回以上」（31.3%）、「月１回未満」（25.0%）となっている。

モデル事業



その他の講座



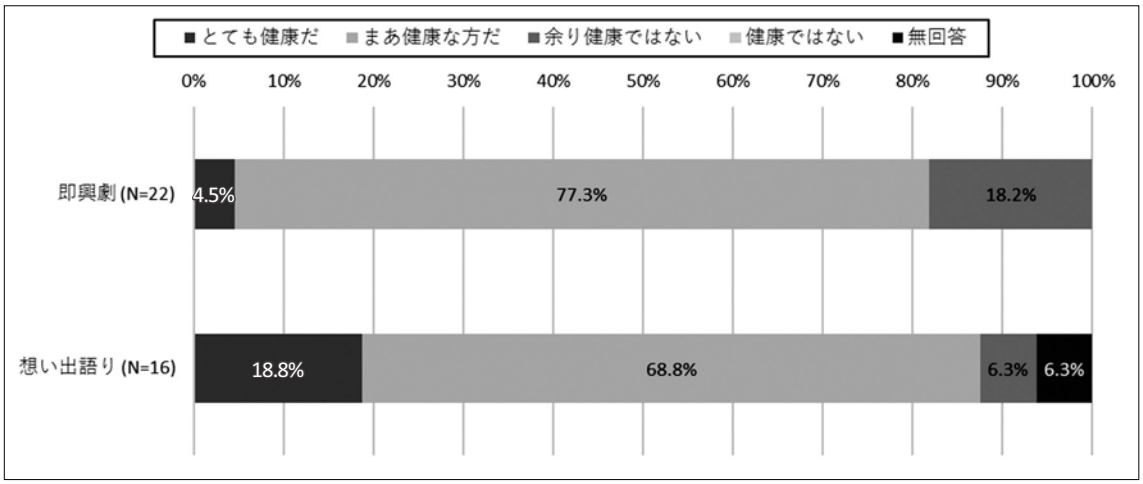
Ｆ７　あなたはふだん、御自分で健康だと思われますか。次の中から、当てはまる番号一つに○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

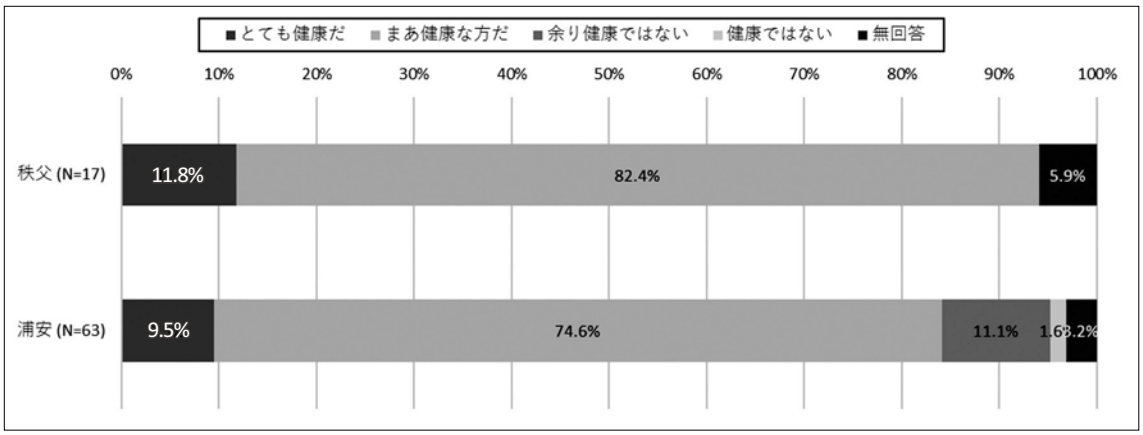
・秩父市の即興劇講座では、「とても健康だ」と「まあ健康な方だ」を合わせると81.8%となっている。また、「余り健康ではない」が18.2%いる。

・浦安市の想い出語り講座では、「とても健康だ」と「まあ健康な方だ」を合わせると87.6%となっている。「余り健康ではない」が6.3%となっている。

モデル事業



その他の講座



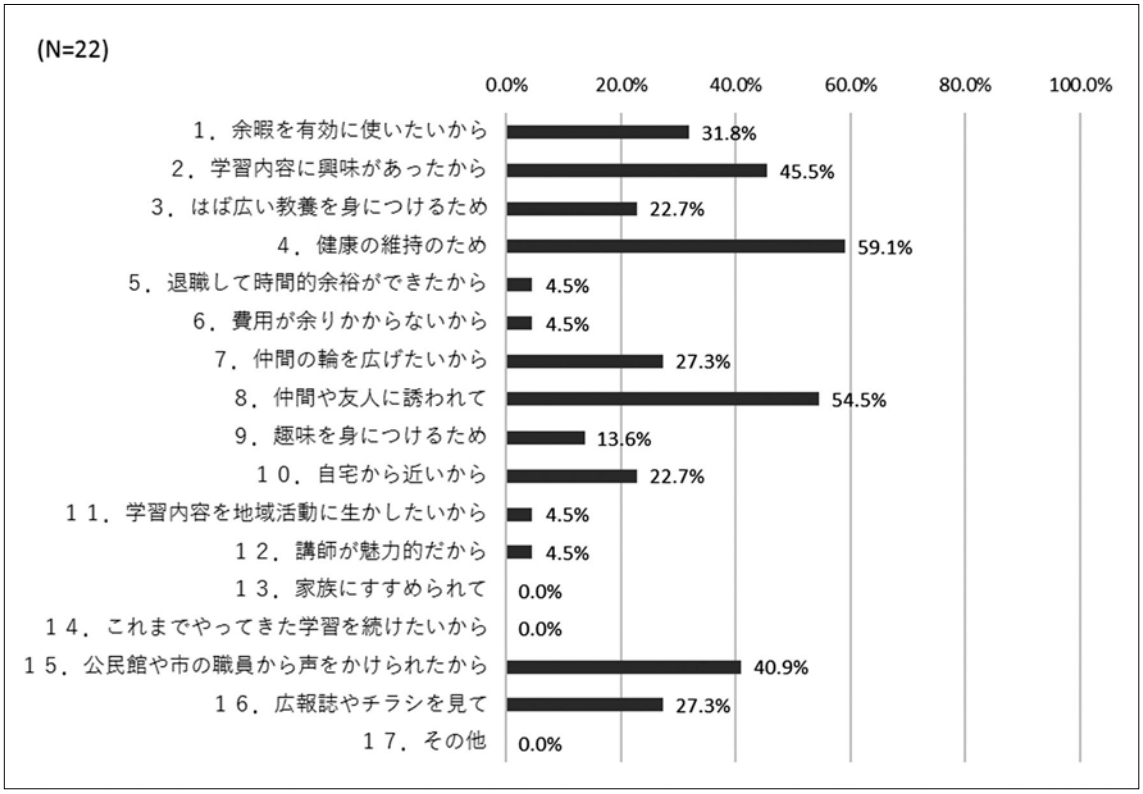
問１．あなたが本講座を受講するようになったきっかけはどのようなものですか。以下の１～17のうち、当てはまる番号全てに○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

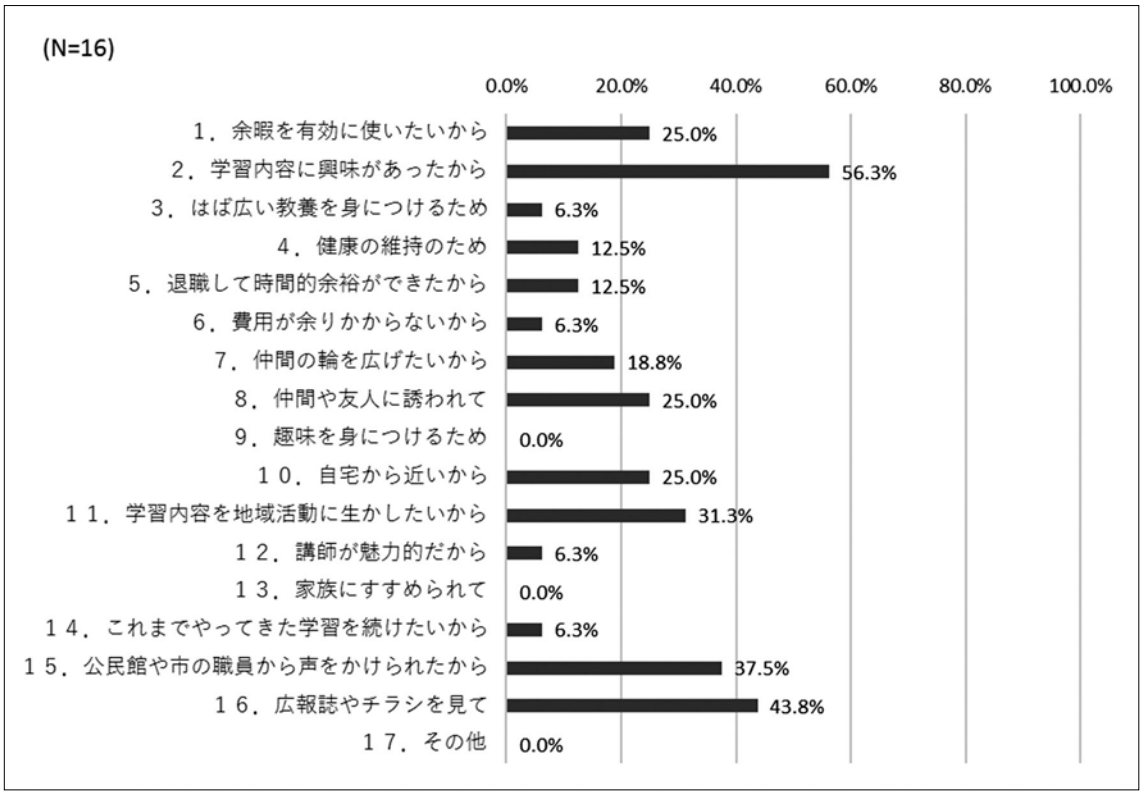
・秩父市の即興劇講座では、「健康の維持のため」（59.1%）が最も多い。次いで、「仲間や友人に誘われて」（54.5%）、「学習内容に興味があったから」（45.5%）の順となっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「学習内容に興味があったから」（56.3%）が最も多い。次いで、「広報誌やチラシを見て」（43.8%）、「公民館や市の職員から声をかけられたから」（37.5%）の順となっている。

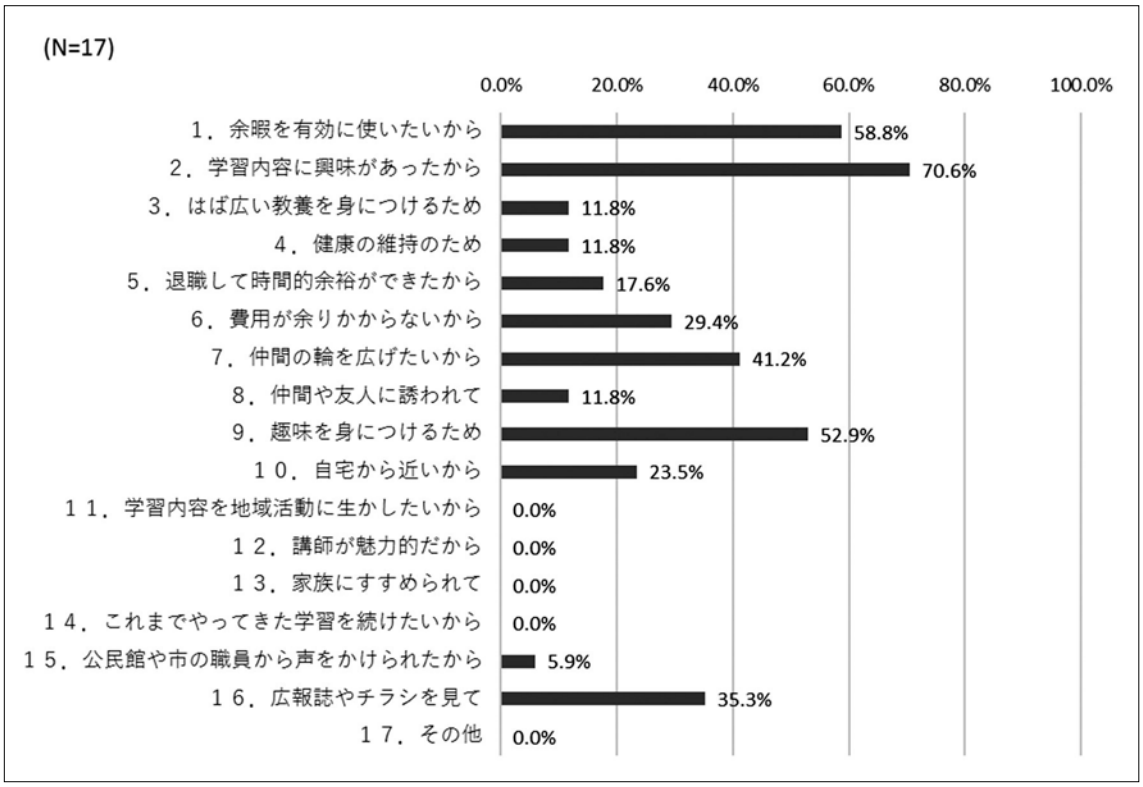
即興劇講座（秩父）　（M. A.）



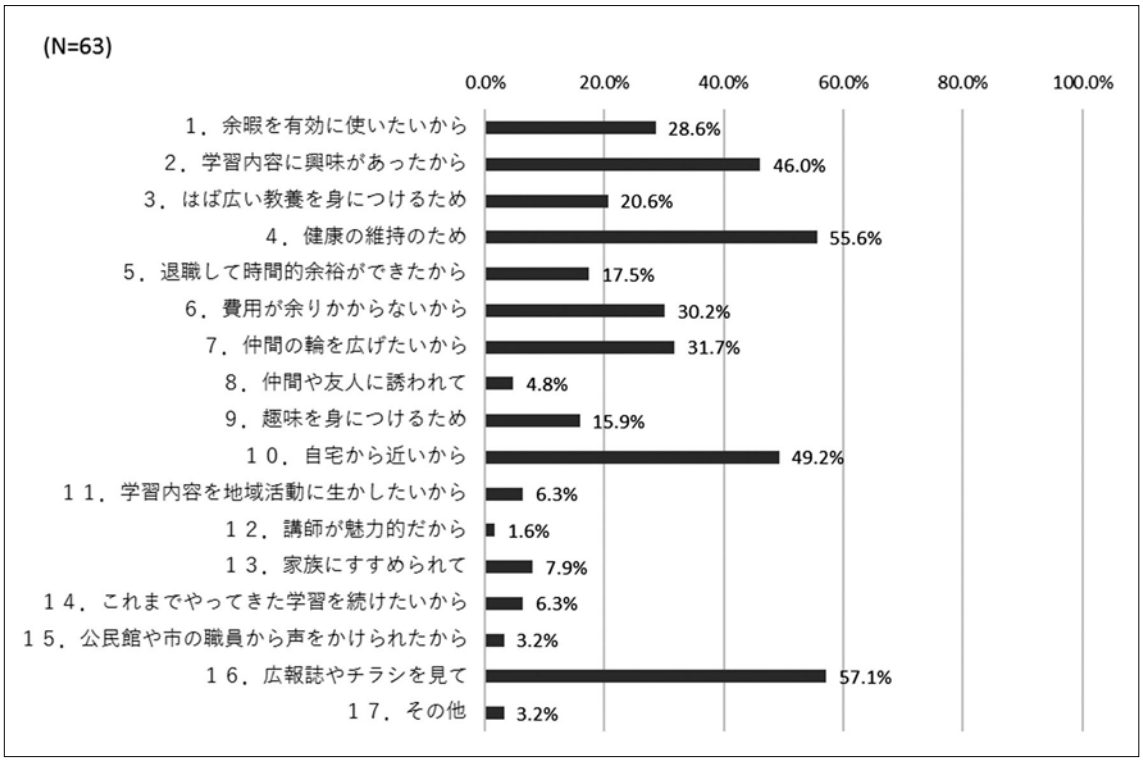
想い出語り講座（浦安）　（M. A.）



秩父市の他の講座　（M. A.）



浦安市の他の講座　（M. A.）



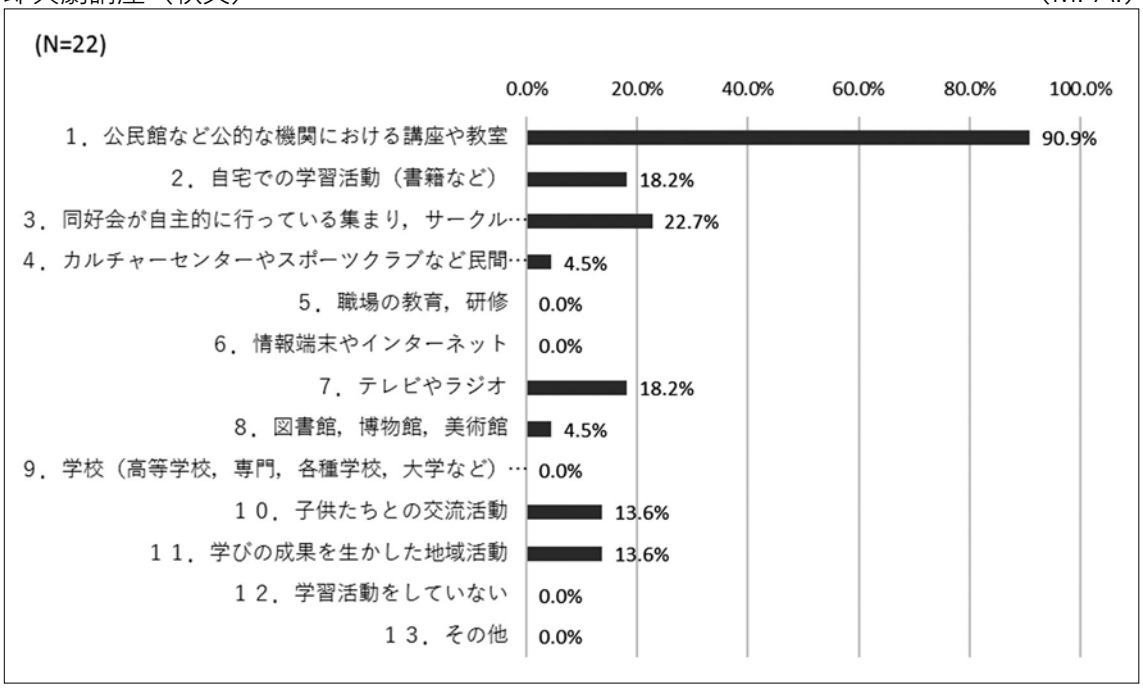
問２．あなたは、この講座を受ける前の１年間にどのような場所や形態で学習活動を行いましたか。以下の１～13のうち、当てはまる番号全てに○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

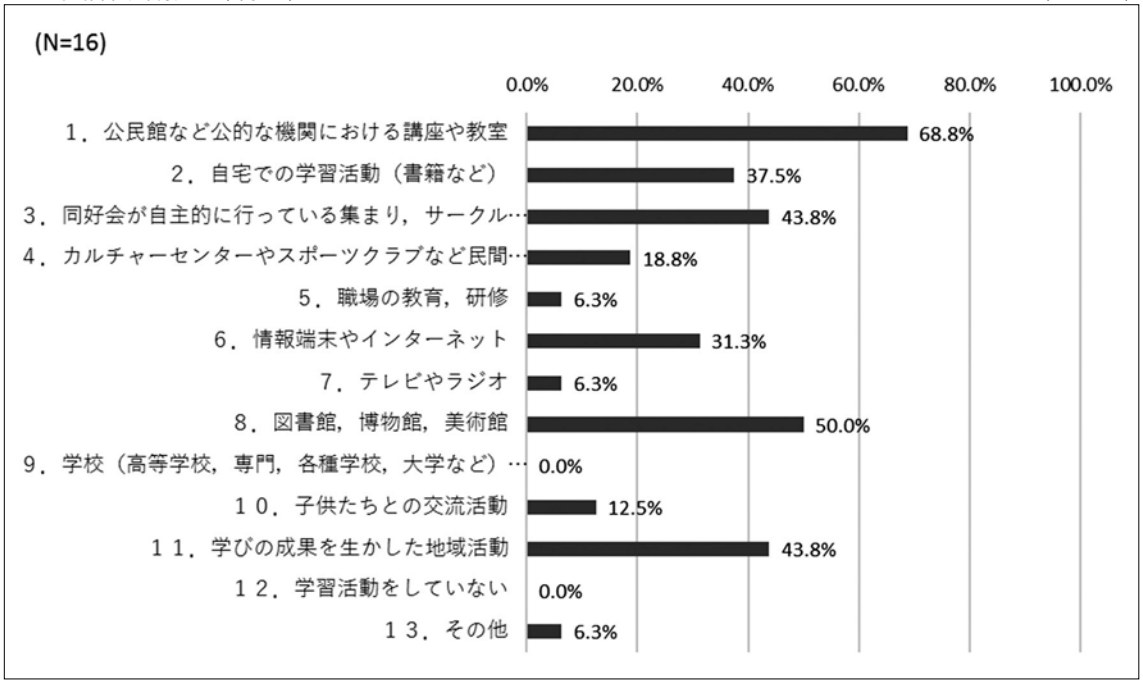
・秩父市の即興劇講座では、「公民館など公的な機関における講座や教室」（90.9%）が最も多い。次いで、「同好会が自主的に行っている集まり、サークル活動」（22.7%）、「自宅での学習活動（書籍など）」（18.2%）、「テレビやラジオ」（18.2%）が順に多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「公民館など公的な機関における講座や教室」（68.8%）が最も多い。次いで、「図書館、博物館、美術館」（50.0%）、「同好会が自主的に行っている集まり、サークル活動」（43.8%）、「学びの成果を生かした地域活動」（43.8%）が順に多い。

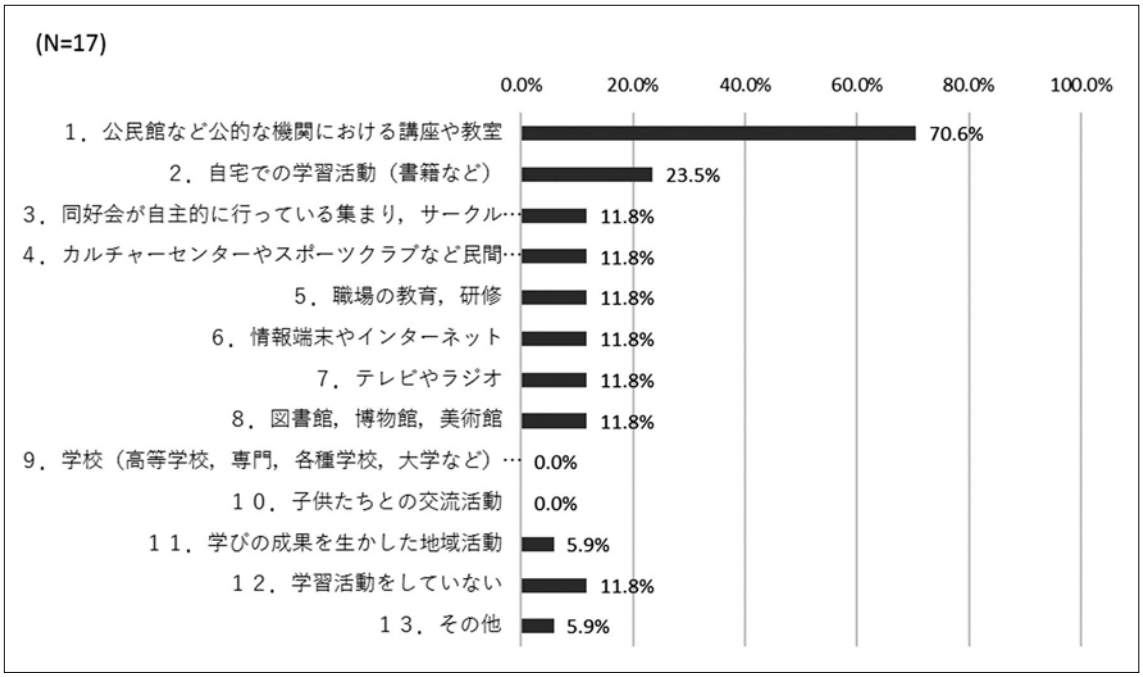
即興劇講座（秩父）　（M. A.）



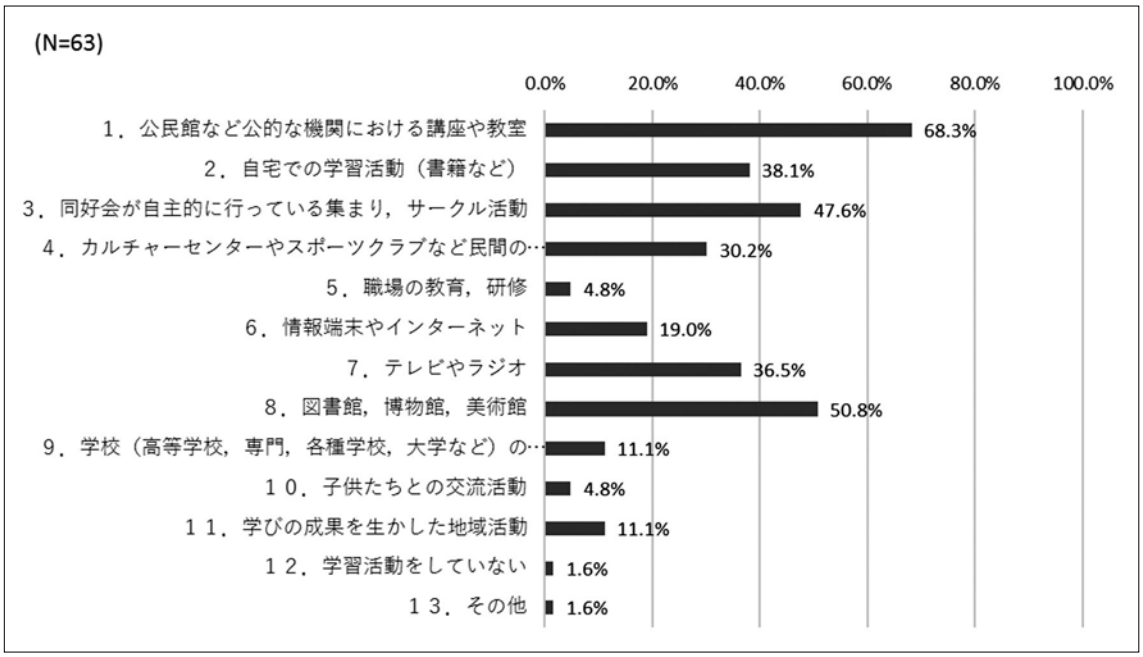
想い出語り講座（浦安）　（M. A.）



秩父市の他の講座　（M. A.）



浦安市の他の講座　（M. A.）



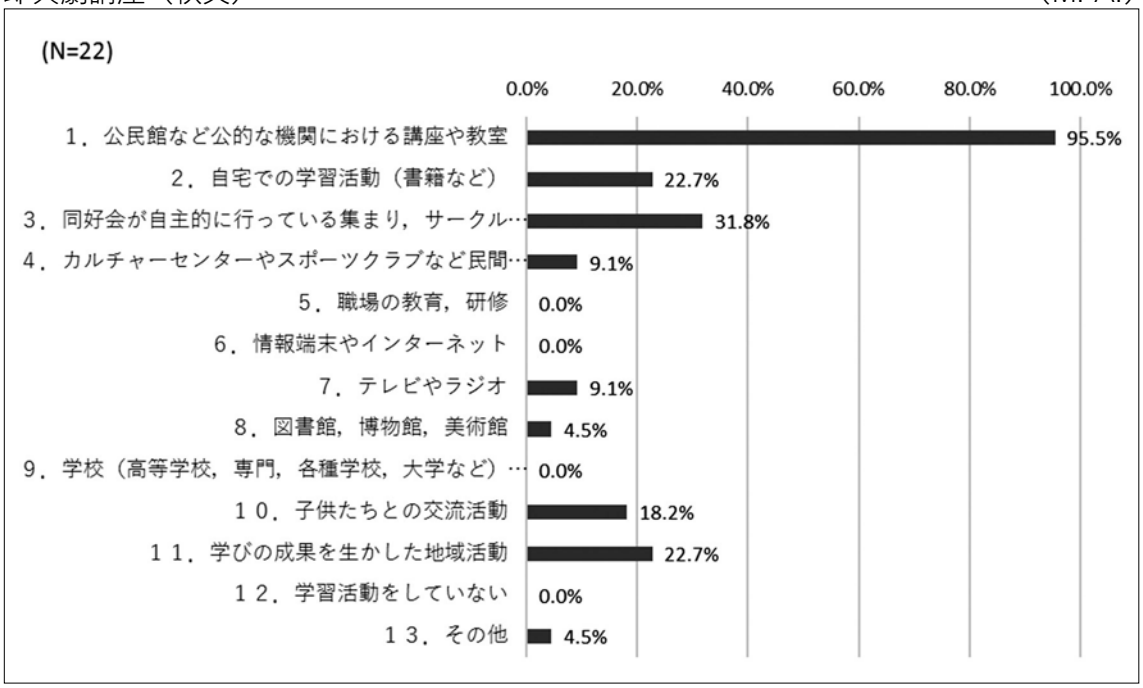
問３．あなたは、今後どのような場所や形態で学習活動を行いたいですか。以下の１～13のうち、当てはまる番号全てに○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

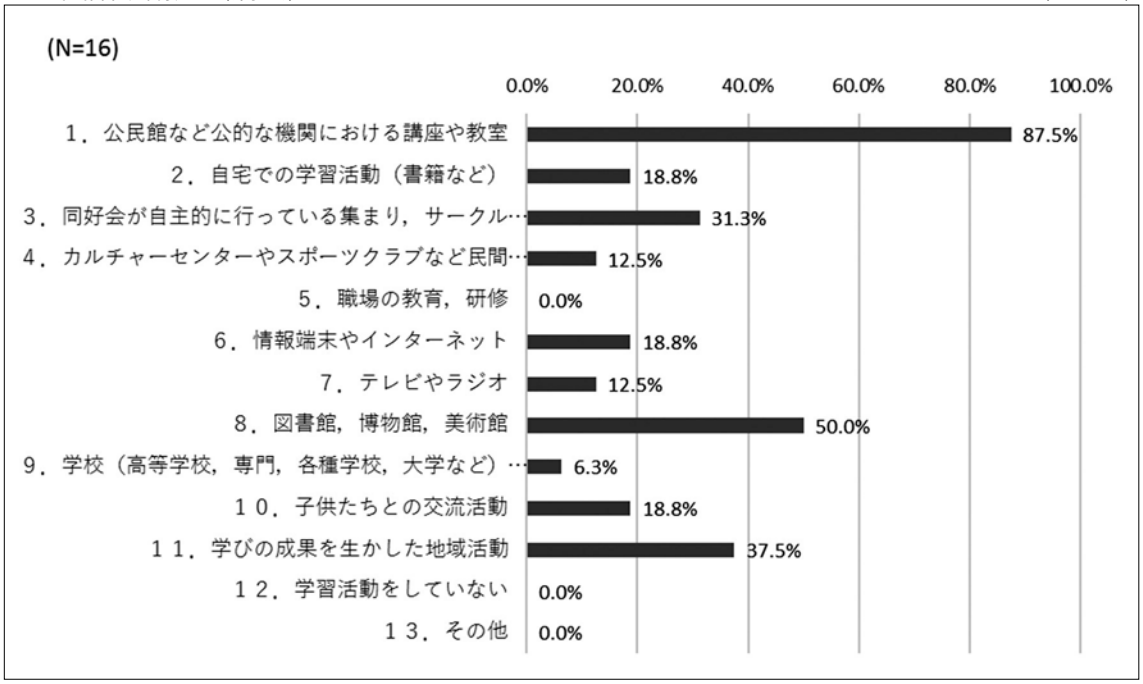
・秩父市の即興劇講座では、「公民館など公的な機関における講座や教室」（95.5%）が最も多い。次いで、「同好会が自主的に行っている集まり、サークル活動」（31.8%）、「自宅での学習活動（書籍など）」（22.7%）、「学びの成果を生かした地域活動」（22.7%）が順に多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「公民館など公的な機関における講座や教室」（87.5%）が最も多い。次いで、「図書館、博物館、美術館」（50.0%）、「学びの成果を生かした地域活動」（37.5%）が順に多い。

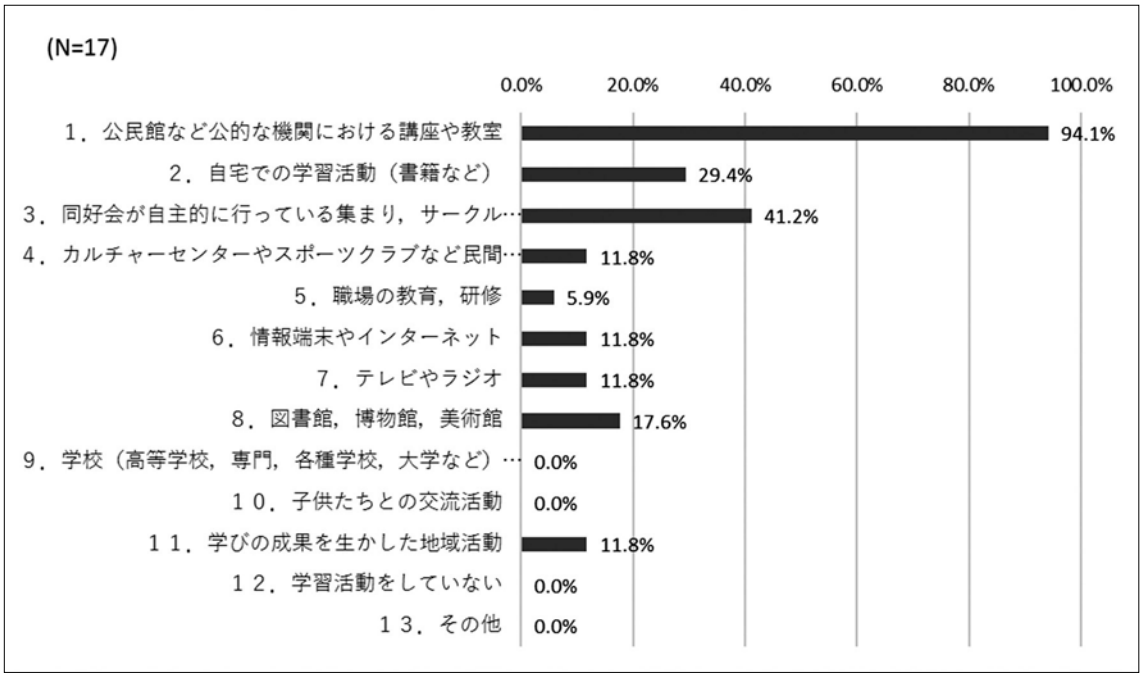
即興劇講座（秩父）　（M. A.）



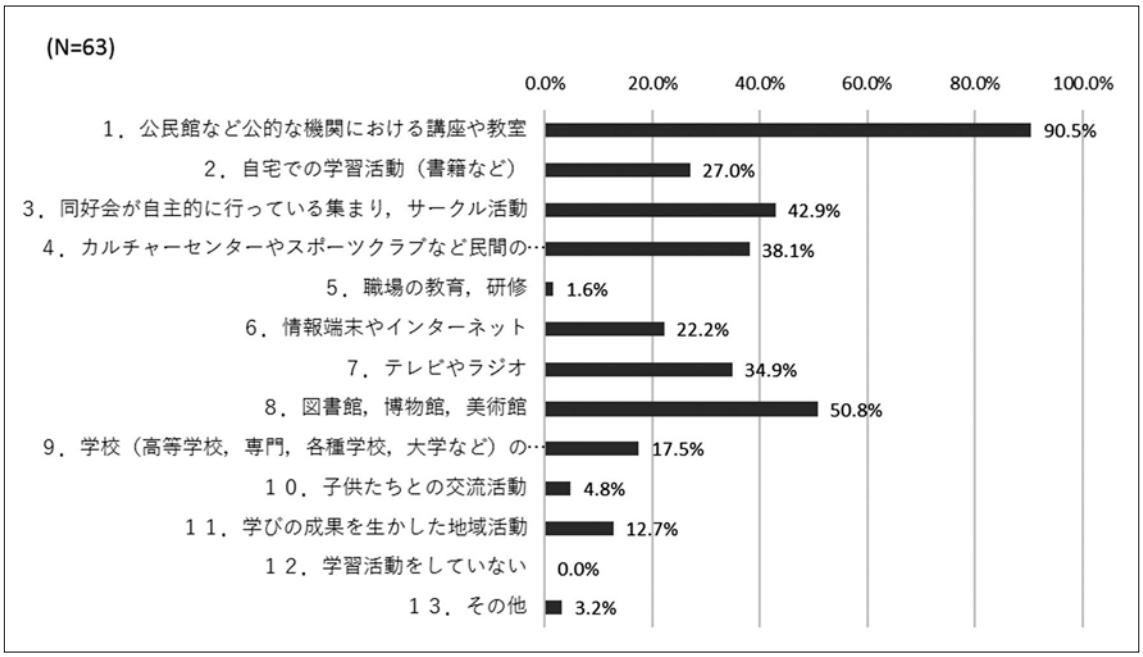
想い出語り講座（浦安）　（M. A.）



秩父市の他の講座　（M. A.）



浦安市の他の講座　（M. A.）



問４．あなたは、本講座を受講するに当たり、どのようなことを期待していますか。以下の１～９のうち、当てはまる番号全てに○を付けてください。

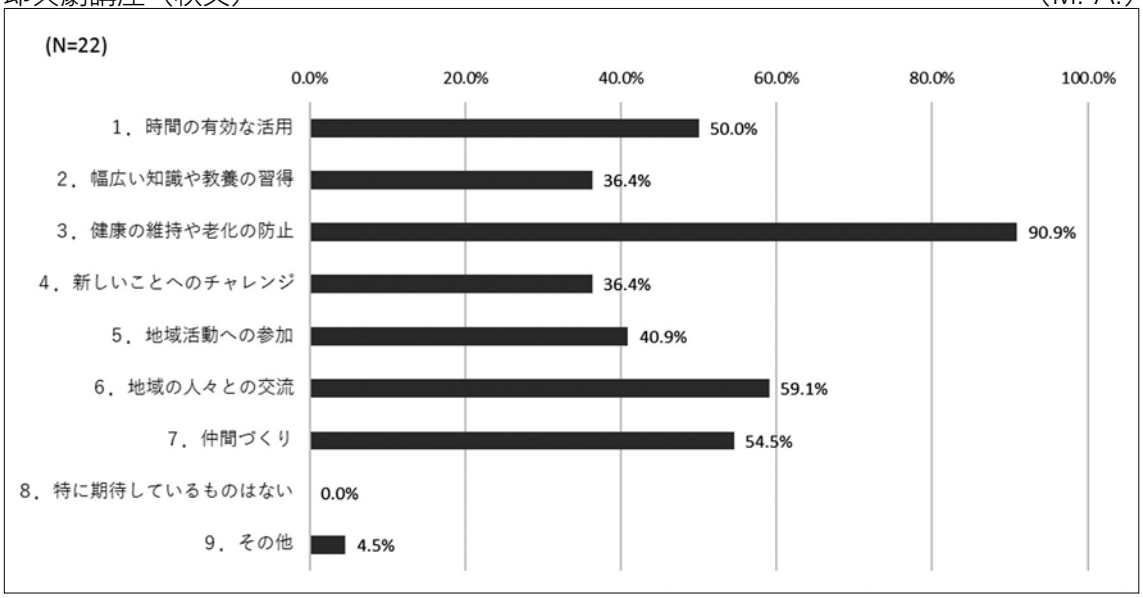
〈モデル事業の結果〉

・秩父市の即興劇講座では、「健康の維持や老化の防止」（90.9%）が最も多い。次いで、「地域の人々との交流」（59.1%）、「仲間づくり」（54.5%）の順となっている。

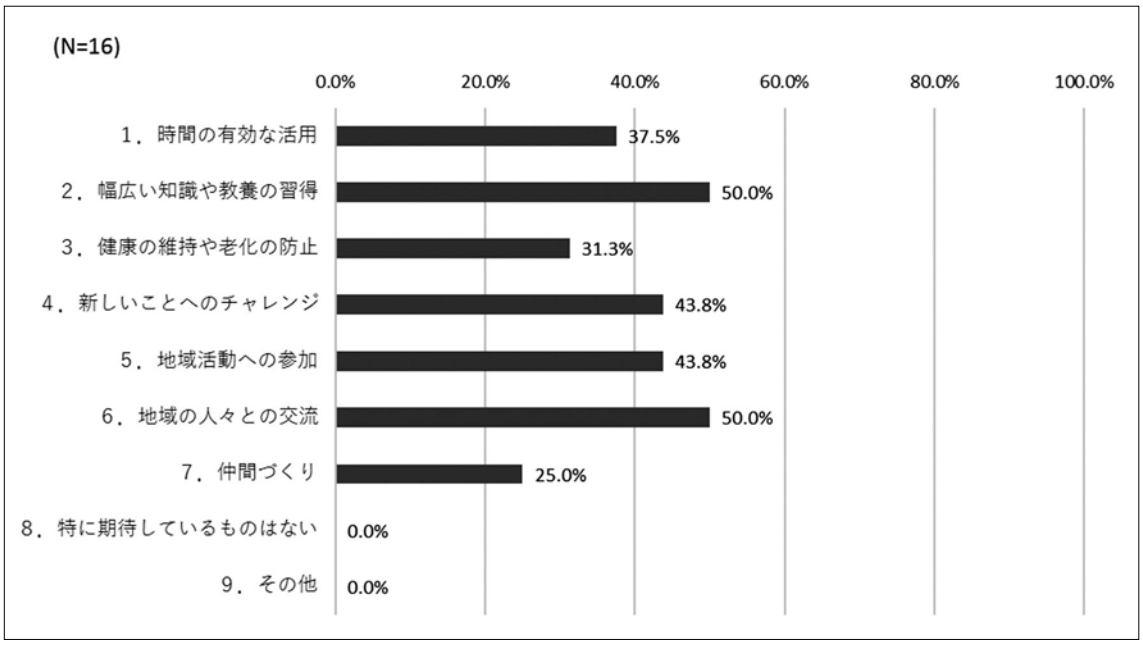
・浦安市の想い出語り講座では、「幅広い知識や教養の習得」（50.0%）と「地域の人々との交流」（50.0%）が最も多い。次いで、「新しいことへのチャレンジ」（43.8%）と「地域活動への参加」（43.8%）の順になっている。

・秩父市及び浦安市ともに、講座の名称やねらいの内容と受講者の期待がほぼ一致していることがわかる。

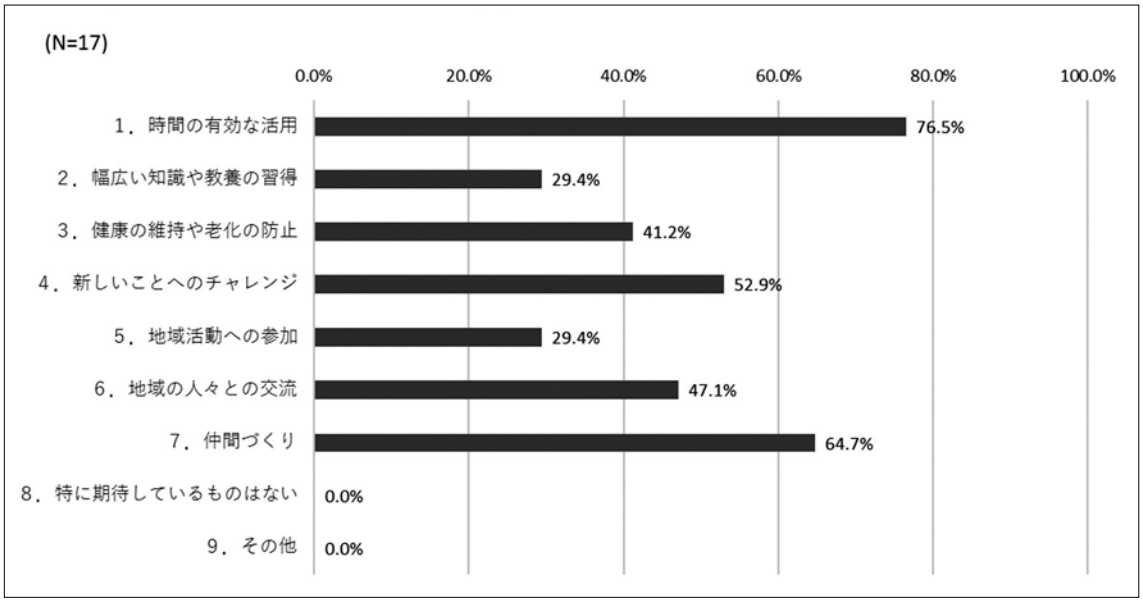
即興劇講座（秩父）　（M. A.）



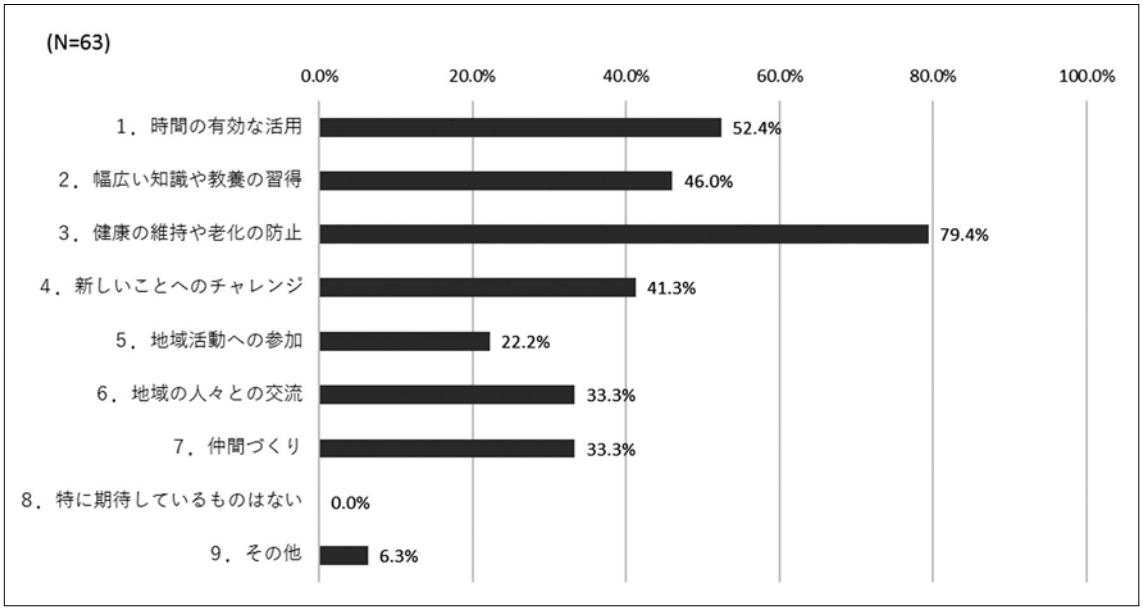
想い出語り講座（浦安）　（M. A.）



秩父市の他の講座　（M. A.）



浦安市の他の講座　（M. A.）



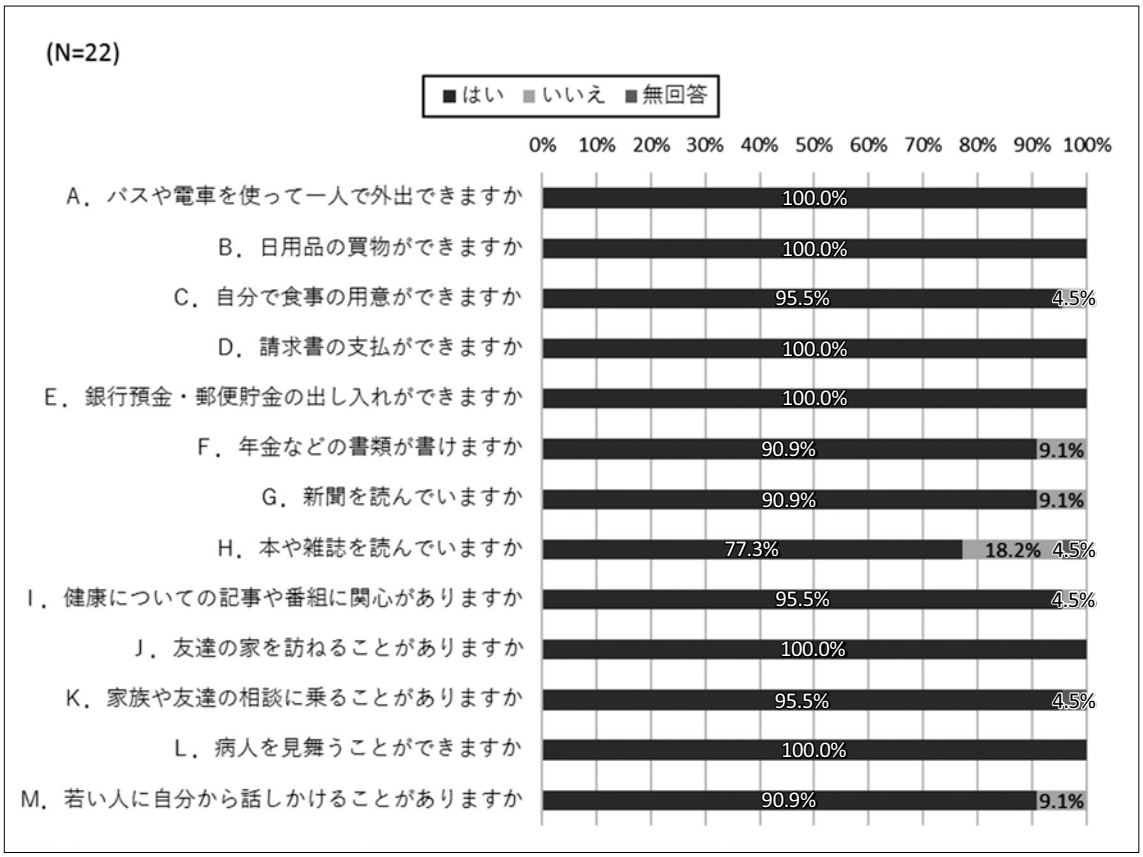
問５．あなたの日常の活動性についてお伺いします。以下のＡ～Ｍの質問ごとに、「はい」又は「いいえ」に○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

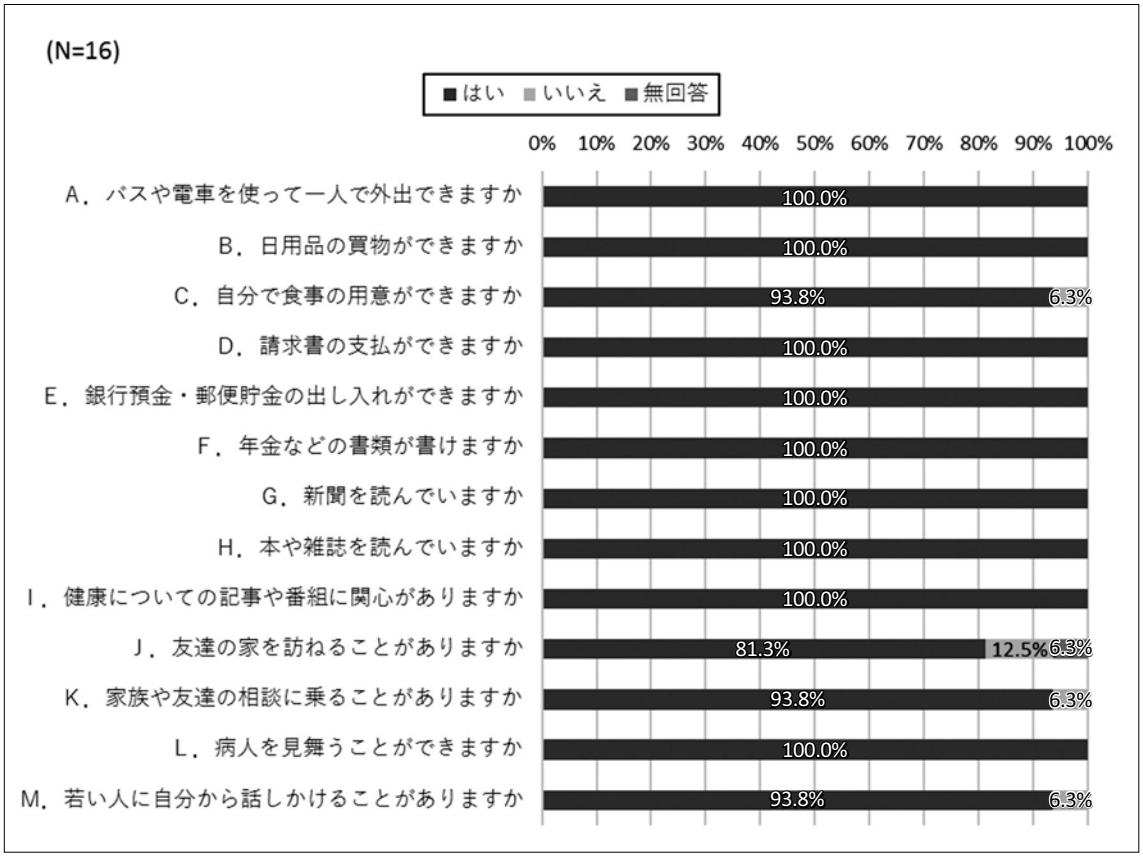
・秩父市の即興劇講座では、全ての項目において、「はい」という回答が大半であり、全員が「はい」と回答した項目は６項目であった。また、「本や雑誌を読んでいますか」という項目は、他の項目に比べて、「いいえ」（18.2%）という回答が多い。

・浦安市の想い出語り講座では、全ての項目において、「はい」という回答が大半であり、全員が「はい」と回答した項目は９項目であった。「友達の家を訪ねることがありますか」という項目は、他の項目に比べて、「いいえ」（12.5%）という回答が多い。

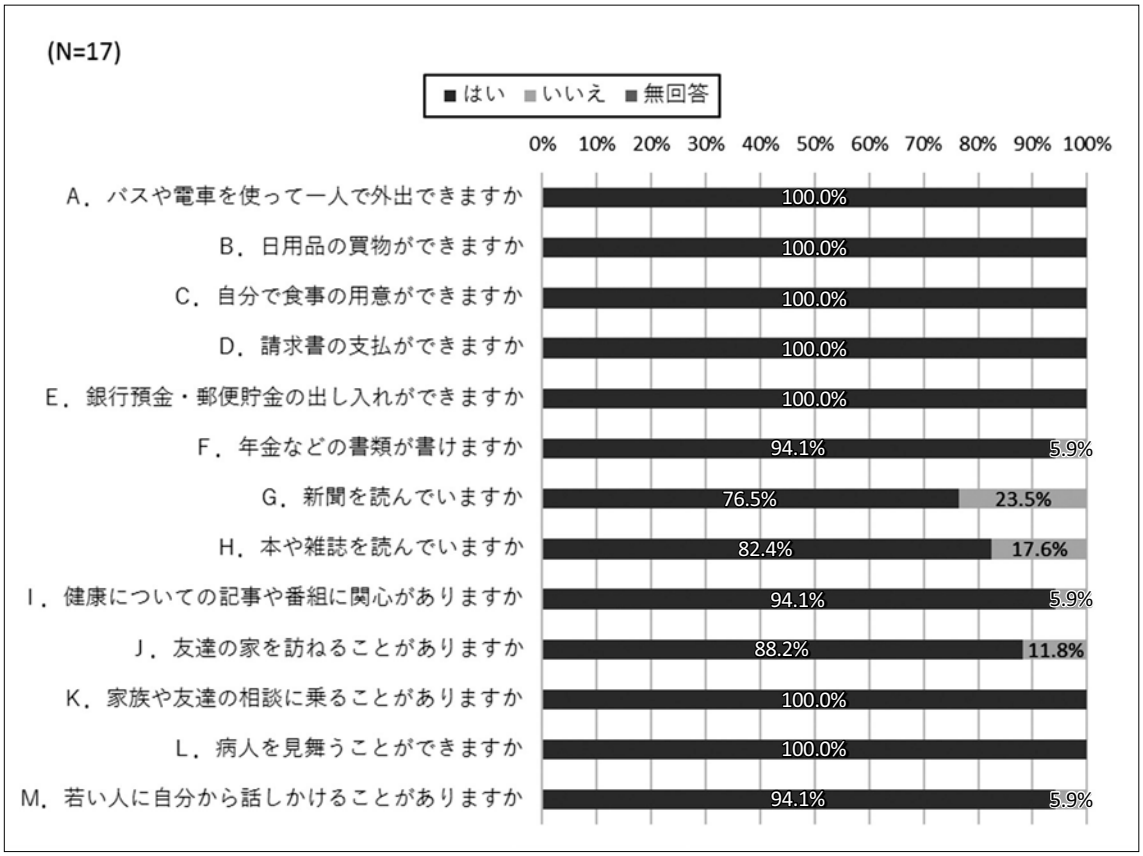
即興劇講座（秩父）



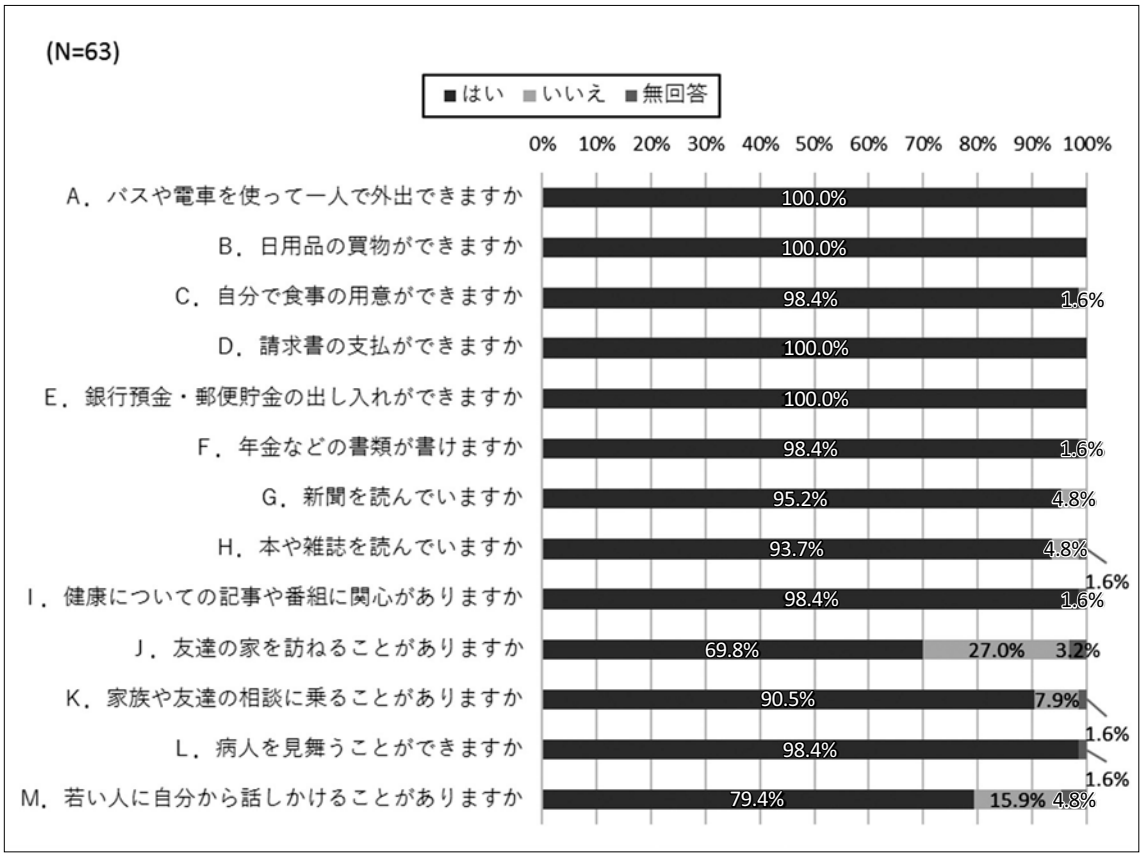
想い出語り講座（浦安）


(N=16)
■はい ■いいえ ■無回答
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
A．バスや電車を使って一人で外出できますか 100.0%
B．日用品の買物ができますか 100.0%
C．自分で食事の用意ができますか 93.8% 6.3%
D．請求書の支払ができますか 100.0%
E．銀行預金・郵便貯金の出し入れができますか 100.0%
F．年金などの書類が書けますか 100.0%
G．新聞を読んでいますか 100.0%
H．本や雑誌を読んでいますか 100.0%
I．健康についての記事や番組に関心がありますか 100.0%
J．友達の家を訪ねることがありますか 81.3% 12.5% 6.3%
K．家族や友達の相談に乗ることがありますか 93.8% 6.3%
L．病人を見舞うことができますか 100.0%
M．若い人に自分から話しかけることがありますか 93.8% 6.3%

秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



問６．友人や近所の方、別居の家族や親戚との付き合いについて伺います。以下のＡ～Ｄの質問ごとに、あなたのお付き合いの状況として、当てはまる番号に一つずつ○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

Ａ．友人や近所の方と、会ったり、一緒に出かけたりすることは、どのくらいありますか

・秩父市の即興劇講座では、「週に２回以上」（45.5%）が最も多く、次いで「週に１回程度」（40.9%）と頻度が低下するにつれて、当てはまる人数も減少する。

・浦安市の想い出語り講座では、「週に２回以上」（56.3%）が最も多く、「週に１回程度」、「月に２～３回」、「月に１回程度」が12.5%ずつと、頻度が低下するにつれて、当てはまる人数も減少する。

・「週に２回以上」及び「週に１回程度」を合計して見た場合、秩父市が86.3%、浦安市が68.8%と、秩父市の講座参加者の方が友人や近所との付き合いが深いことがわかる。

Ｂ．友人や近所の方と、電話で話すことはどのくらいありますか

・秩父市の即興劇講座では、「週に２回以上」（68.2%）が最も多く、頻度が低下するにつれて、当てはまる人数も減少する。

・浦安市の想い出語り講座では、「週に２回以上」（50.0%）が最も多く、頻度が低下するにつれて、当てはまる人数も減少する。

・「週に２回以上」及び「週１回程度」を合計して見た場合、秩父市90.9%、浦安市87.5%で、大きな差異は見られない。

Ｃ．別居の家族や親戚と、会ったり、一緒に出かけたりすることは、どのくらいありますか

・秩父市の即興劇講座では、「週に１回以上」（31.8%）が最も多く、次いで「月に１回程度」（27.3%）、「週に２回以上」（18.2%）が順に多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「年に数回程度／全くない」（37.5%）が最も多く、頻度が上昇するにつれて、当てはまる人数も減少する。

・「週に２回以上」及び「週１回程度」を合計して見た場合、秩父市50.0%、浦安市31.3%と、秩父市の参加者の方が別居の家族や親戚との付き合いが深いことがわかる。

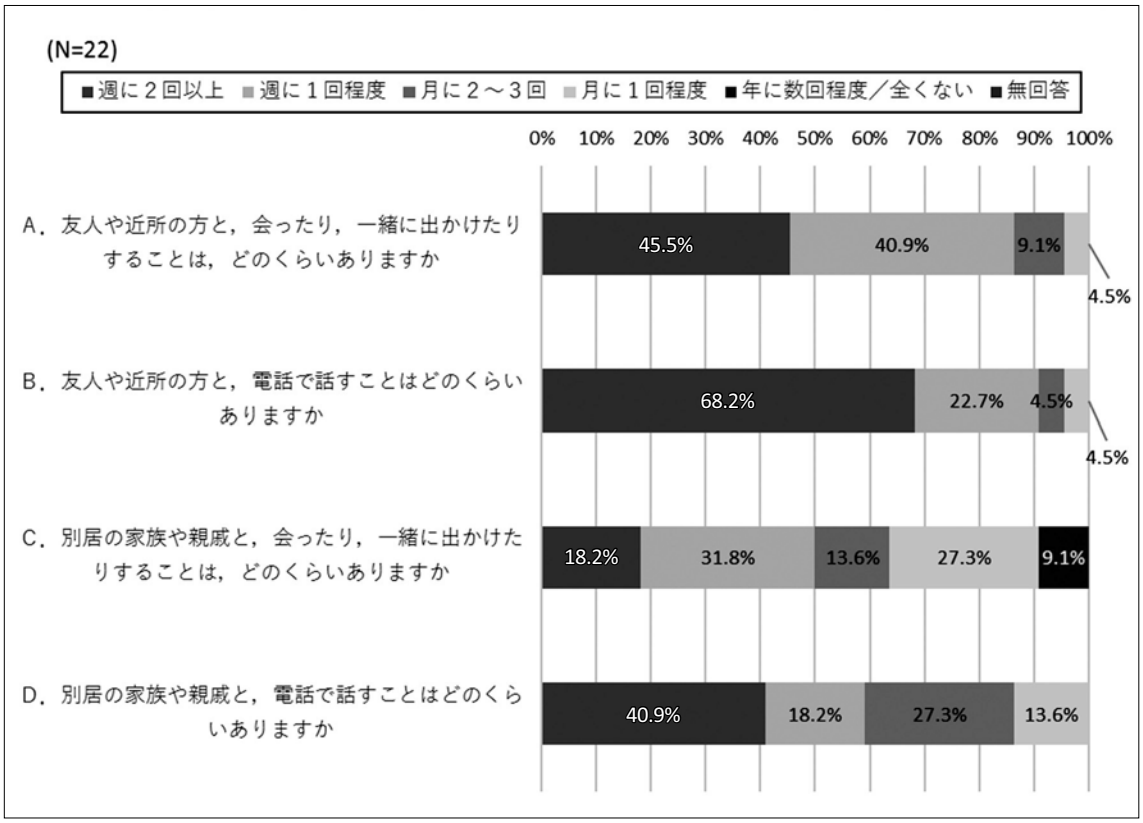
Ｄ．別居の家族や親戚と、電話で話すことはどのくらいありますか

・秩父市の即興劇講座では、「週に２回以上」（40.9%）が最も多く、次いで「月に２～３回」（27.3%）、「週に１回以上」（18.2%）が順に多い。

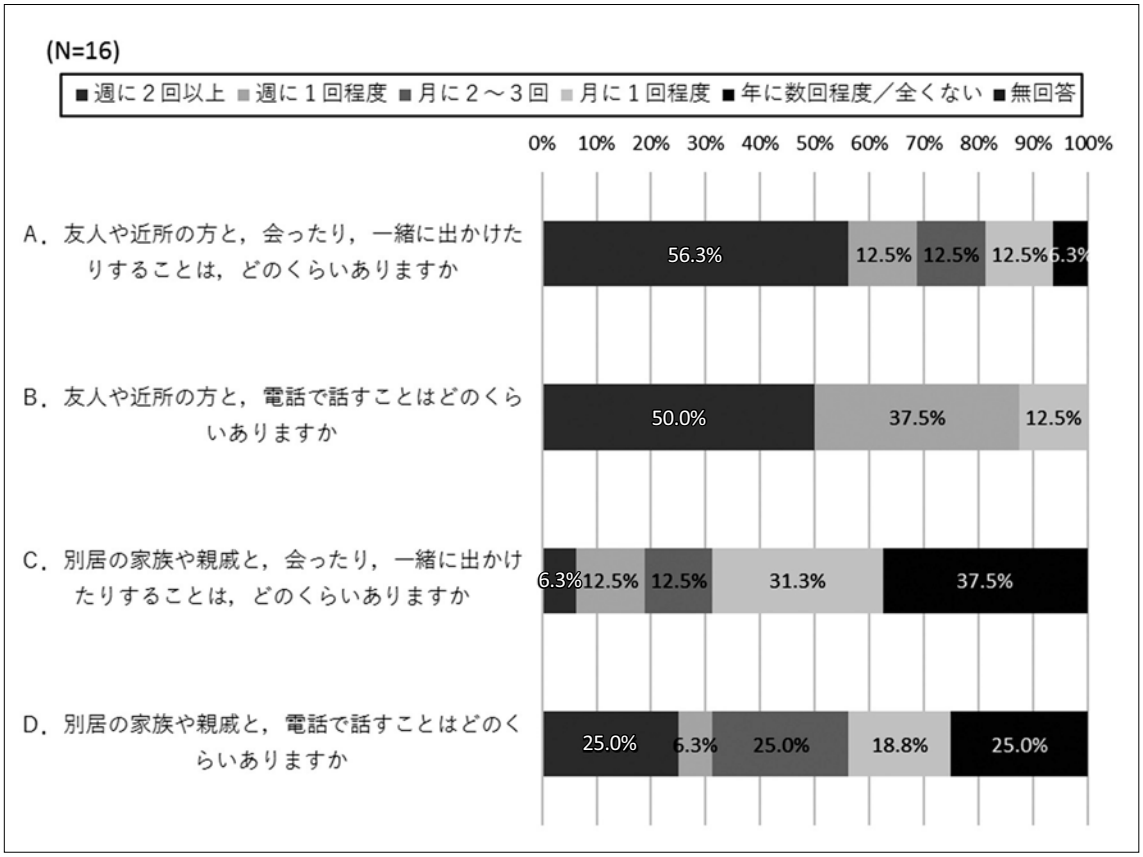
・浦安市の想い出語り講座では、「週に２回以上」、「月に２～３回」、「年に数回程度／全くない」が25.0%ずつで最も多い。

・「週に２回以上」及び「週に１回程度」を合計して見た場合、秩父市59.1%、浦安市31.3%と、秩父市の参加者の方が別居の家族や親戚と電話で話す頻度が高いことがうかがえる。

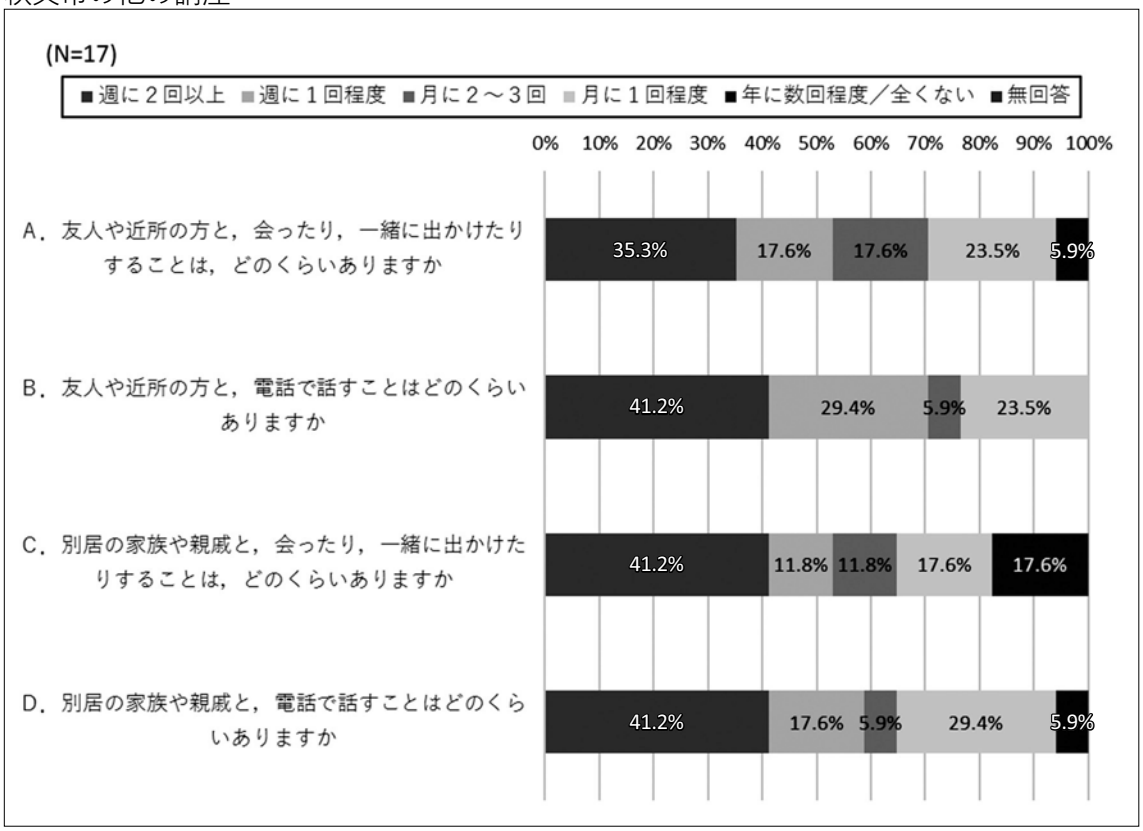
即興劇講座（秩父）



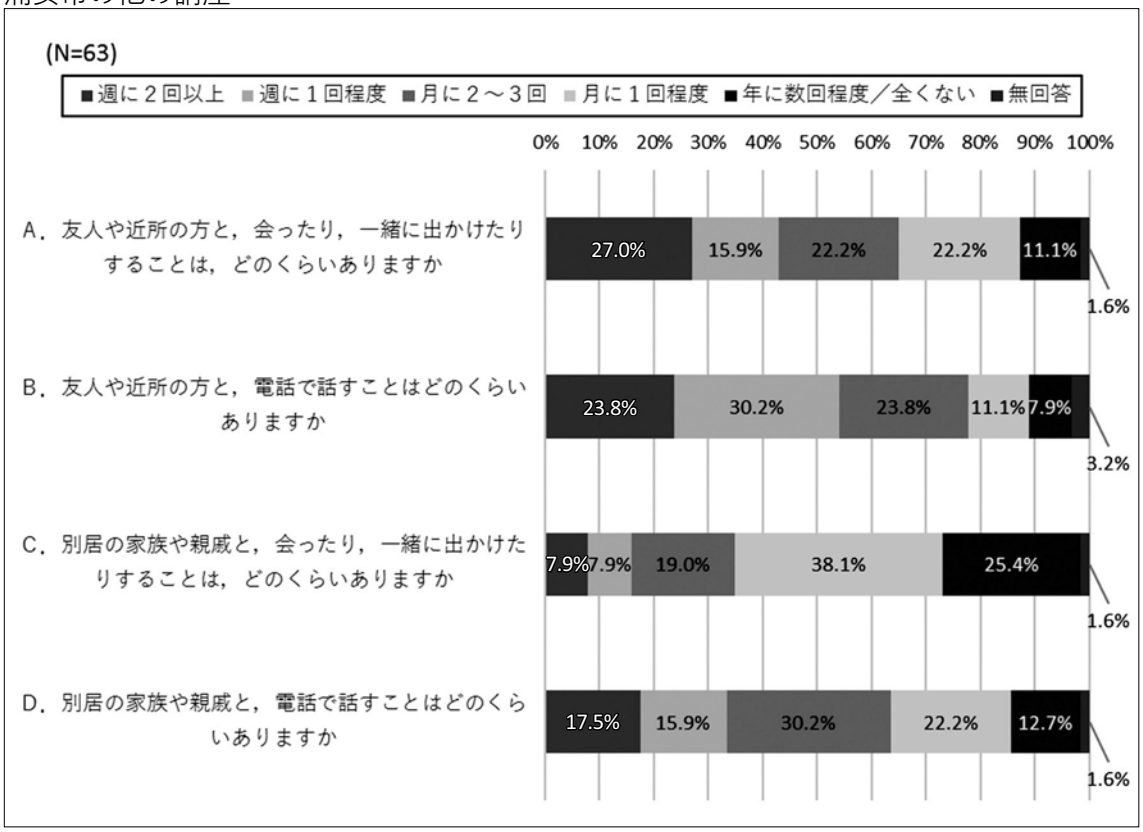
想い出語り講座（浦安）



秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



問７．あなたのお気持ちについて、以下のＡ～Ｅの質問ごとに、２週間のあなたの状態に最も近いものに一つずつ○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

Ａ．明るく、楽しい気分で過ごした

・秩父市の即興劇講座では、「いつも」（40.9%）が最も多く、頻度が減少するにつれて、当てはまる人数も減少する。
・浦安市の想い出語り講座では、「ほとんどいつも」と「半分以上の期間を」が37.5%ずつで最も多く、次いで「半分以下の期間を」（12.5%）が多い。
・「いつも」と「ほとんどいつも」の合計で見た場合、秩父市68.2%、浦安市43.8%と、秩父市の参加者の方が明るく、楽しい気分で過ごしたと回答した者が多い。

Ｂ．落ち着いた、リラックスした気分で過ごした

・秩父市の即興劇講座では、「ほとんどいつも」（40.9%）が最も多く、次いで「いつも」（27.3%）、「半分以上の期間を」（18.2%）が多い。
・浦安市の想い出語り講座では、「半分以上の期間を」（43.8%）が最も多く、次いで「ほとんどいつも」（31.3%）、「半分以下の期間を」（12.5%）が順に多い。
・「いつも」と「ほとんどいつも」の合計で見た場合、秩父市68.2%、浦安市37.6%と、秩父市の参加者の方が30ポイント以上、上回っている。

Ｃ．意欲的で、活動的に過ごした

・秩父市の即興劇講座では、「いつも」と「半分以上の期間を」が27.3%で最も多く、次いで「ほとんどいつも」（22.7%）が多い。
・浦安市の想い出語り講座では、「半分以上の期間を」（37.5%）が最も多く、次いで「ほとんどいつも」（31.3%）、「いつも」と「半分以下の期間を」が12.5%ずつとなっている。
・「いつも」と「ほとんどいつも」の合計で見た場合、秩父市50.0%、浦安市43.8%と、秩父市の参加者の方が若干上回っている。

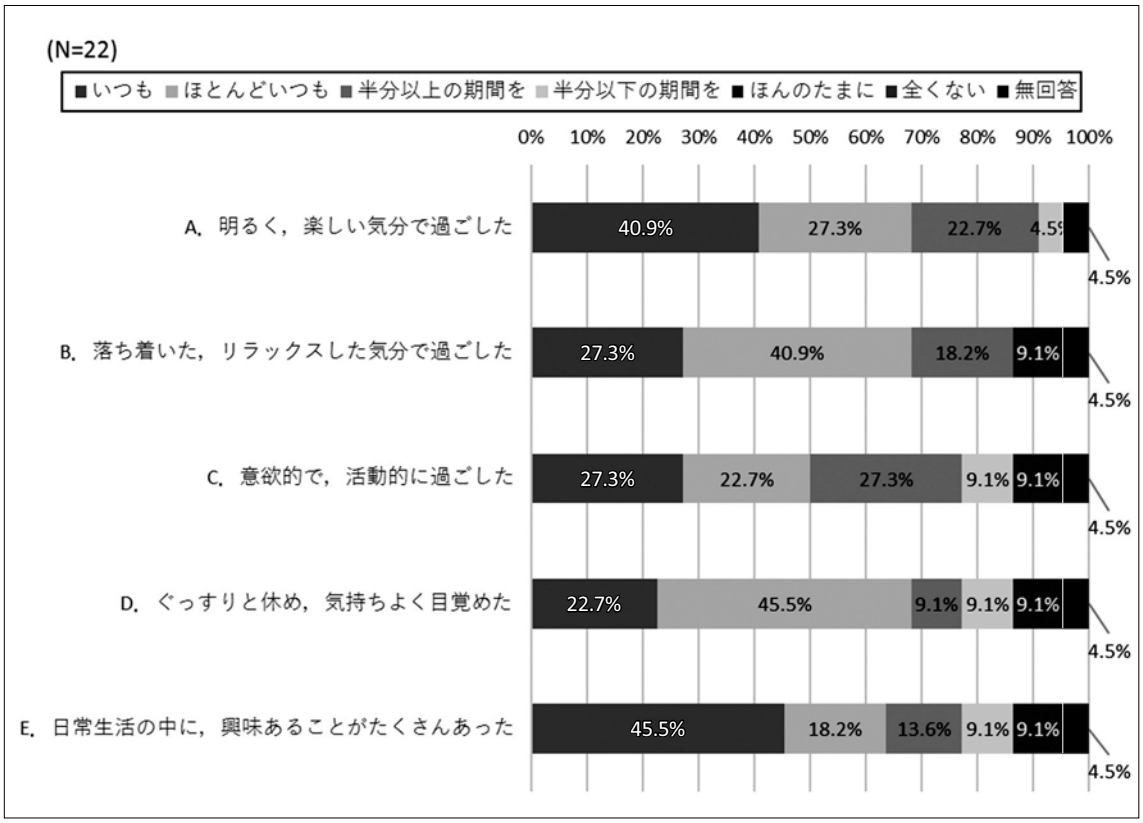
Ｄ．ぐっすりと休め、気持ちよく目覚めた

・秩父市の即興劇講座では、「ほとんどいつも」（45.5%）が最も多く、次いで「いつも」（22.7%）、「半分以上の期間を」、「半分以下の期間を」、「ほんのたまに」が9.1%ずつとなっている。
・浦安市の想い出語り講座では、「半分以上の期間を」（37.5%）が最も多く、次いで「ほとんどいつも」（31.3%）、「ほんのたまに」（12.5%）が順に多い。
・「いつも」と「ほとんどいつも」の合計で見た場合、秩父市68.2%、浦安市37.6%と、秩父市の参加者の方が30ポイント以上、上回っている。

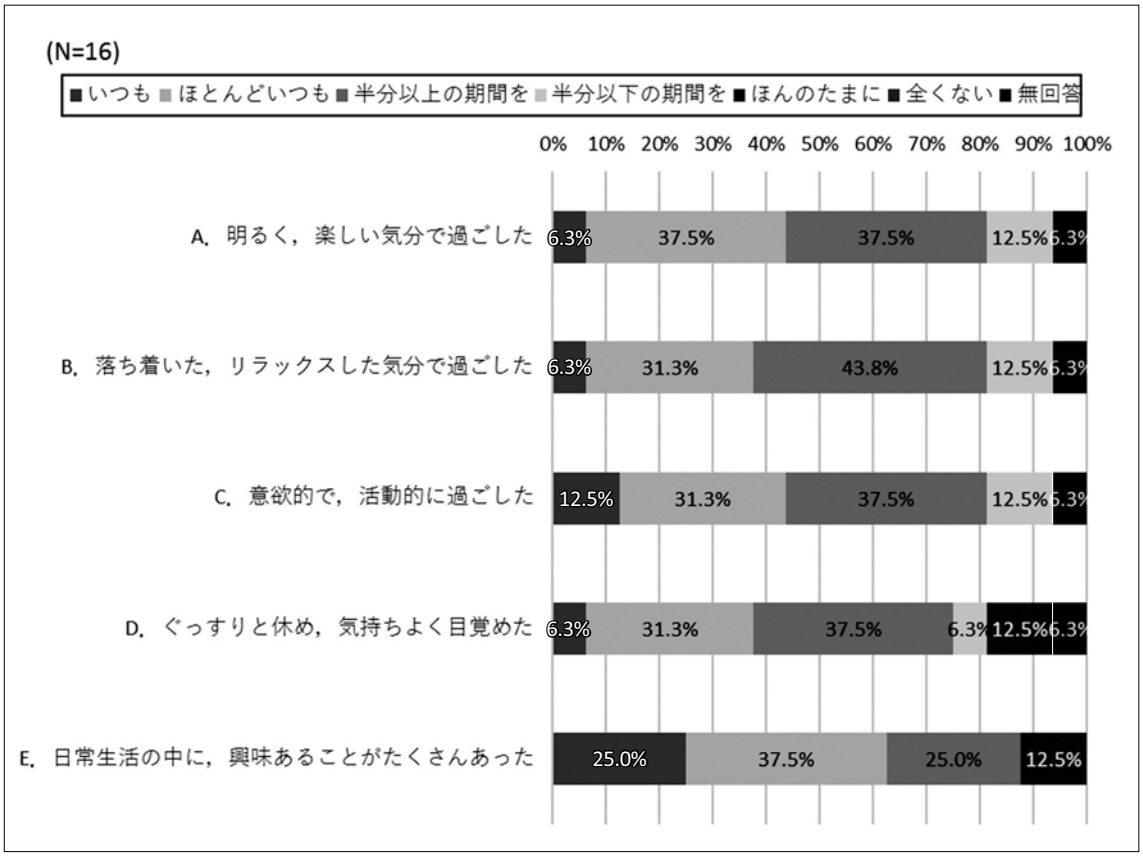
Ｅ．日常生活の中に、興味あることがたくさんあった

・秩父市の即興劇講座では、「いつも」（45.5%）が最も多く、頻度が減少するにつれて、当てはまる人数も減少する。
・浦安市の想い出語り講座では、「ほとんどいつも」（37.5%）が最も多く、次いで「いつも」（25.0%）「半分以上の期間を」（25.0%）が順に多い。

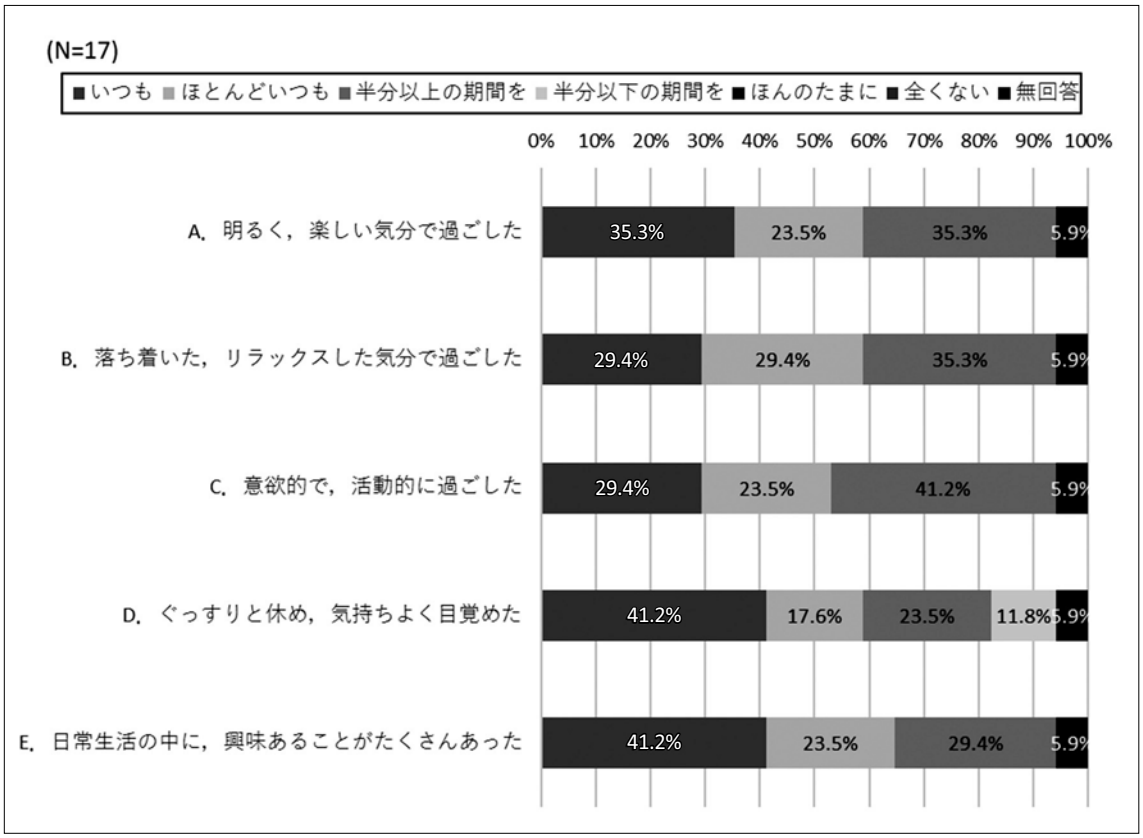
即興劇講座（秩父）



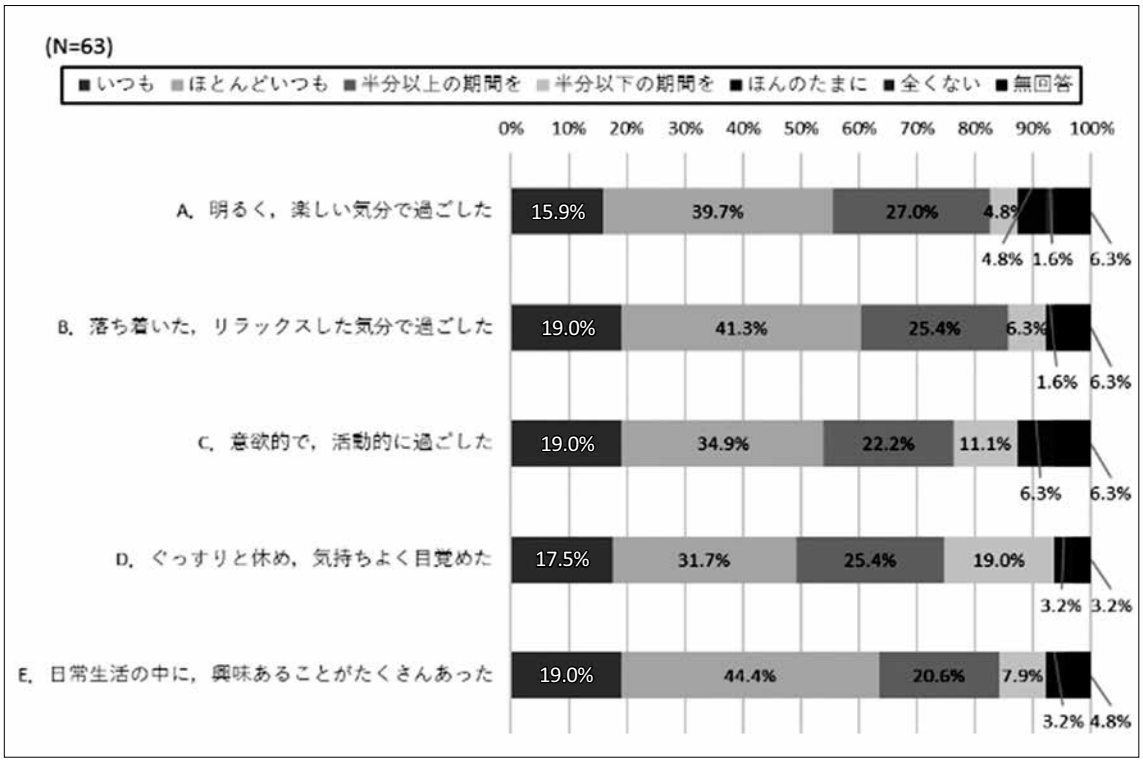
想い出語り講座（浦安）



秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



問８．世間一般の人又は近隣の人に対するあなたのお考えをお尋ねします。以下のＡ～Ｃの質問ごとに、あなたの感じ方を最もよく表している番号に一つずつ○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

Ａ．一般に人は信頼できる

・秩父市の即興劇講座では、「どちらかと言えばそう思う」（54.5%）が最も多く、次いで「どちらともいえない」（22.7%）、「そう思う」（13.6%）の順となっている。
・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（62.5%）が最も多く、次いで「そう思う」（18.8%）、「どちらともいえない」（12.5%）の順となっている。
・「そう思う」と「どちらか言えばそう思う」を合計して見た場合、秩父市68.1%、浦安市81.3%と、浦安市の参加者の方が、「一般に人は信頼できる」と考える者が多い。

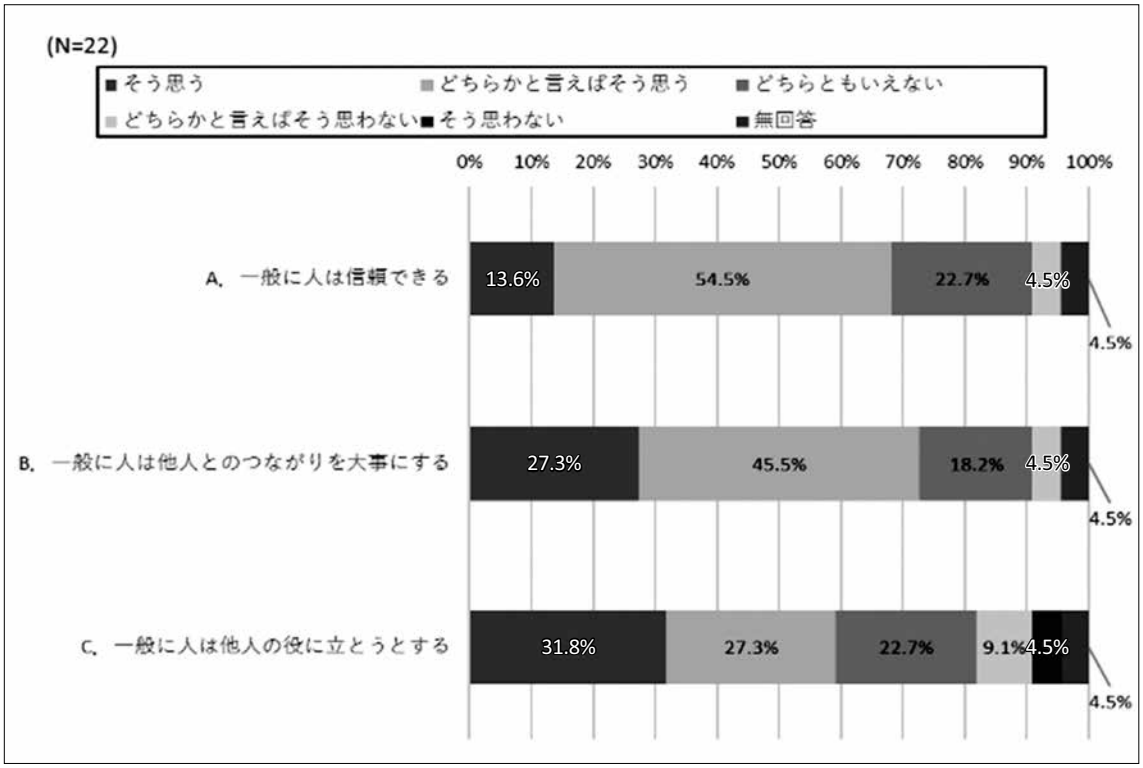
Ｂ．一般に人は他人とのつながりを大事にする

・秩父市の即興劇講座では、「どちらかと言えばそう思う」（45.5%）が最も多く、次いで「そう思う」（27.3%）、「どちらともいえない」（18.2%）の順となっている。
・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（43.8%）が最も多く、次いで「そう思う」（31.3%）、「どちらともいえない」（12.5%）の順となっている。
・「そう思う」と「どちらか言えばそう思う」を合計して見た場合、秩父市72.8%、浦安市75.1%と、大きな差異は見られない。

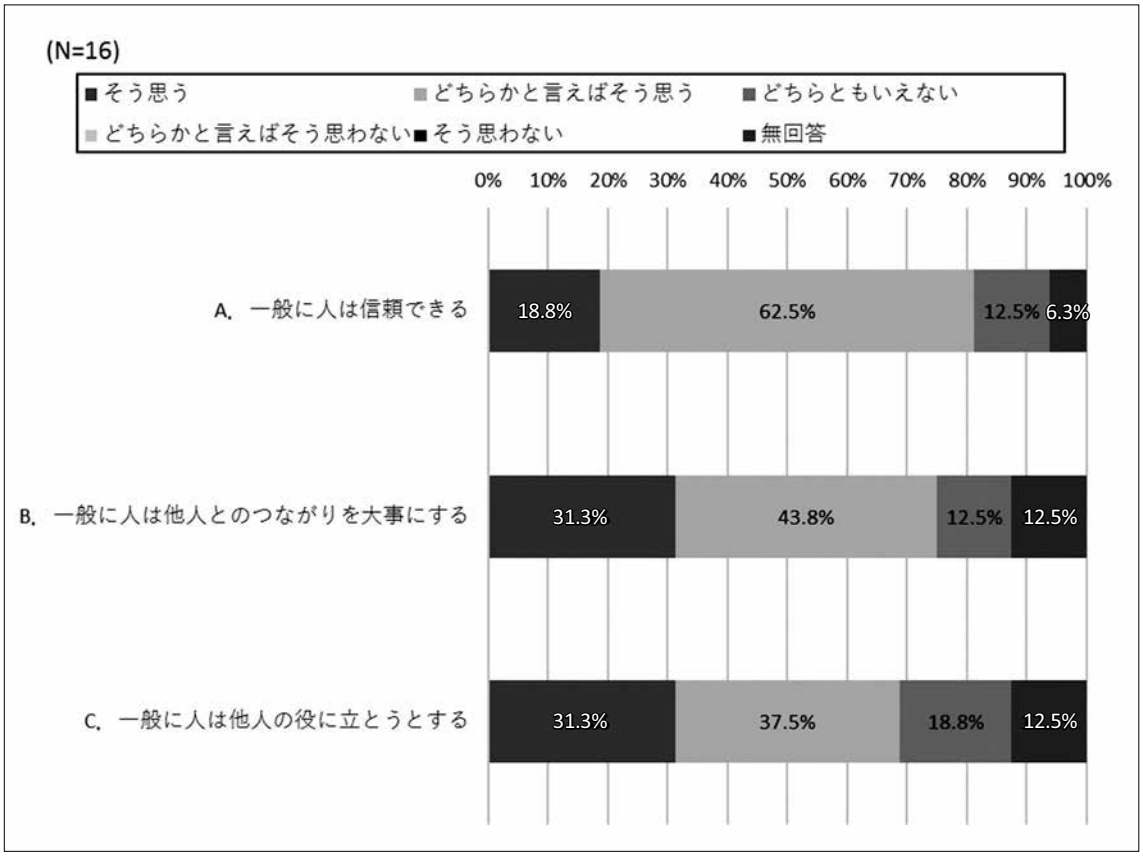
Ｃ．一般に人は他人の役に立とうとする

・秩父市の即興劇講座では、「そう思う」（31.8%）が最も多く、次いで「どちらかと言えばそう思う」（27.3%）と、否定的な回答ほど当てはまる人数が減少する。
・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（37.5%）が最も多く、次いで「そう思う」（31.3%）、「どちらともいえない」（18.8%）の順となっている。
・「そう思う」と「どちらか言えばそう思う」を合計して見た場合、秩父市59.1%、浦安市68.8%と、浦安市の講座参加者の方が、「人は他人の役に立とうとする」と考える者が多い。

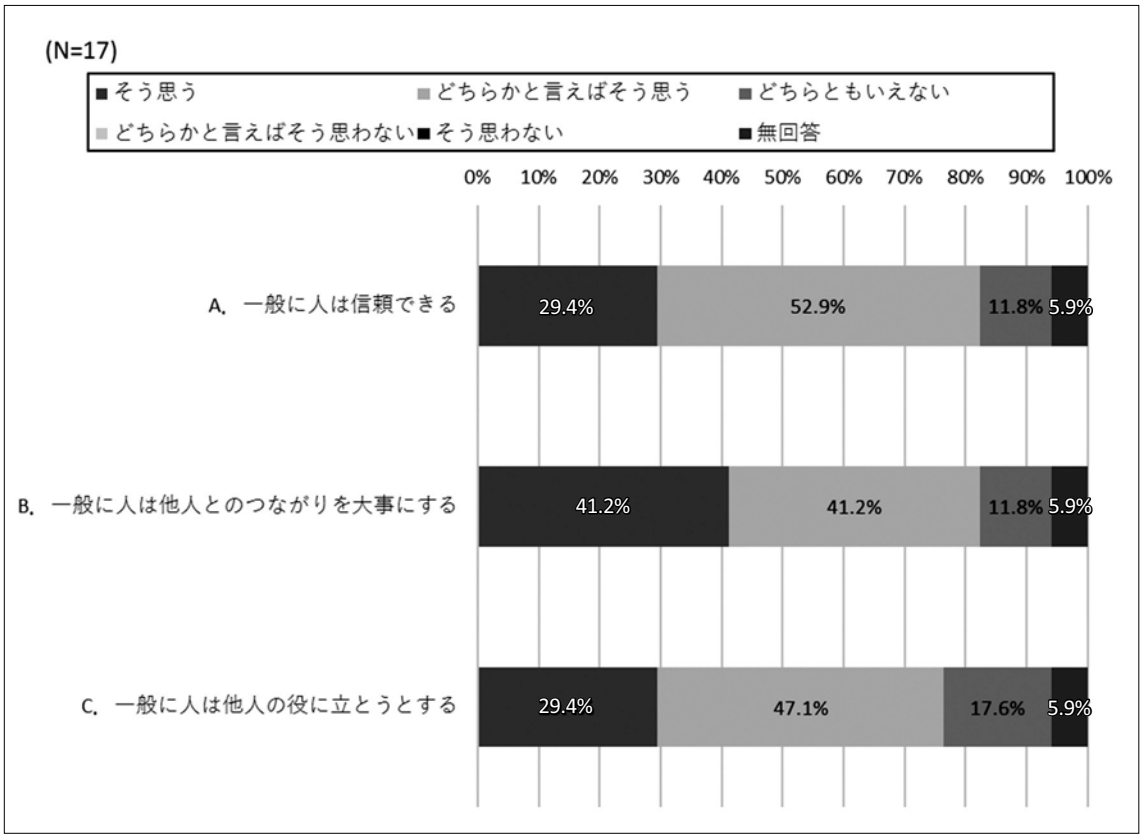
即興劇講座（秩父）



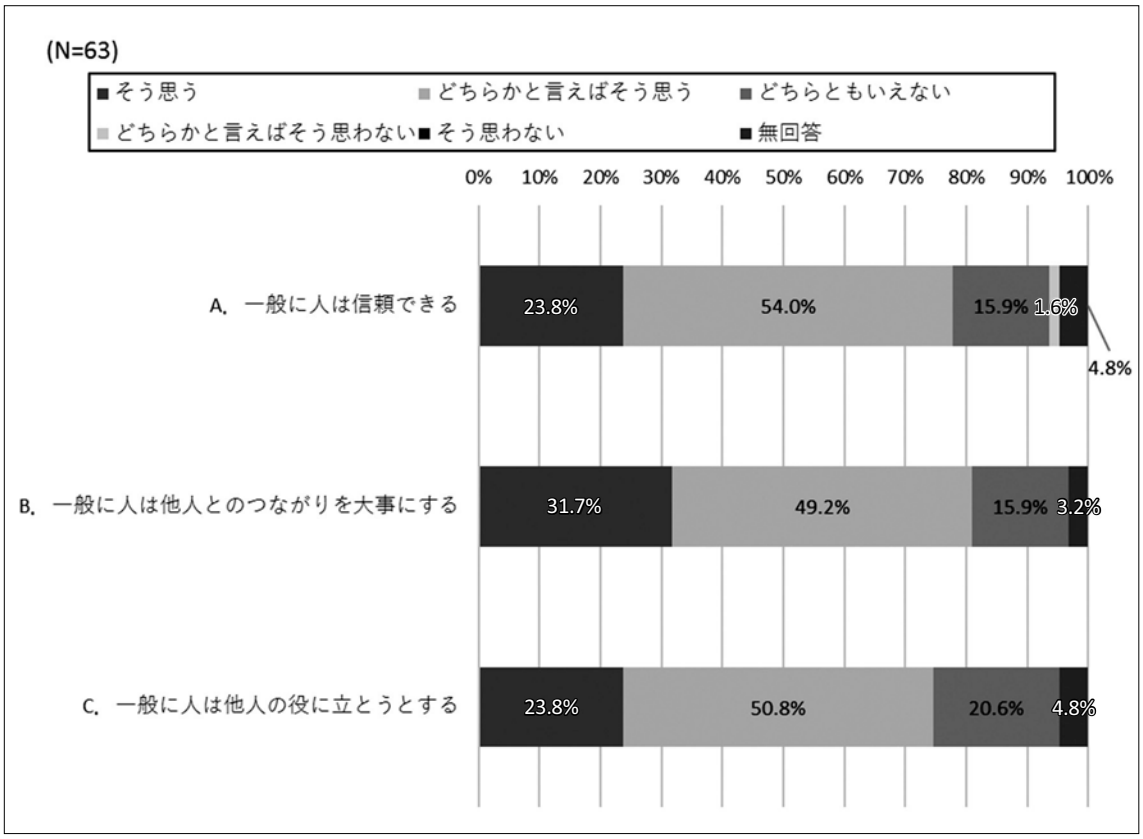
想い出語り講座（浦安）



秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



３．モデル事業における第２回質問紙調査の結果（単純集計）

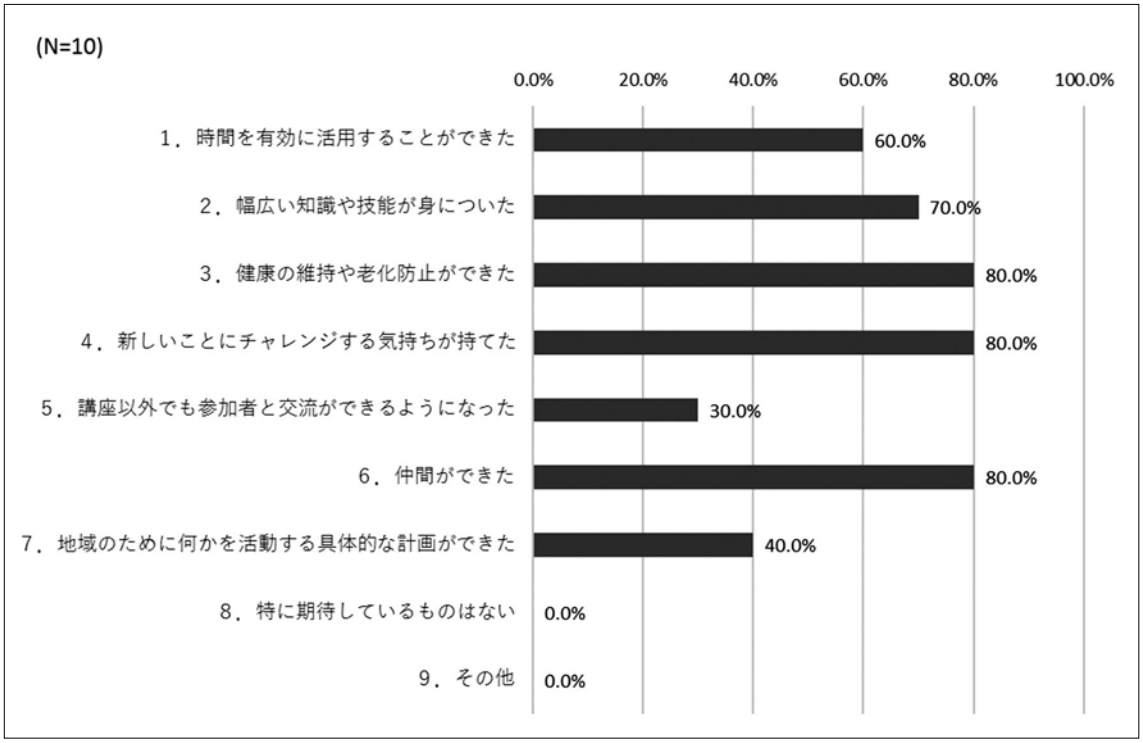
問１．あなたは、本講座での学習を通じて、どのような効果がありましたか。以下の１～９のうち、当てはまる番号全てに○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

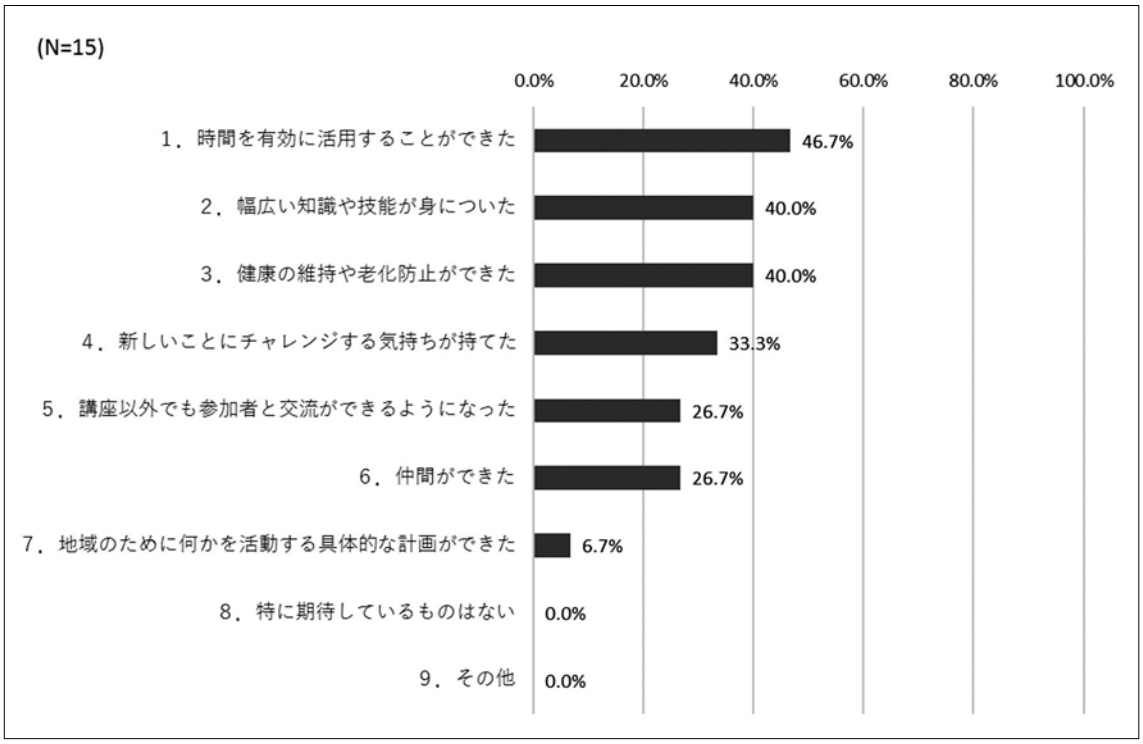
・秩父市の即興劇講座では、「健康の維持や老化防止ができた」、「新しいことにチャレンジする気持ちが持てた」、「仲間ができた」がそれぞれ80.0%で最も多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「時間を有効に活用することができた」（46.7%）が最も多く、次いで「幅広い知識や技能が身についた」、「健康の維持や老化防止ができた」が40.0%ずつとなっている。

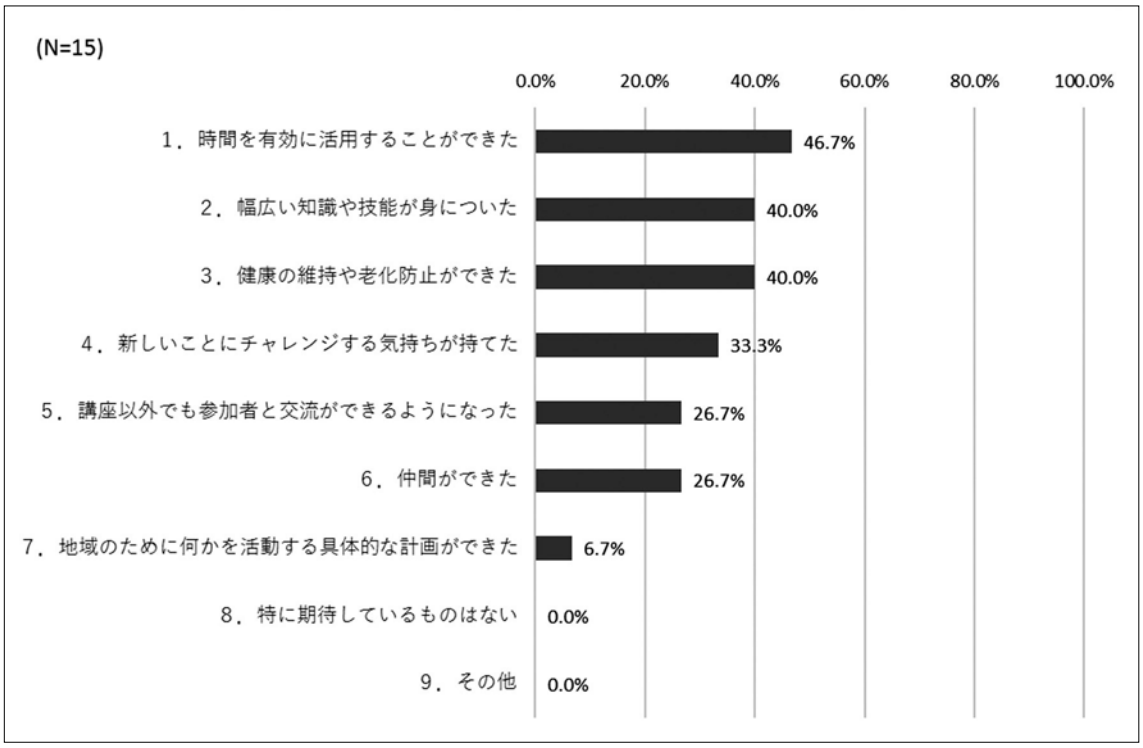
即興劇講座（秩父）　（M. A.）



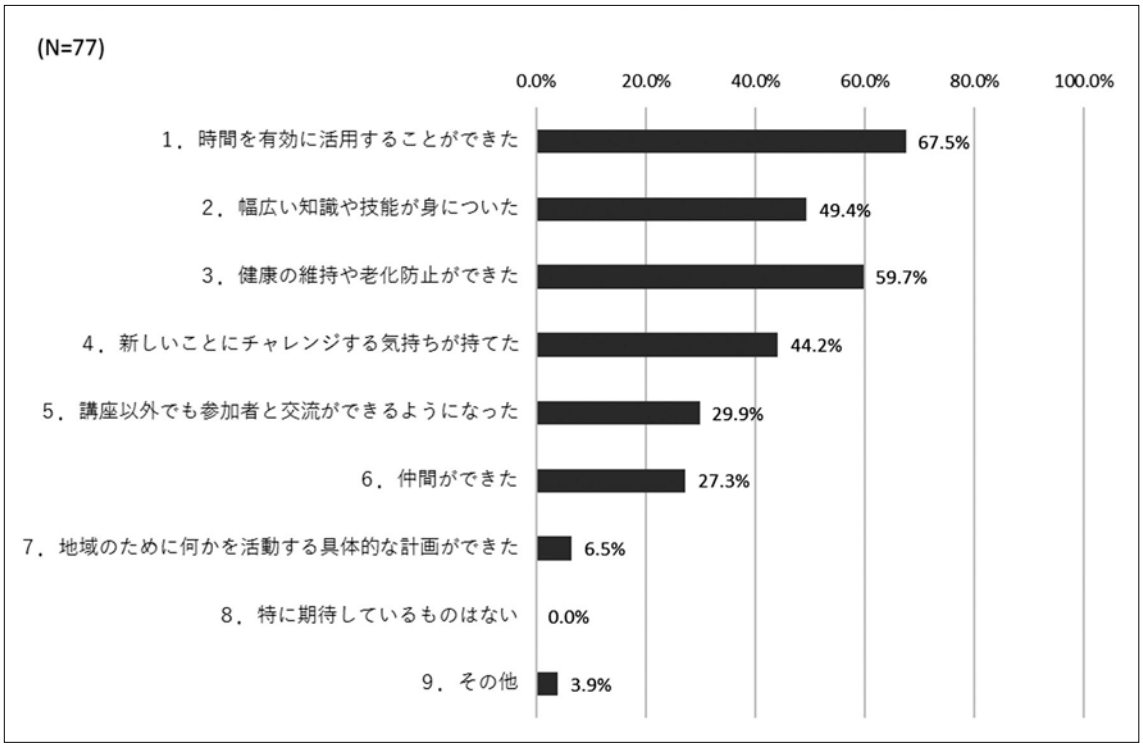
想い出語り講座（浦安）　（M. A.）



秩父市の他の講座　（M. A.）



浦安市の他の講座　（M. A.）



問２．本講座を受講された感想をお聞かせください。以下のＡ～Ｄの質問ごとに、最も当てはまる番号に一つずつ○を付けてください。

Ａ．これからの生活に役立つと思いますか

・秩父市の即興劇講座では、「そう思う」（70.0%）が最も多く、「どちらかと言えばそう思う」（30.0%）を合わせると、全員が肯定的な回答をしている。
・浦安市の想い出語り講座では、「そう思う」（53.3%）が最も多く、「どちらかと言えばそう思う」（46.7%）を合わせると、全員が肯定的な回答をしている。
・秩父市、浦安市ともに最終回まで参加した者は全員「これからの生活に役立つ」と回答している。

Ｂ．これからの地域活動に役立つと思いますか

・秩父市の即興劇講座では、「そう思う」（60.0%）が最も多く、「どちらかと言えばそう思う」（40.0%）を合わせると、全員が肯定的な回答をしている。
・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（60.0%）が最も多く、次いで「そう思う」（33.3%）、「どちらかと言えばそう思わない」（6.7%）の順になっている。
・秩父市、浦安市ともに最終回まで参加した者のほとんどの者が「これからの地域活動に役立つ」と考えている。

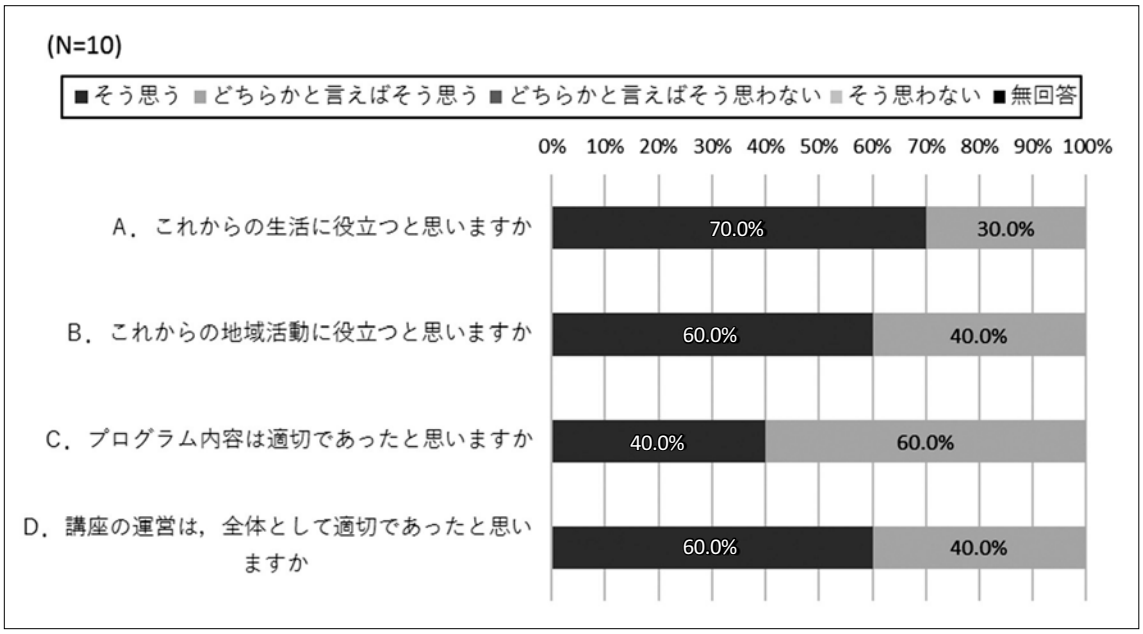
Ｃ．プログラム内容は適切であったと思いますか

・秩父市の即興劇講座では、「どちらかと言えばそう思う」（60.0%）が最も多く、「そう思う」（40.0%）を合わせると、全員が肯定的な回答をしている。
・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（60.0%）が最も多く、「そう思う」（40.0%）を合わせると、全員が肯定的な回答をしている。
・秩父市、浦安市ともに最終回まで参加した者は全員「プログラム内容は適切であった」と考えている。

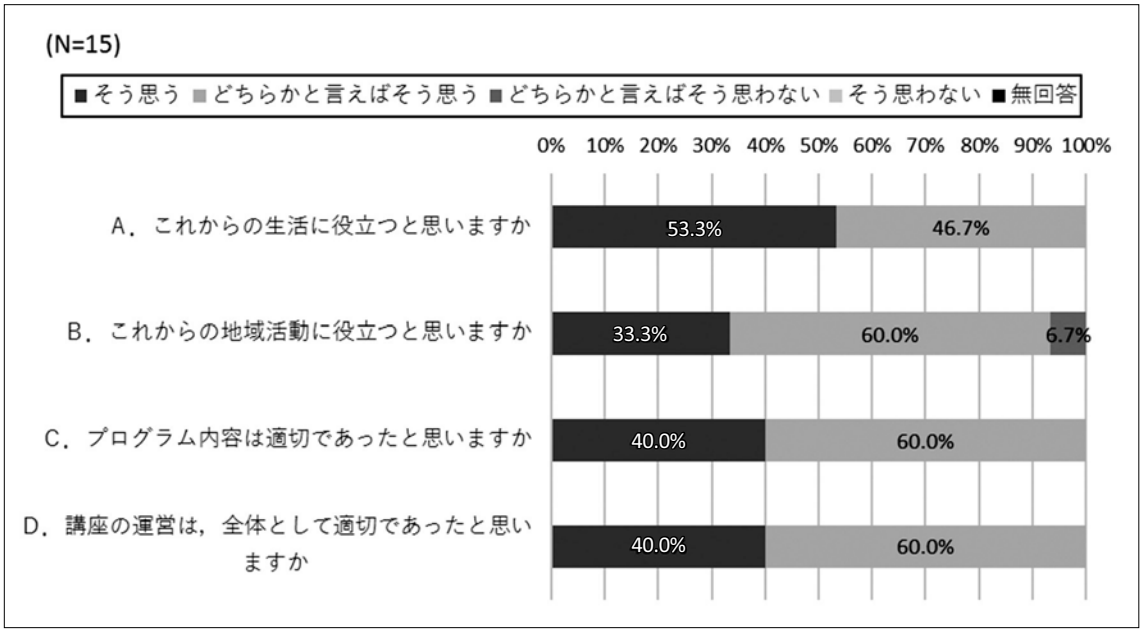
Ｄ．講座の運営は、全体として適切であったと思いますか

・秩父市の即興劇講座では、「そう思う」（60.0%）が最も多く、「どちらかと言えばそう思う」（40.0%）を合わせると、全員が肯定的な回答をしている。
・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（60.0%）が最も多く、「そう思う」（40.0%）を合わせると、全員が肯定的な回答をしている。
・講座の運営については、秩父市、浦安市ともに最終回まで参加した者は全員、適切であったと回答している。

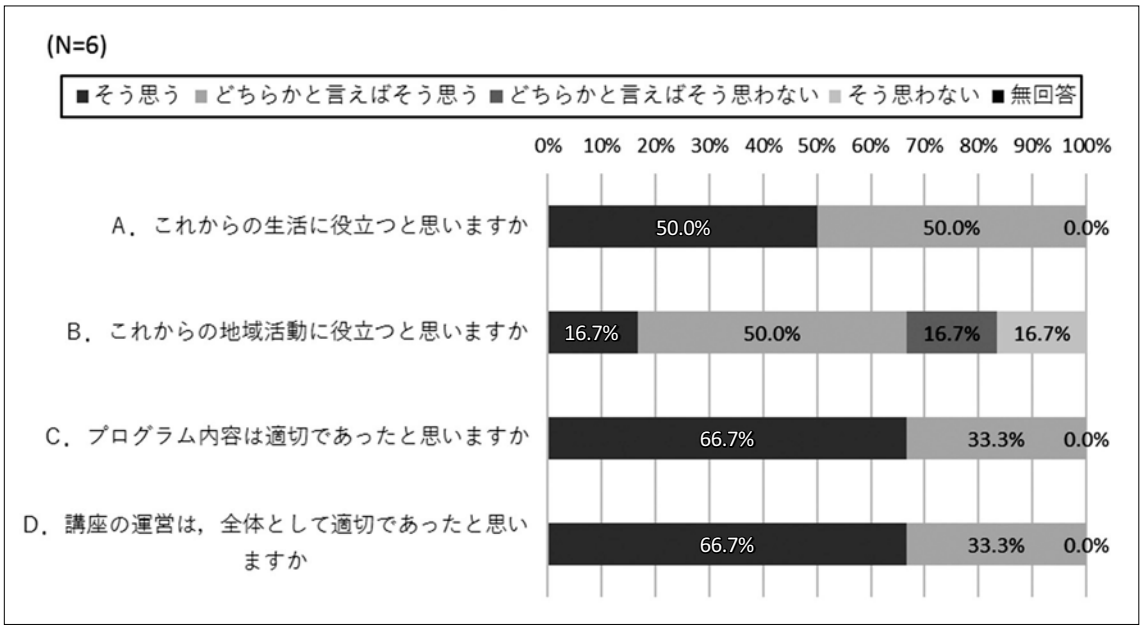
即興劇講座（秩父）



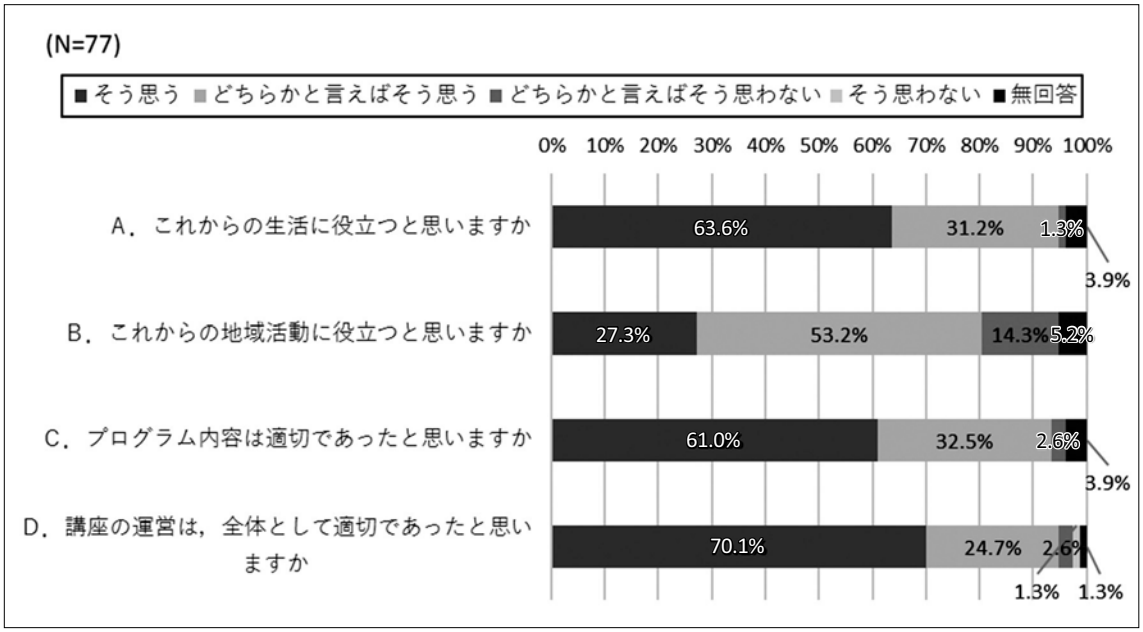
想い出語り講座（浦安）



秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



問３．あなたは、今後、どのような場所や形態で学習活動を行いたいですか。以下の１～13のうち、当てはまる番号全てに○を付けてください。

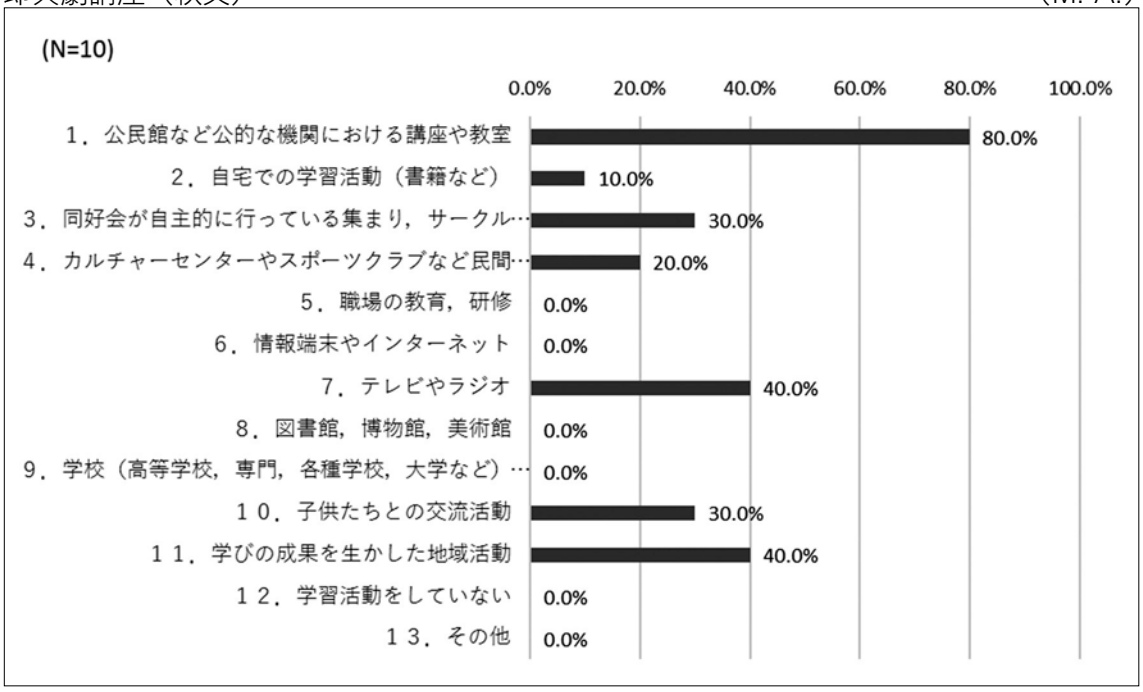
〈モデル事業の結果〉

・秩父市の即興劇講座では、「公民館など公的な機関における講座や教室」（80.0%）が最も多い。次いで「テレビやラジオ」（40.0%）、「学びの成果を生かした地域活動」（40.0%）の順に多い。

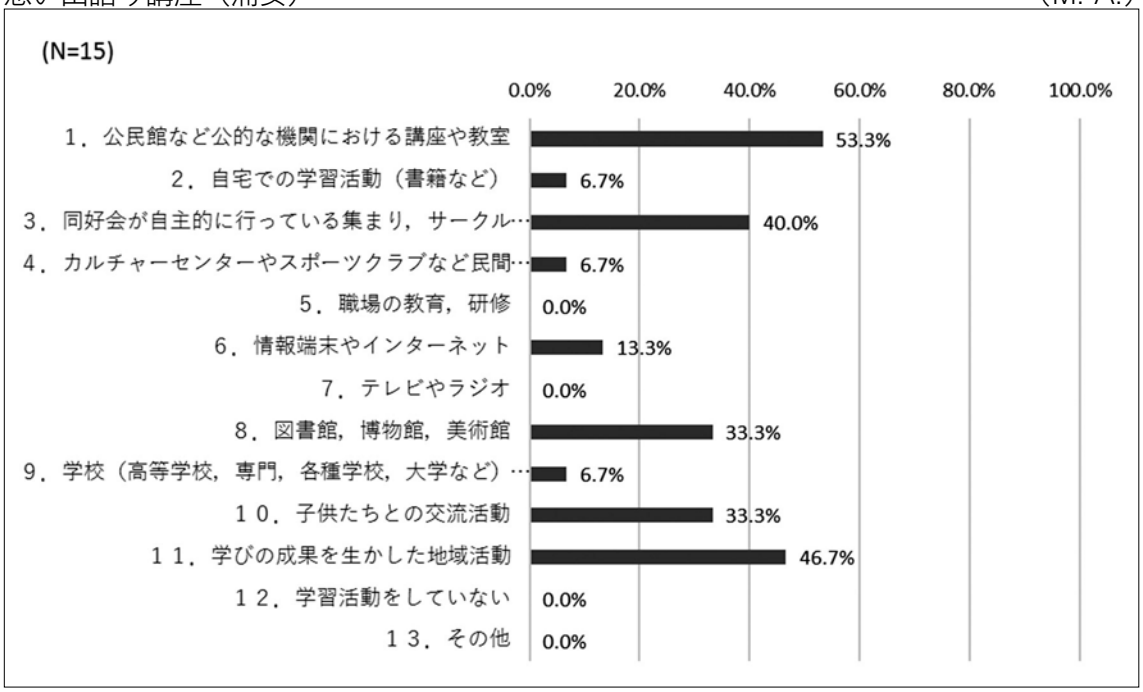
・浦安市の想い出語り講座では、「公民館など公的な機関における講座や教室」（53.3%）が最も多い。次いで「学びの成果を生かした地域活動」（46.7%）、「同好会が自主的に行っている集まり、サークル」（40.0%）が順に多い。

・秩父市と浦安市で比べて見た場合、特徴的なのは、秩父市が「７．テレビやラジオ」が40.0%であるのに対して浦安市は0.0%であること、また、浦安市が「８．図書館、博物館、美術館」が33.3%であるのに対して秩父市では0.0%となっており、地理的な影響や身近な場所における社会教育施設の整備状況等が影響していると思われる。

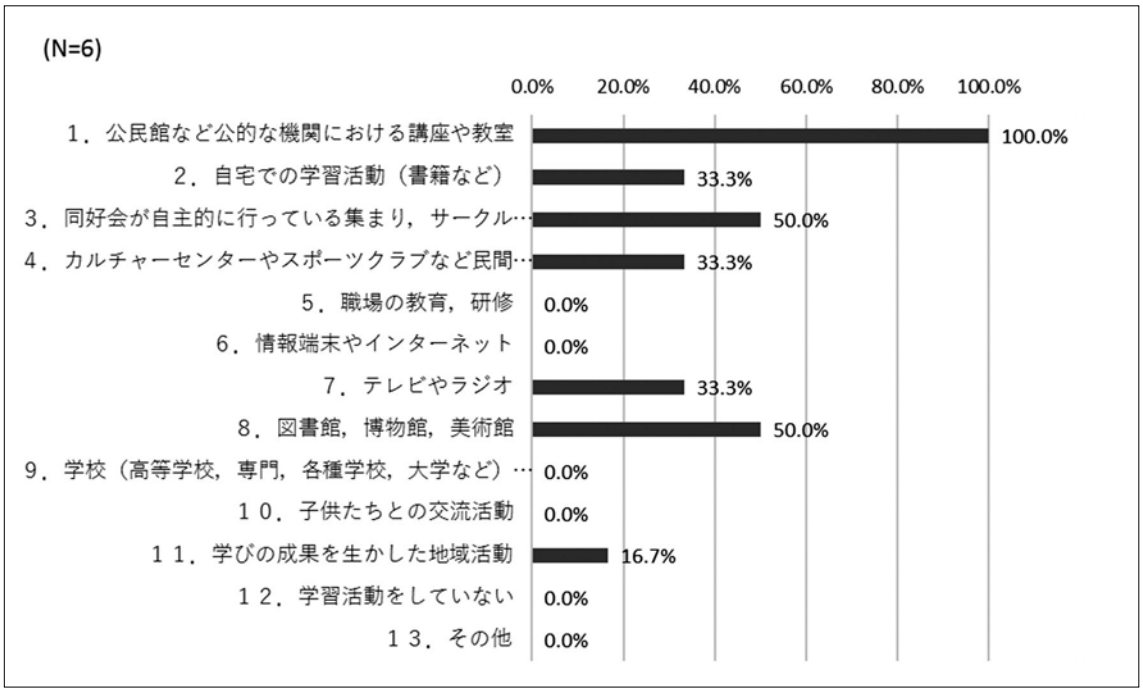
即興劇講座（秩父）　（M. A.）



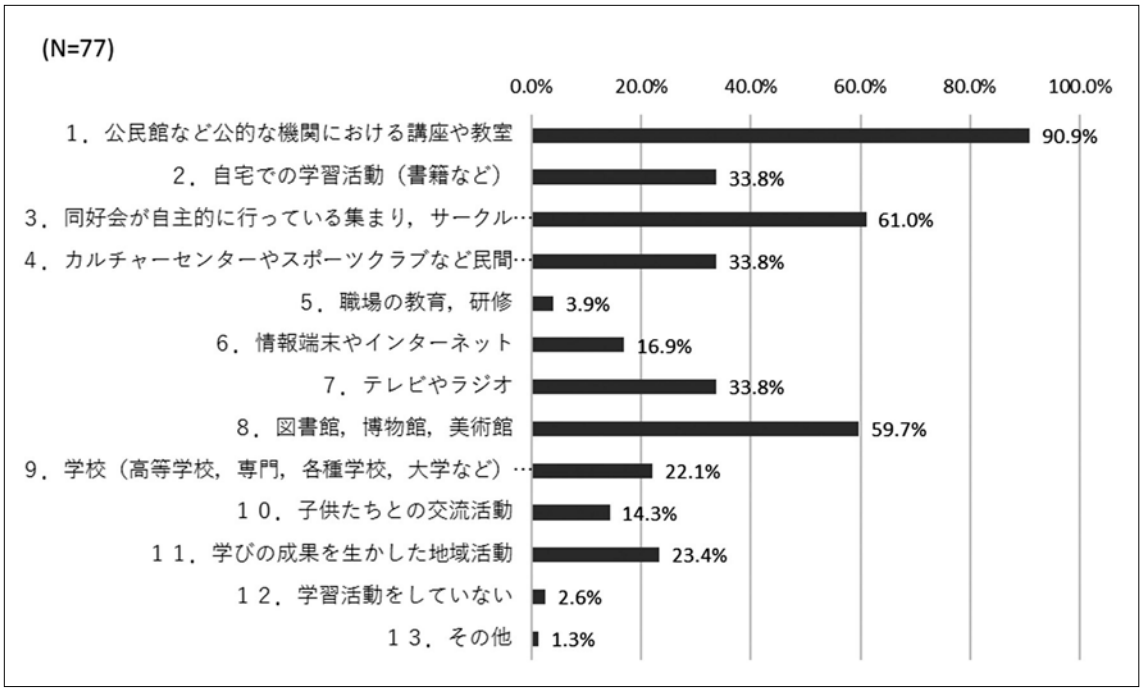
想い出語り講座（浦安）　（M. A.）



秩父市の他の講座　（M. A.）



浦安市の他の講座　（M. A.）



問４．あなたの日常の活動性についてお伺いします。以下のＡ～Ｍの質問ごとに、「はい」又は「いいえ」に〇を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

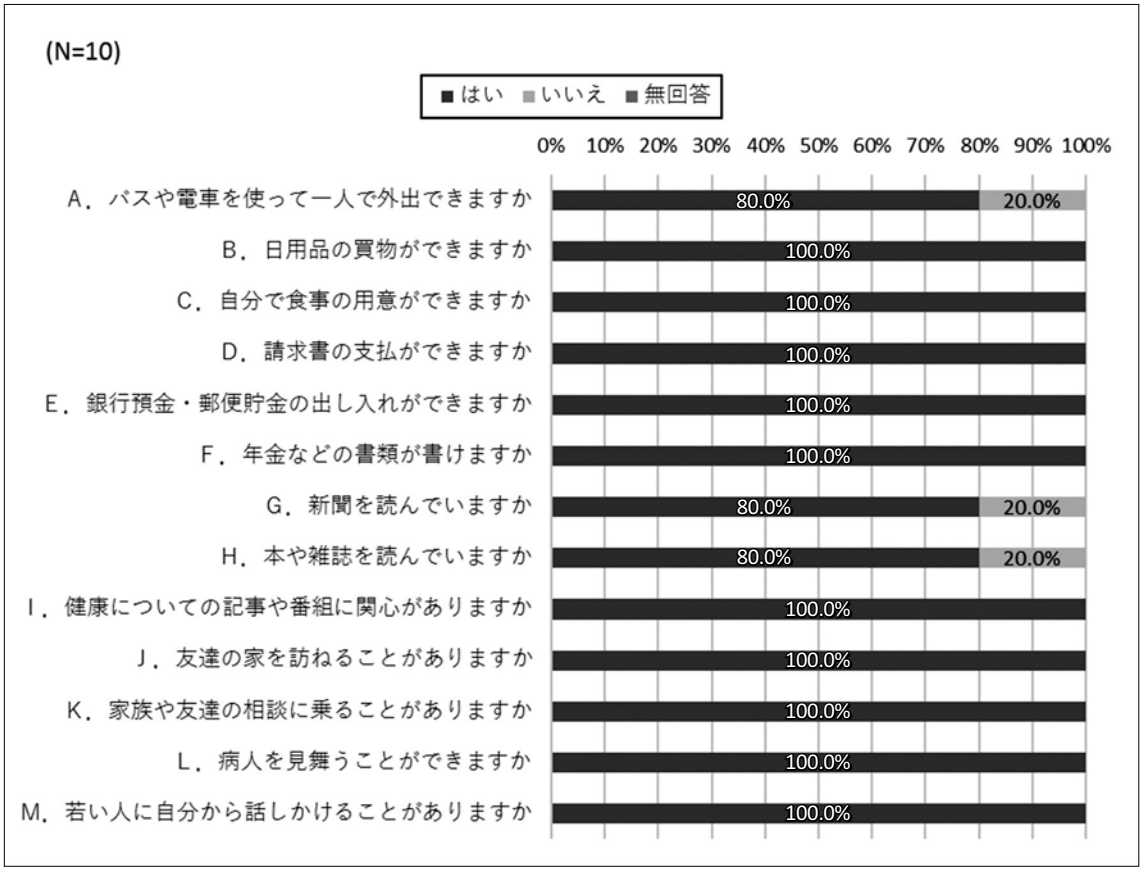
・秩父市の即興劇講座では、全ての項目において、「はい」という回答が大半である。「バスや電車を使って一人で外出できますか」、「新聞を読んでいますか」、「本や雑誌を読んでいますか」という項目は、他の項目に比べて、「いいえ」という回答が多い。

・浦安市の想い出語り講座では、全ての項目において、「はい」という回答が大半である。

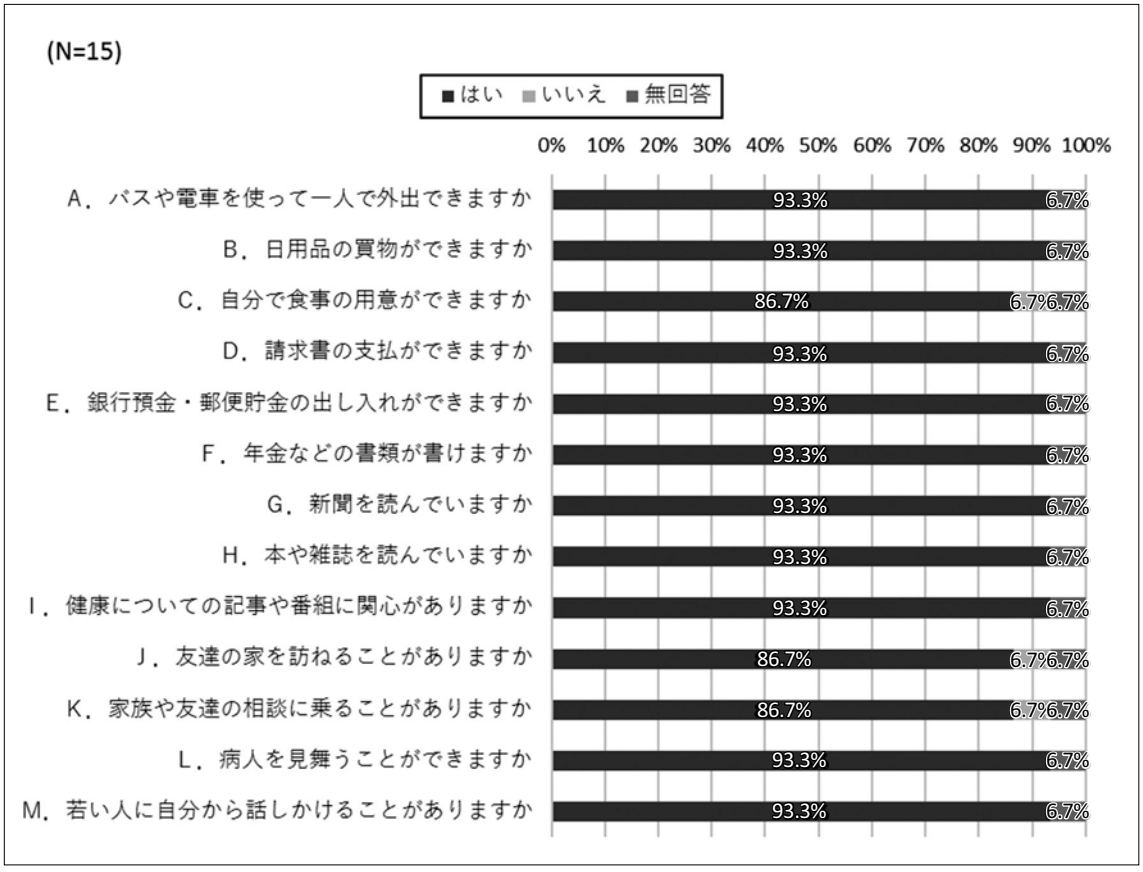
・１回目と比べた場合、秩父市では「はい」の回答が100%となっている項目が６項目だったのに対し、最終回では、10項目で100%となっている。

・また、浦安市で無回答者（6.7%）を除くと、初回の９項目に比べ、10項目で全員が「はい」と回答している。

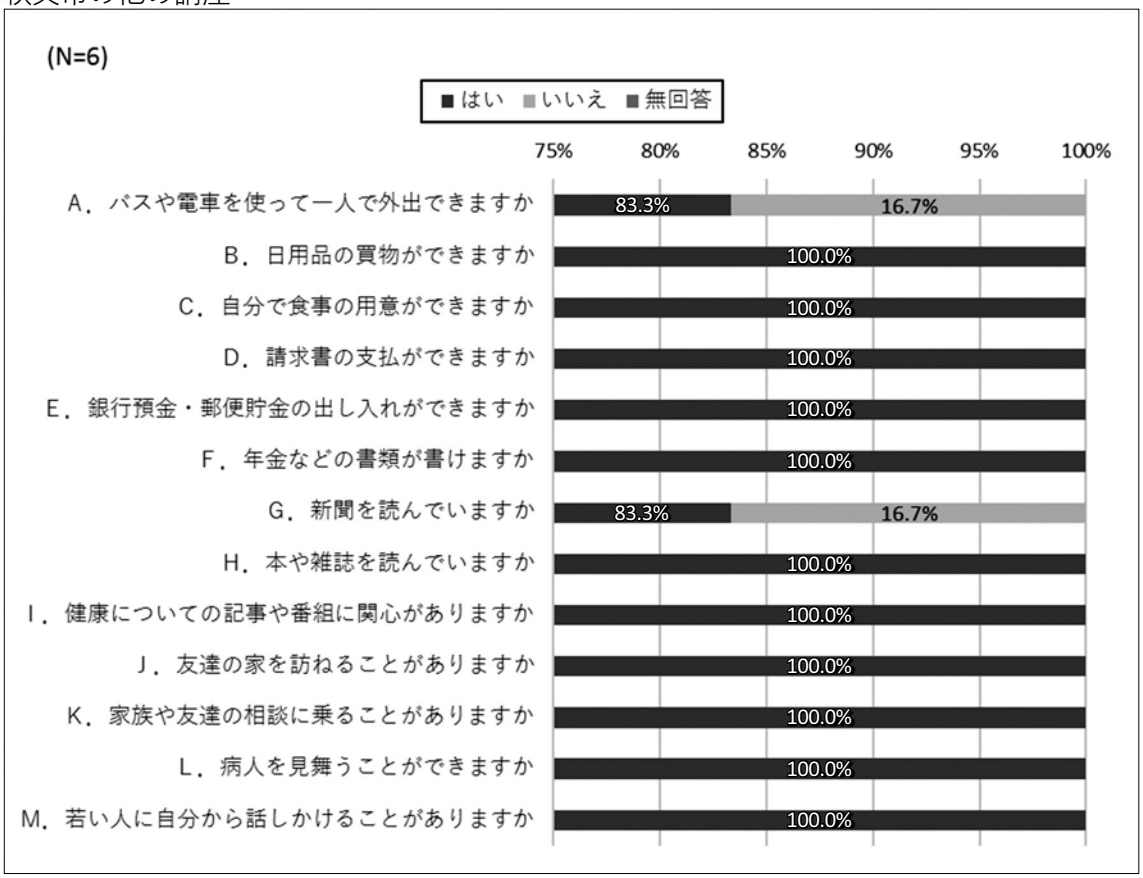
即興劇講座（秩父）



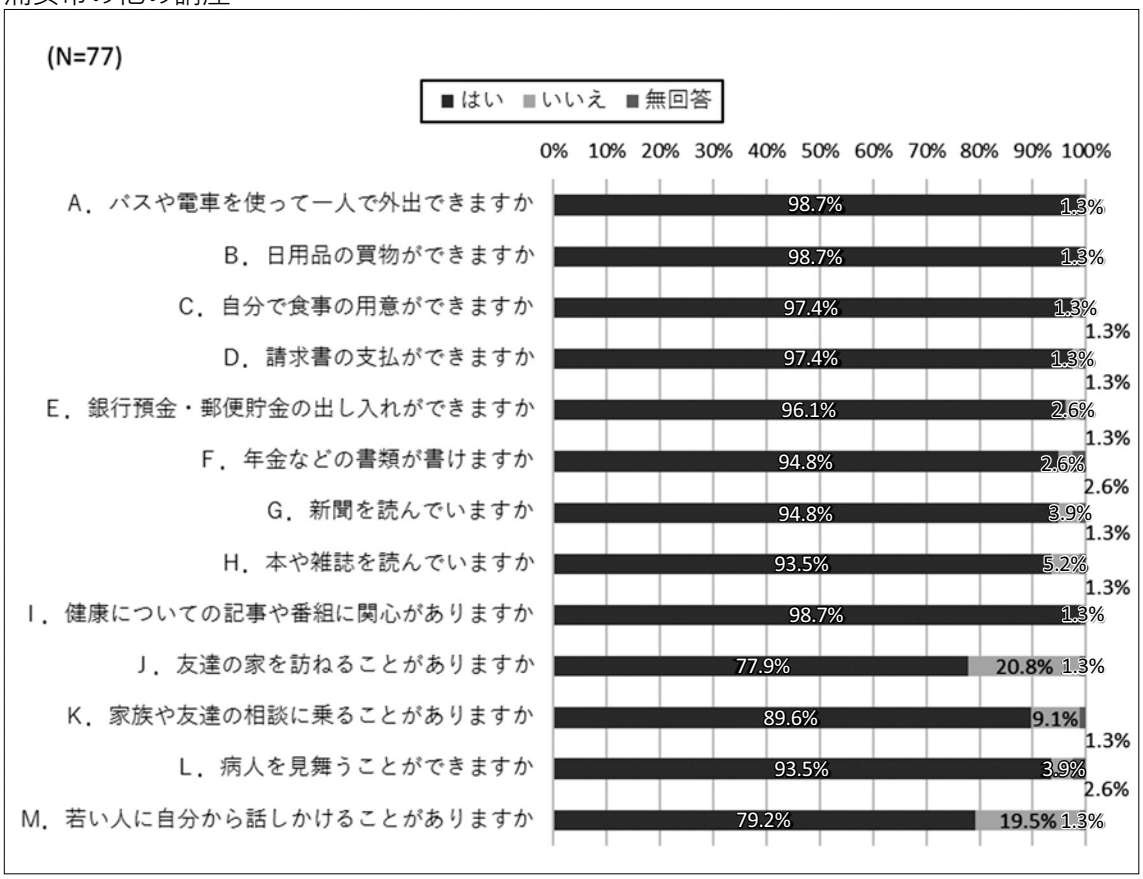
想い出語り講座（浦安）



秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



問５．友人や近所の方、別居の家族や親戚との付き合いについて伺います。以下のＡ～Ｄの質問ごとに、あなたのお付き合いの状況として、当てはまる番号に一つずつ○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

Ａ．友人や近所の方と、会ったり、一緒に出かけたりすることは、どのくらいありますか

・秩父市の即興劇講座では、「週に２回以上」「週に１回程度」「月に２～３回」が30.0%ずつで最も多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「週に２回以上」（33.3%）が最も多く、次いで「週に１回程度」（26.7%）、「月に２～３回」（20.0%）と、頻度が低下するにつれて、当てはまる人数も減少する。

・友人や近所の方等の付き合いについて初回と比べて見ると、秩父市、浦安市とも付き合いの頻度が低下している。

Ｂ．友人や近所の方と、電話で話すことはどのくらいありますか

・秩父市の即興劇講座では、「週に２回以上」（40.0%）が最も多く、次いで「週に１回程度」と「月に２～３回」が同率30.0%ずつとなっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「週に２回以上」（40.0%）が最も多く、次いで「週に１回程度」（26.7%）、「月に１回程度」（20.0%）と、頻度が低下するにつれて、当てはまる人数も減少する。

・友人や近所の方と電話で話すことについて初回と比べて見ると、秩父市、浦安市とも電話で話す頻度は低下している。

Ｃ．別居の家族や親戚と、会ったり、一緒に出かけたりすることは、どのくらいありますか

・秩父市の即興劇講座では、「月に１回程度」（60.0%）が最も多く、次いで「週に２回以上」（20.0%）、「月に２～３回」（10.0%）となっている。

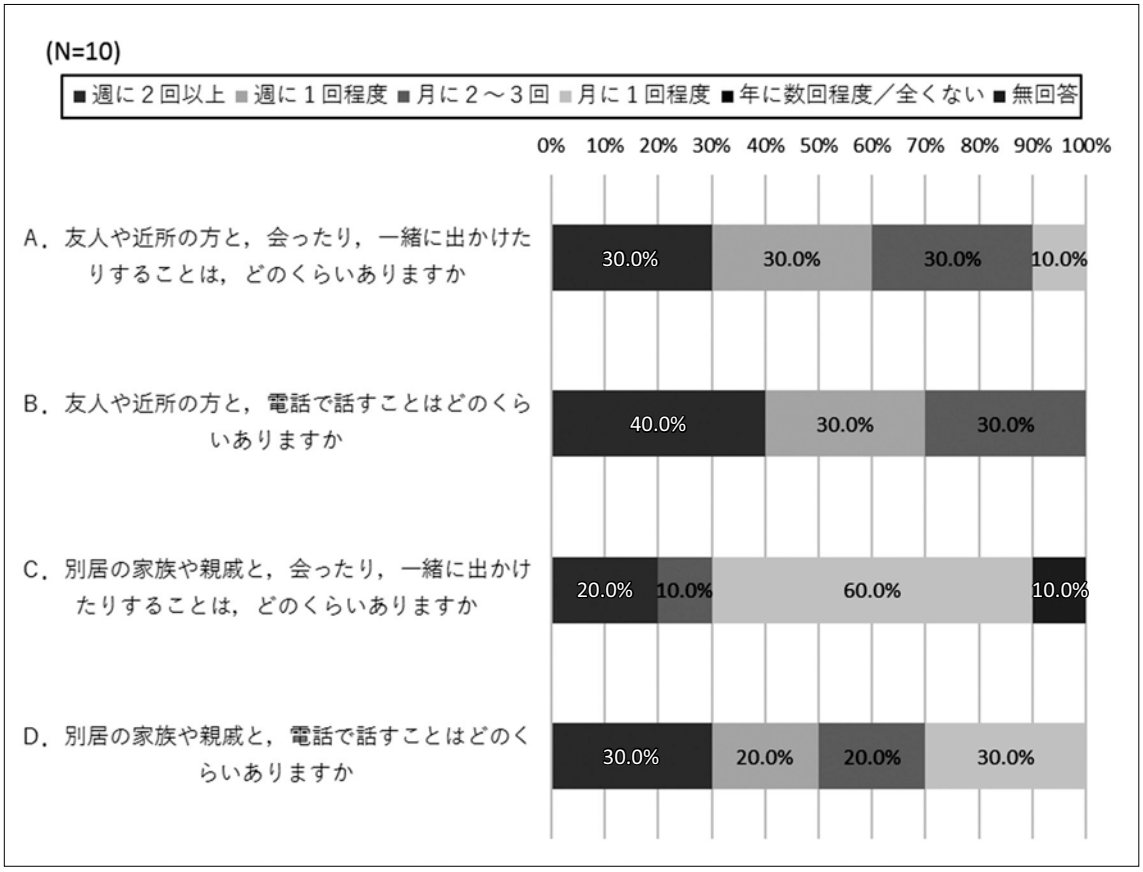
・浦安市の想い出語り講座では、「年に数回程度／全くない」（40.0%）が最も多く、次いで「月に１回程度」（33.3%）と、頻度が上昇するにつれて、当てはまる人数も減少する。

Ｄ．別居の家族や親戚と、電話で話すことはどのくらいありますか

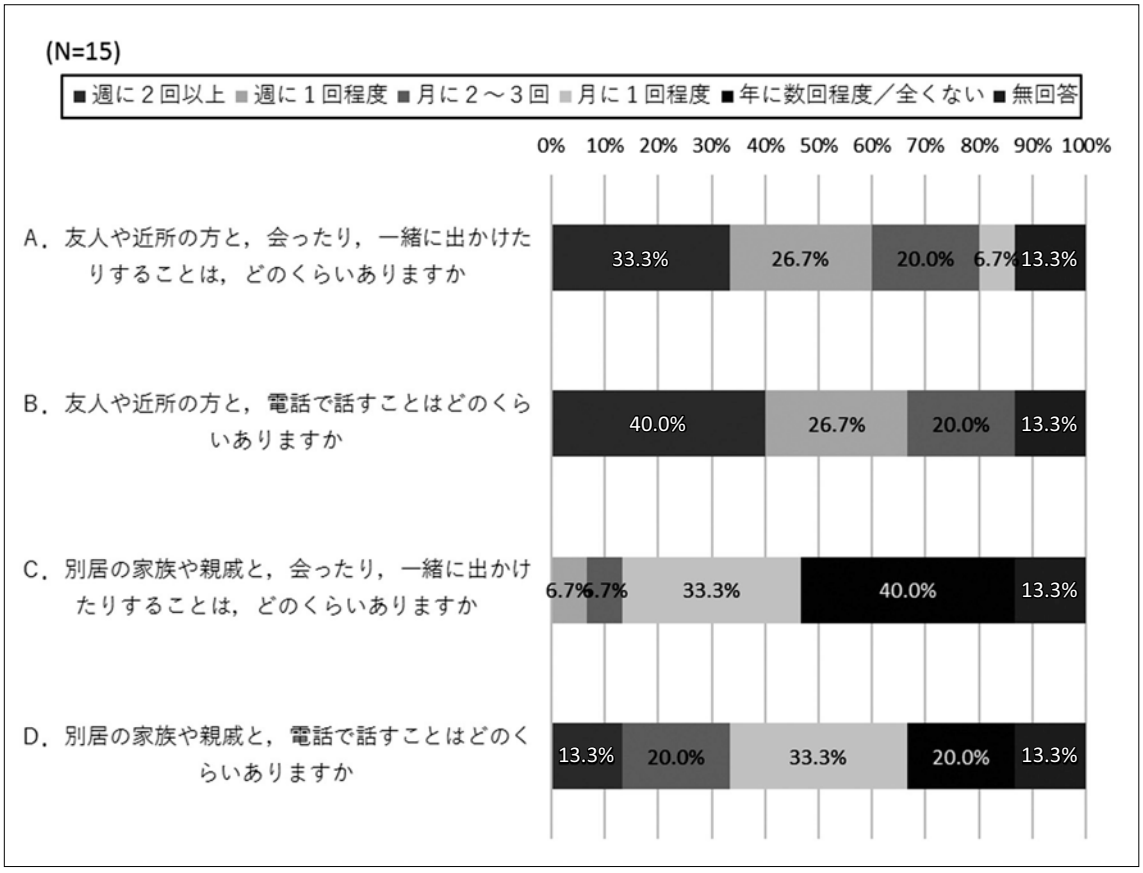
・秩父市の即興劇講座では、「週に２回以上」と「月に１回程度」が30%で最も多く、次いで「週に１回程度」と「月に２～３回」が20%ずつとなっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「月に１回程度」（33.3%）が最も多く、次いで「月に２～３回」と「年に数回程度／全くない」が20%ずつとなっている。

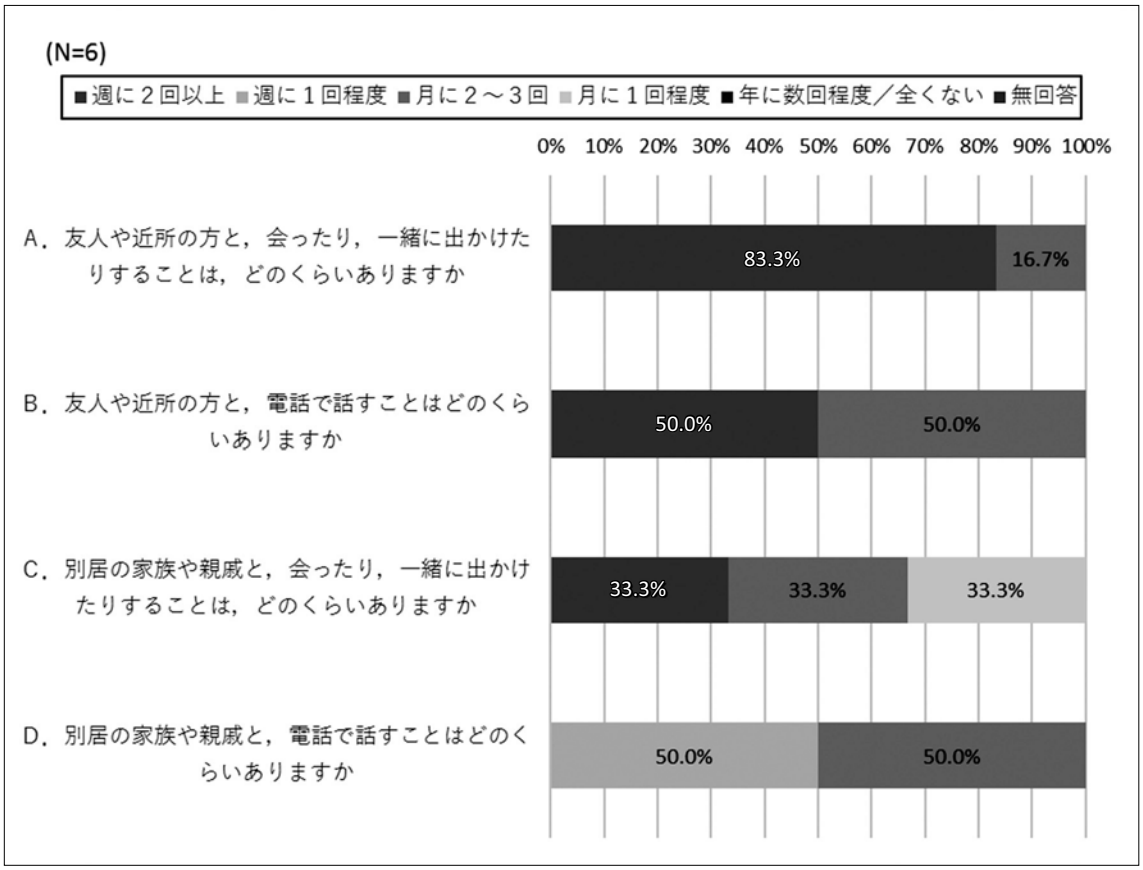
即興劇講座（秩父）



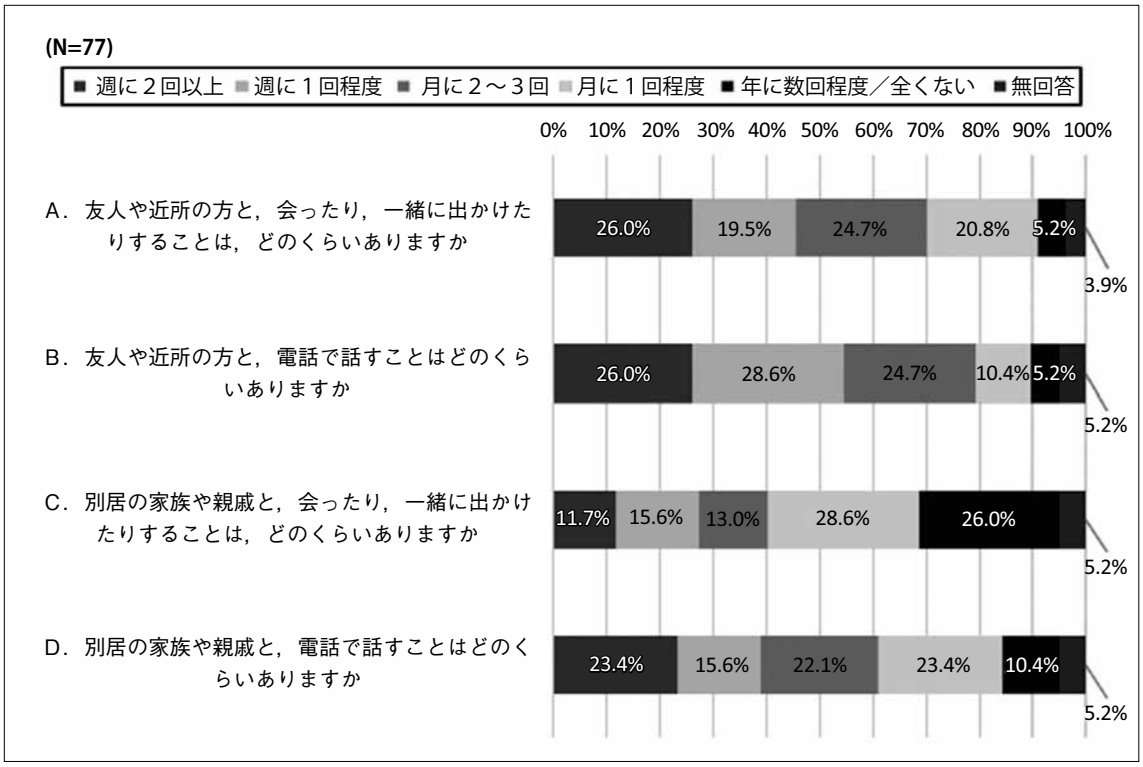
想い出語り講座（浦安）



秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



問６．あなたのお気持ちについて、以下のＡ～Ｅの質問ごとに、２週間のあなたの状態に最も近いものに一つずつ○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

Ａ．明るく、楽しい気分で過ごした

・秩父市の即興劇講座では、「いつも」（50.0%）が最も多く、次いで「ほとんどいつも」（30.0%）と、頻度が減少するにつれて、当てはまる人数も減少する。

・浦安市の想い出語り講座では、「ほとんどいつも」（33.3%）が最も多く、次いで「いつも」（26.7%）、「半分以上の期間を」（20.0%）の順となっている。

Ｂ．落ち着いた、リラックスした気分で過ごした

・秩父市の即興劇講座では、「いつも」（50.0%）が最も多く、次いで「ほとんどいつも」（30.0%）、「半分以上の期間を」と「全くない」が10%ずつとなっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「ほとんどいつも」（33.3%）が最も多く、次いで「いつも」と「半分以上の期間を」が26.7%となっている。

Ｃ．意欲的で、活動的に過ごした

・秩父市の即興劇講座では、「いつも」（60.0%）で最も多く、次いで「ほとんどいつも」と「半分以上の期間を」が20%ずつとなっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「ほとんどいつも」（33.3%）が最も多く、次いで「いつも」（26.7%）、「半分以上の期間を」（20.0%）の順となっている。

Ｄ．ぐっすりと休め、気持ちよく目覚めた

・秩父市の即興劇講座では、「いつも」（50.0%）が最も多く、次に「ほとんどいつも」（40.0%）と、頻度が減少するにつれて、当てはまる人数も減少する。

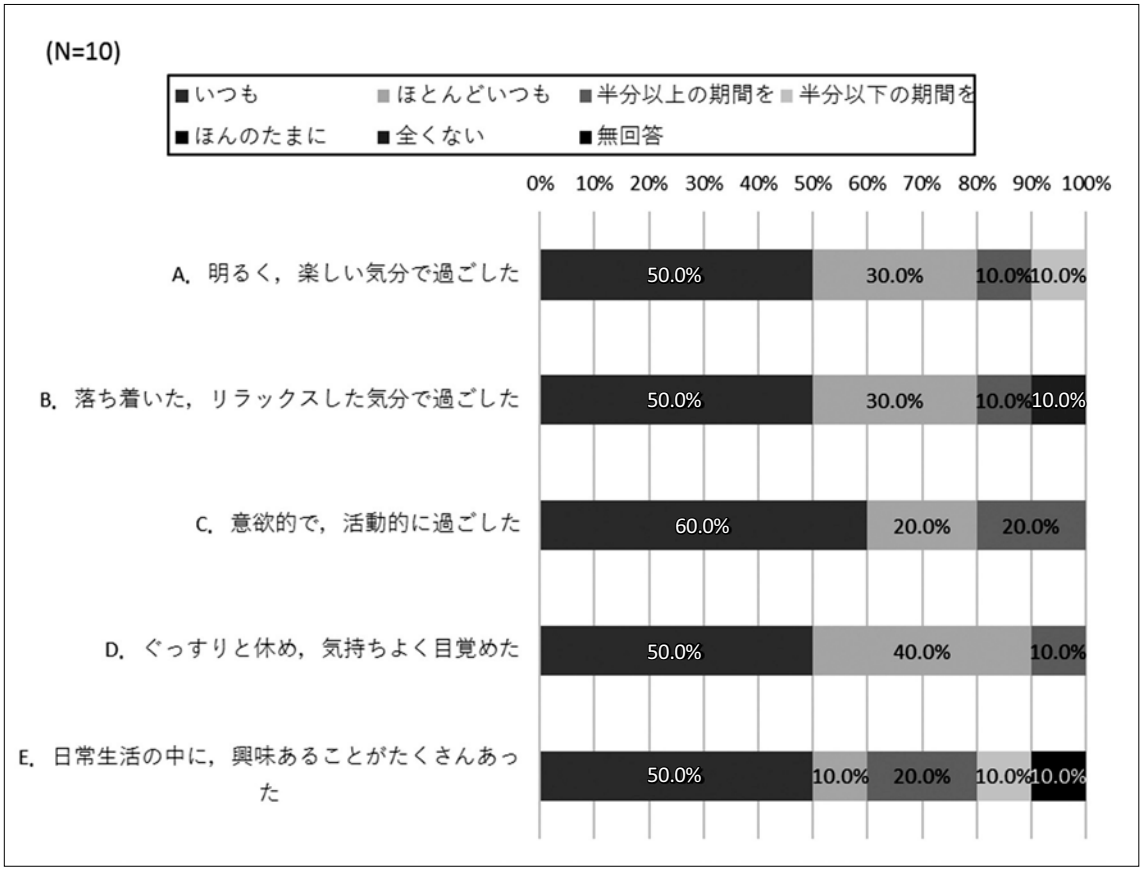
・浦安市の想い出語り講座では、「ほとんどいつも」が最も多く、「いつも」が順に多い。

Ｅ．日常生活の中に、興味あることがたくさんあった

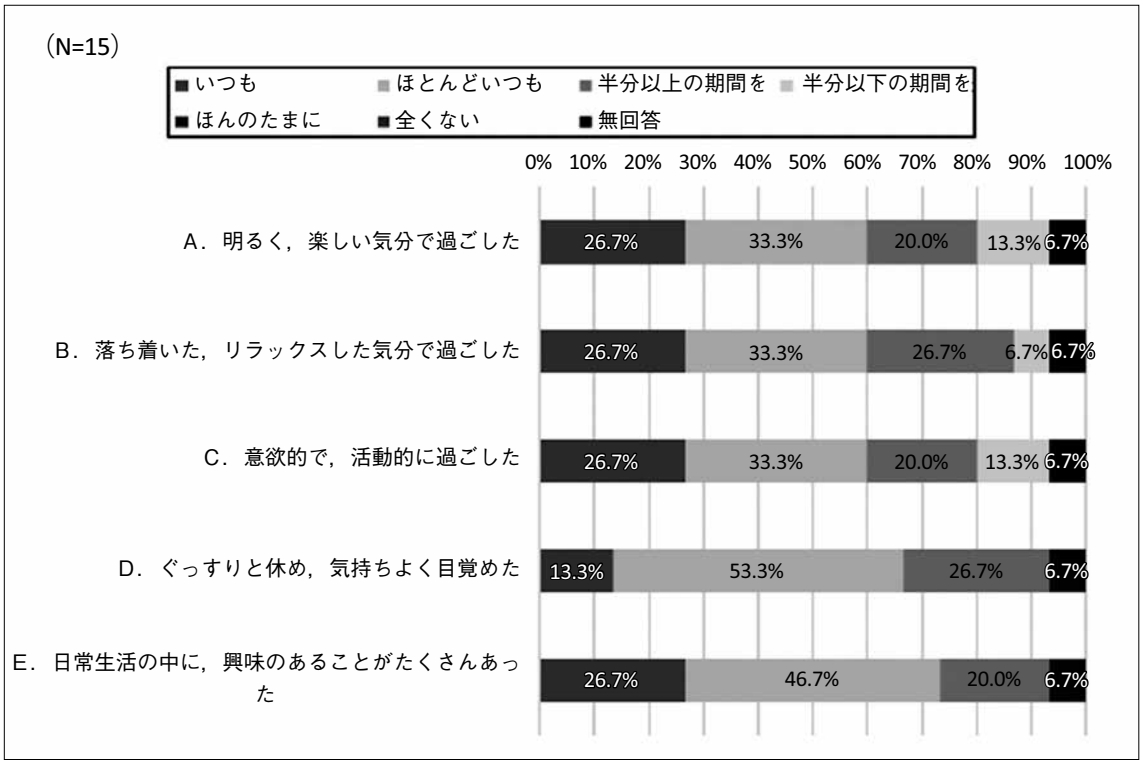
・秩父市の即興劇講座では、「いつも」（50.0%）が最も多く、次いで「半分以上の期間を」（20.0%）となっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「ほとんどいつも」（46.7%）が最も多く、次いで「いつも」（26.7%）「半分以上の期間を」（20.0%）が順に多い。

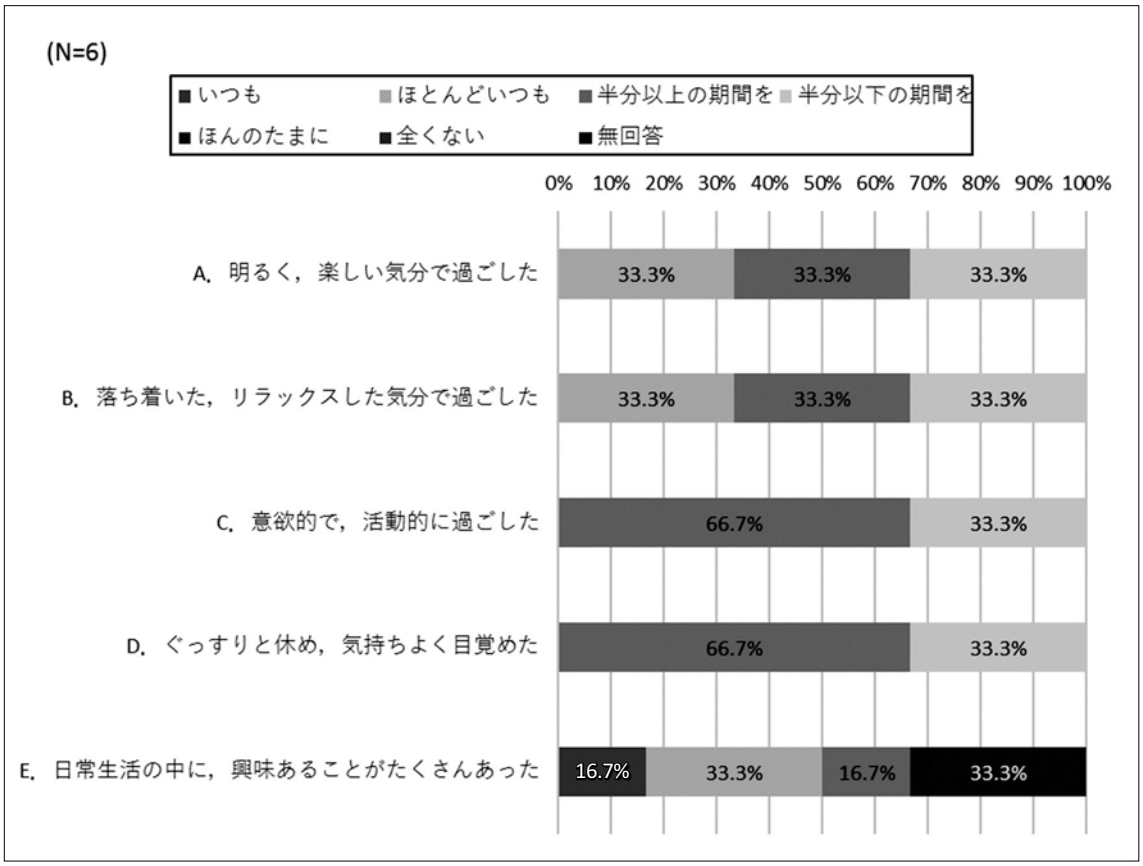
即興劇講座（秩父）



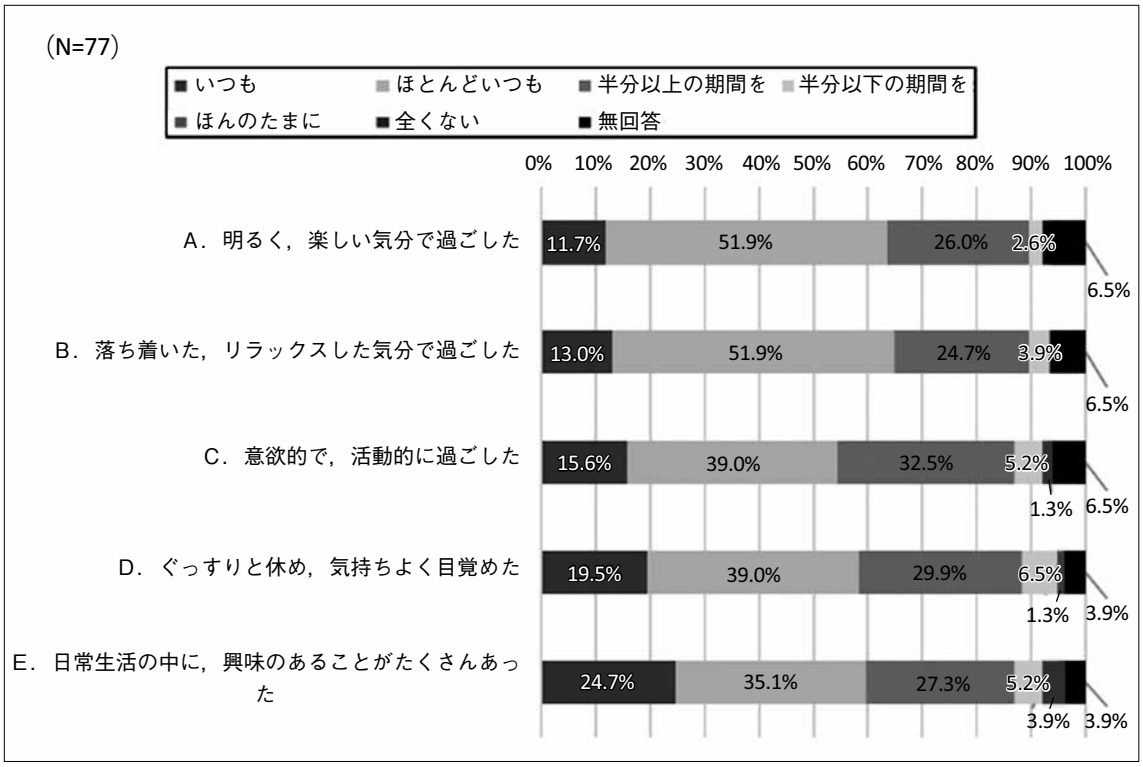
想い出語り講座（浦安）



秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



問７．世間一般の人又は近隣の人に対するあなたのお考えをお尋ねします。以下のＡ～Ｃの質問ごとに、あなたの感じ方を最もよく表している番号に一つずつ○を付けてください。

〈モデル事業の結果〉

Ａ．一般に人は信頼できる

・秩父市の即興劇講座では、「どちらかと言えばそう思う」（70.0%）が最も多く、次いで「どちらともいえない」（20.0%）、「そう思う」（10.0%）が順に多い。

・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（60.0%）が最も多く、次いで「そう思う」と「どちらともいえない」が20%ずつとなっている。

Ｂ．一般に人は他人とのつながりを大事にする

・秩父市の即興劇講座では、「そう思う」（60.0%）が最も多く、次いで「どちらかと言えばそう思う」（30.0%）、「どちらともいえない」（10.0%）の順となっている。

・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（46.7%）が最も多く、次いで「そう思う」（33.3%）、「どちらともいえない」（20.0%）が順に多い。

・「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」と合計して１回目と比較すると、秩父市では１回目（72.8%）、２回目（90.0%）と、17.2ポイント上回っており、浦安市では１回目（75.1%）、２回目（80.0%）と、4.9ポイント上回っている。

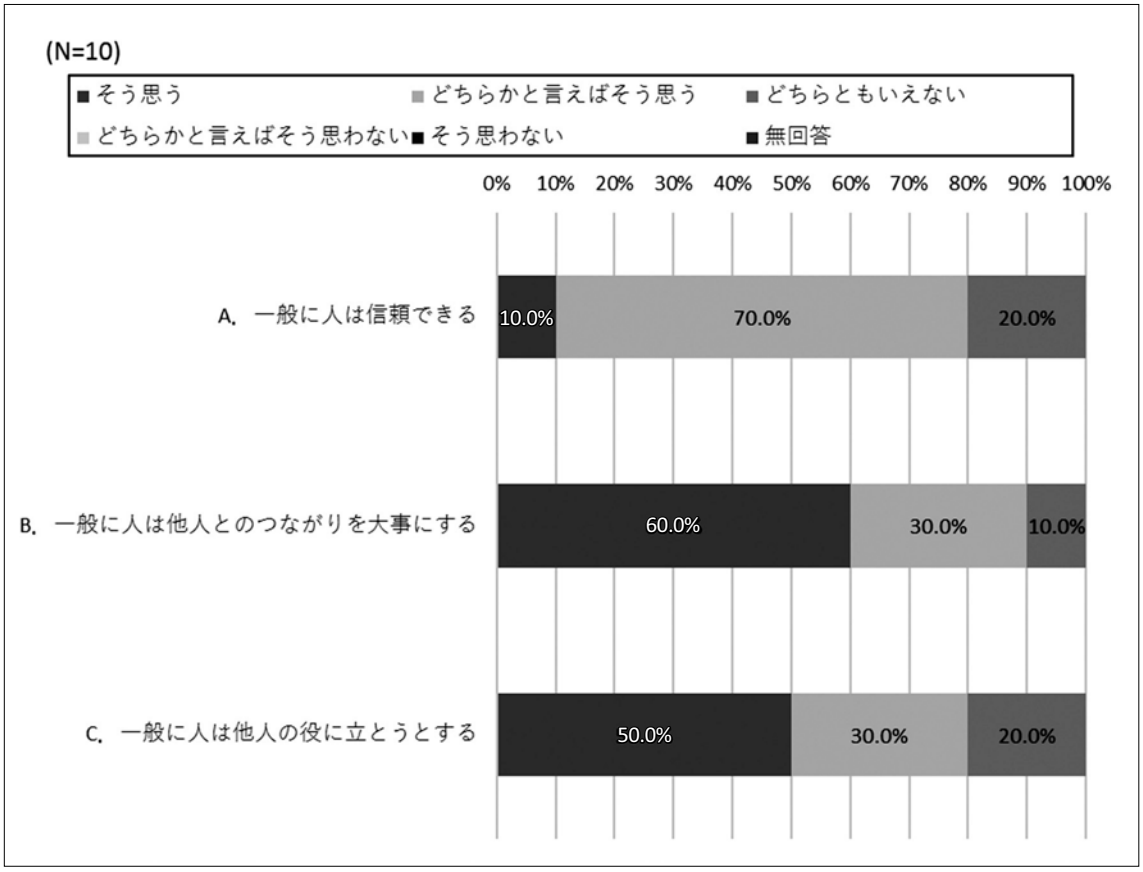
Ｃ．一般に人は他人の役に立とうとする

・秩父市の即興劇講座では、「そう思う」（50.0%）が最も多く、次いで「どちらかと言えばそう思う」（30.0%）、「どちらともいえない」（20.0%）の順となっている。

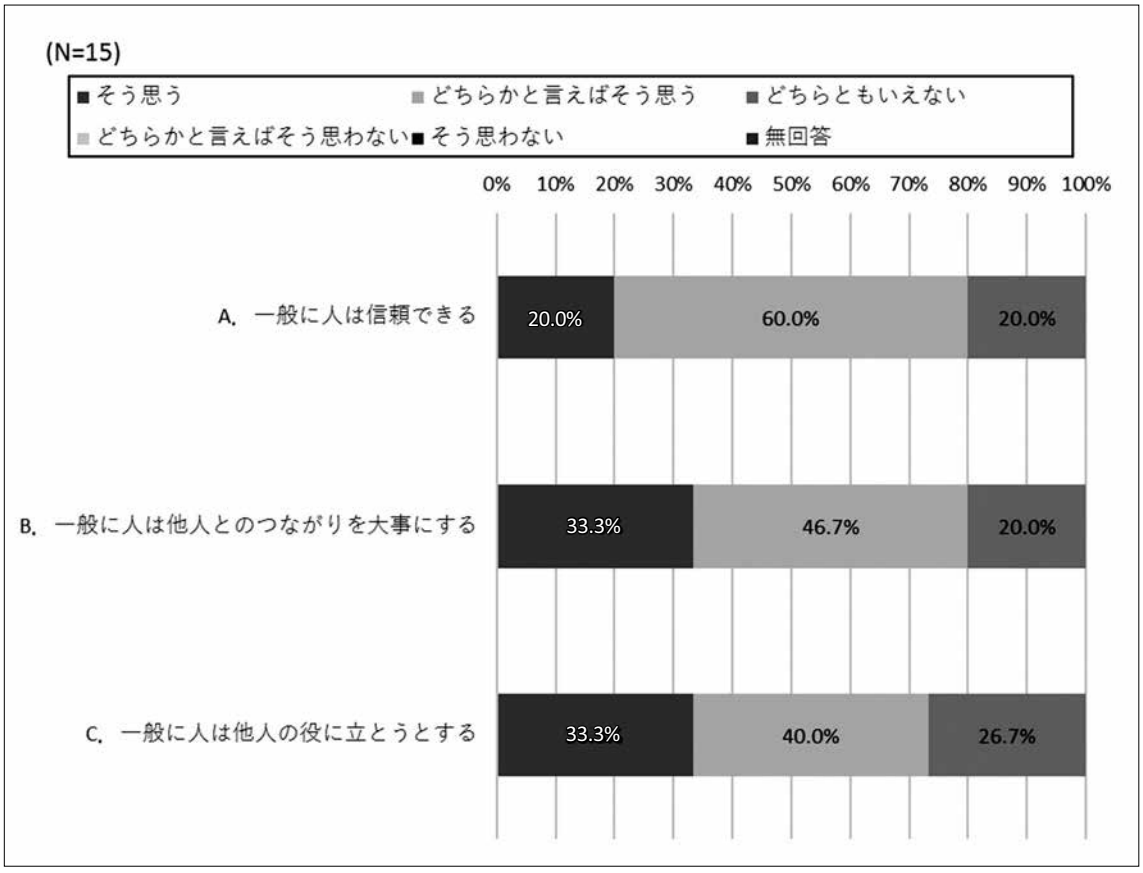
・浦安市の想い出語り講座では、「どちらかと言えばそう思う」（40.0%）が最も多く、次いで「そう思う」（33.3%）、「どちらともいえない」（26.7%）の順となっている。

・「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」と合計して１回目と比較すると、秩父市では１回目（59.1%）、２回目（80.0%）と、20.9ポイント上回っており、浦安市では１回目（68.8%）、２回目（73.3%）と、4.5ポイント上回っている。

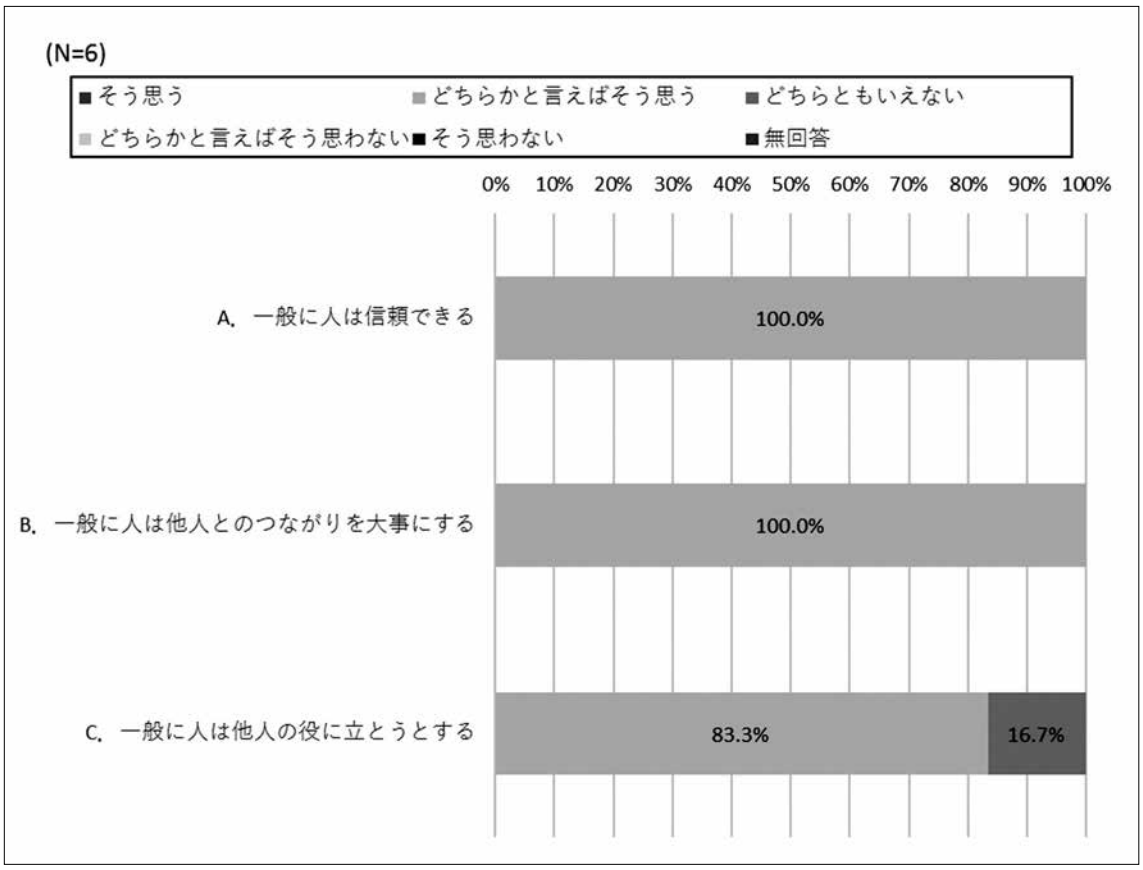
即興劇講座（秩父）



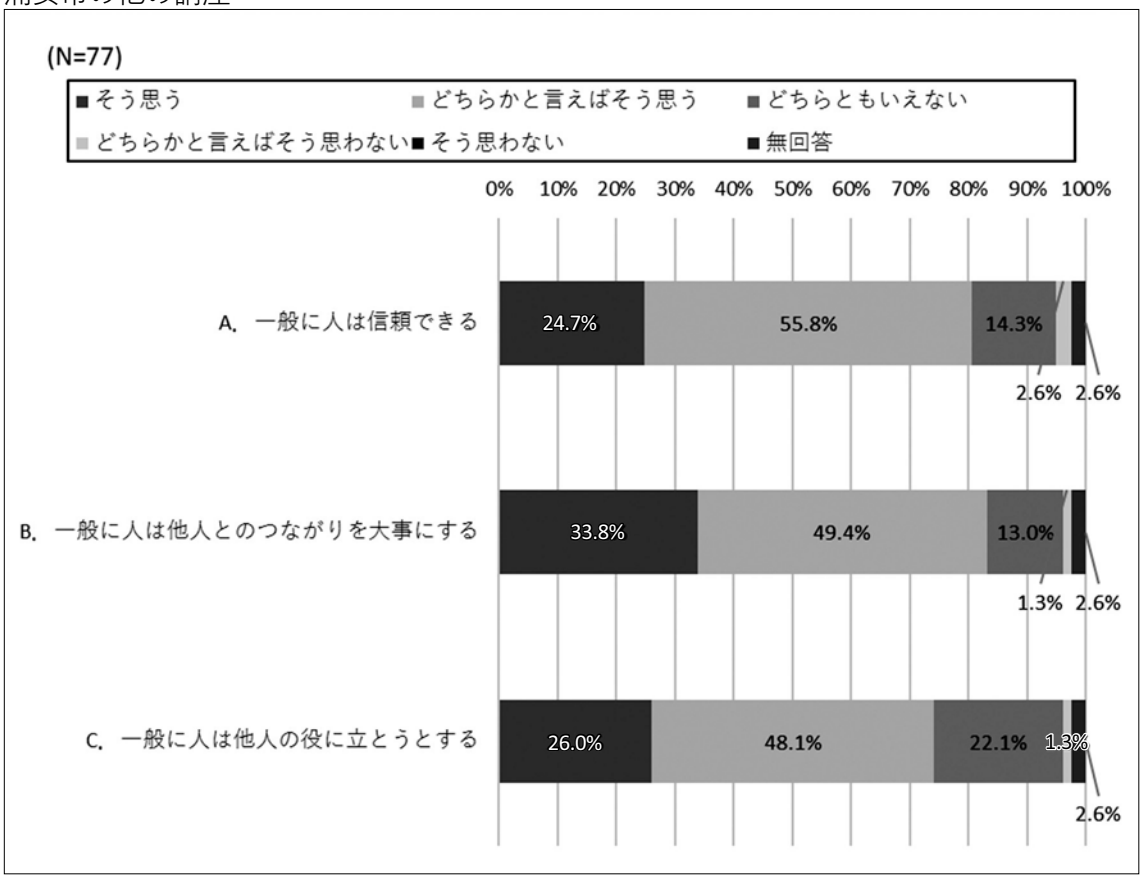
想い出語り講座（浦安）



秩父市の他の講座



浦安市の他の講座



４．全講座の受講生の特徴（クロス集計）

以下、第１回の設問を「前問」、第２回の設問を「後問」と表記した。

（1）性別（Ｆ１）による傾向

①Ｆ１×前問１「受講の目的」（χ^2検定）
・男性の方が、「退職して時間的余裕ができたから」をきっかけとする傾向にある。（$p<0.01$）
・女性の方が、「仲間や友人に誘われて」をきっかけとする傾向にある。（$p<0.01$）
・男性の方が、「広報誌やチラシを見て」をきっかけとする傾向にある。（$p<0.05$）

②Ｆ１×前問２「学習活動の状況」（χ^2検定）
・男性の方が、「自宅での学習活動（書籍など）」をこれまで学習方法としてきた傾向にある。（$p<0.05$）
・男性の方が、「情報端末やインターネット」をこれまで学習方法としてきた傾向にある。（$p<0.01$）
・男性の方が、「図書館、博物館、美術館」をこれまで学習方法としてきた傾向にある。（$p<0.01$）

③Ｆ１×前問３「今後行いたい学習活動」（χ^2検定）
・男性の方が、「カルチャーセンターやスポーツクラブなど民間の講座や教室、通信教育」を今後の学習方法としたいとする傾向にある。（$p<0.05$）
・男性の方が、「情報端末やインターネット」を今後の学習方法としたいとする傾向にある。（$p<0.01$）
・男性の方が、「図書館、博物館、美術館」を今後の学習方法としたいとする傾向にある。（$p<0.01$）

④Ｆ１×前問４「講座への期待」（χ^2検定）
・男性の方が、「新しいことへのチャレンジ」を講座に期待する傾向にある。（$p<0.05$）

⑤Ｆ１×前問５「日常の活動性」（Mann-Whitneyの検定）
・女性の方が、「友人や近所の方と、電話で話す」頻度が高い傾向にある。（$p<0.01$）
・女性の方が、「別居の家族や親戚と、電話で話す」頻度が高い傾向にある。（$p<0.05$）

⑥Ｆ１×前問６「家族や人との交流状況」（Mann-Whitneyの検定）
・女性の方が、「意欲的で、活動的に過ごした」頻度が高い傾向にある。（$p<0.05$）

(2) 年齢（Ｆ２）による傾向

前期高齢者（65歳以上75歳未満）と後期高齢者（75歳以上）の2群に分けて分析した。なお、65歳未満はサンプルサイズが非常に小さいため、対象外とした。

①Ｆ２×前問１「受講の目的」（χ^2検定）
・後期高齢者の方が、「趣味を身につけるため」をきっかけとする傾向にある。（$p<0.05$）

②Ｆ２×前問２「学習活動の状況」（χ^2検定）
・前期高齢者の方が、「カルチャーセンターやスポーツクラブなど民間の講座や教室、通信教育」をこれまで学習方法としてきた傾向にある。（$p<0.05$）

③Ｆ２×前問５「日常の活動性」（Mann-Whitneyの検定）
・後期高齢者の方が、「友人や近所の方と、電話で話す」頻度が高い傾向にある。（$p<0.05$）

(3) 在住期間（Ｆ４）による傾向

在住期間が比較的長い群（30年以上在住）と比較的短い群（30年未満在住）の2群に分けて分析した。

①Ｆ４×前問６「家族と人との交流状況」（Mann-Whitneyの検定）
・在住期間が比較的長い群（30年以上在住）の方が、「友人や近所の方と、電話で話す」頻度が高い傾向にある。（$p<0.05$）

②Ｆ４×前問７「２週間の考えや気持ちの状態」（Mann-Whitneyの検定）
・在住期間が比較的長い群（30年以上在住）の方が、「明るく、楽しい気分で過ごした」頻度が高い傾向にある。（$p<0.01$）

③Ｆ４×前問８「人に対する考え」（Mann-Whitneyの検定）
・在住期間が比較的長い群（30年以上在住）の方が、「一般に人は他人とのつながりを大事にする」と考えている傾向にある。（$p<0.05$）

（4）講座種別による傾向

“即興劇”、”想い出語り”、”終活”、”吹き矢”、”男性専科”、”パン作り”、”エコクラフト”、”シニアサロン”の全８講座について分析した。

①講座種別×Ｆ２「年齢」（Kruskal-Wallisの検定）
・講座によって、年齢の分布に差がある（$p<0.01$）。”パン作り”より”シニアサロン”の方が、”想い出語り”より”シニアサロン”の方が、参加者が高齢の傾向にある。

②講座種別×Ｆ４「居住年数」」（Kruskal-Wallisの検定）
・講座によって、在住期間の分布に差がある（$p<0.01$）。”シニアサロン”より”想い出語り”の方が、”シニアサロン”より”吹き矢”の方が、”シニアサロン”より”即興劇”の方が、”終活”より”即興劇”の方が参加者の在住期間が長い傾向にある。

③講座種別×前問１「受講の目的」（χ^2検定）
・“吹き矢”では、「健康の維持のため」をきっかけとする傾向にあり、”想い出語り”、”終活”、”エコクラフト”では、「健康の維持のため」がきっかけとならない傾向にある。（$p<0.01$）
・“男性専科”、”シニアサロン”では、「費用が余りかからないから」をきっかけとする傾向にあり、”即興劇”では、「費用が余りかからないから」がきっかけとならない傾向にある。（$p<0.05$）
・“シニアサロン”では、「仲間の輪を広げたいから」をきっかけとする傾向にある。（$p<0.05$）
・“終活”では、「仲間や友人に誘われて」がきっかけとならない傾向にある。（$p<0.01$）
・“吹き矢”、”パン作り”、”エコクラフト”では、「趣味を身につけるため」をきっかけとする傾向にあり、”想い出語り”、”終活”では、「趣味を身につけるため」がきっかけとならない傾向にある。（$p<0.01$）
・“シニアサロン”では、「自宅から近いから」をきっかけとする傾向にある。（$p<0.01$）
・“想い出語り”では、「学習内容を地域活動に生かしたいから」をきっかけとする傾向にある。（$p<0.05$）
・“即興劇”、”想い出語り”では、「公民館や市の職員から声をかけられたから」をきっかけとする傾向にあり、”吹き矢”では、「公民館や市の職員から声をかけられたから」がきっかけとならない傾向にある。（$p<0.01$）

④講座種別×前問４「講座への期待」（χ^2検定）
・“終活”では、「幅広い知識や教養の習得」が期待される傾向にあり、”吹き矢”、”シニアサロン”では、「幅広い知識や教養の習得」が期待されない傾向にある。（$p<0.01$）
・“即興劇”、”吹き矢”では、「健康の維持や老化の防止」が期待される傾向にあり、”想い出語り”、”エコクラフト”では、「健康の維持や老化の防止」が期待されない傾向にある。（$p<0.01$）

・“男性専科”では、「新しいことへのチャレンジ」が期待される傾向にあり、”終活”では、「新しいことへのチャレンジ」が期待されない傾向にある。（$p<0.01$）
・“シニアサロン”では、「仲間づくり」が期待される傾向にあり、”終活”では、「仲間づくり」が期待されない傾向にある。（$p<0.01$）

⑤講座種別×後問１「受講後の効果」（χ^2検定）
・“即興劇”では、「新しいことにチャレンジする気持ちが持てた」効果があると参加者が感じた傾向にある。（$p<0.05$）
・“即興劇”では、「仲間ができた」効果があると参加者が感じた傾向にあり、”終活”では、「仲間ができた」効果があると参加者が感じなかった傾向にある。（$p<0.01$）
・“即興劇”では、「地域のために何かを活動する具体的な計画ができた」効果があると参加者が感じた傾向にある。（$p<0.05$）

５．モデル事業講座受講前後の変化（クロス集計）

①前問３「今後の学習活動の希望」×後問３「今後の学習活動の希望」（McNemarの検定）
・“即興劇”、”想い出語り”の両方とも、講座を受講したことによって、学習活動の希望が変化しているとはいえない。

②前問５「日常の活動性」×後問４「日常の活動性」」（McNemarの検定）
・“即興劇”、”想い出語り”の両方とも、講座を受講したことによって、日常の活動性が変化しているとはいえない。

③前問６「人との交流状況」×後問５「人との交流状況」（Wilcoxonの符号付順位検定）
・“即興劇”の講座を受けた受講生は、「友人や近所の方と、会ったり、一緒に出かけたりする」頻度が高くなっている。（$p<0.05$）
・“即興劇”の講座を受けた受講生は、「友人や近所の方と、電話で話す」頻度が高くなっている。（$p<0.05$）
・“想い出語り”では、講座を受講したことによって、人との交流状況が変化しているとはいえない。

④前問７「２週間の考えや気持ち」×後問６「２週間の考えや気持ち」（Wilcoxonの符号付順位検定）
・“即興劇”、”想い出語り”の両方とも、講座を受講したことによって、普段の気持ちが変化しているとはいえない。

⑤前問８「人に対する考え」×後問７「人に対する考え」（Wilcoxonの符号付順位検定）
・“即興劇”、”想い出語り”の両方とも、講座を受講したことによって、人に対する考え方が変化しているとはいえない。

※今回の調査研究においては諸般の事情により、モデル講座のプログラム途中（２～３回目）から第１回を実施しているため、最終回に実施した第２回との間隔が短く、講座の前後の変化があまり見られなかった。

平成27・28・29年度　社会教育事業の開発・展開に関する調査研究事業

高齢者の地域への参画を促す地域の体制づくりに関する調査研究報告書

平成30年３月

文部科学省
国立教育政策研究所
社会教育実践研究センター

〒110-0007　東京都台東区上野公園12番43号
TEL（０３）３８２３－０２４１
FAX（０３）３８２３－３００８

国立教育政策研究所
National Institute for Educational Policy Research
〒110-0007　東京都台東区上野公園 12-43
TEL03-3823-0241　FAX03-3823-3008